児玉町文化財調査報告書　第23集

城の内・日延・東田・浅見境北遺跡

県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書５

埼玉県児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書　第23集

城の内・日延・東田・浅見境北遺跡

県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5

1997

埼玉県児玉町教育委員会

序

児玉町の北半に位置し、女堀川流域で最大の水田地帯を擁する共和地区は、児玉地方の中世を語る上で欠かせない地域であります。特に平安時代末から鎌倉時代には、源頼朝に協力して鎌倉幕府の成立に貢献した児玉党諸氏の本貫地であったことは良く知られており、その諸氏が苗字とした地名は現在も地区内の大字名として残っています。また、南北朝時代には、奥州から上洛を目指した南朝方の陸奥鎮守府大将軍北畠顕家と、鎌倉にいた北朝方の足利尊氏の子で後に室町幕府の２代将軍となる足利義詮が、薊山（浅見山）で合戦を行ったという記録や伝承があります。そして、室町時代後期には、古河公方の足利成氏と対立した関東管領の扇谷・山内両上杉氏が、当地区とは目と鼻の先である本庄市の五十子に長大な陣地を数年にわたって構え、扇谷上杉氏の執事であったあの有名な太田道灌も当地に滞陣して多くの合戦に活躍しています。

このように共和地区は、中世の各節目に起こった重要な歴史的事件の一つの舞台となった地域ですが、残念ながら当時の地元の具体的な様相については、それを伝える古文書等の資料がまったく残っていないため、現状ではほとんど明らかではありません。そのため、当地域の中世以前の歴史的な状況を知るには、地下に眠っている埋蔵文化財の発掘調査に期待するところが非常に大きいのです。我々の先祖達が直接大地に刻んだ生活の痕跡である埋蔵文化財（遺跡）を、保護し活用しながら郷土の貴重な文化的・歴史的遺産として後世に残すことも、今の時代を託された我々の責務の一つと考えられます。

今回報告する城の内遺跡・日延遺跡・東田遺跡・浅見境北遺跡は、県営ほ場整備事業児玉南部地区の平成３年度工区と平成４年度工区の工事に伴い、児玉町教育委員会が発掘調査を実施したものです。発掘調査の結果、城の内遺跡は鎌倉時代の寺や室町時代の館に関係する遺跡であることが明らかとなり、日延遺跡・東田遺跡・浅見境北遺跡では、古墳時代の集落跡とともに鎌倉時代～室町時代の集落跡が検出され、当地域の中世史を考える上で大変重要な成果を上げることができました。これも、埼玉県本庄土地改良事務所や地元関係者をはじめとする多くの方々や機関から受けた様々なご協力やご教示の賜であります。ここに改めて厚くお礼申し上げ、感謝の意を表します。

最後に本書が学術研究はもとより埋蔵文化財の保護と様々な教育活動や生涯学習の場に広く活用されることを期待します。

平成９年３月３日

児玉町教育委員会
教育長　冨　丘　文　雄

例　　言

1．　本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字入浅見字城の内に所在する城の内遺跡(B～D地点)、字城の内から日延にかけて所在する日延遺跡(A・C地点)、大字蛭川字東田に所在する東田遺跡、字浅見境に所在する浅見境北遺跡の発掘調査報告書である。

2．　発掘調査は、県営ほ場整備事業児玉南部地区の工事に伴う事前の記録保存を目的として、平成3年度と平成4年度に児玉町教育委員会が実施したものである。

3．　発掘調査は、恋河内昭彦が担当した。

4．　本書刊行に要した経費は、国庫補助金・県費補助金・町費及び県費委託金である。

5　　本書の執筆は、第Ⅵ章を野口泰宣が、その他は恋河内が執筆した。

6．　本書の編集は恋河内が行った。

7．　本書の写真は、遺構を恋河内が、遺物については小林節子と中里広子の協力を得た。

8．　本書中の地図は、国土地理院発行の5万分の1及び2万5千分の1、児玉町役場発行の2千5百分の1と児玉町教育委員会の児玉町文化財(条里)現況測量図を使用している。

9．　現地発掘調査から本書刊行にあたって、下記の人々や機関より様々なご助言やご協力をいただいた。記して感謝いたします。

赤熊　浩一、浅野　晴樹、荒川　正夫、伊丹　　徹、市川　　修、出縄　康行、井上　尚明、梅沢太久夫、太田　博之、岡本　幸男、小澤　正人、金子　彰男、小林　康幸、駒宮　史朗、昆　　彭生、坂本　和俊、佐々木幹雄、佐藤　好司、篠崎　　潔、鈴木　敏昭、外尾　常人、高橋　一夫、武内　　茂、田村　　誠、富田　和夫、中島　　宏、中村　倉司、長瀧　歳康、坂野　和信、平田　重之、昼間　孝志、藤川　繁彦、増田　一裕、丸山　　修、丸山　陽一、水村　孝行、宮井　英一、矢内　　勲、山本　　靖

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、埼玉県本庄土地改良事務所、児玉南部土地改良区、中世瓦研究会

目　　次

序

例　　言

目　　次

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　城の内遺跡B・C・D地点の発掘調査 …… 5
第1節　遺跡の概要 …… 5
第2節　縄文時代の遺物 …… 9
第3節　古墳～平安時代の遺構と遺物 …… 11
1．竪穴式住居跡 …… 11
2．土　　壙 …… 19
3．その他の遺物 …… 21
第4節　中世以降の遺構と遺物 …… 28
1．竪穴状遺構 …… 28
2．門　　跡 …… 29
3．掘立柱建物跡 …… 48
4．井　戸　跡 …… 87
5．集石遺構 …… 108
6．土　　壙 …… 112
7．柱　穴　列 …… 132
8．溝　　跡 …… 135
9．堀　　跡 …… 161
10．ピット出土遺物 …… 189
11．城の内遺跡表採瓦 …… 193

第Ⅲ章　日延遺跡A・C地点の発掘調査 …… 197
第1節　遺跡の概要 …… 197
第2節　検出された遺構と遺物 …… 202
1．掘立柱建物跡 …… 202
2．土　　壙 …… 202
3．溝　　跡 …… 210

第Ⅳ章　東田遺跡の発掘調査 …… 213
第1節　遺跡の概要 …… 213
第2節　検出された遺構と遺物 …… 214
1．竪穴式住居跡 …… 214
2．掘立柱建物跡 …… 215

3．土　　壙……217
4．溝　　跡……218

第Ⅴ章　浅見境北遺跡の発掘調査……222
第1節　遺跡の概要……222
第2節　検出された遺構と遺物……227
1．竪穴式住居跡……227
2．掘立柱建物跡……334
3．井　戸　跡……350
4．円形周溝遺構……358
5．土　　壙……360
6．溝 状 土 壙……365
7．溝　　跡……367

第Ⅵ章　中世における共和地区の様相……371
第1節　児玉党一族と共和地区……371
1．児玉党の発生と児玉庄……371
2．児玉党庄氏一族……372
3．児玉党真下氏……375
第2節　鎌倉時代の共和地区と児玉党……376
1．児玉党庄氏の西遷と北条氏……376
2．鎌倉時代の庄氏の系譜……377
3．鎌倉幕府の滅亡と庄氏一族……379
第3節　南北朝の動乱と共和地区……380
1．薊山合戦と真下氏……380
2．丹党安保氏の進出……381
第4節　室町戦国期の共和地区……382
1．児玉党流本庄氏の活躍……382
2．その後の共和地区……383

第Ⅶ章　中世の土器と瓦……385
第1節　各遺跡出土の中世土器……385
1．貿易陶磁器……385
2．国産陶器……385
3．在地産土器……387
第2節　城の内遺跡出土の中世瓦……391

第Ⅷ章　おわりに……393

参考文献……394

写真図版

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

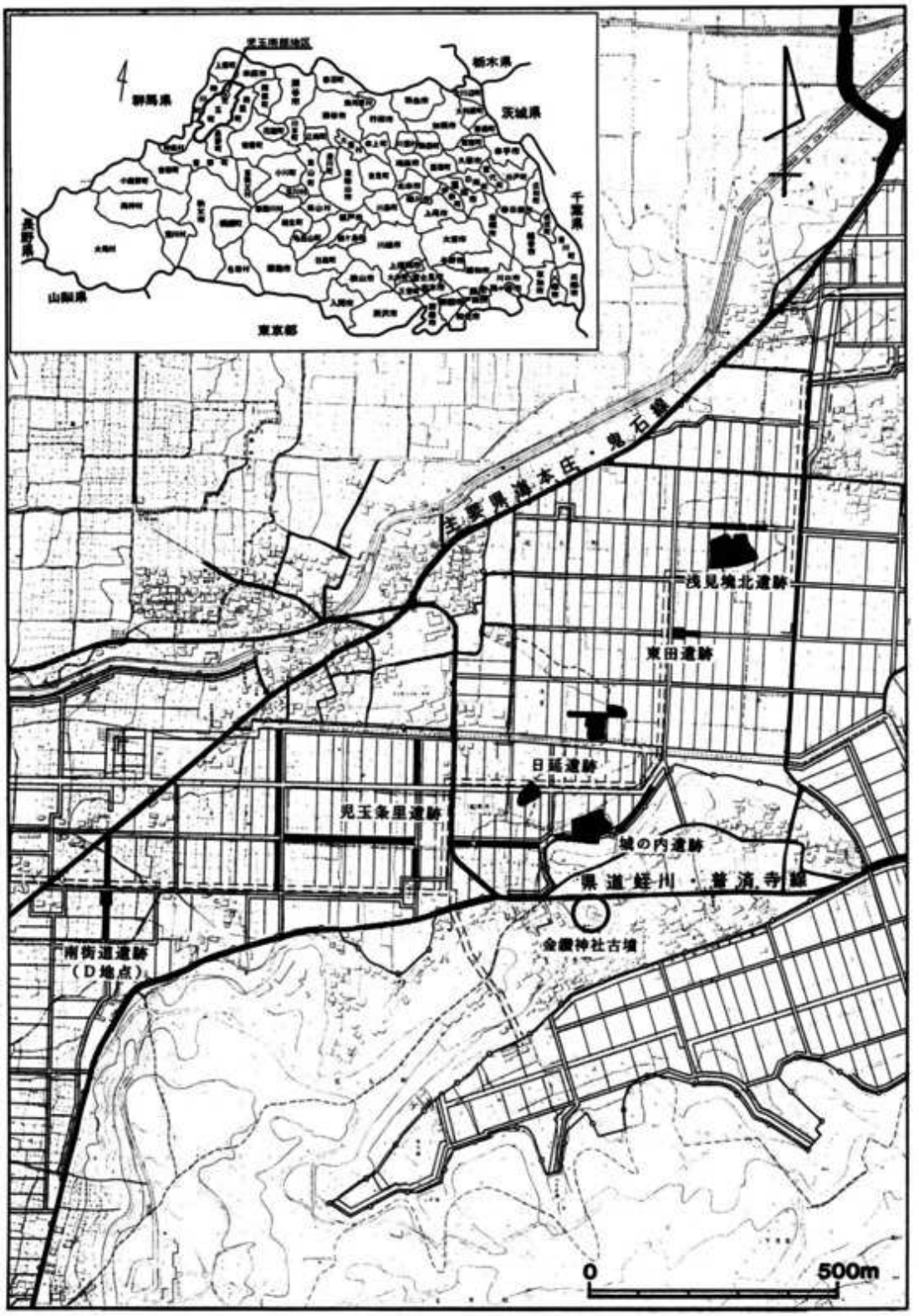
本報告の城の内遺跡(B・C・D地点)・日延遺跡(A・C地点)・浅見境北遺跡は、県営ほ場整備事業児玉南部地区の平成3年度工区と平成4年度工区の工事に伴って、発掘調査を実施したものである。

平成3年度工区は、西側は国道462号線、南側は生野山残丘、北側は大堀川(やぼり川)によって囲まれた南北約400m・東西約1000mの水田を主体とする約31haを対象にしている。この工区内には、西端の畑地帯に南街道遺跡(恋河内1996)、東側の生野山残丘北側斜面下の低台地上に城の内遺跡と侵食によって地形的に分離された日延遺跡、水田部の大半は1町四方の条里形地割りの痕跡が広がる児玉条里遺跡が所在している。これらの工区内に所在する遺跡の取り扱いについて、担当機関の本庄土地改良事務所と児玉町教育委員会で協議を重ね、それをもとに平成2年12月に県文化財保護課・県耕地課・本庄土地改良事務所・児玉町教育委員会の四者による調整会議が行われた。その結果、工事に伴ってやむを得ず遺跡が破壊される部分については、事前に発掘調査を実施して記録保存の措置をとることになった。

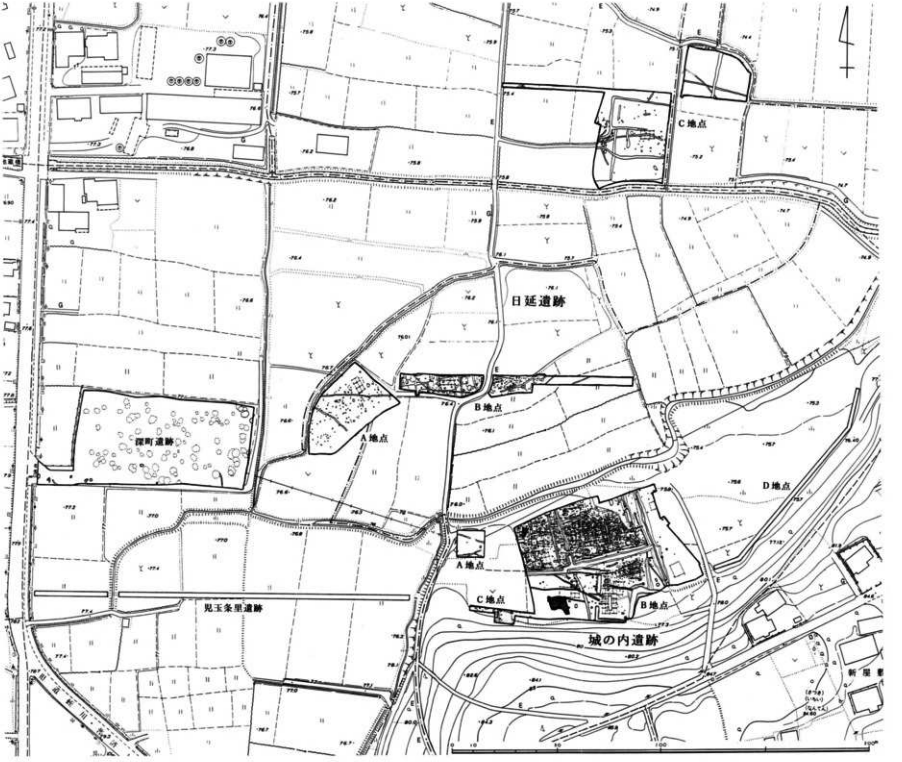
発掘調査に関する届出は、本庄土地改良事務所より平成3年5月28日付け本地第324号による「埋蔵文化財発掘の通知」が、児玉町教育委員会より平成3年6月3日付けの児教社第80号による「埋蔵文化財発掘調査の通知」が、それぞれ埼玉県教育委員会を経て文化庁に提出されている。なお、文化庁からは、平成4年4月8日付けの3委保記第5−5064号による発掘調査通知の受理について児玉町教育委員会に通知があり、埼玉県教育委員会からは平成3年10月5日付けの教文第3−227号による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の指示が本庄土地改良事務所に対して通知されている。

平成4年度工区は、平成3年度工区の北側に隣接して位置し、北側と西側は国道462号線、南側は大堀川(やぼり川)、東側は入浅見が高関に通じる南北方向の道路によって囲まれた水田地帯を主体とする約33.4haを対象にしている。この工区内には、生野山残丘下の低台地から分離された微高地上に日延遺跡(C地点)、水田部内の微高地上に浅見境北遺跡、現水田部に1町四方の条里形地割りの痕跡が広がる児玉条里遺跡(東田遺跡)が所在しており、それらの遺跡の取り扱いについて、担当機関の本庄土地改良事務所と児玉町教育委員会で協議を重ね、それをもとに平成3年12月に県文化財保護課・県耕地課・本庄土地改良事務所・児玉町教育委員会の四者による調整会議が行われた。その結果、工事に伴ってやむを得ず遺跡が破壊される部分については、事前に発掘調査を実施して記録保存の措置をとることになった。

発掘調査に関する届出は、本庄土地改良事務所より平成4年5月18日付け本地第225号による「埋蔵文化財発掘の通知」が、児玉町教育委員会より平成4年5月18日付けの児教社第43号(日延遺跡C地点)・第44号(児玉条里遺跡)・第45号(浅見境北遺跡)による「埋蔵文化財発掘調査の通知」が、それぞれ埼玉県教育委員会を経て文化庁に提出されている。なお、文化庁からは、平成4年10月20日付け4委保記第5−3987号(児玉条里遺跡)・第5−3988号(日延遺跡C地点)・第5−3989号(浅見境北遺跡)による発掘調査通知の受理について児玉町教育委員会に通知があり、埼玉県教育委員会からは平成4年9月3日付け教文第3−189号・190号による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の指示が本庄土地改良事務所に対して通知されている。


児玉南部地区
群馬県
栃木県
茨城県
千葉県
埼玉県
山梨県
東京都
主要県道本庄・皆石線
浅見境北遺跡
東田遺跡
日延遺跡
児玉条里遺跡
城の内遺跡
県道蛭川・普済寺線
金鑽神社古墳
南街道遺跡
（D地点）
0
500m

第1図　発掘調査位置図



第２図　城の内遺跡・日延遺跡発掘調査地点位置図

第Ⅱ章　城の内遺跡B・C・D地点の発掘調査

第1節　遺跡の概要

本遺跡は、生野山残丘北側斜面下の標高76mを測る低台地上に立地している。本遺跡の周辺には、すでに発掘調査が実施された遺跡が多く、北側約50mの微高地上には古墳時代前期～中期の集落跡と中世の屋敷跡を主体とする日延遺跡(本書第Ⅲ章)が、西側約100mの低地内には条里水田跡と縄文時代～弥生時代の倒木痕を主体とする深町遺跡(鈴木・西口1981)が、南側約100mの残丘上には古墳時代中期の当地域における首長墓である大型円墳の金鑽神社古墳(佐藤1986)が、南東側約100mの残丘上には古墳時代中期と平安時代～中世の集落跡や屋敷跡を主体とする新屋敷遺跡が所在している。また、本遺跡の北側に広がる沖積低地内には、1町四方の方格地割りが連続する条里形地割り(児玉条里遺跡)が広範囲に見られる。

本遺跡は、昭和55年に東京電力の送電線鉄塔建設に伴って、A地点(第2図)の小規模な発掘調査が実施されており(鈴木・西口1981)、今回の発掘調査は本遺跡の第2次調査にあたる。発掘調査は、水田化のために削平されるB地点と小排水路建設に伴うC・D地点の3箇所(第2図)で実施したが、すでに水田として利用されていた山際のD地点は、現状で西側に隣接するB地点よりも30cm程度削平されており、明確な遺構は確認できなかった。また、A地点の調査では、先土器時代のナイフ形石器やUフレイクと、縄文時代早期(押型文・条痕文)と中期の土器片と石器が少量出土しているが、今回の調査では先土器時代の遺物はなく、縄文時代の早期と前期の土器片(第5図)と石器が少量出土しただけで、縄文時代の遺構はまったく検出されなかった。

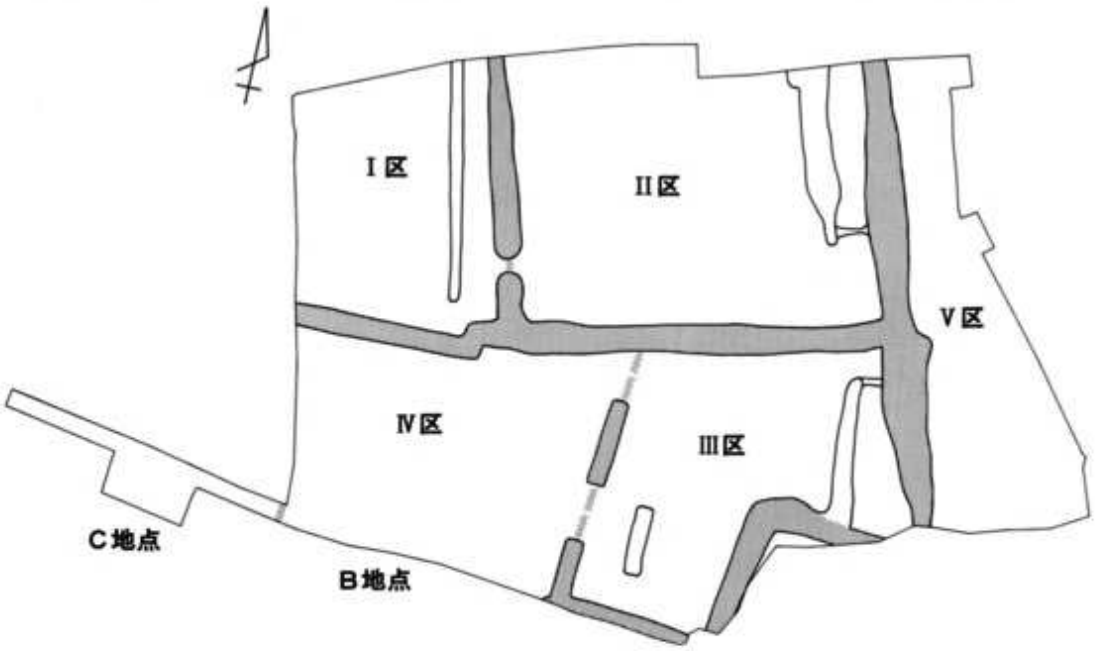
B・C地点で検出された遺構は、竪穴式住居跡1軒・竪穴状遺構1基・掘立柱建物跡31棟・門跡2基・井戸跡13基・集石遺構2基・柱穴列2基・土壙約80基・溝跡16条と堀跡である。これらの遺構は、時期的には主に古墳時代中期と中世のものであるが、後者の中世の遺構が主体で、その種類は多彩である。また、これらの遺構の中で遺構番号を付けていないものは、A軽石降下以後の近世後半以降でも比較的新しい時代のものであり、本報告ではこれらについての説明は省略している。

古墳時代の遺構(第6図)は、中期の住居跡1軒と土壙2基だけであるが、中世における造成や屋敷等の建設に伴って多くの遺構が破壊された可能性が強く、該期の遺構はもっと多く存在したものと思われる。また、該期にはB地点の調査区南側の残丘斜面裾に、残丘からの湧水によって開析された幅約20mの浅い谷が存在しており、その埋没した黒色土やそれを切る中世の遺構からは中期の土器片が比較的多く出土している。本遺跡の中期集落は、その立地条件や出土土器から見て、単一時期の小規模な集落であったものと思われるが、北側の日延遺跡や南側残丘上の新屋敷遺跡でも、本遺跡と近時した時期の集落が営まれている。これらの近接して存在する小規模な集落は、相互に密接な繋がりをもっていたものと想像され、本遺跡南側の残丘上に築造される格子目叩きの円筒埴輪を伴う金鑽神社古墳との関係からも注目されよう。この他には、古墳時代から平安時代の須恵器片や古墳時代中期から後期の埴輪の破片も少量出土している(第17・18図)。

中世の遺構(第19～22図)は、竪穴状遺構1基・掘立柱建物跡31棟・門跡2基・井戸跡13基・集石遺構

2基・柱穴列2基・土壙71基・溝跡12条と、敷地の周りと内部を区画する比較的規模の大きな堀跡である。これらの遺構は、概ね13世紀～16世紀前半の比較的長期にわたって形成されているが、検出された遺構の多彩さや出土した遺物の様相から見て、本遺跡がその当初から在地領主層と直結もしくは密接に関係した遺跡であったことが伺える。その変遷は、まず12世紀末～13世紀前半頃に縄目叩きの瓦を主体にした瓦葺きの門(第1号門跡)や堂を伴う屋敷かあるいは小規模な寺院が建立され、14世紀には浅見山Ⅰ遺跡出土の瓦(本庄市1986)と同笵の連珠文軒平瓦と文様叩き平瓦を使用した修理もしくは再建が行われたものと推測される。その後、本遺跡は15世紀中頃になって比較的規模の大きな堀による区画とおそらく土塁をもつ館かそれに付随するような屋敷に大改造され、短期間の間にいくらか改修されるが、15世紀末～16世紀前半のうちには廃絶されたようである。

前半期に築造された瓦葺きの構造物を伴う屋敷跡か寺院跡は、15世紀の大改造に伴う造成によってかなり破壊されたようで、その具体的な様相は明確ではない。しかし、第1号門跡の構築状況からは、残丘北側斜面の裾をほぼ東西方向に直線的に削って台地上を平場の敷地に造成しており、その築造にあたってかなり大掛かりな工事が行われたようである。また、その敷地内の地割りは、本遺跡の北側に隣接する現水田部の条里形地割りと同じく、ほぼ東西及び南北方向をとっていたようである。後半期の堀によって区画された館跡かそれに付随するような屋敷跡は、北側と西側の境が台地と水田部の境の水路に比定され、東側の境が調査区内で検出された堀跡のD・E区(第137図)と推測され、東西約120m・南北約80mで、面積約7,800㎡の不整の四角形を呈した敷地であったと思われる。敷地の内部は堀によって区画され、Ⅳ区(第3図)以外はいずれも複数の建物跡や井戸を備えており、生活空間としては独立した様相をもっているが、大形建物や礎石建物が多く、他とは構造の異なった第5号井戸跡のあるⅡ区の生活者に従属した関係の敷地区分であったと推測される。



第3図　城の内遺跡B地点区域割図

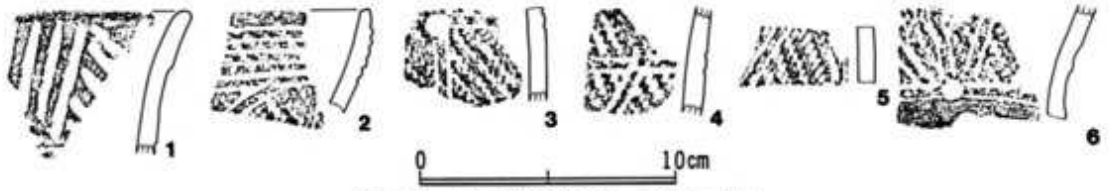
第4図　城の内遺跡B・C地点全体図

第２節　縄文時代の遺物

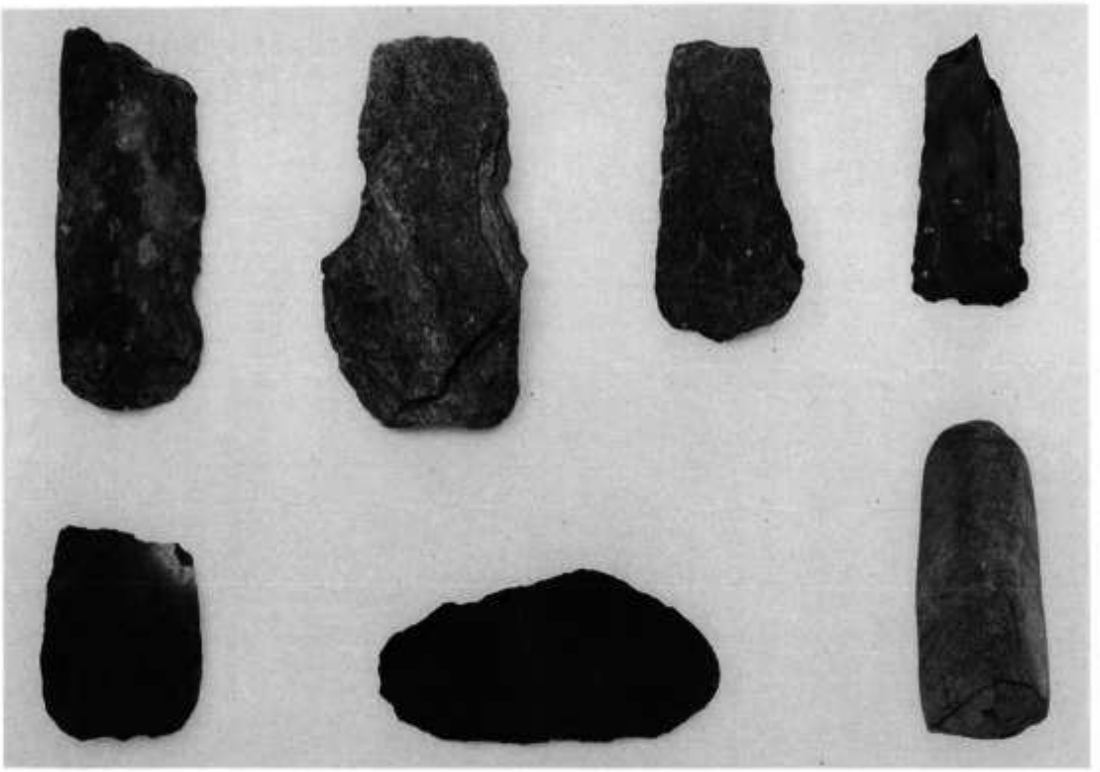
城の内遺跡のＢ･Ｃ地点の調査では、縄文時代の土器片と石器が少数出土している。これらの遺物は、いずれも後世の遺構の覆土中に混入して検出されたものやあるいは表採によるものであり、縄文時代の遺構は調査区内ではまったく検出されていない。

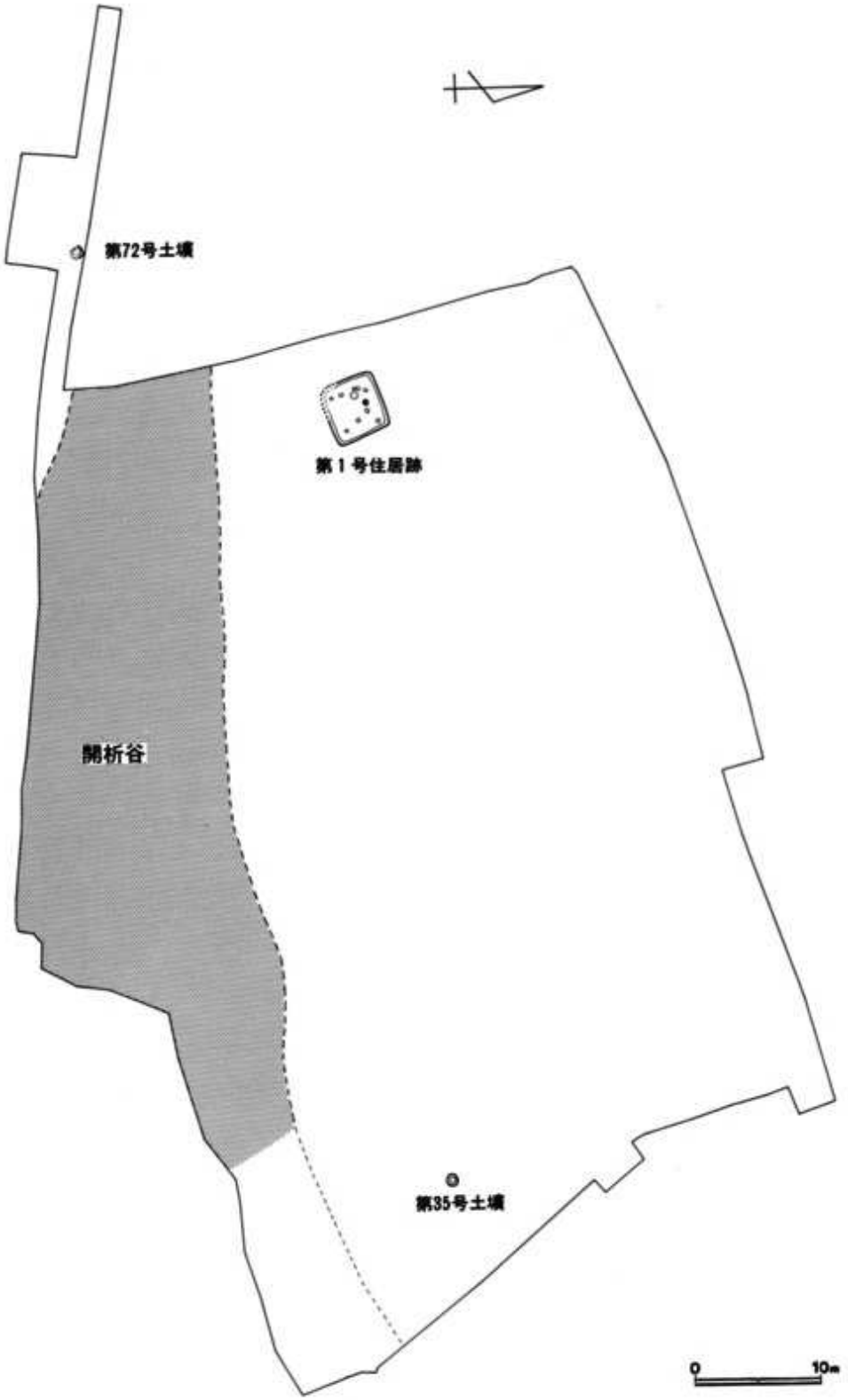
土器(第５図)は、小破片が全部で10片程度出土している。１は、第１号溝跡の覆土中から出土した深鉢形土器の口縁部破片で、太い篦描による据歯文とその下端に文様帯区画の横位沈線を施すものである。２～６は、古墳時代中期の第１号住居跡(№２～５)や周辺のピット(№６)の覆土中から出土した深鉢形土器の破片である。いずれもＲＬの地文の上に半裁竹管による平行沈線文を施すもので、縦と横の区画線の結節点には指頭によって皿状に窪めた円文を配している。時期は、１が早期の田戸下層式に、２～６と図示できなかった残りの土器片が前期の諸磯ａ式に比定される。

石器は、打製石斧５個･スタンプ型石器１個･横刃型石器及び剥片が出土しているが、それぞれの時期は明確ではない。



第５図　城の内遺跡出土の縄文土器





第6図　城の内遺跡古墳時代遺構配置図

第３節　古墳～平安時代の遺構と遺物

１．竪穴式住居跡

第１号住居跡（第７図）

Ｂ地点の調査区西端に位置する。住居跡南西側コーナー部を第２号溝跡に、住居跡内を中世以降の第36号土壙や第37号土壙及び多数のピットによって切られているため、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、比較的整った方形を呈するが、各コーナー部はやや丸みをもっている。規模は、南北方向4.52m・東西方向4.80mを測る。主軸方位は、N－20°－Wをとる。

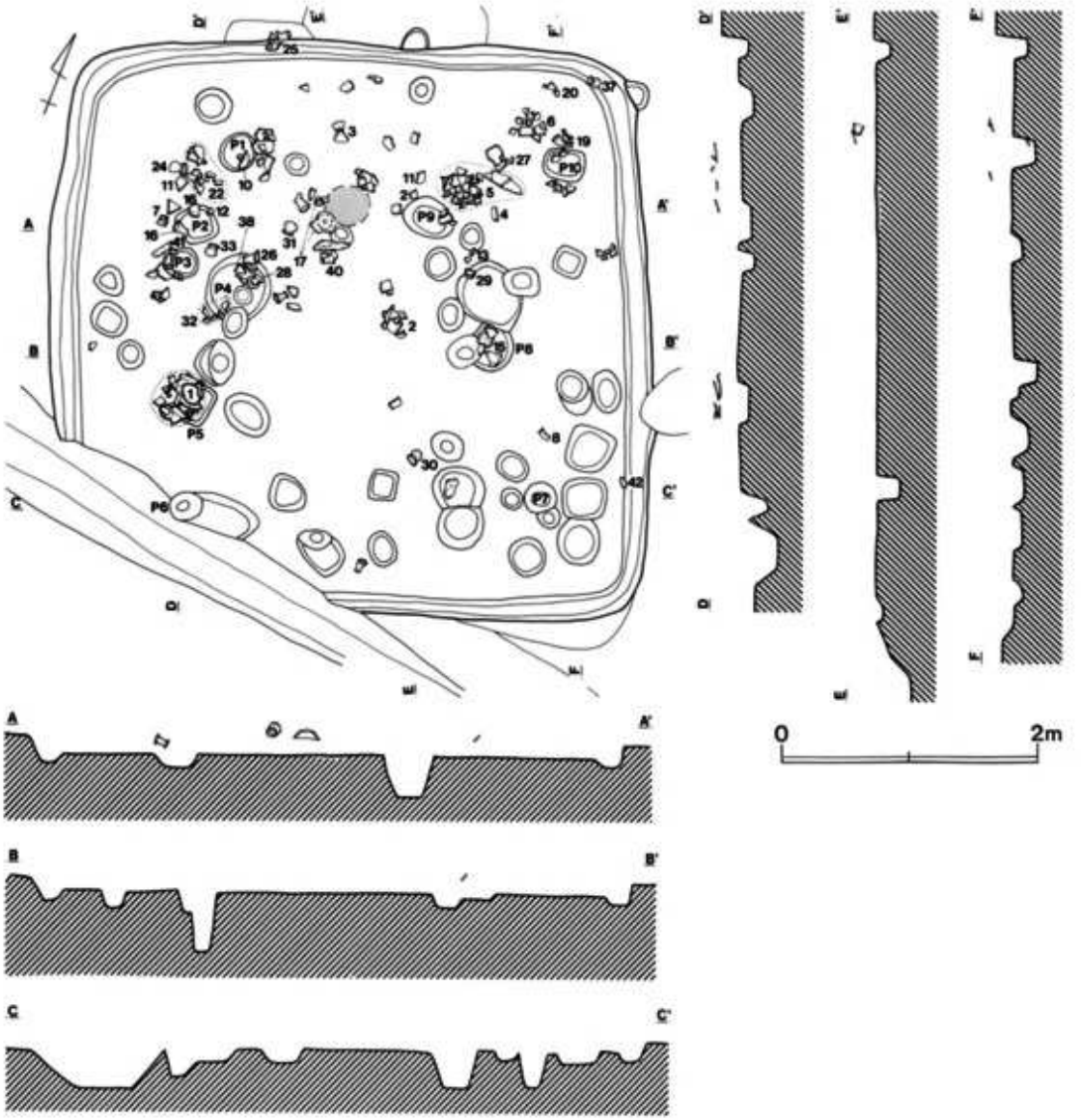
壁は、若干外傾して立ち上がり、確認面からの深さは最高14cmある。残存する各壁下には幅15cm～20cm・深さ８cm程度の壁溝が、途切れずに巡っている。床面は、ロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平らにした貼床式で、全体にやや軟弱である。炉は、住居中央部から北側壁の方に寄った位置にある。床面が円形に焼けているだけの掘り込みをもたない地床炉で、あまり良く焼けておらず、硬化していない。

ピットは、住居跡内に多数見られるが、ほとんどが中世のもので、覆土の状態から本住居跡に伴う可能性が高いと考えられるものはＰ１～Ｐ10の10箇所である。主柱穴の配置は不明確であるが、Ｐ６とＰ７はその形態や規模が類似しており、その位置から４本主柱の一部を構成していたものと思われる。Ｐ４は、他に比べて規模がやや大きく、土壙状を呈するものである。貯蔵穴は、残存する住居内では検出されなかった。

出土遺物は、覆土中より比較的多くの土器と少量の石製品が出土している。これらの土器は、住居北側半分の覆土上層を主体として出土しており、住居廃絶後の覆土埋没過程中に投棄されたものである。出土状態から本住居跡に伴うと考えられるものは、東側壁際の床面上から出土したNo42の砥石だけである。

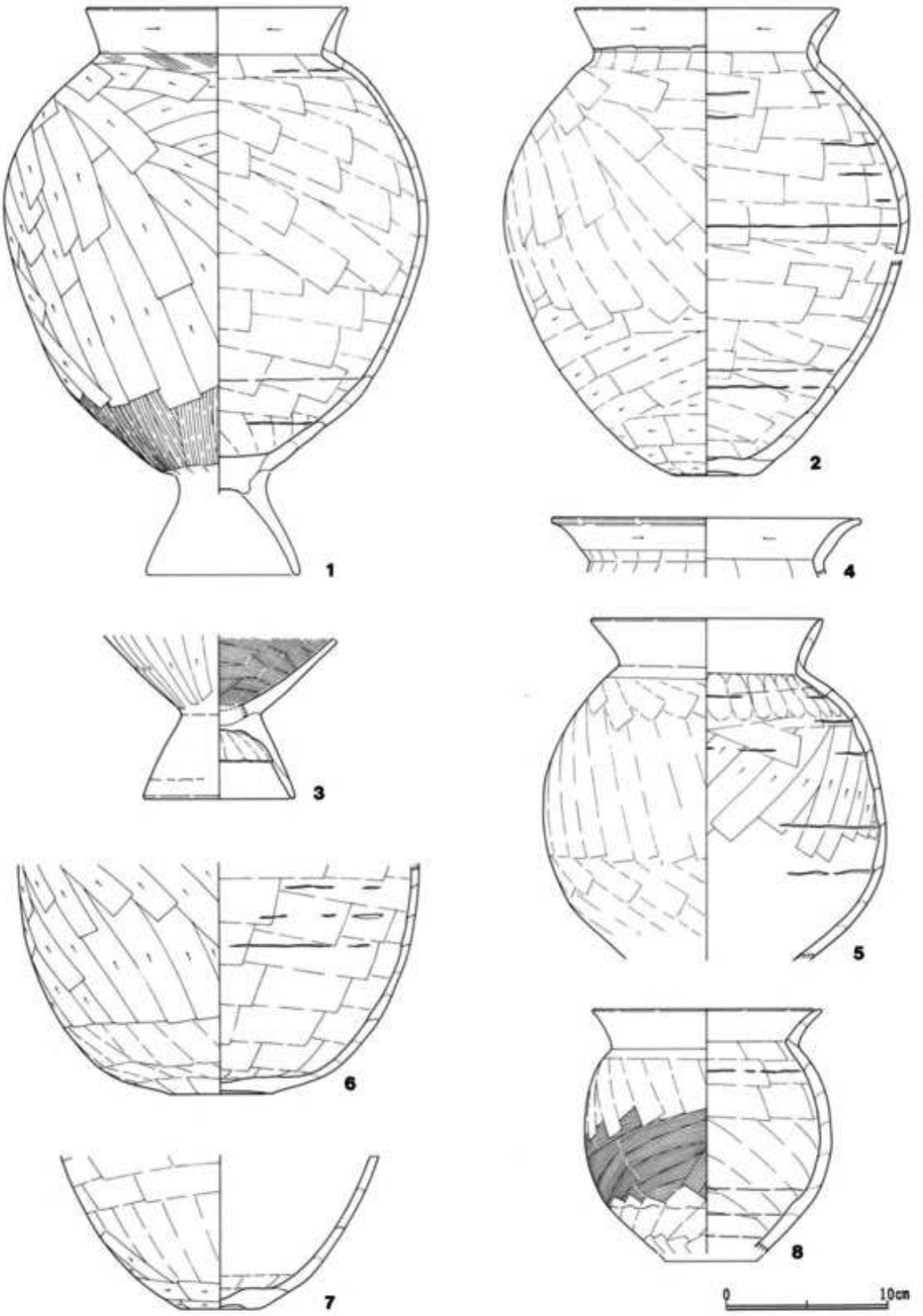
第１号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	台付甕	口縁部径（16.2cm） 残存高 30.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや直線的に外傾する。胴部は張り、最大径をやや上位にもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面浅く間隔の広いハケの後ケズリ、内面篦ナデ。	赤色粒・白色粒 外－暗茶褐色 内－明茶褐色	2/3。 外面下半は二次焼成により荒れている。 覆土中。
2	甕	口径（16.4） 推定高（29.0） 底径 5.3	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。底部は突出せず、中央部が窪む平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後上半ナデ、内面篦ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－暗茶褐色	上半4/5、下半1/2。 胴部外面煤の付着顕著。 上半と下半は接合しない。 器形は図上復元。 覆土中。
3	台付甕	残存高 10.1cm	粘土紐積み上げ成形。台部貼り付け。台部はやや内湾ぎみに開く。	胴部外面ナデの後部分的にケズリ、内面ハケ。台部内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－茶褐色 内－暗茶褐色	3/4。 胴部内面煤の付着あり。 覆土中。
4	甕	口縁部径（17.2cm）	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面篦ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	1/4。 覆土中。



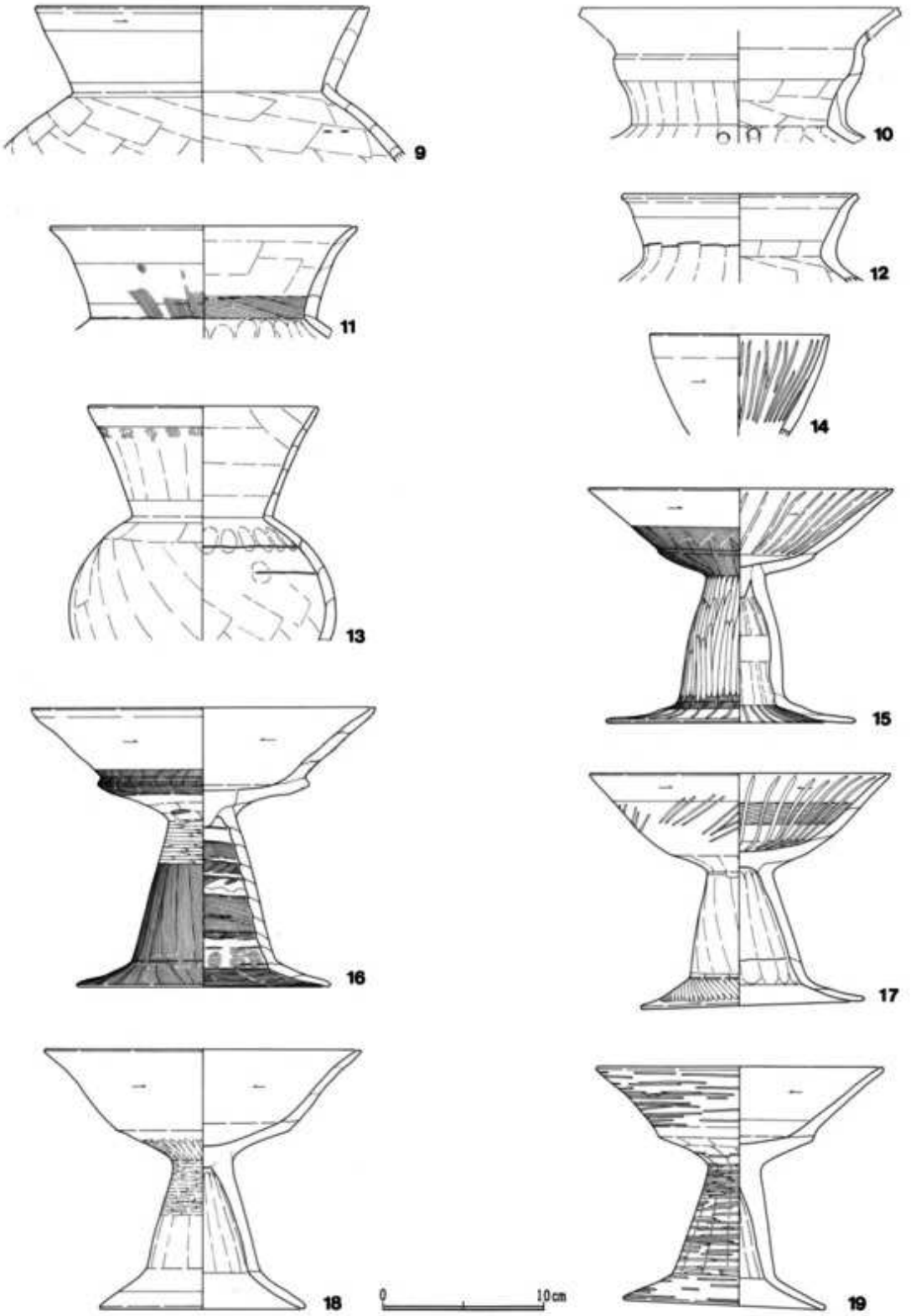
第7図　第1号住居跡

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	甕	口縁部径（14.4cm） 残存高 21.0cm	粘土紐輪積み成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ナデの後上半ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	2/3。 胴部外面黒斑あり。 覆土中。
6	甕	残存高14.2 底径 6.4	粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、底部は中央部が若干窪む平底を呈する。	胴部外面ナデの後ケズリ、内面箆ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－暗褐色	1/3。 胴部外面煤の付着あり。 覆土中。
7	甕	残存高9.5 底径 5.2	粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、底部は輪台状に窪む平底を呈する。	胴部外面ナデの後下端ケズリ、内面ナデ。底部外面外縁ケズリ・中央ナデ。	片岩粒・白色粒 外－茶褐色 内－暗茶褐色	2/3。 覆土中。



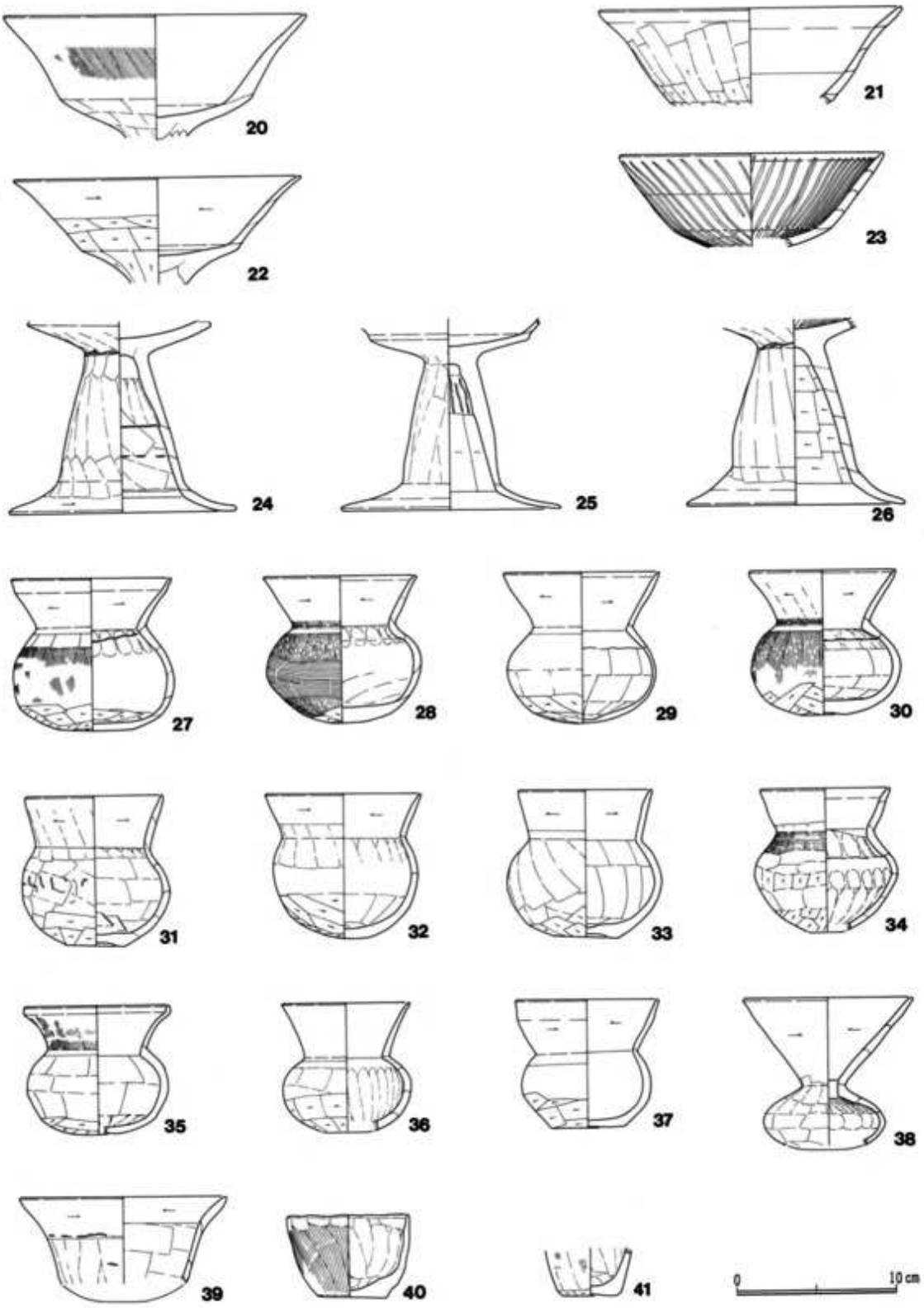
第8図　第1号住居跡出土遺物(1)

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
8	小形甕	口縁部径 (14.2cm) 残存高 15.1cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後上半と下半にナデ、内面箆ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－暗茶褐色 内－淡茶褐色	2/3。 覆土中。
9	広口壺	口縁部径 20.6cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は平坦面に凹線を施す。	口縁部外面丁寧なナデ、内面ヨコナデ。胴部外面丁寧なナデ、内面箆ナデ。	白色粒 内外－明茶褐色	3/4。 覆土中。
10	二重口縁壺		粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに屈曲し、二重口縁の形態を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面箆ナデ。胴部外面箆ナデ。	赤色粒・白色粒 外－茶褐色 内－黒褐色	1/2。胴部上端に焼成前の穿孔あり。 覆土中。
11	広口壺	口縁部径 (19.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ナデ。	白色粒 内外－明茶褐色	1/3。外面煤の付着あり。 覆土中。
12	広口壺	口縁部径 14.6cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面箆ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－茶褐色	3/4。 覆土中。
13	直口壺	口縁部径 (14.2cm) 残存高 14.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は球状に強く張る。	口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面箆ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	1/4。 覆土中。
14	直口壺	口縁部径 (11.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデの後暗文。	白色粒 内外－暗茶褐色	1/3。 覆土中。
15	高坏	口縁部径 18.8cm 器高 14.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は坏部から直線的に開く。脚柱部は短くやや膨らみをもつ。脚端部は低く外反ぎみに開く。	口縁部外面ハケの後上半ヨコナデ、内面ヨコナデ。脚柱部外面ハケの後ミガキ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－明茶褐色	3/4。 口縁部内面及び脚端部内外面に暗文あり。 覆土中。
16	高坏	口縁部径 (21.2cm) 器高 17.2cm	粘土紐積み上げ成形（脚部巻き上げ）。口縁部は外反ぎみに開き、坏部との境の稜は突出する。脚柱部やや高く、脚端部は外反ぎみに開く。	口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。坏部外面ハケの後ナデ。脚柱部外面ハケの後上半ミガキ、内面ハケ。脚端部内外面ハケ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	2/3。 脚部外面黒斑あり。 覆土中。
17	高坏	口縁部径 18.6cm 器高 14.5cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや内湾ぎみに開く。脚柱部は短く、脚端部は外反しながら開く。	口縁部外面ナデ、内面ハケの後ヨコナデ。坏部外面ナデ。脚柱部内外面ナデ。脚端部外面ミガキ、内面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 外－茶褐色 内－暗茶褐色	3/4。 口縁部外面には半截竹管状工具による暗文。 内面は箆描による暗文。 覆土中。
18	高坏	口縁部径 (19.6cm) 器高 16.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに開く。脚柱部は短く、脚端部はやや高く直線的に開く。	口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面ナデの後ミガキ。脚柱部外面ナデの後上半ミガキ、内面指ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	白色粒 内外－茶褐色	1/2。 覆土中。
19	高坏	口縁部径 17.8cm 器高 15.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに開く。脚柱部はやや低く、脚端部は直線的に開く。	口縁部内外面ヨコナデの後外面細かいミガキ。脚柱部外面ナデの後細かいミガキ、内面ナデ。脚端部内外面ヨコナデの後外面雑なミガキ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	坏部3/4、脚部完形。 覆土中。

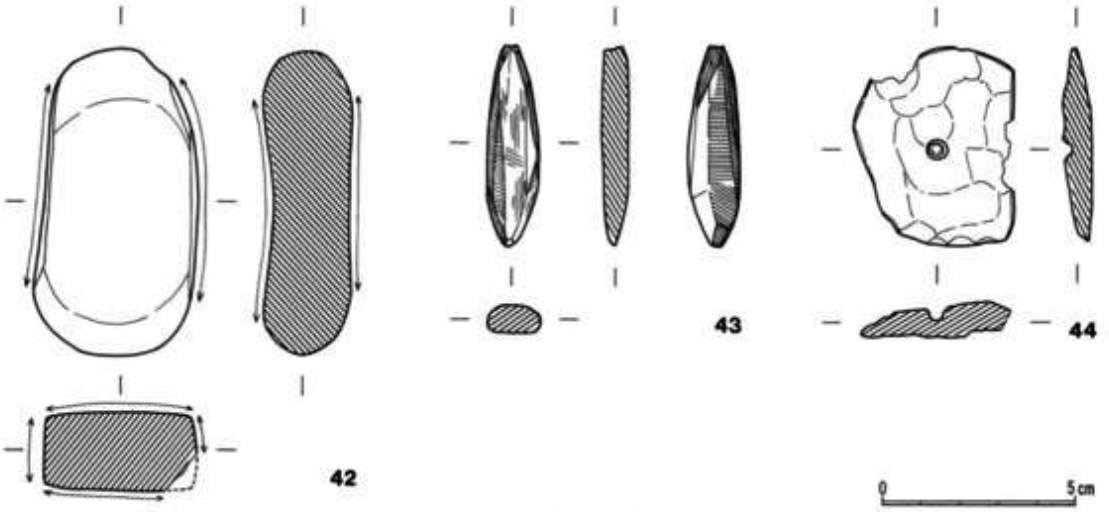


第9図　第1号住居跡出土遺物(2)

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
20	高坏	縁部径 (19.0cm)	粘土紐積み上げ成形。坏部は深く、口縁部は外反しながら開く。	口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ナデ。坏部外面ケズリの後ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	1/5。 覆土中。
21	高坏	口縁部径 (19.0cm)	粘土紐積み上げ成形。坏部は深く、口縁部は緩やかに外反する。	口縁部外面ケズリの後ヨコナデ、内面ナデ。坏部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	1/3。 P10内。
22	高坏	口縁部径 (18.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデの後、外面下半ケズリ。坏部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	1/2。 覆土中。
23	高坏	口縁部径 (16.6cm)	粘土紐積み上げ成形。坏部は深く、口縁部はやや内湾ぎみに開く。	口縁部及び坏部内外面ともナデの後放射状暗文。	片岩粒・白色粒 外－暗茶褐色 内－明茶褐色	1/3。 覆土中。
24	高坏	残存高 12.0cm	脚部粘土紐輪積み成形。脚柱部は中位がやや膨らみ、脚端部は強く外反して開く。	坏部内外面ナデ。脚柱部外面ナデ、内面篦ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	4/5。 覆土中。
25	高坏	残存高 11.9cm	粘土紐積み上げ成形。脚柱部は中位がやや膨らみ、脚端部は強く外反して開く。	坏部内外面ナデ。脚柱部外面丁寧なナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	2/3。 覆土中。
26	高坏	残存高 11.6cm	粘土紐積み上げ成形。脚柱部は中位が膨らみ、脚端部は外反して開く。	坏部外面ナデ、内面暗文。脚柱部外面篦ナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	脚部完形。 覆土中。
27	小形直口壷	口縁部径 10.0cm 器高 9.5cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに外傾し、上端は短く屈曲する。胴部は張り、底部はやや丸底ぎみ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ下半ケズリ、内面ナデ。底部内外面ケズリ。	片岩粒・白色粒 内外－淡茶褐色	2/3。 覆土中。
28	小形直口壷	口縁部径 9.6cm 器高 9.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに外傾する。胴部は張り、底部は不安定で小さな平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	3/4。 覆土中。
29	小形直口壷	口縁部径 9.8cm 器高 9.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－淡茶褐色 内－茶褐色	3/4。 外面黒斑あり。 覆土中。
30	小形直口壷	口径 9.2 器高 9.0 底径 2.8	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや外反ぎみに外傾する。胴部は張り、底部は若干窪む小さな平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ下半ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。	白色粒 外－淡茶褐色 内－茶褐色	ほぼ完形。 外面黒斑あり。 覆土中。
31	小形直口壷	口径 8.6 器高 9.4 底径 3.6	粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみにやや外傾する。胴部は張り、底部は中央が窪む平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－明茶褐色	ほぼ完形。 底部内面斑点状剥落顕著。 覆土中。
32	小形直口壷	口縁部径 (9.8cm) 器高 9.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は張り、底部は不安定で小さな平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面上半ナデ・下半篦ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－茶褐色	2/3。 外面黒斑あり。 覆土中。



第10図　第１号住居跡出土遺物(3)



第11図　第１号住居跡出土遺物(4)

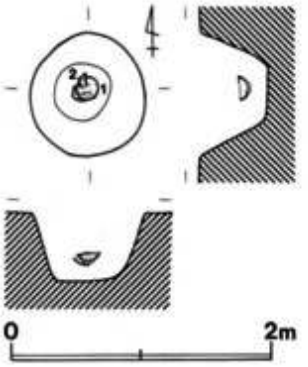
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
33	小形直口壷	口径 8.4 器高 9.3 底径 4.1	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部は張り、底部は中央部が窪む平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下端ケズリ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡茶褐色	ほぼ完形。 底部内面斑点状剥落あり。 覆土中。
34	小形直口壷	口縁部径 8.1cm 器高 8.9cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は若干内湾ぎみに外傾する。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半ハケ下半ケズリの後部分的にナデ、内面指ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	3/4。 外面黒斑あり。 覆土中。
35	小形直口壷	口径 (9.2) 器高 8.0 底径 (2.2)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は短く上方に屈曲する。胴部は張り、底部は若干窪む小さな平底を呈する。	口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下端ケズリ、内面指ナデの後上半篦ナデ。底部外面ケズリ。	白色粒 内外－暗茶褐色	1/2。 覆土中。
36	小形直口壷	口径 (8.0) 器高 8.0	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面指ナデ。	赤色粒・白色粒 外－暗褐色 内－茶褐色	1/4。 覆土中。
37	小形直口壷	口径 9.0 器高 8.0 底径 4.5	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、底部は中央部が若干窪む平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。底部外面外縁ケズリ・中央ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	ほぼ完形。 胴部内面剥落顕著。 覆土中。
38	小形直口壷	口径 10.6 残存高 9.3	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に強く外傾する。胴部は小さく偏平をなす。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。	白色粒 外－茶褐色 内－暗茶褐色	2/3。 頸部は穿孔による。 覆土中。
39	椀	口径(13.0) 残存高 5.4	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短くやや外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	1/4。 覆土中。
40	坏	口径 4.6 器高 5.2 底径 4.3	手捏ね成形。体部は内湾ぎみに立ち上がり、底部は平底を呈する。	口縁部指頭による押捺。体部外面ナデの後ハケ、内面指ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	2/3。 外面黒斑あり。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
41	坏	残存高 3.0 底径 3.3	粘土紐積み上げ成形。体部は内湾ぎみにやや外傾し、底部は平底を呈する。	体部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。底部外面外縁ケズリ、中央部ナデ。	片岩粒・赤色粒 外－淡橙褐色 内－淡褐色	3/4。 覆土中。
42	砥石	長さ 7.9 幅 4.0 厚さ 2.0	楕円形に近いやや小さい自然石の表裏面及び側面を平坦に加工して使用。	表裏面及び両側面とも良く擦られ、表裏面は中央部が窪んでいる。	凝灰岩	完形。 重さ118g。 床面上。
43	石製品	長さ 5.2 幅 1.3 厚さ 0.7	剣形石製模造品の形態に類似するが、研磨による稜が多く見られる。	表裏面及び両側面とも荒い研磨を施す。	滑石	完形。 重さ9g。 覆土中。
44	石製品	長さ 5.1 幅 4.1 厚さ 0.8	平面形は円形を呈していたものと思われるが、剥落が著しい。	両面とも荒れており、研磨痕は見られないが、片側の中央部に穿孔痕がある。	片岩	破損品。重さ20g。 覆土中。

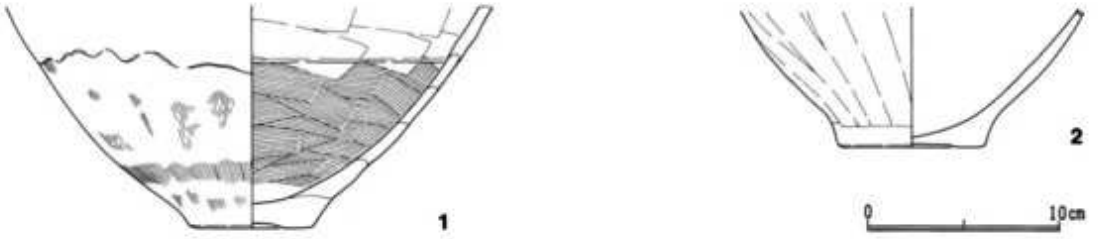
2．土　壙

第35号土壙（第12図）

B地点の調査区東端に位置する。遺構の上面は現代の水田耕作による強い削平を受けているが、遺存状態は比較的良好である。平面形は円形に近い形態を呈し、規模は南北方向95cm・東西方向88cmを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは52cmある。底面は平坦でやや狭い円形を呈している。覆土は、炭化粒子を多量に含む黒色土である。出土遺物は、土壙中央部の覆土中より壺と思われる土器の胴部下半が正位の状態で出土している。



第12図　第35号土壙



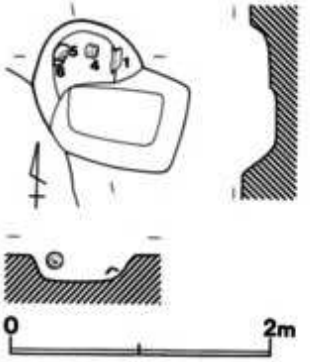
第13図　第35号土壙出土遺物

第35号土壙出土遺物観察表

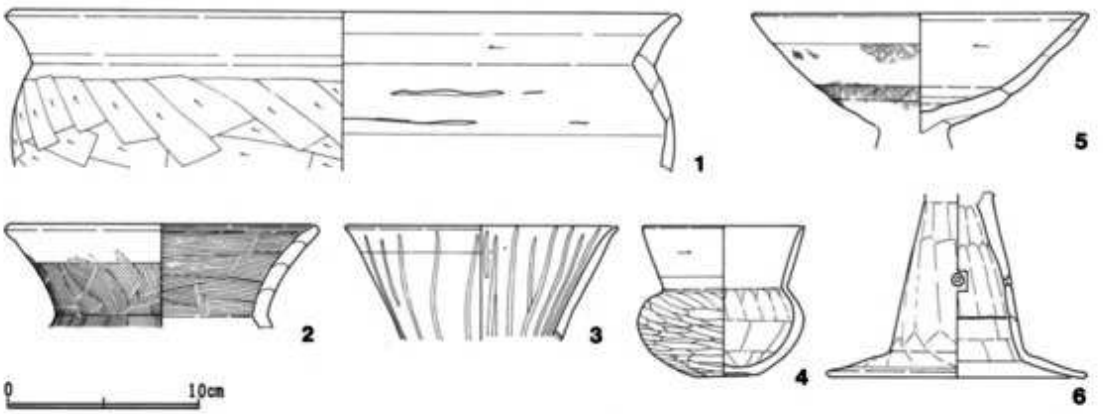
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1		残存高 11.5 底径 6.4	粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、底部は中央部が窪む平底を呈する。	胴部外面ハケの後ナデ、内面ハケの後上半篦ナデ。底部内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－淡茶褐色 内－暗褐色	2/3。 覆土中。
2		残存高 7.2 底径 7.6	粘土紐積み上げ成形。胴部は張り、底部は中央部が若干窪む平底を呈する。	胴部内外面ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 外－茶褐色 内－明茶褐色	1/2。 覆土中。

第72号土壙（第14図）

C地点の調査区中央部のやや東寄りに位置する。土壙の南側半分を中世の第71号土壙と石敷遺構によって切られているため、土壙の全容は不明である。平面形は、残存する部分から推測すると、円形もしくは楕円形に近い形態であったものと思われる。規模は、東西方向85cm・南北方向は78cmまで測れる。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。底面は比較的広く平坦をなしている。覆土は、ロームブロックやローム粒子を微量含む暗茶褐色土である。出土遺物は、土器が出土しているが、No 4 以外はすべて破片である。



第14図　第72号土壙



第15図　第72号土壙出土遺物

第72号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	大形鉢	口縁部径 (35.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く緩やかに外反する。胴部はあまり張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－明茶褐色	口縁部1/4。 底面付近。
2	壷	口縁部径 (16.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部内側は若干窪む。	口縁部外面ハケの後上半ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	口縁部1/4。 覆土中。
3	直口壷	口縁部径 (14.2cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部はやや外反する。	口縁部外面ナデの後上端ヨコナデ、内面ヨコナデ。口縁部内外面とも暗文を施す。	白色粒 内外－淡茶褐色	口縁部1/4。 覆土中。
4	小形直口壷	口径 8.4 器高 7.8 底径 2.9	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。胴部はやや偏平ぎみに張り、底部は若干窪む平底を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ミガキ、内面指ナデの後篦ナデ。底部外面ナデ。	白色粒 内外－茶褐色	ほぼ完形。 胴部外面黒斑あり。 底面上。
5	高坏	口縁部径 17.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開く。	口縁部外面ナデの後部分的にナデ、内面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	坏部完形。 覆土中。
6	高坏	残存高 9.6cm	粘土紐積み上げ成形。脚柱部はあまり膨らまず、脚端部は低く外反ぎみに開く。	脚柱部外面ナデ、内面上半指ナデ・下半ナデ。脚端部外面ナデ、内面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	脚部1/2。 覆土中。

3．その他の遺物

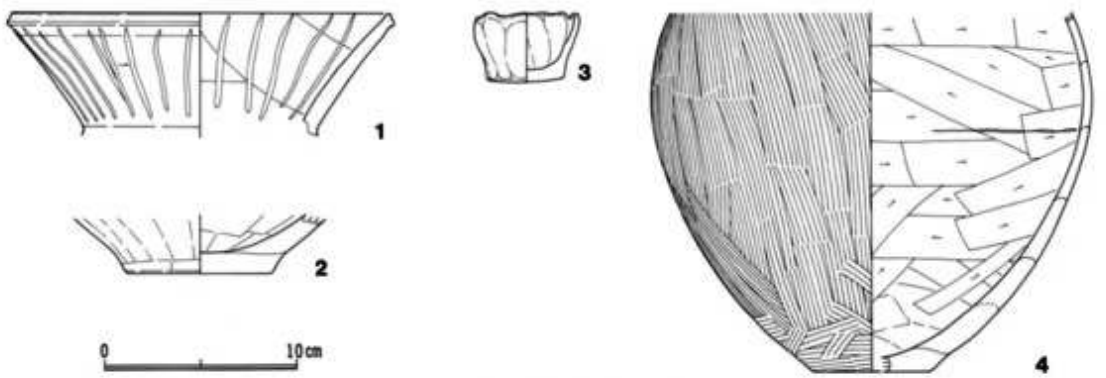
該期では、この他に土師器や須恵器と埴輪の破片が、主に後世の遺構の覆土中に混じって出土している(第16～18図)。

土師器(第16図)は、残丘北側斜面直下に位置するB地点調査区南側の開析谷黒色埋没土の上面や、その黒色土を切る中世の第2号溝跡の覆土中から比較的多くの破片が出土しているが、図示できるものは少ない。時期は、第1号住居跡と同じく古墳時代中期の和泉式土器である。

須恵器(第17図)は、中世以降の遺構の覆土中に混じって、高坏・甕・高台付壷・高台付椀・甑？等の破片が少量出土している。時期は、No1～5が古墳時代後期、No6～9が奈良・平安時代のものと考えられるが、このうちのNo2の高坏脚部は当地域では比較的珍しい湖西産である。

埴輪(第18図)は、格子目叩きやハケ調整の円筒埴輪の破片(No1～6)と、形象埴輪(No7)の破片がある。円筒埴輪は破片の湾曲が弱いことから、比較的大型品と推測されるものが多く、形象埴輪はその形状から人物埴輪の基部の可能性も考えられる。時期は、5世紀代のものが主体と考えられるが、No5とNo7は6世紀代に下る可能性がある。

これらの遺物のうち、調査区内で遺構が検出されていない古墳時代後期～平安時代に属するもの

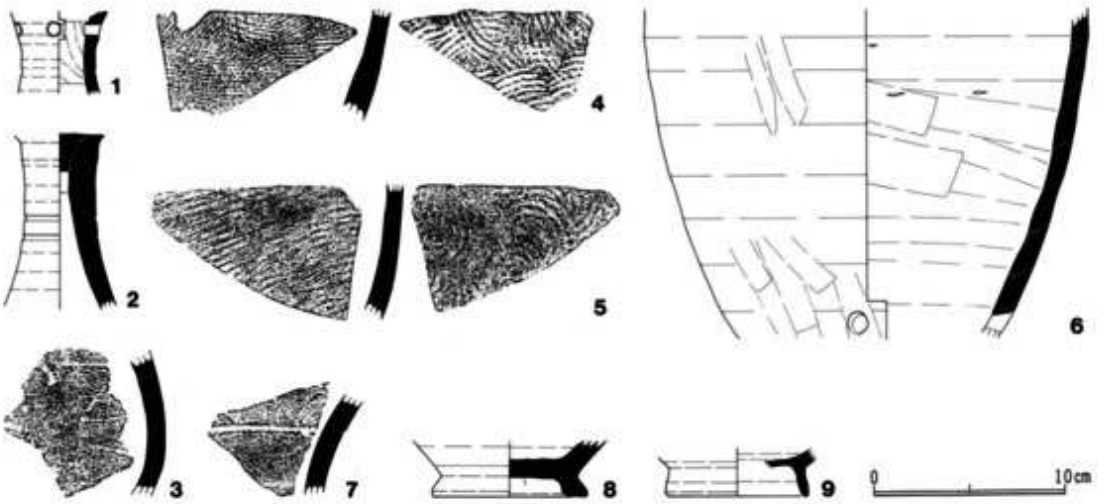


第16図　城の内遺跡出土の土師器

城の内遺跡B地点出土土師器観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壷	口縁部径 (20.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部やや外反ぎみに外傾し、口唇部は平坦な面をもつ。	口縁部内外面ともヨコナデの後暗文を施す。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	口縁部1/4。 第2号溝跡覆土中出土。
2	甕	底部径 7.6cm	粘土紐積み上げ成形。底部は突出した平底を呈する。	胴部外面ナデ、内面箆ナデ。底部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	底部1/2。 第2号溝跡覆土中出土。
3	坏	口径 5.2 器高 3.6 底径 3.9	粘土紐積み上げ成形。体部は内湾ぎみに立ち、底部は平底を呈する。	口縁部未調整。体部外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	3/4。 第2号溝跡覆土中出土。
4	甕	残存高 18.5cm 底部径 (6.0cm)	粘土紐積み上げ成形。胴部はやや長胴ぎみで、最大径を中位にもつ。底部は突出しない平底を呈する。	胴部外面ハケ、内面ナデの後ケズリ。底部外面ハケ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	1/4。 外面中位に煤の付着あり。 調査区南側開析谷覆土出土。

の多くは、中世の寺院や屋敷の建設に伴う残丘上や残丘北側斜面裾の造成により、残丘上に立地する生野山古墳群(菅谷他1973)や平安時代を主体とする新屋敷遺跡の集落から流れ込んだものと推測

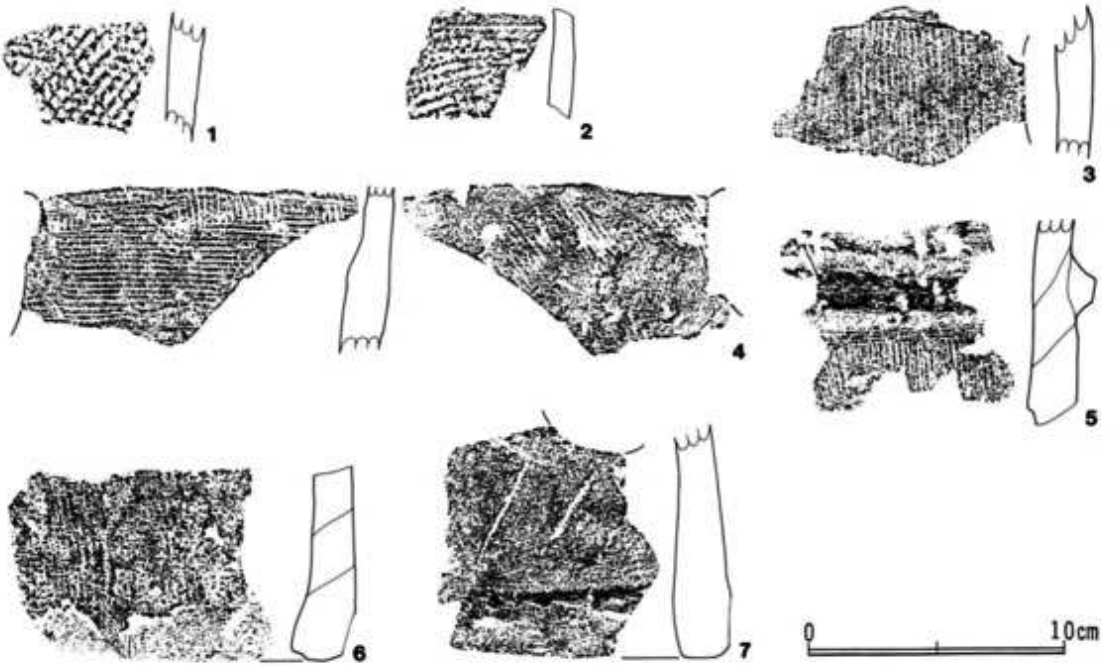


第17図　城の内遺跡出土の須恵器

城の内遺跡B地点出土須恵器観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 高坏	残存高 4.3cm	ロクロ成形。脚部上半はやや ゆぼまり、坏部接合部下 に焼成前の穿孔を4孔もつ。	脚部外面回転ナデ、内面上 半シボリ目・下半回転ナデ。	白色粒 外－暗灰色 内－灰色	脚柱部上半のみ。 堀跡E区出土。
2	須恵器 高坏	残存高 9.0cm	ロクロ成形。脚部は高く、 下半は緩やかに開く。	脚部外面回転ナデ、内面ナ デ。脚部外面中位に2本の 沈線を施す。	白色粒 内外－淡灰色 肉－淡褐色	脚柱部のみ。 湖西産。 堀跡B区出土。
3	須恵器 甕		叩き成形。	外面カキ目、内面当道具痕 (青海波文)の上にナデを施 す。	白色粒 外－暗灰色 内－黒灰色	胴部破片。 第6号溝跡覆土中出土。
4	須恵器 甕		叩き成形。	外面平行叩き目、内面青海 波文。	白色粒・黒色粒 内外－暗灰色	胴部破片。 第8号溝跡覆土中出土。
5	須恵器 甕		叩き成形。	外面平行叩き目、内面青海 波文。	白色粒 内外－暗灰色	胴部破片。 堀跡D区出土。
6	須恵器 甑？	残存高 16.9cm	粘土紐積み上げ成形。胴部 下端に焼成前の穿孔をもつ。	胴部外面回転ナデの後部分 的に雑なナデ、内面回転ナ デの後部分的に篦ナデ。	白色粒・小石 内外－暗灰色	胴部1/5。 第8号溝跡覆土中出土。
7	須恵器 甕		頸部は緩やかに外反する。	頸部外面回転ナデの後上半 横描波状文、内面回転ナデ。 外面に沈線を施す。	赤色粒・白色粒 外－灰褐色 内－茶灰色	頸部破片。 第5号井戸跡覆土中出土。
8	須恵器 高台付壺	高台部径 (8.0cm)	高台部は低く、外傾して貼 り付けられている。	胴部及び高台部内外面回転 ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－暗灰色	底部1/4。 第27号土壙覆土中出土。
9	須恵器 高台付椀	高台部径 (8.0cm)	高台部はやや高く、若干外 傾して貼り付けられている。 器肉は比較的薄い。	高台部内外面回転ナデ。	白色粒 内外－暗灰色 肉－灰色	底部1/3。 底部内面黒色付着物あり。 堀跡B区出土。

される。また格子目叩きの埴輪破片については、調査区南側約100mの残丘上に位置する金鑽神社古墳との関係が考えられるが、第18図№4のようなタテハケの後に2次ヨコハケをもつ埴輪片も、同じく格子目叩きの埴輪を伴う本庄市公卿塚古墳(太田1991)でも見られ、注目されよう。

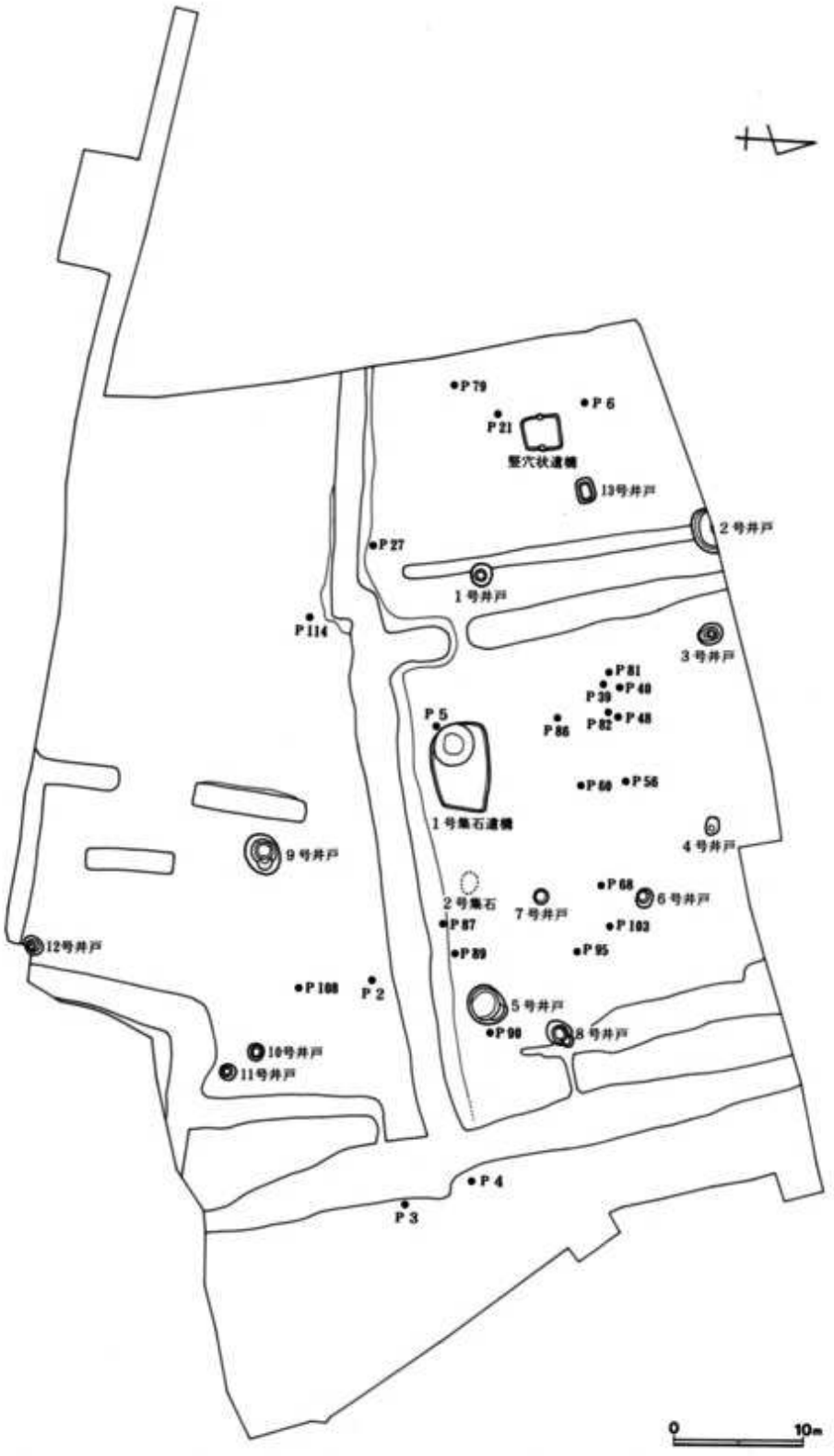


第18図　城の内遺跡出土の埴輪

城の内遺跡B地点出土埴輪観察表

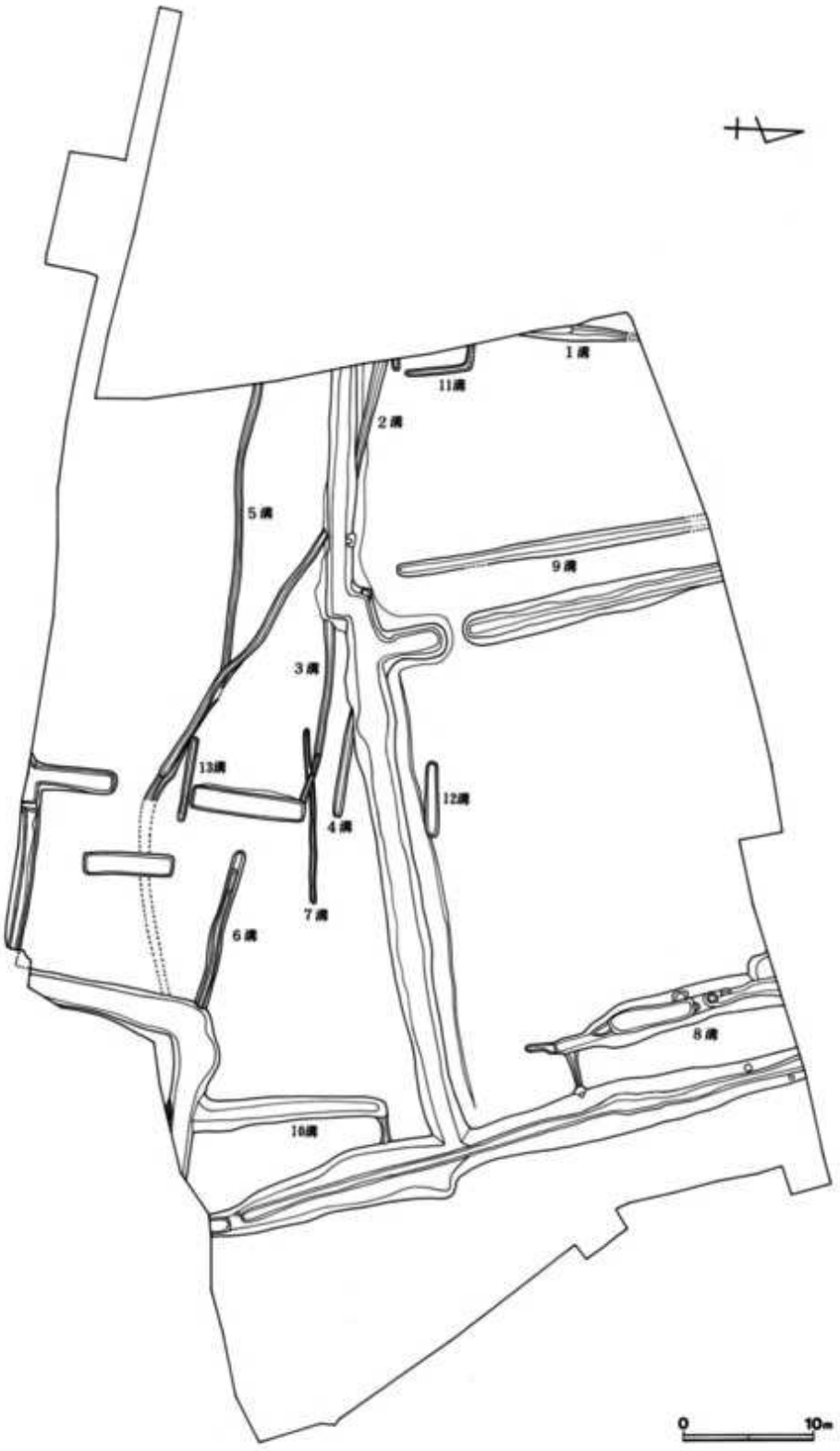
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	円筒埴輪		粘土紐積み上げ後叩き成形。	外面格子目叩き、内面ナデ。	小石・白色粒 内外－淡茶褐色	破片。 堀跡G区出土。
2	円筒埴輪		粘土紐積み上げ後叩き成形。	外面格子目叩きの後破片上端部ヨコナデ、内面ナデ。	小石・白色粒 内外－淡茶褐色	破片。 第2号集石遺構出土。
3	円筒埴輪		粘土紐積み上げ成形。破片右端に透孔あり。	外面縦ハケの後破片上端部ヨコナデ、内面指ナデ。	小石・片岩粒 赤色粒・白色粒 内外－暗褐色	破片。 第9号溝跡覆土中出土。
4	円筒埴輪		粘土紐積み上げ成形。破片左端に透孔あり。	外面縦ハケの後横ハケ・破片上下端ヨコナデ、内面ハケの後ナデ。	白色粒 内外－明茶褐色 肉－暗灰色	破片。 堀跡E区出土。
5	円筒埴輪		粘土紐積み上げ成形。凸帯は断面台形を呈す。	外面縦ハケ、内面ハケの後ナデ。凸帯ヨコナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡褐色	破片。 第2号集石遺構出土。
6	円筒埴輪		粘土紐積み上げ成形。破片の湾曲は緩やかであり、比較的大型のものと思われる。	外面縦ハケ、内面ナデ。端部ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡橙褐色	破片。 堀跡E区出土。
7	形象埴輪		粘土紐積み上げ成形。破片右上隅に透孔あり。破片は湾曲せず、直線的である。	内外面ナデ。端部外表面剥離。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－明橙褐色	破片。 第2号集石遺構付近出土。

第19図　城の内遺跡中世遺構配置図（掘立柱建物跡・門跡・柱穴列）



第20図　城の内遺跡中世遺構配置図（竪穴状遺構・井戸跡・集石遺構・ピット）

第21図　城の内遺跡中世遺構配置図（土壙）



第22図　城の内遺跡中世遺構配置図（堀・溝跡）

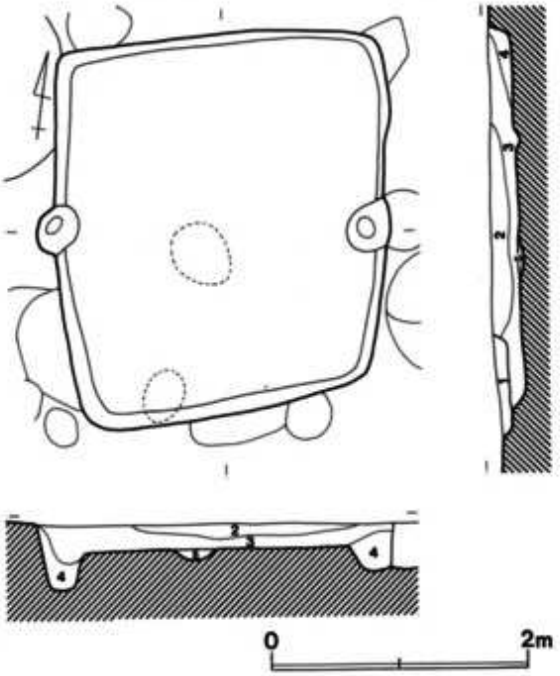
第4節　中世以降の遺構と遺物

1．竪穴状遺構（第23図）

竪穴状遺構は、B地点I区の中央部付近で1基検出されている。重複する掘立柱建物跡や第6号土壙をすべて切って構築されており、遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、南側壁が南に開いてやや歪んでいるが、長方形を基調にしているものと思われる。規模は、南北方向2.96m・東西方向2.60mを測る。壁は、各壁とも若干傾斜して直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で20cmある。底面は、地山のローム層を直接整形して、平坦でほぼ水平に作られている。本竪穴状遺構に伴うと考えられるピットは、2箇所検出されている。これらのピットは、東西両壁のそれぞれ中央に位置し、いずれも壁を若干掘り込んでいる。形態は、直径35cm前後の円形に近い平面形を呈し、底面からの深さは東側のピットが20cm西側のピットが30cmあり、ほぼ垂直に掘られている。遺構内では、これらのピット以外の施設はまったく見られなかった。

出土遺物は、片口鉢や土師質土器皿の破片が少量と古銭（開元通寶）1枚がある（第24図）。いずれも覆土中から出土したもので、その出土状態からは遺構に直接伴うものではないと考えられる。



竪穴状遺構土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

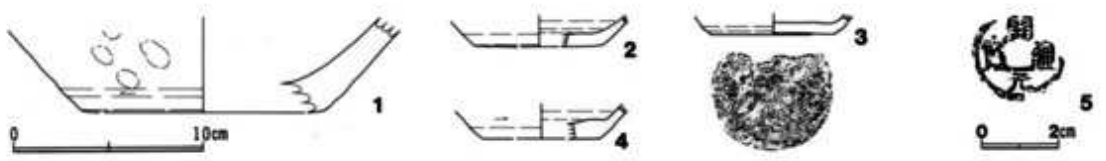
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第3層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

第4層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第5層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。第5号掘立柱建物跡柱穴覆土。）

第23図　竪穴状遺構



第24図　竪穴状遺構出土遺物

竪穴状遺構出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	底部径 (12.6cm)	粘土紐積み上げ成形。体部はやや内湾ぎみに緩やかに立ち上がる。	体部内外面ナデ。外面下端ヨコナデ。	小石・白色針状物質 外－暗褐色 内肉－淡橙褐色	底部1/4。 在地産。 覆土中。
2	土師質土器皿	底部径 (6.6cm)	ロクロ成形。体部は直線的に外傾する。	体部内外面ヨコナデ。底部外面回転糸切り。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	底部1/3。 覆土中。
3	土師質土器皿	底部径 6.4cm	ロクロ成形。体部は直線的に外傾し、底部との境は若干窪む。	体部内外面ヨコナデ。底部外面回転糸切り。	赤色粒・白色粒 内外－明橙褐色 肉－淡褐色	底部3/4。 覆土中。
4	土師質土器皿	底部径 (6.0cm)	ロクロ成形。体部は直線的に外傾する。底部は厚い。	体部内外面ヨコナデ。底部外面回転糸切り。	赤色粒・白色針状物質 内外－暗褐色	底部1/4。 覆土中。
5	古銭	直径 2.45	開元通寶。初鋳621年。非常に薄く軟質。周縁部剥落顕著。		銅製。	3/4。覆土中。

2．門　跡

第1号門跡（第25図）

残丘北側斜面下のC地点調査区中央部に位置し、斜面の裾を鉤の手状に削り込んでほぼ平坦に造成した場所に作られている。遺構の南側と東側の一部は調査区外に延びているため、本遺構の全容は不明であるが、四角形を基調とする掘り込み内のほぼ全面に石敷が施され、掘り込み内の西端に礎石と考えられる大きな石を2箇所（P1・P2）に設置していることから、現状では門とその前庭の可能性が高いと考えられるものである。

前庭部と考えられる石敷を伴う掘り込みは、調査区内では南北方向が6.14mまで、東西方向が7.50mまで測れるが、門の前庭部自体は東西方向6.40m・南北方向約5mの長方形ぎみの形態を呈し、その南側や東側の調査区外に延びる部分は、残丘斜面に沿って東側に向かう道の一部であろうと推測される。掘り込みは、確認面からの深さが北側で30cm前後・南側で50cm前後を測り、各壁とも緩やかに傾斜している。底面は、ほぼ水平で平坦に掘られており、全体によくしまっているが、南東側の道と推測される部分は、他に比べて底面が若干高くなっている。石敷は、掘り込み内のほぼ全面の底面上に直に敷かれているが、西側のP1とP2の礎石間及び礎石周辺には石敷は施されておらず、P1の南側からP1・P4・P2の東側に沿ってL字形に石敷が囲っていたようである。石は、長さ15cm前後の丸みをもつ自然石が主体的に使われており、特別に平坦面の広い石を選んで配列したような形跡は見られない。また、石の平坦面の高さを合わせて一個ずつきれいに揃えるようなこともしておらず、全体にあまり手の込まない雑な敷き方である。ただ、石敷北側の門前庭部では、これらの比較的大きな石の隙間に小さな砕石を詰め込んでいる傾向があり、石敷南側の道では一部に小さな砕石が集中して敷かれている部分が見られ、特に掘り込みが東側の調査区外に延びる南東側付近が顕著である。この前庭部とそれにつながる道と考えられる掘り込みは、その覆土が中世の他の遺構と異なって、当時の表土と考えられるような有機土をまったく含まない褐色系の土であり（第7・10・11層）、基盤のローム土やその下の白色粘土及び礫層の土を多く含んでいることから、単純な自然堆積ではなく、周辺における何だかの残丘斜面部の造成に伴って、人為的に埋め戻された可能性が高いと考えられる。

門の礎石(P1・P2)は、隅丸長方形状を呈する前庭部の北西側と南西側のコーナー部の2箇所に位置している。P1とP2の柱心間は、3.70mを測り、B地点のⅢ区とⅣ区を区切る堀の陸橋部に位置する第2号門跡(第34図)とほぼ同規模である。これらの礎石は、いずれも長さ70cm～75cm・幅45cm～60cm・厚さ34cm～37cmの角柱状の大きな石を、深さ35cm～40cmのP1・P2の中に縦に据えて、倒れないようにピット(据え穴)との間に小さな石を一部詰めて埋めている。礎石は、掘り込み底面から35cm程突出させ、上端の平坦面を掘り込みの確認面より15cm程度上の高さに揃えている。調査時には明確にできなかったが、この礎石の高さや礎石間に石敷が施されていないことから見て、P1とP2の間及びその周辺は、礎石が10cm～15cm程度頭を出す掘り込み確認面の高さくらいまで、平坦なテラス状に埋め戻した土段が存在した可能性が高いと考えられる。礎石西側の掘り込み外には、小規模で浅く一部に礎石を伴うP5とP6があり、P1とP2の門柱の礎石と対をなす控柱の据え穴の可能性がある。P1とP5及びP2とP6の柱心間は、いずれも1.20mである。また、P1とP2のほぼ中間の若干東側にずれた位置には、底面を10cm弱掘り窪めて長さ25cm・幅20cmの比較的大きく偏平な石を西側に傾けて据えたP4がある。石の高さは周辺の石敷とほぼ同じであるが、位置的には先に推定した礎石間を埋め戻した土段の下に入る可能性もある。その性格についてはよく解らないが、その位置から見て門の逆開きを防ぐ施設の礎石の可能性も考えられる。この他にはP1の南東側に深さ10cm程度の小規模なP3が掘られているが、その性格については不明である。

出土遺物は、主に前庭部の石敷上やそれに近い覆土下層から出土している。山茶碗窯系片口鉢・土師質土器皿・瓦・古銭・鉄釘など、比較的多くの種類が見られるが、完形品は少なく破片のものが大半である。このうちの瓦と鉄釘は、量的に豊富であり、門やそれに付属する構造物に使われていた可能性が高い。唯一の完形品であるNo13の土師質土器皿は、礎石間の土段が推定される場所の中に位置し、またP4北側の底面上から出土したNo62の古銭も土段内に近いことから、これらについては門建立に伴う地鎮等の祭祀に使用されたことも考えられる。No80の五輪塔の水輪は、調査区南西端の表土層(第Ⅰ層)中から出土しており、本遺構に直接伴うものではない。

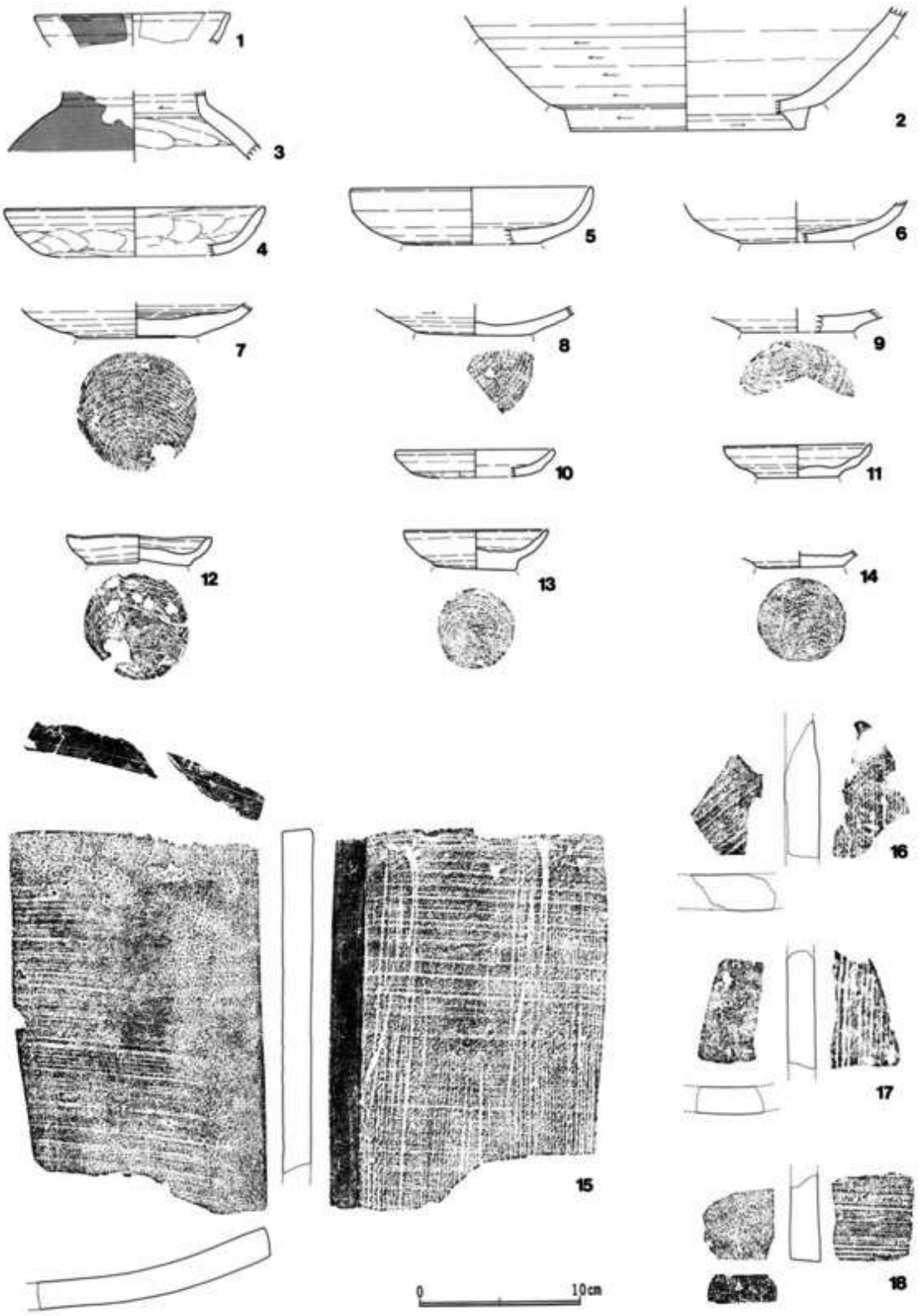
本遺構から推測される門の構造は、石敷より一段高い土段上に頭を出すようにP1・P2内に据えられた大きな礎石の上に門柱が立てられ、その西側にP5とP6の控柱(押柱)を伴い、門柱上にはおそらく縄目叩きの瓦を葺いた屋根組があったものと思われる。戸は、門柱間が1間約1.80mの2間幅であることから、真ん中から左右に開く開き戸が考えられ、その開く方向は前庭部と控柱の位置関係から、西側に開く構造であったと推測される。このように、本遺構の門が西開きの開き戸であったと考えられれば、門の西が内側で、東が外側として意識されていたことが伺える。

第1号門跡は、造成された残丘北側斜面裾に沿って東西方向に延びる道が、食い違いにより鉤の手状に連結する部分に位置すると考えられる。門控柱(P5・P6)の西側は、門にほぼ平行して一段高くなっており、その段や門の南北方向の向きは、B地点のⅢ区とⅣ区を区切る堀跡や第2号門跡及びⅠ区西端の第1号溝跡と平行する同じ向きであり、B地点のⅠ区とⅣ区を区切る堀跡やその延長の第3号溝跡等とほぼ直交している。このことから、おそらく第1号門跡は、B地点Ⅳ区の西側区画線上に位置すると推測され、門の北側延長の調査区外にはほぼ南北方向に向く何だかの地割り遺構が存在するものと思われる。

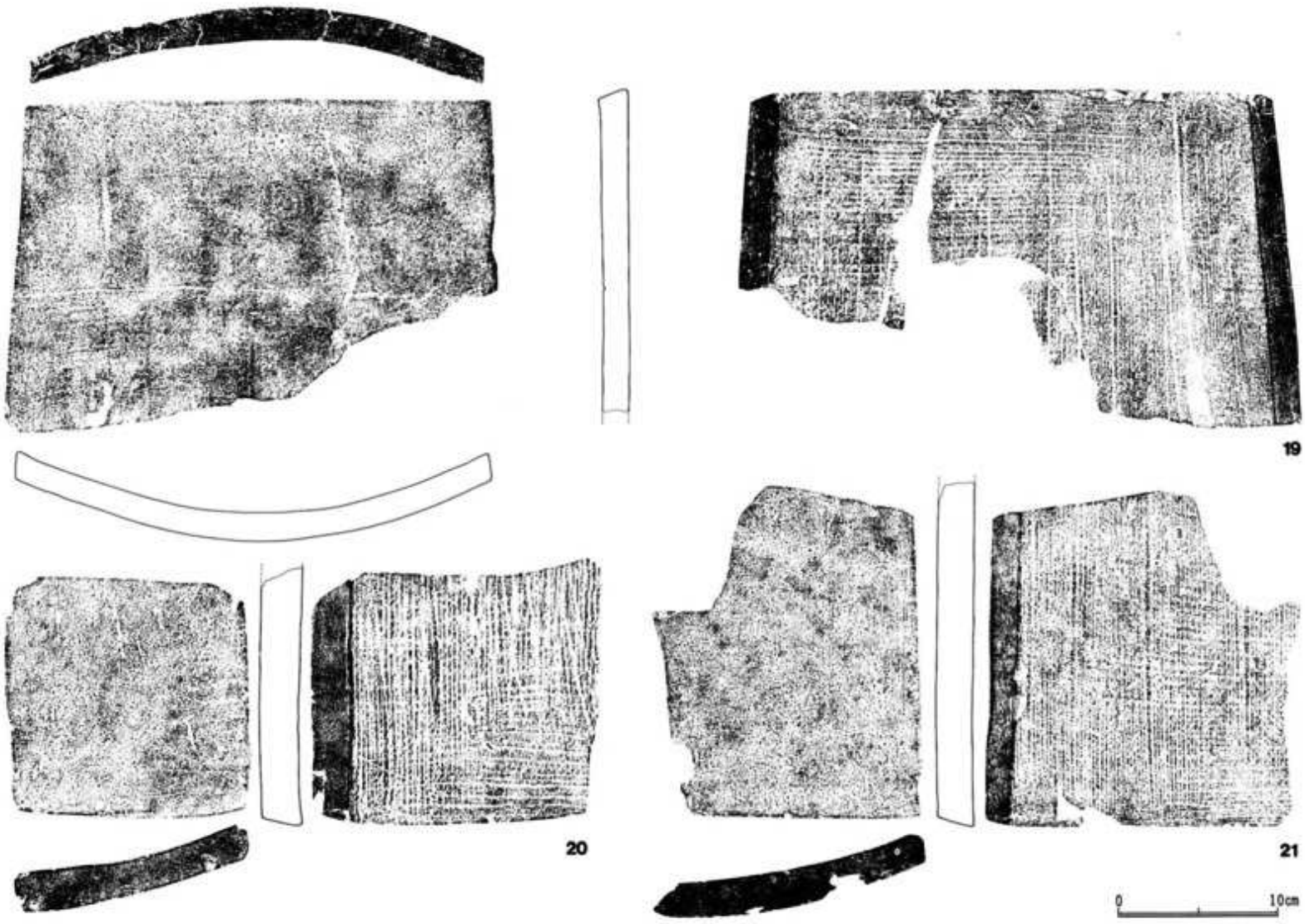
第25図　第１号門跡

第１号門跡土層説明

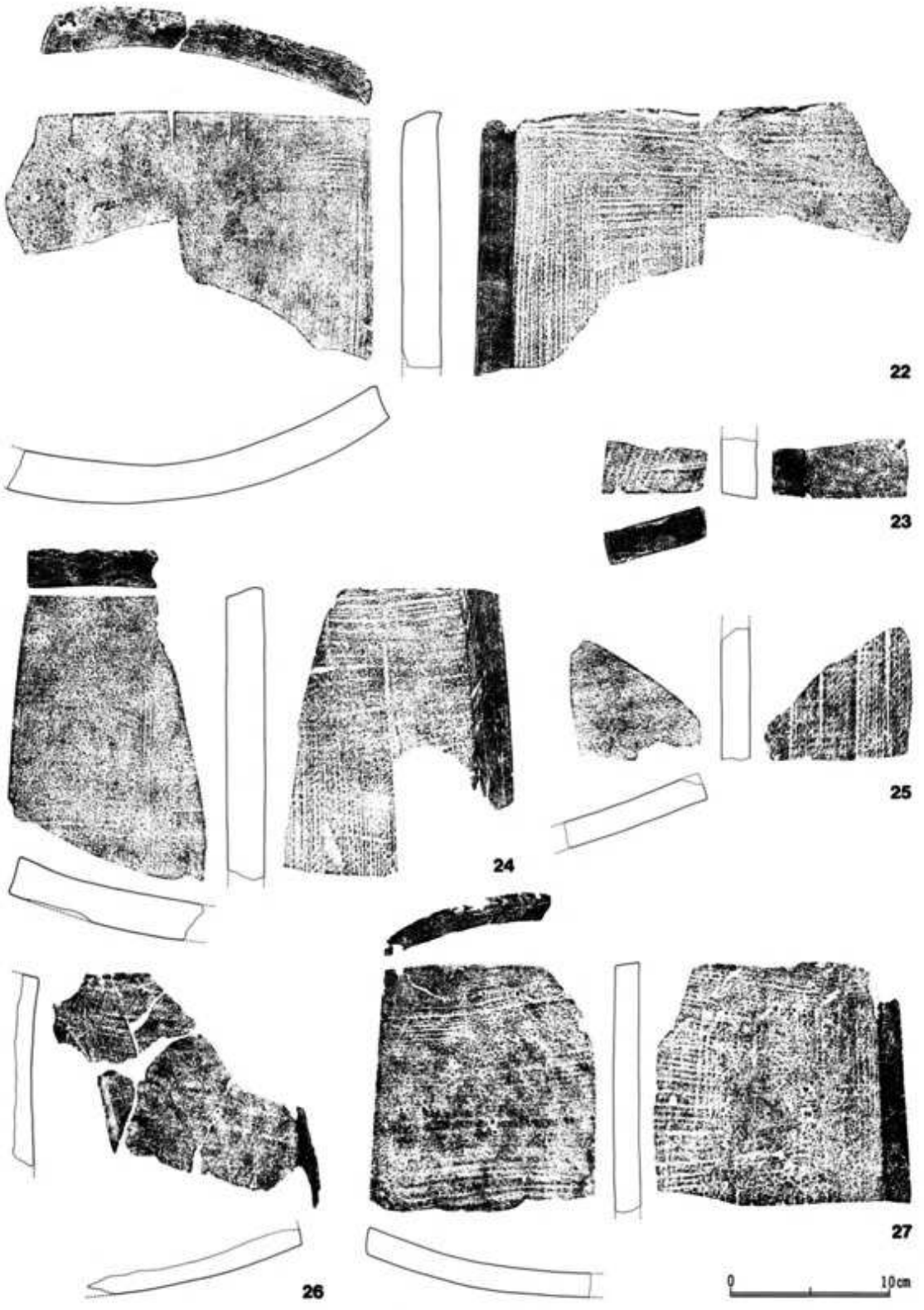
第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：暗茶褐色土層（B軽石・ローム粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第１層：暗茶褐色土層（ローム粒子・白色粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗黄白色土層（黄白色粘土ブロックを多量に、礫を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第３層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：淡褐色土層（淡褐色粘土を主体に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：淡褐色土層（淡褐色粘土を主体に、礫を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第６層：暗褐色土層（ロームブロック・礫を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第７層：暗茶褐色土層（白色粘土ブロックを均一に、小石・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第８層：茶褐色土層（白色粘土・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第９層：茶褐色土層（白色粘土粒子・ローム粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第10層：暗褐色土層（ローム粒子・小礫・白色粒子・炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第11層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、白色粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第12層：淡茶褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に、ロームブロック・小礫を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



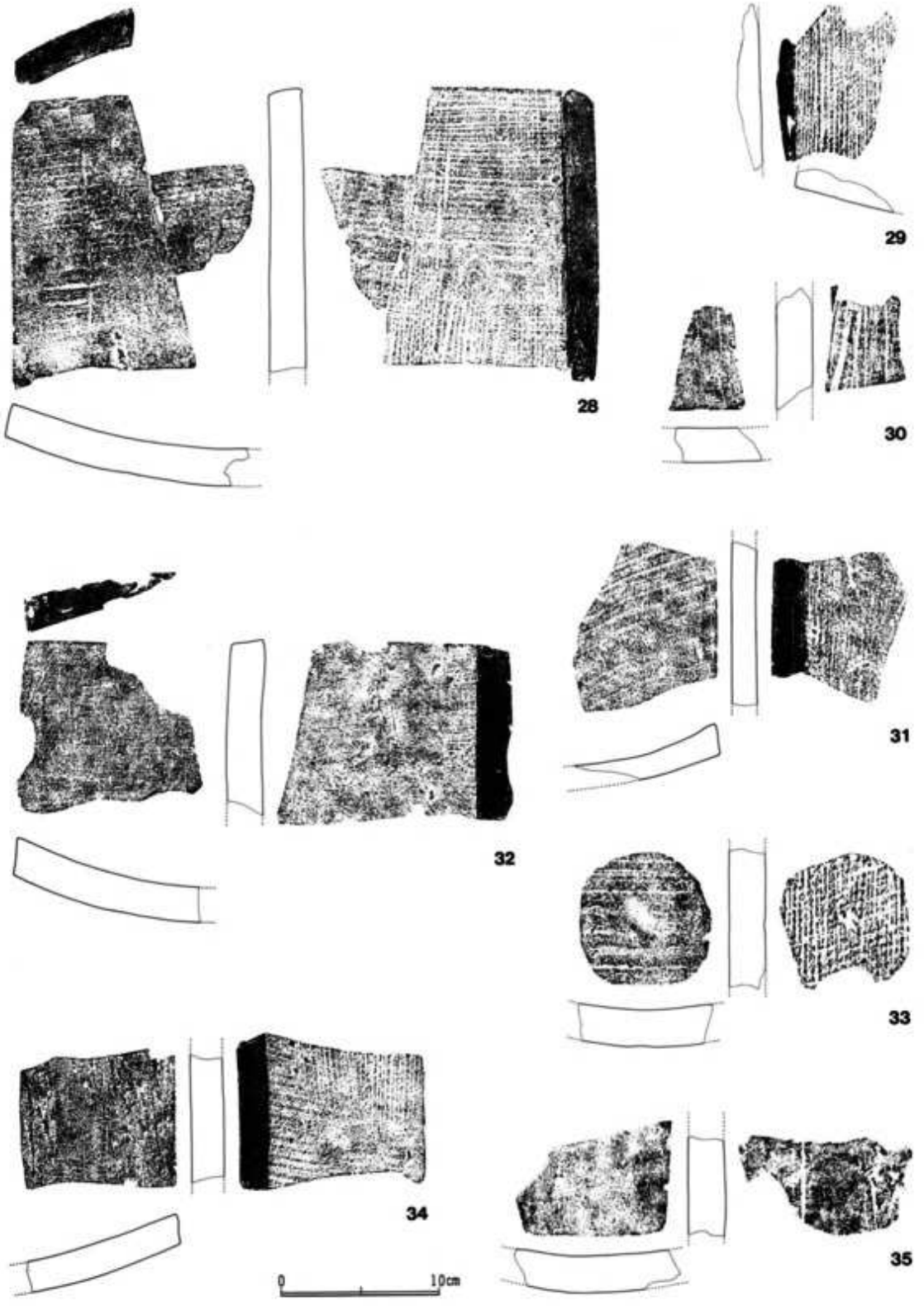
第26図　第１号門跡前庭部出土遺物(1)



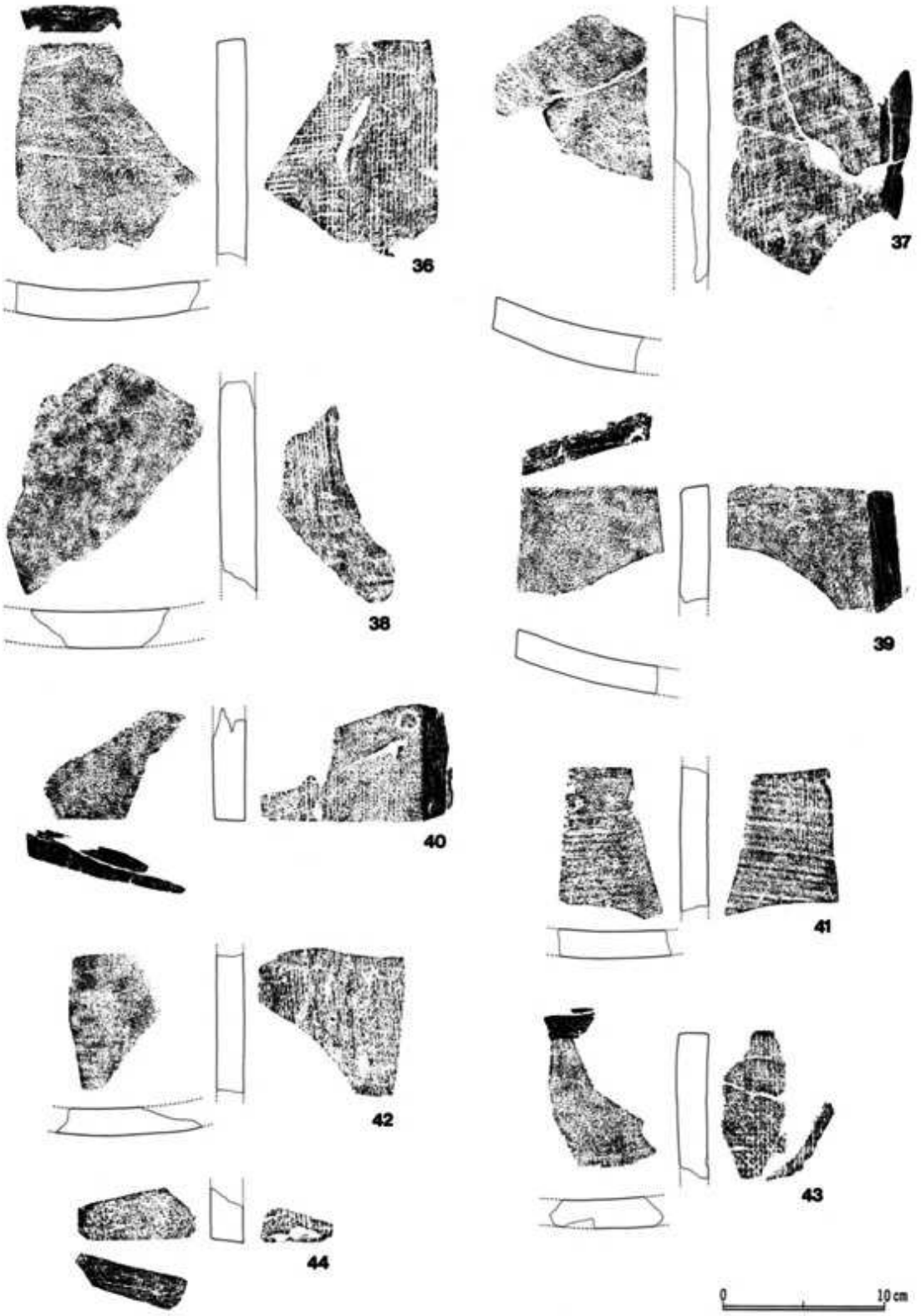
第27図　第1号門跡前庭部出土遺物(2)



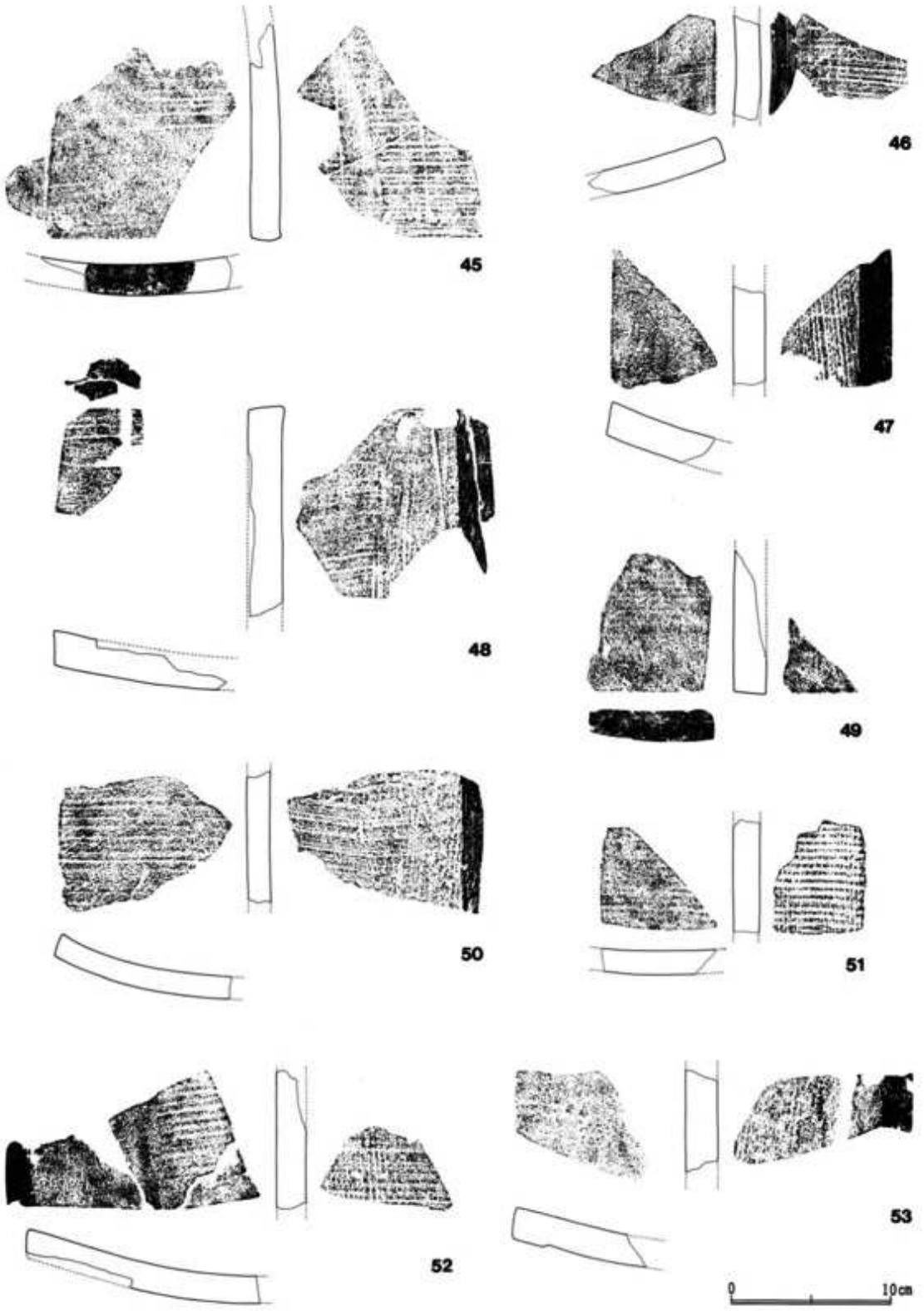
第28図　第１号門跡前庭部出土遺物(3)



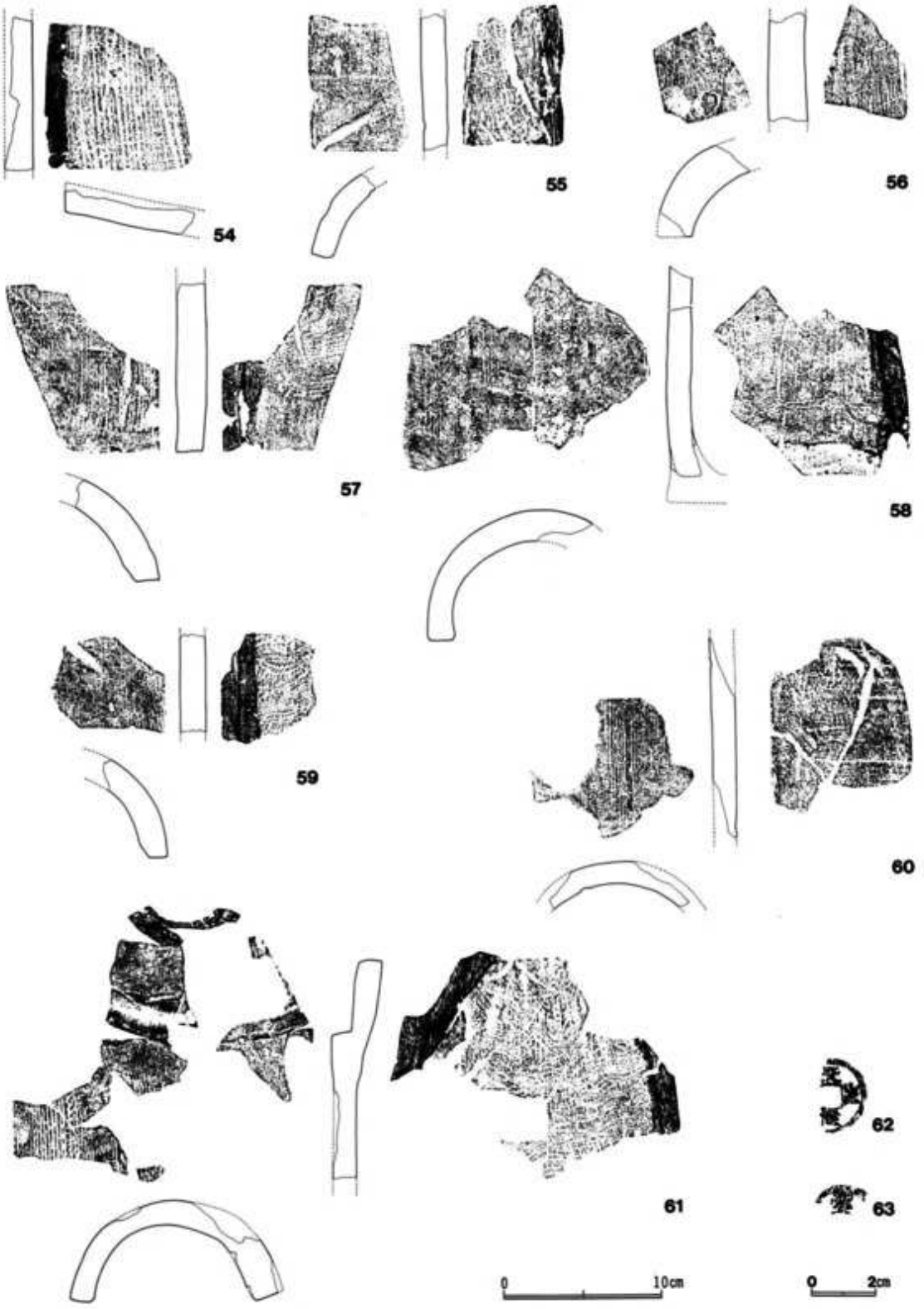
第29図　第１号門跡前庭部出土遺物(4)



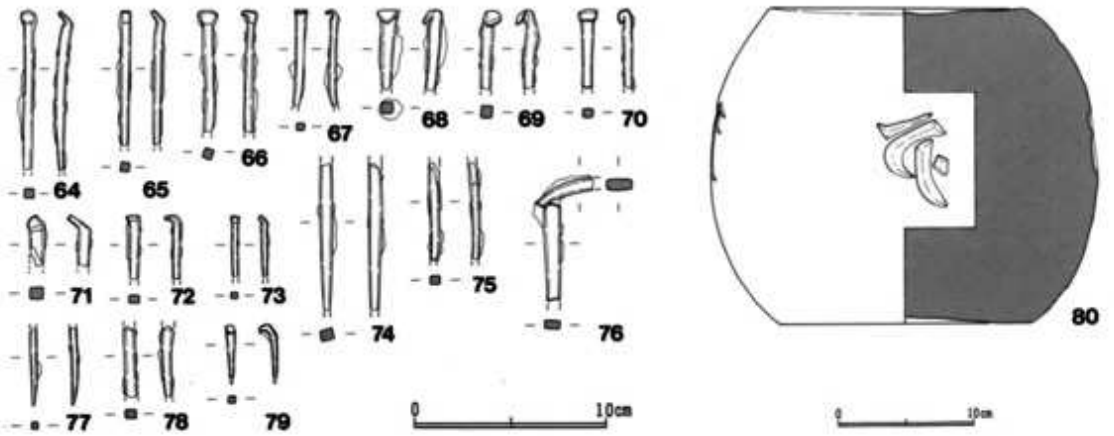
第30図　第１号門跡前庭部出土遺物(5)



第31図　第１号門跡前庭部出土遺物(6)



第32図　第１号門跡前庭部出土遺物(7)



第33図　第１号門跡前庭部出土遺物(8)

第１号門跡前庭部出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	椀	口縁部径 (12.0cm)	ロクロ成形。口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部は平坦ぎみである。	口縁部内外面回転ナデ。口縁部外面に自然釉がかかる。	白色粒 内外－淡灰白色	1/7。東海系。 還元焔焼成。 前庭部覆土中。
2	山茶碗窯系 高台付 片口鉢	残存高　7.2 高台径(14.6)	高台部貼り付け。体部は緩やかに開く。高台部は厚く、端部は平坦面をもつ。	体部外面回転ナデの後下半回転箆ケズリ、内面回転ナデ。高台部内外面回転ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－淡灰色	1/4。 内面下半斑点状溶着著。 前庭部覆土中。
3	灰釉 広口壺		頸部はやや細く、胴部はややなで肩ぎみ。	頸部内外面回転ナデ。胴部外面ナデ、内面指ナデ。	白色粒・黒色粒 外－淡灰色 内－黒灰色	1/4。還元焔焼成。 外面は淡緑色釉がかかる。 前庭部覆土中。
4	土師質土器皿	口縁部径 (16.2cm) 器高 (3.0cm)	手捏ね成形。体部はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部外面にヨコナデによる緩い稜をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指押さえ、内面指ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	1/4。 前庭部覆土中。
5	土師質土器皿	口径(15.2) 器高(3.5) 底径(8.6)	ロクロ成形。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。底部は若干突出ぎみの平底を呈す。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面は摩滅が著しく観察不能。	白色粒・黒色粒 内外－淡褐色	1/5。 前庭部覆土中。
6	土師質土器皿	底部径 (7.0cm)	ロクロ成形。体部は内湾しながら立ち上がる。底部は若干突出ぎみの平底を呈す。	体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－淡褐色	1/4。 前庭部覆土中。
7	土師質土器皿	底部径 7.6cm	ロクロ成形。体部は内湾ぎみに開く。底部は若干突出ぎみの平底を呈する。	体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面回転ナデ。	赤色粒・白色粒 黒色粒 内外－淡褐色	底部のみ。 前庭部覆土中。
8	土師質土器皿	底部径 (7.3cm)	ロクロ成形。体部はやや内湾ぎみに大きく開き、底部は平底を呈する。	体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、回転ナデ。	赤色粒・白色粒 黒色粒 内外－淡褐色	1/5。 前庭部覆土中。
9	土師質土器皿	底部径 (7.3cm)	ロクロ成形。体部は大きく開き、底部は平底を呈する。	体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	1/3。 前庭部覆土中。
10	土師質土器皿	口径 (9.8) 器高　1.8	手捏ね成形。口縁部は内湾しながら開き、体部との境に稜をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－淡橙褐色	1/5。 前庭部覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
11	土師質土器皿	口径 (9.2) 器高 2.0 底径 (5.0)	ロクロ成形。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は短く直立ぎみである。底部は突出する平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面不不明。	白色粒・黒色粒 内外－淡褐色	1/4。 前庭部覆土中。
12	土師質土器皿	口径 (9.0) 器高 2.3 底径 (6.7)	ロクロ成形。体部は短く内湾ぎみに立ち、口縁部は肥厚する。底部は若干突出する平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗橙褐色	3/4。 器形は歪んでいる。 前庭部覆土中。
13	土師質土器皿	口径 9.0 器高 2.5 底径 5.2	ロクロ成形。口縁部は内湾しながら開く。底部は突出する平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面は未調整でロクロ目を残す。	白色粒・黒色粒 内外－淡褐色	完形。 土段内底面上。 底部のみ。
14	土師質土器皿	底部径 5.5cm	ロクロ成形。底部は若干突出した平底を呈する。	内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ロクロ目。	赤色粒・白色粒 内外－淡褐色	前庭部覆土中。
15	平瓦	残存長 23.4 残存幅 15.3 厚さ 1.8	一枚作り。厚さは均一である。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。側面・狭端面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－暗灰色	1/4。 前庭部覆土中。
16	平瓦	残存長 8.5 残存幅 6.1 厚さ 2.2	糸切り離しによる一枚作り。厚さは厚く、破片上端に窪みあり。	凸面縄目叩き、凹面糸切り痕の後布目圧痕。	白色粒・黒色粒 凹－灰色 凸－暗灰色	破片。 前庭部覆土中。
17	平瓦	残存長 7.8 残存幅 5.0 厚さ 1.7		凸面縄目叩き、凹面ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。凹凸両面ともやや摩滅している。 前庭部覆土中。
18	平瓦	残存長 5.4 残存幅 5.4 厚さ 1.9	端部はやや肥厚している。凹面砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデ、凹面ナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 前庭部覆土中。
19	平瓦	残存長 20.0 最大幅 29.6 厚さ 1.7	一枚作り。平面形は台形を呈する。狭端面はやや傾斜し、側面は垂直ぎみである。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面ヨコナデの後縦方向のナデ。側面・狭端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	1/2。 前庭部底面上。
20	平瓦	残存長 16.1 残存幅 15.4 厚さ 2.5	厚さは全体的に均一で厚く、端部側は若干若干反る。側面は垂直ぎみで若干肥厚し、端面はやや傾斜する。凹凸両面とも砂と小石が付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ後縦方向のナデ。側面・狭端面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－暗灰色	1/4。 前庭部石敷上。
21	平瓦	残存長 21.4 残存幅 17.4 厚さ 2.3	厚さは中央部は厚く、側面側はやや薄くなる。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面布目圧痕。側面・狭端面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－淡灰褐色 肉－淡灰色	1/4。 前庭部石敷上。
22	平瓦	残存長 15.9 残存幅 24.3 厚さ 2.5	厚さは全体的に均一で厚い。端面はやや傾斜し、凸面側に若干突出する。凹凸両面及び端面下半に砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデの後縦方向の篦ナデ。側面・狭端面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－暗灰色	1/4。 前庭部石敷上。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
23	平瓦	残存長 3.9 残存幅 7.0 厚さ 2.2	糸切り離しによる一枚作り。端面はやや傾斜し、側面は垂直ぎみ。凸面側砂付着。	凹凸両面ともナデ。側面・狭面篦切り後ナデ。	白色粒 凹－灰色 凸－暗灰色	破片。 前庭部覆土中。
24	平瓦	残存長 17.9 残存幅 12.1 厚さ 2.4	一枚作り。厚さは全体的に均一で厚い。狭端面はやや傾斜する。凹凸両面及び狭端面下半に砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面縦方向のナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－暗灰色	1/4。 土段上か前庭部覆土中。
25	平瓦	残存長 8.2 残存幅 9.5 厚さ 1.8	厚さは全体的に均一である。	凸面縄目叩き、凹面丁寧なナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－淡褐色	破片。 焼成不良。 前庭部覆土中。
26	平瓦	残存長 15.5 残存幅 15.0	凹面側剥離。端面下半に砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデ後縦方向のナデ。	白色粒・黒色粒 凸－黒灰色	破片。 前庭部覆土中。
27	平瓦	残存長 15.6 残存幅 14.1 厚さ 1.6	厚さは均一で、比較的薄い。狭端面はやや傾斜する。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。側面・狭端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	1/4。 前庭部覆土中。
28	平瓦	残存長 17.2 残存幅 15.0 厚さ 2.3	一枚作り。凹凸両面とも叩き成形。厚さは均一で厚く、狭端面はやや傾斜する。凹面及び端面下端砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面板状工具による叩きの後木口状工具によるヨコナデ。側面・狭端面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－暗灰色	1/4。 前庭部覆土中。
29	平瓦	残存長 10.4 残存幅 6.6	凹面側剥離。	凸面縄目叩き。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凸－淡灰色	破片。 前庭部覆土中。
30	平瓦	残存長 7.9 残存幅 6.2 厚さ 2.2	厚さはやや厚め。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－淡灰色	破片。 前庭部覆土中。
31	平瓦	残存長 10.8 残存幅 9.1 厚さ 1.6	厚さは比較的薄い。側面の凹面側は肥厚する。凸面砂付着。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕の後木口状工具によるナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 前庭部覆土中。
32	平瓦	残存長 11.7 残存幅 13.2 厚さ 2.3	厚さはやや厚めで、端部に向かって若干反る。端面はやや傾斜する。	凸面木口状工具によるヨコナデ後ナデ、凹面布目圧痕。側面・端面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－淡灰色	破片。 前庭部覆土中。
33	平瓦	残存長 8.7 残存幅 8.5 厚さ 2.3	破片の形態は丸い円盤状を呈し、意図的に加工した可能性もある。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 前庭部石敷上。
34	平瓦	残存長 10.0 残存幅 10.3 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。側面は垂直ぎみで、若干窪む。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面布目圧痕の後ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 前庭部覆土中。
35	平瓦	残存長 8.2 残存幅 10.6 厚さ 2.3	厚さはやや厚め。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 №30と同一個体。 前庭部覆土中。
36	平瓦	残存長 13.6 残存幅 11.3 厚さ 1.9	厚さは比較的均一で、端部に向かって若干反る。凹面及び端面下半に砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面布目圧痕の後篦ナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸肉－淡褐色	破片。 焼成不良。 前庭部覆土中。

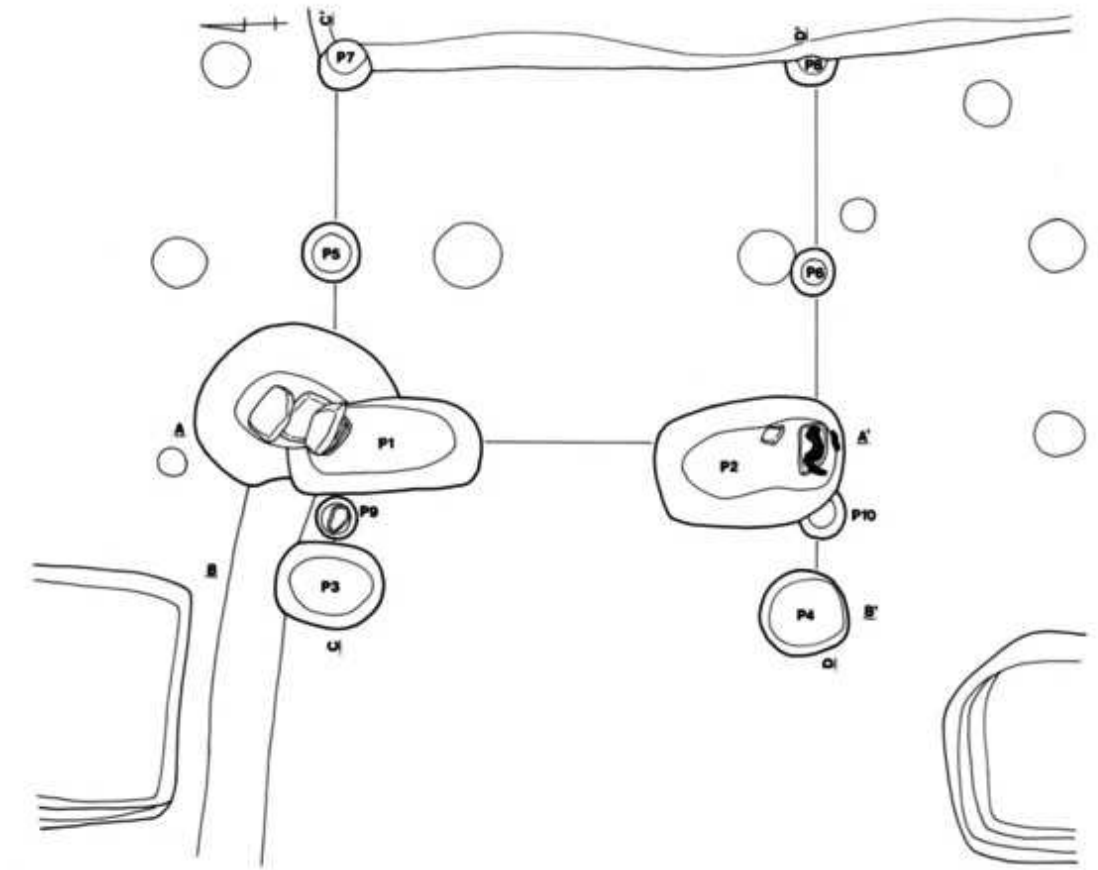
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
37	平瓦	残存長 16.5 残存幅 10.1 厚さ 2.1	厚さは比較的均一で、側面は垂直ぎみ。凸面砂の付着あり。	凸面横方向の篦ナデの後縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸肉－淡褐色	破片。 凸面摩滅。 前庭部覆土中。
38	平瓦	残存長 15.5 残存幅 12.4 厚さ 2.2	凸面砂の付着あり。	凸面横方向の篦ナデの後縄目叩き、凹面ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－淡灰色	破片。 前庭部覆土中。
39	平瓦	残存長 7.9 残存幅 9.5 厚さ 1.8	厚さはやや薄く、狭端面は若干傾斜する。凹凸両面及狭端面下端砂付着。	凸面横方向の篦ナデの後縄目叩き、凹面ナデ。側面・狭端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 前庭部覆土中。
40	平瓦	残存長 7.5 残存幅 10.9 厚さ 2.0	端部・側面とも垂直ぎみ。凹凸両面とも砂付着。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。側面・端面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹－黒灰褐色 凸－淡灰褐色	破片。 前庭部覆土中。
41	平瓦	残存長 9.7 残存幅 7.0 厚さ 1.6	厚さは比較的均一でやや薄い。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面布目圧痕の後木口状工具によるヨコナデ。	白色粒 凹－暗灰色 凸－黒灰色 肉－黒灰色	破片。 前庭部覆土中。
42	平瓦	残存長 9.9 残存幅 9.3 厚さ 1.7	厚さは比較的均一でやや薄い。凸面砂付着。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕の後木口状工具によるヨコナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 前庭部覆土中。
43	平瓦	残存長 9.0 残存幅 7.8 厚さ 1.9	厚さは比較的均一であるが、端部に向かってやや反る。凹凸両面とも砂付着。	凸面横方向の篦ナデの後縄目叩き、凹面ナデ。側面・端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸肉－淡褐色	破片。 焼成不良。 前庭部覆土中。
44	平瓦	残存長 3.4 残存幅 7.2 厚さ 2.0	端部はやや傾斜している。凹凸両面とも砂付着。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面ナデ。側面・端面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－淡灰色	破片。 前庭部覆土中。
45	平瓦	残存長 14.9 残存幅 14.8 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。端部は垂直ぎみで、凸面側に若干突出する。端面下半砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。端面篦切り後ナデ。	赤色粒・白色粒 凹凸肉－淡褐色	破片。 焼成不良。 土段内P1上面。
46	平瓦	残存長 7.1 残存幅 8.5 厚さ 1.6	厚さは比較的均一でやや薄い。側面は若干丸みをもつ。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸肉－暗褐色	破片。 前庭部覆土中。
47	平瓦	残存長 8.7 残存幅 6.7 厚さ 2.0	側面はやや傾斜する。凹凸両面とも砂付着。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 前庭部覆土中。
48	平瓦	残存長 13.0 残存幅 11.1 厚さ 2.1	凹面の大半は剥離。端面はやや傾斜し、側面は垂直ぎみである。凸面と端面下半には砂が付着している。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き及び縦方向のナデ、凹面篦ナデ。端面・側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色 肉－暗茶褐色	破片。 前庭部覆土中。
49	平瓦	残存長 8.9 残存幅 8.5 厚さ 2.0	端面は若干傾斜する。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面木口状工具によるヨコナデ。端面篦切り後ナデ。	赤色粒・白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 前庭部覆土中。
50	平瓦	残存長 9.4 残存幅 11.0 厚さ 1.5	厚さは比較的均一でやや薄い。側面は傾斜する。凹面側砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－淡褐色 肉－淡灰色	破片。 焼成不良。 前庭部覆土中。

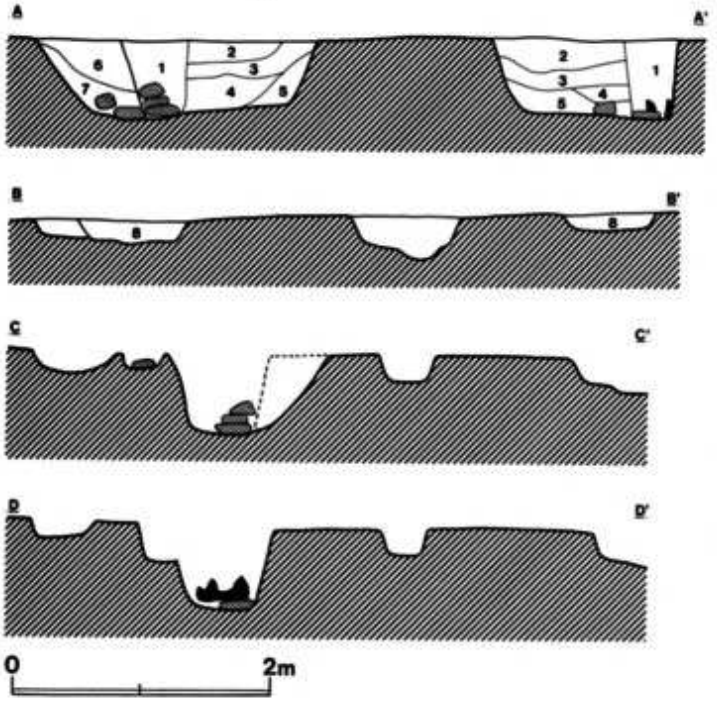
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
51	平瓦	残存長 7.2 残存幅 7.2 厚さ 1.6	厚さは比較的均一でやや薄い。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 前庭部覆土中。
52	平瓦	残存長 9.2 残存幅 14.7 厚さ 1.8	凸面の大半は剥離。側面は垂直ぎみ。凹面側砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 前庭部覆土中。
53	平瓦	残存長 7.1 残存幅 9.8 厚さ 2.0	側面はやや傾斜する。凸面側に凹型台縁辺の圧痕と思われる段あり。凸面側は砂が付着している。	凸面縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデの後縦方向のナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 前庭部覆土中。
54	平瓦	残存長 9.8 残存幅 8.5	凹面側は剥離。凸面側は砂が付着している。	凸面縄目叩き。側面篦切り後ナデ。	赤色粒・白色粒 凸－暗灰色	破片。 前庭部覆土中。
55	丸瓦	残存長 8.4 厚さ 1.6	凹面側に布目端部圧痕あり。	凸面縄目叩きの後ナデ。凹面布目圧痕。側面ナデ。	赤色粒・白色粒 凹凸－淡褐色	破片。 前庭部覆土中。
56	丸瓦	残存長 6.7 厚さ 2.5	厚さは比較的厚く、側面は平坦である。	凸面縄目叩きの後ナデ。凹面布目圧痕。側面ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－淡灰色	破片。 前庭部覆土中。
57	丸瓦	残存長 10.4 厚さ 1.9	広端部は凸面側に若干反り、広端面はやや傾斜している。側面内側の面取り幅は狭い。	凸面縄目叩きの後ナデ。凹面布目圧痕の後端部ナデ。側面・端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－黒灰色 肉－淡褐色	破片。 土段上。
58	軒丸瓦	残存長 13.3 厚さ 1.5	厚さはやや薄く、瓦当面は剥離している。側面内側の面取り幅は狭い。	凸面縄目叩きの後ナデ。凹面布目圧痕。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－黒灰色 肉－淡褐色	破片。 前庭部覆土中。
59	丸瓦	残存長 6.1 厚さ 1.6	厚さは比較的薄く、側面内側の面取り幅はやや狭い。	凸面縄目叩きの後ナデ。凹面布目圧痕。側面篦切り後ナデ。	赤色粒・白色粒 凹凸－淡褐色 側面－黒灰色	破片。 前庭部覆土中。
60	丸瓦	残存長 14.6 厚さ 1.4	厚さは比較的薄い。凹面側に紐の圧痕あり。	凸面縄目叩きの後ナデ。凹面布目圧痕の後篦ナデ。	赤色粒・白色粒 凹凸肉－淡褐色	破片。 前庭部覆土中。
61	丸瓦	残存長 13.6 幅 13.3 厚さ 1.5 玉縁長 4.4	玉縁部の取り付けは若干角度をもつ。側面内側の面取り幅はやや狭い。	凸面縄目叩きの後ナデ・玉縁部凸面ナデ。凹面布目圧痕。側面・狭端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－黒灰色 肉－淡灰褐色	1/3。 前庭部覆土中。
62	古銭	直径 2.31	天聖元寶。初鋳1023年。文字は摩滅が著しい。		銅製。	1/2。P4北側底面。
63	古銭		文字は摩滅していて判読不明。		銅製。	1/4。前庭部覆土中。
64	釘	残存長 8.2 幅 0.5 厚さ 0.5	断面は方形を呈する。頭部は薄く偏平な舌状をなし、やや斜めに折り曲げている。	錆は内部まで進行しており、地金はもろい。	鉄製	先端部欠失。 前庭部覆土中。
65	釘	残存長 6.9 幅 0.5 厚さ 0.5	断面は方形を呈する。頭部は薄く偏平な四角形をなし、斜方向に折り曲げている。	錆は内部まで進行しており、地金はもろい。	鉄製	先端部欠失。 前庭部覆土中。
66	釘	残存長 6.3 幅 0.5 厚さ 0.5	断面は方形を呈する。頭部は薄く偏平をなし、ほぼ直角に短く折り曲げている。	錆は内部まで進行しており、地金はもろく、一部空洞化している。	鉄製	先端部欠失。 前庭部覆土中。
67	釘	残存長 5.0 幅 0.4 厚さ 0.4	断面は方形を呈する。頭部は薄く偏平な舌状をなし、丸く折り曲げている。	錆は内部まで進行しており、地金はもろく、一部空洞化している。	鉄製	先端部欠失。 前庭部覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
68	釘	残存長 4.1 幅 0.6 厚さ 0.6	断面は方形を呈する。頭部は薄く偏平な方形をなし、やや歪んで折り曲げている。	錆は内部まで進行しており、地金はもろく、一部空洞化している。	鉄製	下半欠失。 前庭部覆土中。
69	釘	残存長 4.1 幅 0.6 厚さ 0.6	断面は方形を呈する。頭部は薄く偏平な方形をなし、やや撓れて折り曲げている。	錆は内部まで進行しており、地金はもろい。	鉄製	下半欠失。 前庭部覆土中。
70	釘	残存長 4.1 幅 0.5 厚さ 0.4	断面は方形を呈する。頭部はやや薄く、丸く折り曲げている。	錆は内部まで進行しており、地金はもろい。	鉄製	下半欠失。 前庭部覆土中。
71	釘	残存長 2.6 幅 0.7 厚さ 0.6	断面は方形を呈する。頭部は薄く偏平な舌状をなし、斜方向に折り曲げている。	錆は内部まで進行しており、地金はもろい。	鉄製	下半欠失。 前庭部覆土中。
72	釘	残存長 3.3 幅 0.5 厚さ 0.4	断面は方形を呈する。頭部は薄く偏平な舌状をなし、ほぼ直角に折り曲げている。	錆は内部まで進行しており、地金はもろく、一部空洞化している。	鉄製	下半欠失。 前庭部覆土中。
73	釘	残存長 3.1 幅 0.4 厚さ 0.4	断面は方形を呈する。頭部は薄く偏平な台形をなし、斜方向に折り曲げている。	錆は内部まで進行しており、地金はもろい。	鉄製	先端部欠失。 前庭部覆土中。
74	釘	残存長 7.5 幅 0.65 厚さ 0.58	断面は方形を呈し、先端部に向かって徐々に細くなる。	錆は内部まで進行しており、地金はもろい。	鉄製	両端部欠失。 前庭部覆土中。
75	釘	残存長 5.0 幅 0.5 厚さ 0.4	断面は方形を呈する。	錆は内部まで進行しており、地金はもろく、一部空洞化している。	鉄製	両端部欠失。 前庭部覆土中。
76	不明	残存長 5.1 幅 0.8 厚さ 0.4	断面は長方形を呈する。上端部に別の鉄器が付着している。	錆は内部まで進行しており、地金はもろい。	鉄製	下半欠失。 前庭部覆土中。
77	釘	残存長 4.0 幅 0.35 厚さ 0.35	断面は方形を呈し、先端部に向かって徐々に細くなり、先端は尖っている。	錆は内部まで進行しており、地金はもろい。	鉄製	両端部欠失。 前庭部覆土中。
78	釘	残存長 3.6 幅 0.55 厚さ 0.45	断面は方形を呈する。	錆は内部まで進行しており、地金はもろく、一部空洞化している。	鉄製	両端部欠失。 前庭部覆土中。
79	釘	残存長 2.8 幅 0.4 厚さ 0.35	断面は方形を呈する。頭部は薄く偏平な方形をなし、丸く折り曲げている。	錆は内部まで進行しており、地金はもろい。	鉄製	ほぼ完形。 前庭部覆土中。
80	五輪塔(水輪)	高さ 23.2 幅 23.6	側面はきれいな丸みをもち、四方に同じ梵字を施す。上下両平坦面は若干窪む。	側面及び上下両平坦面とも研磨により仕上げられているが、小穴状の窪みが顕著。	安山岩	完形。 表土層(第Ⅰ層)中。

第2号門跡（第34図）

B地点Ⅲ区の西端に位置し、Ⅲ区とⅣ区を東西に区切る堀跡の中央部の途切れた陸橋部に構築されている。本遺構は、重複する第9号掘立柱建物跡や第2号溝跡を切り、東側最後列の控柱の柱穴





第2号門跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・B軽石を微量含む。粘性・しまりともない。）

第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第4層：暗黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第6層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第7層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第8層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第34図　第2号門跡

の一部を、Ⅲ区とⅣ区を区切る堀跡と同形態の短い堀跡によって切られている。

門は、柱穴の形態やその配列から、最も規模の大きな柱穴掘り方のＰ１とＰ２が門柱と考えられ、その前に１列の控柱(Ｐ３とＰ４)と、その後に２列の控柱(Ｐ５･Ｐ６とＰ７･Ｐ８)を伴う構造と推測される。規模は、門柱の柱心間の幅が3.80m･門柱の前後に位置する控柱のＰ３～Ｐ７及びＰ４～Ｐ８の柱心間の長さが約4.20mを測る。

門柱の柱穴掘り方と考えられるＰ１とＰ２は、平面形が長さ約150cm･幅70cm～100cmのコーナー部の丸みがかなり強い隅丸長方形ぎみの形態を呈している。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは65cm程度を測る。底面は、開析谷黒色埋没土下のローム層を掘り込んで平坦に作られており、いずれも柱穴掘り方外側の壁に接する底面上に大きな礎石が据えられている。礎石は、長さ35cm～45cm･厚さ５cm～10cmの偏平な片岩系の自然石を使用しており、右側のＰ２は１個であるが、左側のＰ１は３個の自然石を重ねている。Ｐ１は、同様の礎石をもつ比較的大きな土壙状の穴と重複しているが、この土壙状の穴は両者の礎石の重なり具合から見て、Ｐ１と何だかの関わりをもつ施設と考えられる。右側のＰ２では、礎石の上に門柱の基部が一部残存しており、腐食のため原形を止めていないが、それによると門柱は直径35cm前後の比較的大きな円柱状の柱であったと思われる。柱穴掘り方の覆土は、暗褐色土とロームブロックを多量に含む暗黄褐色土が互層をなし、礎石の上に門柱を立てた後、版築状に埋め戻している。

控柱は、門柱の前と後ではその柱穴の形態が異なっている。門柱の前に位置するＰ３とＰ４は、直径70cm前後の比較的規模の大きな円形もしくは楕円形に近い形態を呈している。深さは、いずれも15cmと浅く、底面は黒色土中でローム層に達していない。覆土は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土によって充填されており、柱痕が見られないことから、おそらくこの暗黄褐色土を基盤とした上に控柱が立てられたものと思われる。なお、このＰ３とＰ１及びＰ４とＰ２の間には、Ｐ９とＰ10のやや小規模な円形を呈するピットがある。Ｐ９は礎石をもち、Ｐ10はＰ２を切っており、位置にややずれがあり深さも異なるが、いずれも門柱と控柱が並ぶ柱穴列の線上に位置することから、門と関連する柱穴の可能性が推測される。門の後に位置するＰ５～Ｐ８は、いずれも直径40cm前後の円形を呈し、確認面からの深さも20cm程度と揃っており、底面は平坦でローム層に達している。前後の柱穴間の長さは異なり、Ｐ１とＰ５及びＰ２とＰ６の柱心間は1.30m、Ｐ５とＰ７及びＰ６とＰ８の柱心間は1.60mである。出土遺物は、門柱の柱穴掘り方であるＰ２の覆土中から、第35図№１の鉄釘の破片が１点出土しただけである。

本門跡は、その陸橋部における位置や控柱の配置関係と門柱の柱心間の幅から見て、東側のⅢ区側に開く開き戸であったと考えられるが、比較的立派で堅牢であったと思われる門柱やその前後に複数の控柱を伴うことから、あるいは門上には簡単な構造の櫓をもつ櫓門であった可能性も推測される。

第35図　第２号門跡出土遺物

第２号門跡出土遺物観察表

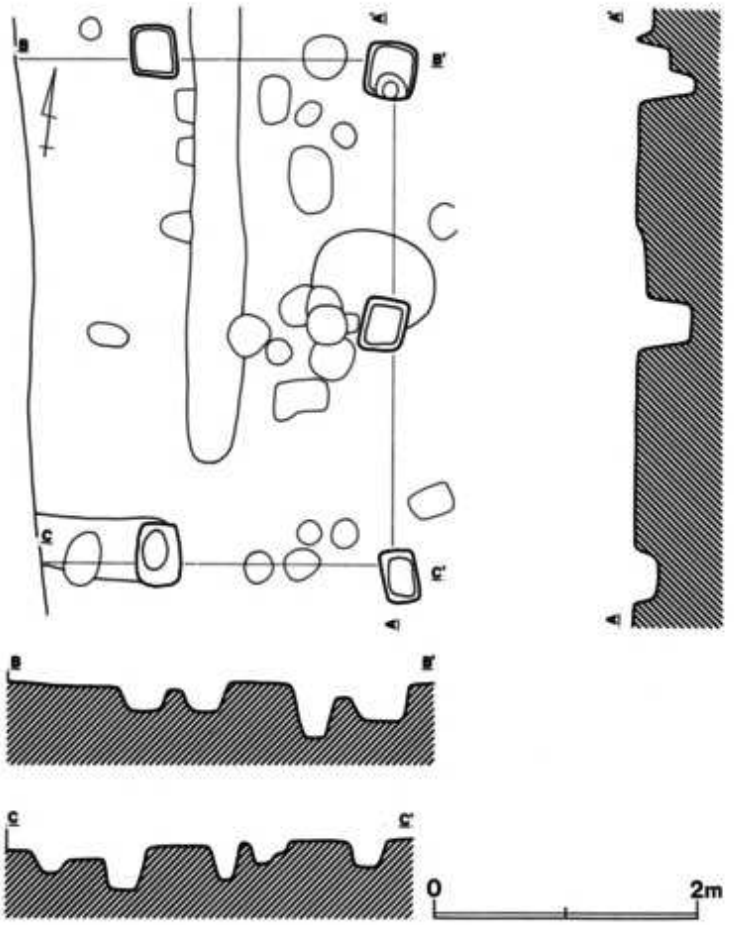
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	釘	残存長 3.9 幅 0.4 厚さ 0.4	断面は方形を呈しているが、ややねじれている。	錆はすでに安定し、地金部分はなく、空洞化している。	鉄製	両端部欠失。 右側門柱穴内。

3．掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第36図）

B地点I区の南西端に位置し、重複する第11号溝跡と第38号土壙を切っている。建物跡の西側は調査区外に位置するため、本建物跡の全容は不明である。

形態は、建物跡の南北方向が2間、東西方向が2間以上の側柱式である。規模は、南北方向が4m・東西方向は2.95mまで測れる。建物跡の南北方向は、M−7°−Wを向く。柱通りは、南北方向・東西方向とも若干ずれが見られるが、比較的通りは良い。柱心間は、南北方向が2m、東西方向は調査区内で検出された部分では1.80mを測る。柱穴は、いずれも40cm〜45cm×30cm〜40cm程度の長方形を呈し、確認面からの深さは20cm〜40cmで、底面は平坦である。柱穴覆土は、ローム粒子を微量含む暗茶褐色土で、本建物跡と同じく方形の柱穴を主体とする北側の第1号柱穴列や第1号土壙・第2号土壙等の覆土と類似している。覆土中からは、遺物は何も出土しなかった。

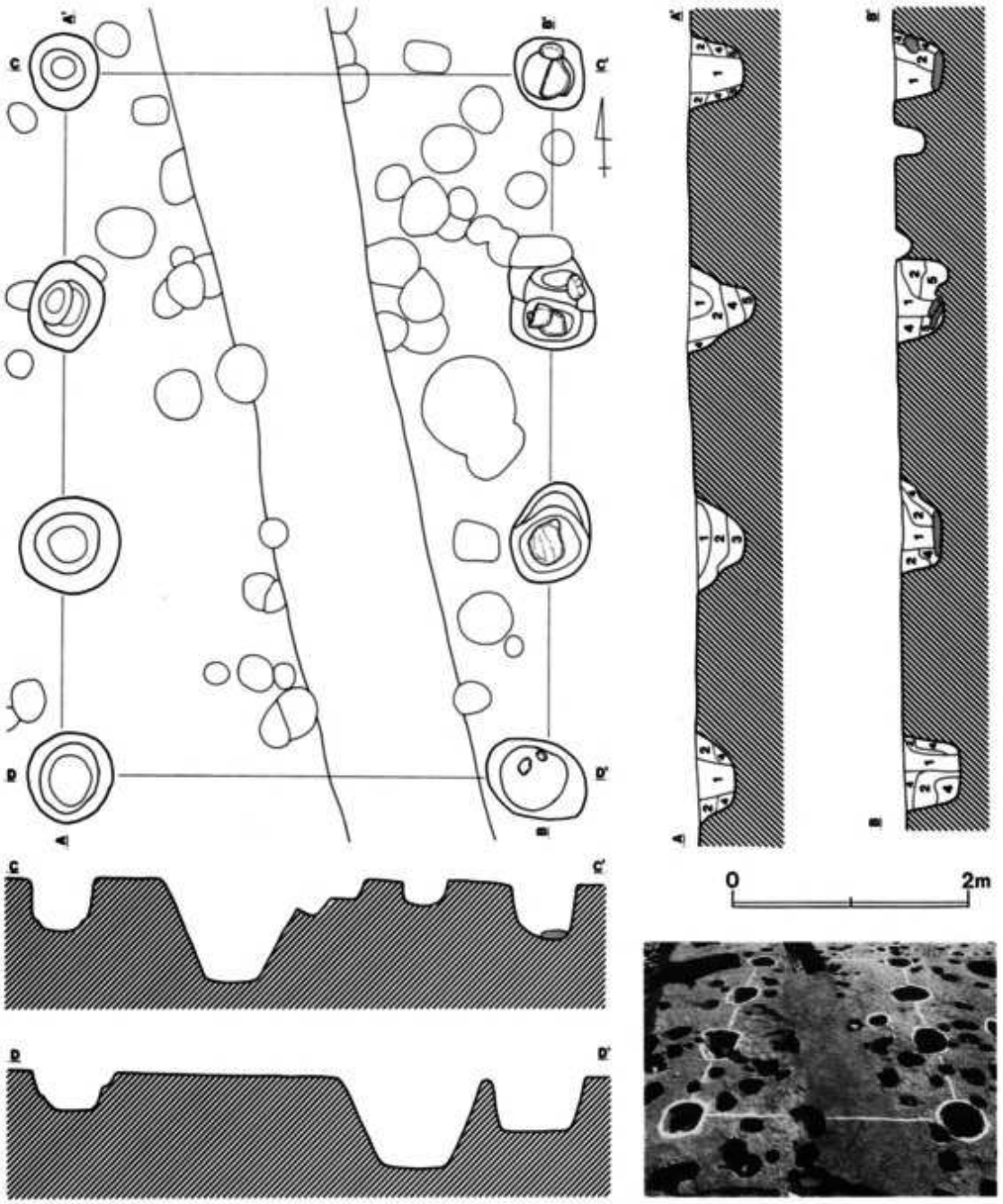


第36図　第1号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡（第37図）

B地点I区の東端に位置する。第9号溝跡や第5号掘立柱建物跡と重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

形態は、建物跡の中央部に第9号溝跡があるため、建物内部の束柱等柱穴の存否が明確ではないが、一応南北方向が3間、東西方向が2間の側柱式と思われる。規模は、梁行方向が4.20m・桁行方向が6mを測る。建物跡の長軸方向は、ほぼ真北を向いている。柱通りは非常に良く、柱穴は整然と配列されているが、梁行側は真ん中の柱穴をもたない可能性が高い。柱心間は、桁行が各2mを測り、梁行は真ん中の柱穴がないため明確ではないが、その規模から見ておそらく1間の長さは桁行とほぼ同じ長さと推測される。柱穴は、いずれも比較的規模の大きな掘り方をもち、多くは柱痕



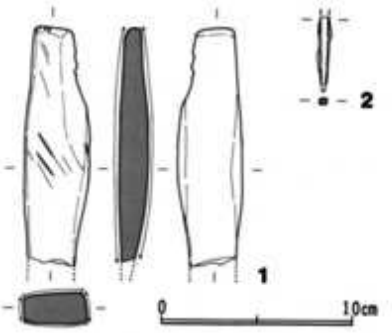
第37図　第２号掘立柱建物跡

第２号掘立柱建物跡土層説明

第１層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗灰褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロック・炭化粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：黒灰褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗灰褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）

を残しているが、柱痕の規模は一様ではない。また、建物桁行の柱穴列では、西側桁行の柱穴が素掘りであるのに対して、東側桁行の柱穴は掘り方底面に比較的大きな礎石を据えているものが多いという差異が見られる。柱穴掘り方は、長さが60cm～90cmを測り、平面形は円形・楕円形・不整形と様々であり、断面の形態も摺鉢状・逆台形・段をもつものなど様々な形態が見られる。確認面からの深さは、最低32cmから最高56cmを測るが、40cm～50cmのものが主体的である。掘り方覆土は、柱を立てた後版築状に埋め戻されたような堆積を示している。

出土遺物は、建物跡の東側桁行の北から２番目の柱穴掘り方内の礎石の間から砥石(No１)が、北から４番目の南東コーナーに位置する柱穴掘り方内から鉄釘の破片(No２)が、それぞれ１個ずつ出土している。



第38図　第２号掘立柱建物跡出土遺物

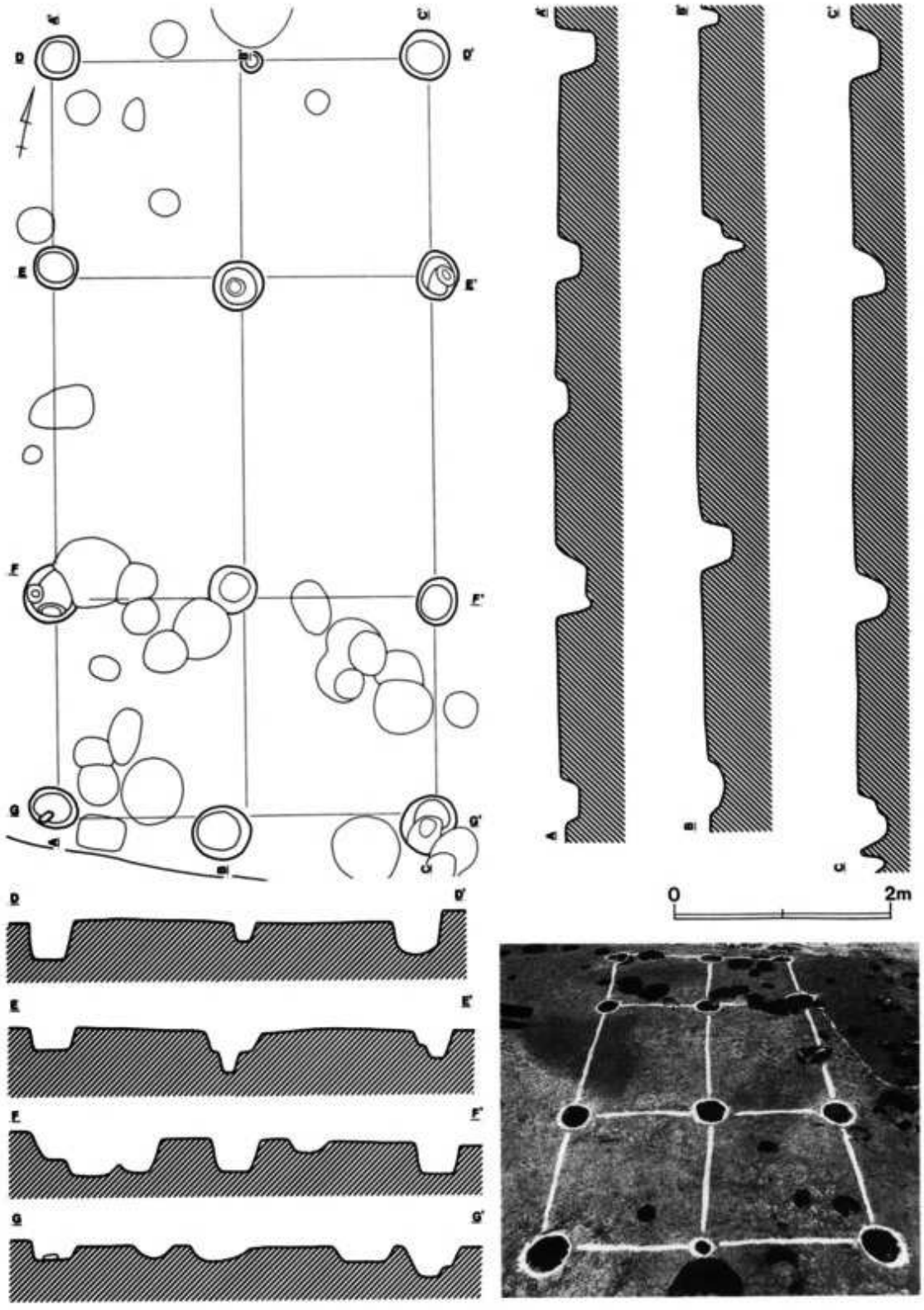
第２号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	砥石	残存長 12.3 幅 3.4 厚さ 1.5	形態は薄く長細い短冊形を呈するが、両端部は幅が狭く、厚さも薄くなっている。	表裏面及び両側面とも良く擦られている。表面に刃物による条痕あり。	凝灰岩	下端欠失。 重さ87ｇ 柱穴掘り方内。
2	釘	残存長 3.5 幅 0.4 厚さ 0.35	断面はやや長方形ぎみである。先端部に向かって細くなる。	錆は安定しており、すでに地金部分はなく、空洞化している。	鉄製	両端欠失。 柱穴掘り方内。

第３号掘立柱建物跡（第39図）

Ｂ地点Ｉ区の南端に位置し、建物の南側をＩ区とⅣ区を区切る堀跡と接している。また、柱穴の一部は西側の古墳時代中期の第１号住居跡と重複し、それを切っている。

形態は、建物跡の南北方向が３間・東西方向が２間の長方形を呈し、内部に束柱か棟持柱をもつ総柱式ではないかと思われるが、建物の南北方向の真ん中の１間の間隔が他に比べてかなり広いことから、あるいは南北方向１間・東西方向２間の小規模な建物が２棟並列して配置されている可能性も考えられる。規模は、梁行方向が3.40m・桁行方向が７ｍを測る。建物跡の長軸方向は、N－11°－Wをとり、西側の第９号溝跡やＩ区とⅡ区を区切る堀跡とほぼ平行する向きである。柱心間は、梁行方向が１間1.70m、桁行方向は南北両端の１間がいずれも２ｍであるが、真ん中の１間は３ｍとかなり広い。柱通りは、桁行側の側柱穴は東西両方とも比較的良く直線上に並んで対をなしているが、真ん中の柱穴列はそれらとは若干ずれる傾向が見られる。柱穴は、直径40cm～50cmの円形を呈し、確認面からの深さが30cm前後のものが主体である。これらの柱穴の中で北側梁行の真ん中の柱穴は、直径20cm・深さ16cmと他に比べて極端に規模が小さい。柱穴覆土は、Ｂ軽石やロームブロックと白色粘土粒子を微量に含む暗灰褐色土を主体にしている。いずれの柱穴も柱痕は見られず、何も出土しなかった。

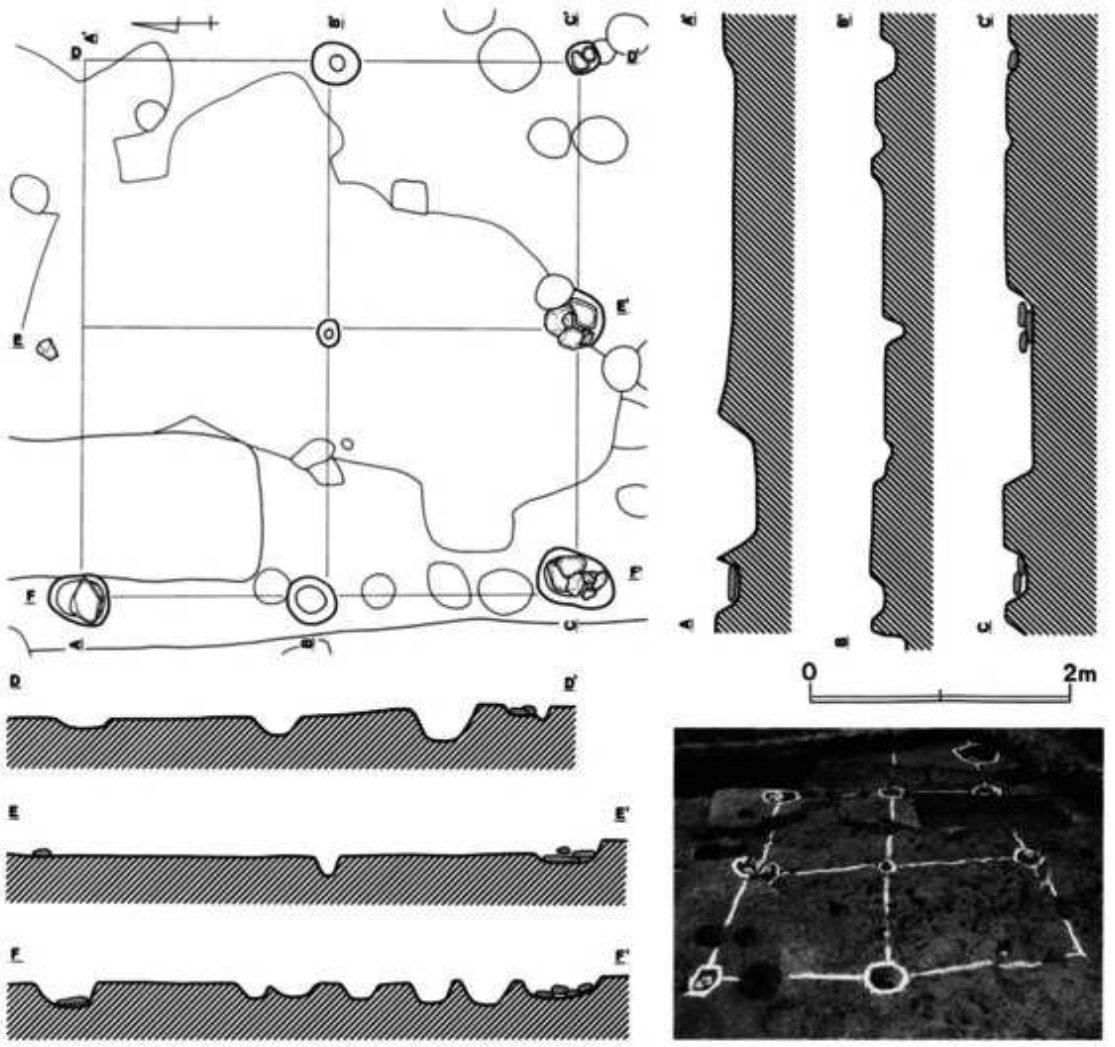


第39図　第３号掘立柱建物跡

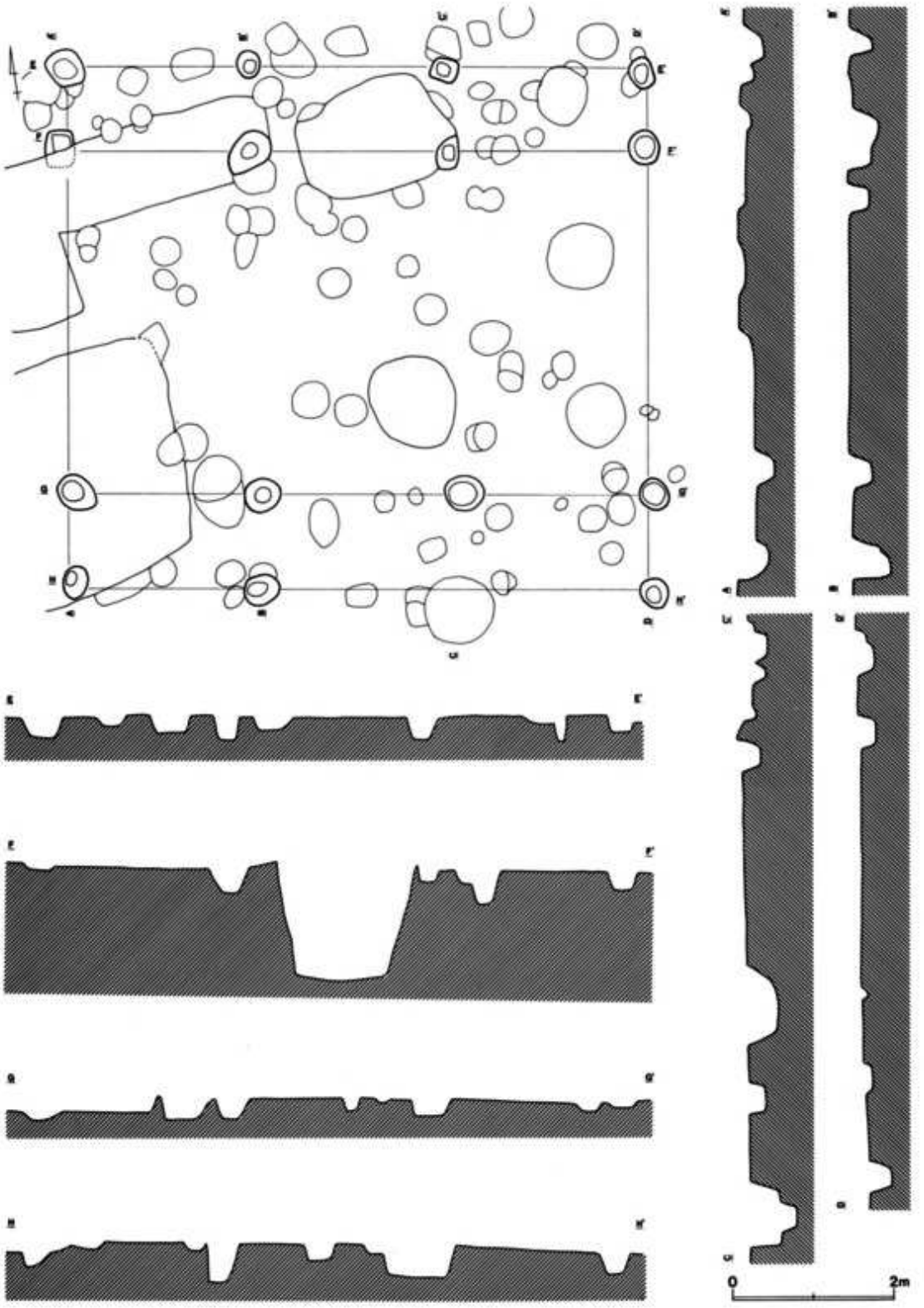
第４号掘立柱建物跡（第40図）

Ｂ地点Ｉ区の北西端に位置し、重複する第15号土壙に柱穴の一部を切られている。本建物跡の内部は、広範囲にわたって撹乱が及んでおり、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

建物跡の形態は、建物跡の北側の柱穴が撹乱等により２本不明であるため明確ではないが、南北・東西方向とも２間の方形を呈するものと思われ、真ん中に束柱をもつ総柱式と推測される。建物跡の南北方向は、ほぼ真北を向いている。規模は、南北方向が3.80m・東西方向が4.00mと、南北方向が若干短くなっており、柱心間はそれぞれ1.90mと2.00mである。柱穴は、長さ25cm～60cmの円形や楕円形を呈し、確認面からの深さは10cm～20cmある。側柱穴は、底面に複数の自然石を重ねたり組み合わせた礎石を伴っているものが多い。真ん中の束柱は、直径20cmの円形を呈し、建物の側柱穴に比べてかなり小規模であるが、上半部は撹乱により削平され、柱穴の下部しか残存していないため、その規模等は明確ではない。柱穴の覆土中からは、遺物は何も出土しなかった。



第40図　第４号掘立柱建物跡



第41図　第５号掘立柱建物跡

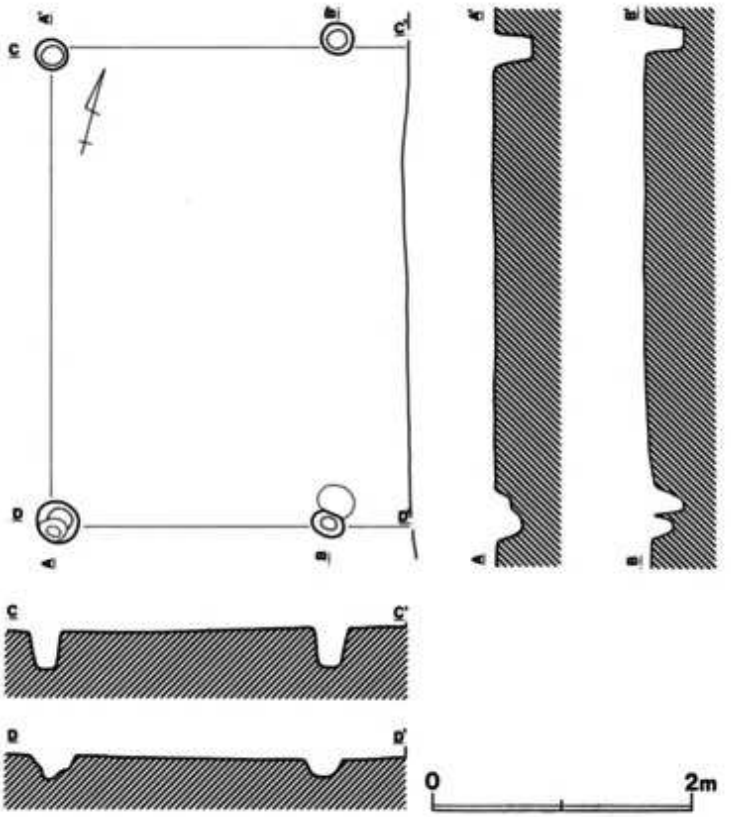
第5号掘立柱建物跡（第41図）

B地点Ⅰ区の中央部に位置し、重複する竪穴状遺構・第2号土壙・第13号井戸跡などに切られ、入れ子状に重複する第29号掘立柱建物跡を切っている。また、東側で第2号掘立柱建物跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、南北方向2間・東西方向3間の東西方向に長い長方形を呈する側柱式で、南北両側に幅が半間程度の庇を伴っている。規模は、身舎部分の梁行が4.20m・桁行が7.20mを測り、庇部分は北側が幅1.00m・南側が幅1.20mと南側の庇の幅が若干長くなっている。建物跡の長軸方向は、N−98°−Eを向いている。柱通りは比較的良く、いずれの柱穴も直線上に整然と並んで配置されている。柱心間は、桁行は2.40mの等間隔であるが、梁行では真ん中の棟持柱の柱穴がないため、1間の柱心間は明確ではない。柱穴は、長さ40cm前後の円形を呈するものが主体的であるが、中には方形もしくは長方形ぎみの形態のものも見られる。確認面からの深さは、最低で10cm・最高で48cmあるが、30cm前後のものが主体である。礎石を伴うものはない。柱穴覆土は、ローム粒子を微量含む暗褐色土で、柱痕が確認できたものはなく、遺物も出土しなかった。

第6号掘立柱建物跡（第42図）

B地点Ⅴ区の北側に位置する。調査区内で検出された部分は建物跡の一部であり、建物跡の西側は調査区外に延びる可能性が高いため、本建物跡の全容は不明である。また、B地点のⅤ区は調査前まで水田として耕作されていた場所で、すでに調査区東側よりも20cm～30cm一段低く削平されているため、遺構の遺存状態は良好とは言えないであろう。



第42図　第6号掘立柱建物跡

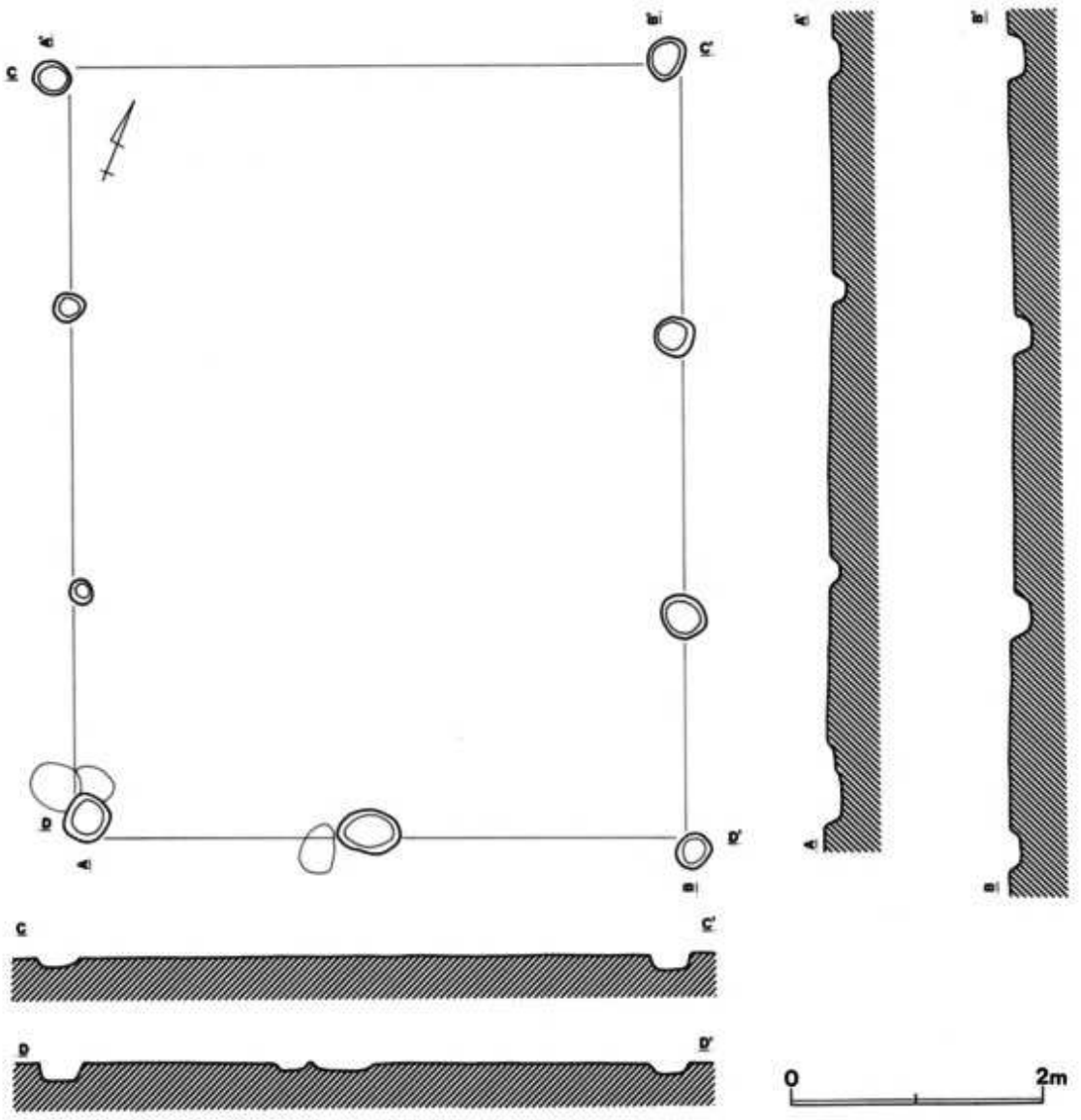
建物跡の形態は、南北方向2間・東西方向1間以上の長方形もしくは方形を呈する側柱式と思われるが、南北方向の柱穴列については中間柱の柱穴が見られないため、1間の間隔は明確ではない。規模は、南北方向が3.60m・東西方向は1間の柱心間が2.20mを測る。建物跡の南北方向の向きは、M−16°−Wをとり、東側に近接する堀跡とほぼ平行している。柱穴は、他の建物跡の柱穴に比べていずれも小規模で、

直径20cm～30cmの円形を呈し、確認面からの深さは最低で15cm～最高が30cmを測る。柱穴覆土は、ローム粒子を微量含む暗灰色土で、遺物は何も出土しなかった。

第7号掘立柱建物跡（第43図）

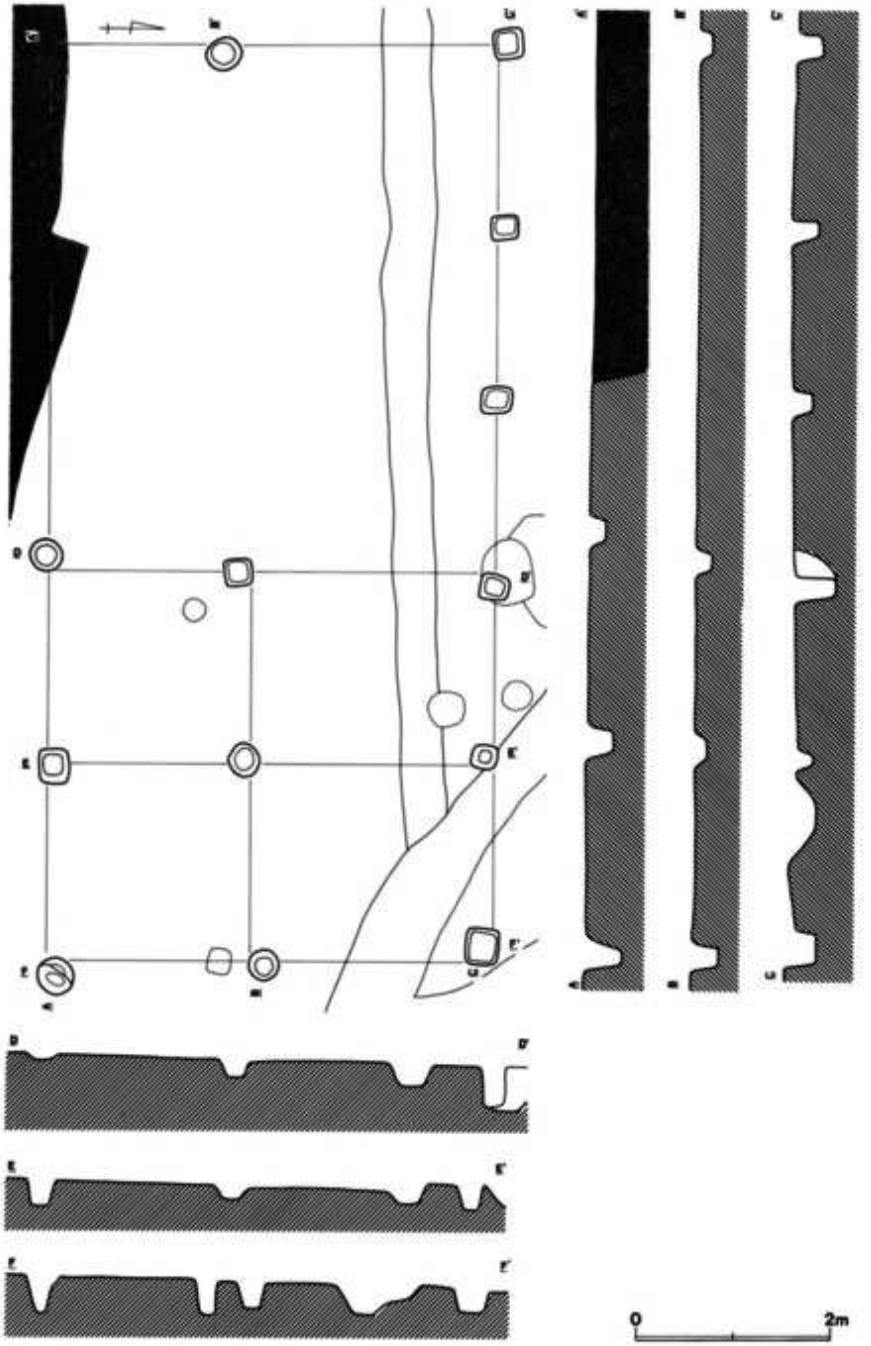
B地点V区の南端付近に位置する。B地点のV区は、最近の水田耕作により一段低く削平されているため、遺構の遺存状態は良好とは言えないであろう。

建物跡の形態は、南北方向が3間・東西方向が2間の長方形を呈する側柱式であるが、若干平行四辺形状に歪んでいる。規模は、梁行が4.80m・桁行が6.20mを測る。建物跡の桁行方向は、N－24°－Wを向き、東側に近接する堀跡とほぼ同じ向きをとっている。柱心間は、桁行では東西両側とも1



第43図　第7号掘立柱建物跡

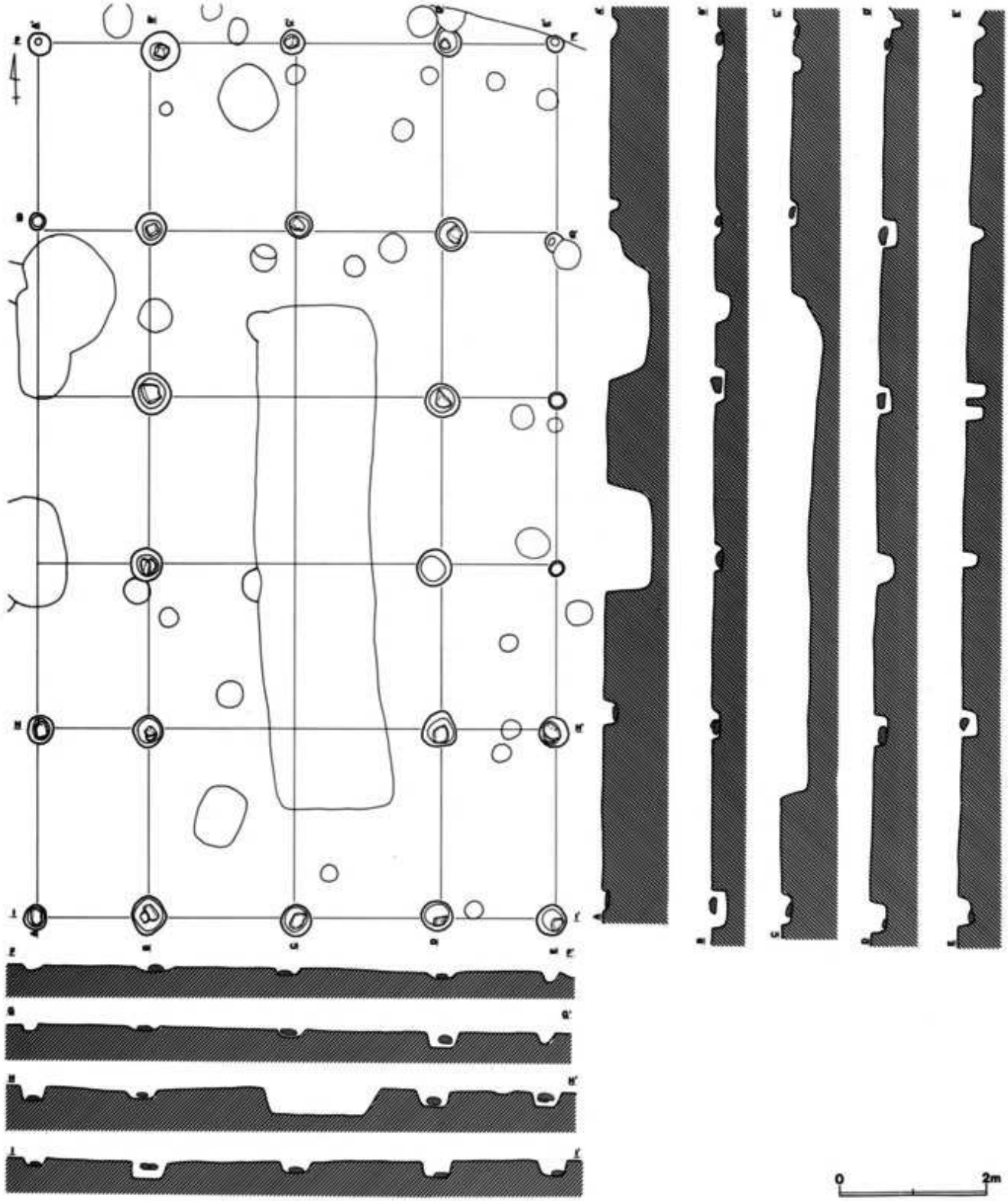
間の間隔が不揃いで、東側桁行は北から2.20m・2.20m・1.80mで、西側桁行は北から2.00m・2.20m・2.00mである。梁行側は、北側梁行には棟持柱の柱穴が見られないが、南側梁行の棟持柱の柱穴位置からは1間2.40mと考えられる。柱穴は、直径30cm前後の円形を呈するものが主体であるが、西側桁行の中間に位置する2本の柱穴は、直径20cm前後で他に比べてやや規模が小さい。また、南側梁行の棟持柱の柱穴だけは、やや規模が大きい楕円形を呈している。確認面からの深さは、5cm～15cmと全体的に浅い。柱穴覆土は、北側の第6号掘立柱建物跡と類似した暗灰色土で、遺物は何も出土しなかった。



第44図　第8号掘立柱建物跡

第8号掘立柱建物跡（第44図）

B地点Ⅳ区の中央部に位置し、重複する第11号掘立柱建物跡・第2号溝跡・第5号溝跡を切っている。建物跡の南西側は、撹乱により柱穴の配列が不明な部分があり、遺存状態は良好とは言えない。



第45図　第９号掘立柱建物跡

建物跡の形態は、南北方向が2間・東西方向が5間の長方形を呈し、建物跡の東西方向の東側2間は、内部に束柱か棟持柱の柱穴をもつ総柱式で、西側は内部に柱穴をもたない側柱式になっている。規模は、梁行が4.60m・桁行が9.40mを測る。建物跡の桁行方向は、N−95°−Eを向いている。柱通りは、あまり良くなく、いずれの柱穴列もややずれが見られる。柱心間は、梁行・桁行とも一様ではない。梁行の2間は、2.60mと2.00mで北側の1間の方が長くなっている。桁行の5間は、両端がいすれも2.00mと若干広く、中間の3間はいずれも1.80mである。柱穴は、長さ30cm前後の方形を呈するものが主体であるが、中には直径35cm程度の円形を呈するものも見られる。確認面からの深さは20cm～40cmを測る。柱穴覆土は、ローム粒子やロームブロックを微量含む暗茶褐色土である。遺物は、何も出土しなかった。

第9号掘立柱建物跡（第45図）

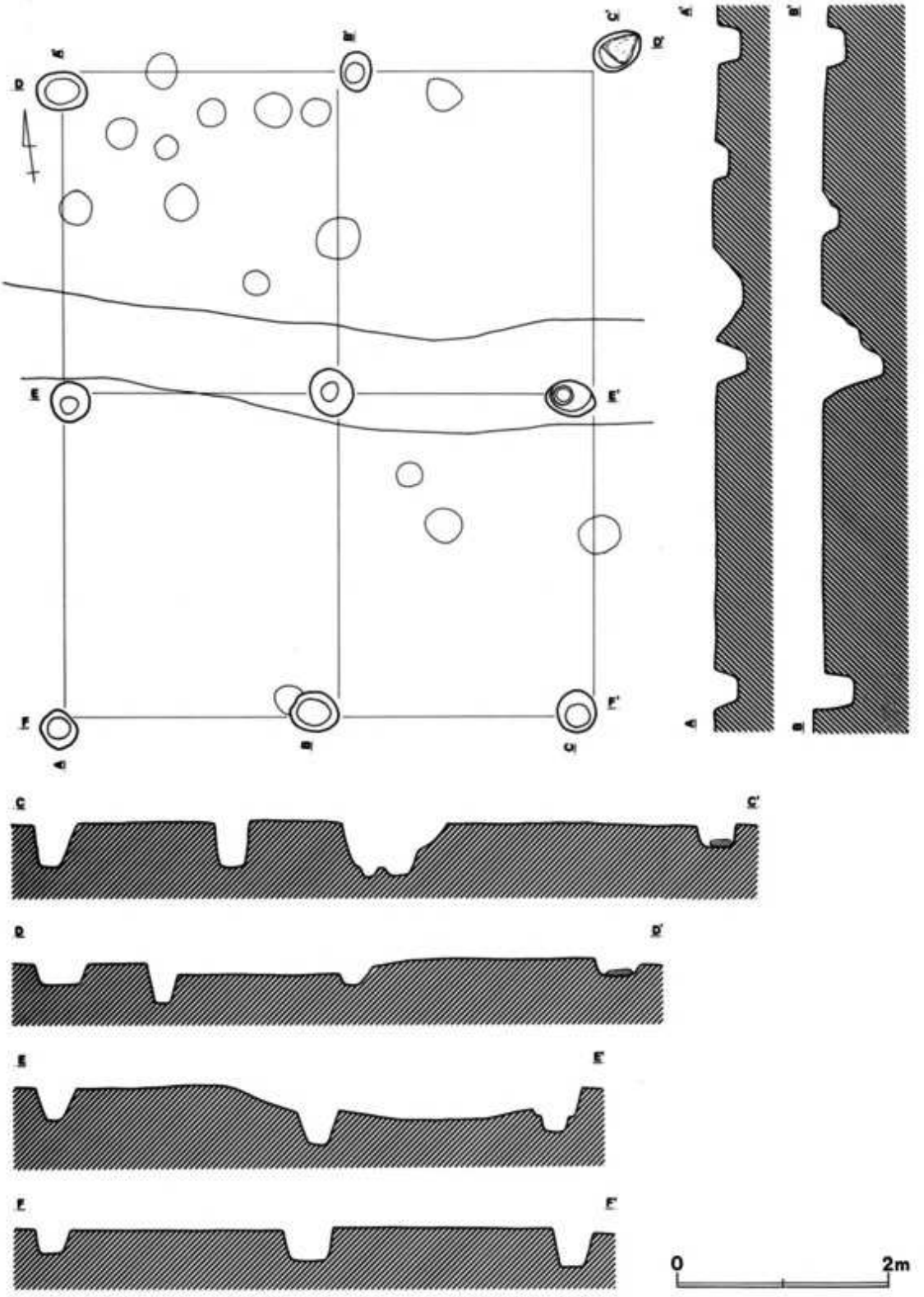
B地点Ⅲ区の南西端に位置し、重複する第2号門跡や入口部奥の短い掘跡に切られている。また、第2号溝跡や第6号溝跡及び第10号掘立柱建物跡とも重複しているが、それらとの新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、南北方向5間・東西方向2間の細長い長方形を呈し、東西両側に庇を伴っている。建物跡の内部は、ちょうど堀跡に切られているため明確ではないが、北側では束柱が1箇所残存しており、総柱式であった可能性もある。規模は、身舎部分の梁行が4.00m・桁行が11.60mあり、庇部分は東西両側とも1.50mを測る。柱心間は、梁行はいずれも2.00mと等間隔であるが、桁行は南北両端の1間が2.50mとやや広く、他はいずれも2.20mで1間の間隔に異なりが見られる。柱通りは比較的良く、各柱穴列とも直線上に並んでいる。建物跡の桁行方向は、N−2°−Eを向き、ほぼ真北に近い方向をとっている。身舎部分の柱穴は、直径30cm～50cmの円形を呈しており、ほとんどが長さ15cm～20cmの礎石を伴っている。庇部分の柱穴は、身舎部分の柱穴より規模が小さい直径20cm程度の円形を呈するものが主体であるが、庇の桁行方向の南端の1間を構成する2本の柱穴だけは、東西両側ともに直径30cm～40cmと他に比べて規模がやや大きく、柱穴内に礎石を伴っている。確認面からの深さは、10cm～25cmを測るが、全体的に20cm以下の比較的浅いものが主体である。柱穴覆土は、ローム粒子を微量含む淡灰色土で、遺物は何も出土しなかった。

第10号掘立柱建物跡（第46図）

B地点Ⅲ区の中央部に位置し、重複する第6号溝跡を切っている。また、本建物跡は、第9号掘立柱建物跡とも一部重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、南北・東西両方向とも2間で、真ん中に束柱をもつ総柱式と考えられるが、南北方向と東西方向の1間幅は異なっており、南北方向に長い長方形を呈している。また、柱通りが悪く、特に建物跡の北東隅に位置する比較的大きな礎石を伴う柱穴は、他の柱穴列から完全に外れており、本建物跡の側柱を構成する柱穴か不明確であるが、あるいは平行四辺形状にかなり歪んだ平面形を呈することも想定される。規模は、南北方向が約6m・東西方向が4.80mを測る。柱心間は、柱通りが悪いため明確ではないが、南北方向が1間3m・東西方向が1間2.40mと推測される。建



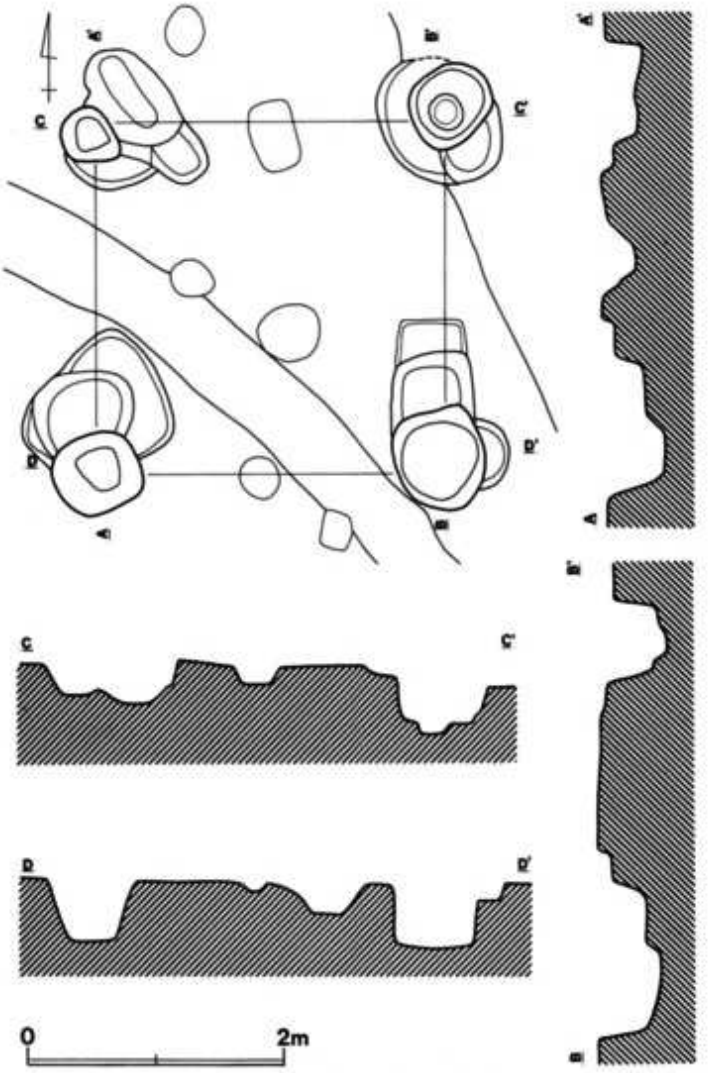
第46図　第10号掘立柱建物跡

物跡の南北方向は、ほぼN−7°−Eを向いている。柱穴は、直径40cm前後の円形もしくは楕円形を呈する素掘りのものが主体で、確認面からの深さは側柱穴は20cm～40cmであるが、真ん中の東柱の柱穴は58cmと他に比べて深くなっている。柱穴覆土は、上半がローム粒子を均一に含む暗褐色土、下半がロームブロックを微量含む黒灰色土である。遺物は何も出土しなかった。

第11号掘立柱建物跡（第47図）

B地点Ⅳ区の中央部に位置する。本建物跡の南西側柱穴の一部を第8号掘立柱建物跡の柱穴に切られ、北東側柱穴の上半を後世の溝跡に切られている。また、第2号溝跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、1間×1間の方形を呈し、柱心間は南北方向・東西方向とも2.70mの等間隔である。東西方向の柱穴間の中央には、小規模で浅いピットがあるが、これらは本建物跡の柱穴とは覆土が異なっており、本建物跡には伴わないと考えられる。建物跡の南北方向は、N−2°−Wのほぼ真北を向いている。柱穴は、直径60cm前後の不整円形を呈するものが主体で、確認面からの深さは北西側の柱穴が25cmとやや浅いが、他はいずれも50cm程度ある。本建物跡の柱穴は、いずれも規模の大きな土壙状のピットが2～3重複しており、数度の建て替えが行われた可能性が高い。柱穴覆土は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土で、柱痕は見られなかった。覆土中からは遺物は何も出土しなかった。



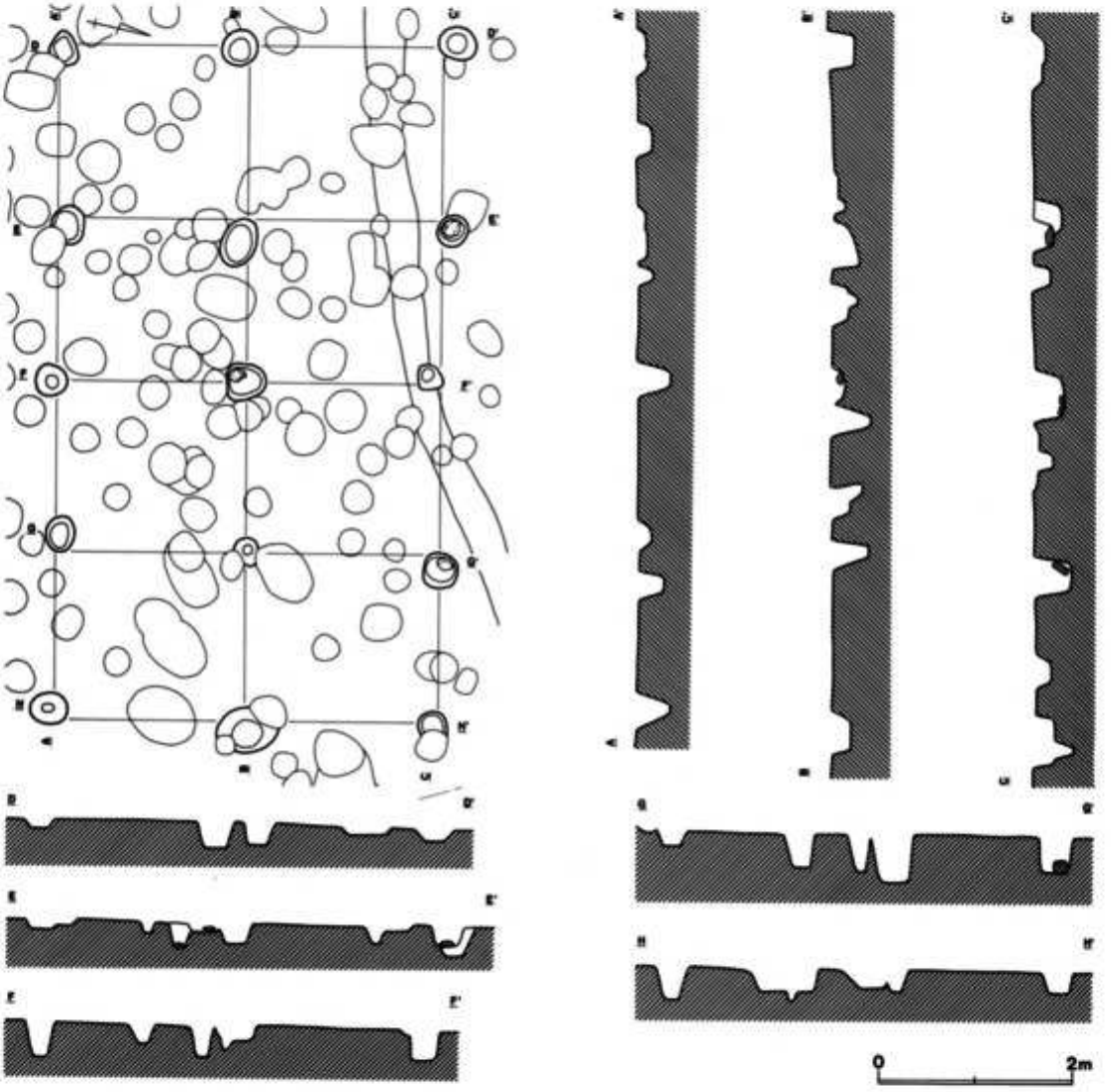
第47図　第11号掘立柱建物跡

第12号掘立柱建物跡（第48図）

B地点のⅢ区北側に位置し、重複する第15号掘立柱建物跡を切っている。この他にもこの場所には多くの掘立柱建物跡が重複しているが、それらとの新旧関係は不明である。また本建物跡の西側

には、建物跡の側壁を本建物跡と同一方向にとる１間×２間の小規模な第13号掘立柱建物跡が隣接しており、両建物跡は密接な関係をもって併置されていたものと思われる。

建物跡の形態は、東西方向４間・南北方向２間の長方形を呈し、建物内部に束柱もしくは棟持柱をもつ総柱式である。柱通りはあまり良くなく、梁行・桁行の柱穴列ともやや蛇行ぎみである。規模は、梁行が４ｍ・桁行が７ｍを測る。柱心間は、梁行が２ｍの等間隔で、桁行が1.75mのほぼ等間隔である。建物跡の桁行方向は、N−78°−Eを向き、本建物跡の北側にあるⅡ区とⅢ区を区切る東西方向の堀跡とほぼ平行している。柱穴は、直径30cm～40cmの円形を呈するものが多いが、楕円形や不整形を呈するものも見られる。素掘りのものが大半であるが、柱穴内に礎石や根回しの石をもつものもある。確認面からの深さは、最低10cm～最高40cmあるが、全体的には建物跡の西側の柱穴は浅く、東側の柱穴はやや深い傾向が見られる。柱穴内からは遺物は何も出土しなかった。

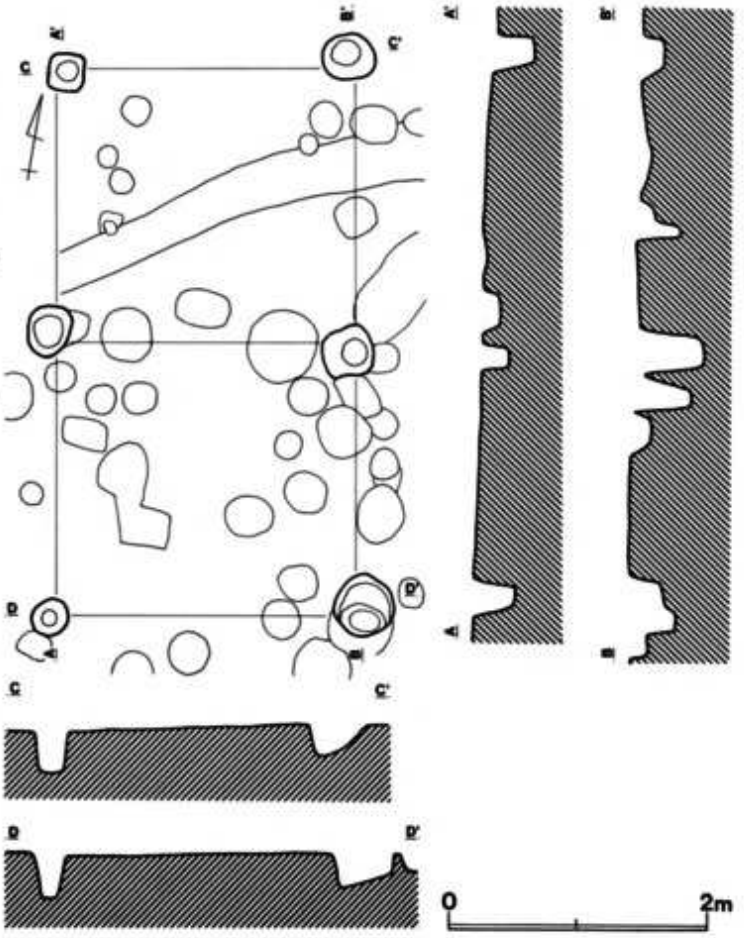


第48図　第12号掘立柱建物跡

第13号掘立柱建物跡（第49図）

B地点のⅢ区北側に位置し、第12号掘立柱建物跡の西側に近接して併置されている。本建物跡は、重複する第16号掘立柱建物跡の柱穴の一部を切っている。

建物跡の形態は、南北方向2間・東西方向1間の長方形を呈している。建物跡の南北方向は、東側に近接する第12号掘立柱建物跡の梁行方向と同一のN−12°−Wを向いている。規模は、南北方向4.20m・東西方向2.30mを測り、南北方向の柱心間はほぼ2.10mの等間隔である。柱穴は、直径30cm～45cmの円形を呈するものが主体であるが、一部方形ぎみのものも見られる。確認面からの深さは、30cm前後のものが主体であるが、南北方向の東側柱穴列の真ん中の柱穴は深さが50cmあり、他に比べて極端に深くなっている。柱穴内からは遺物は何も出土しなかった。

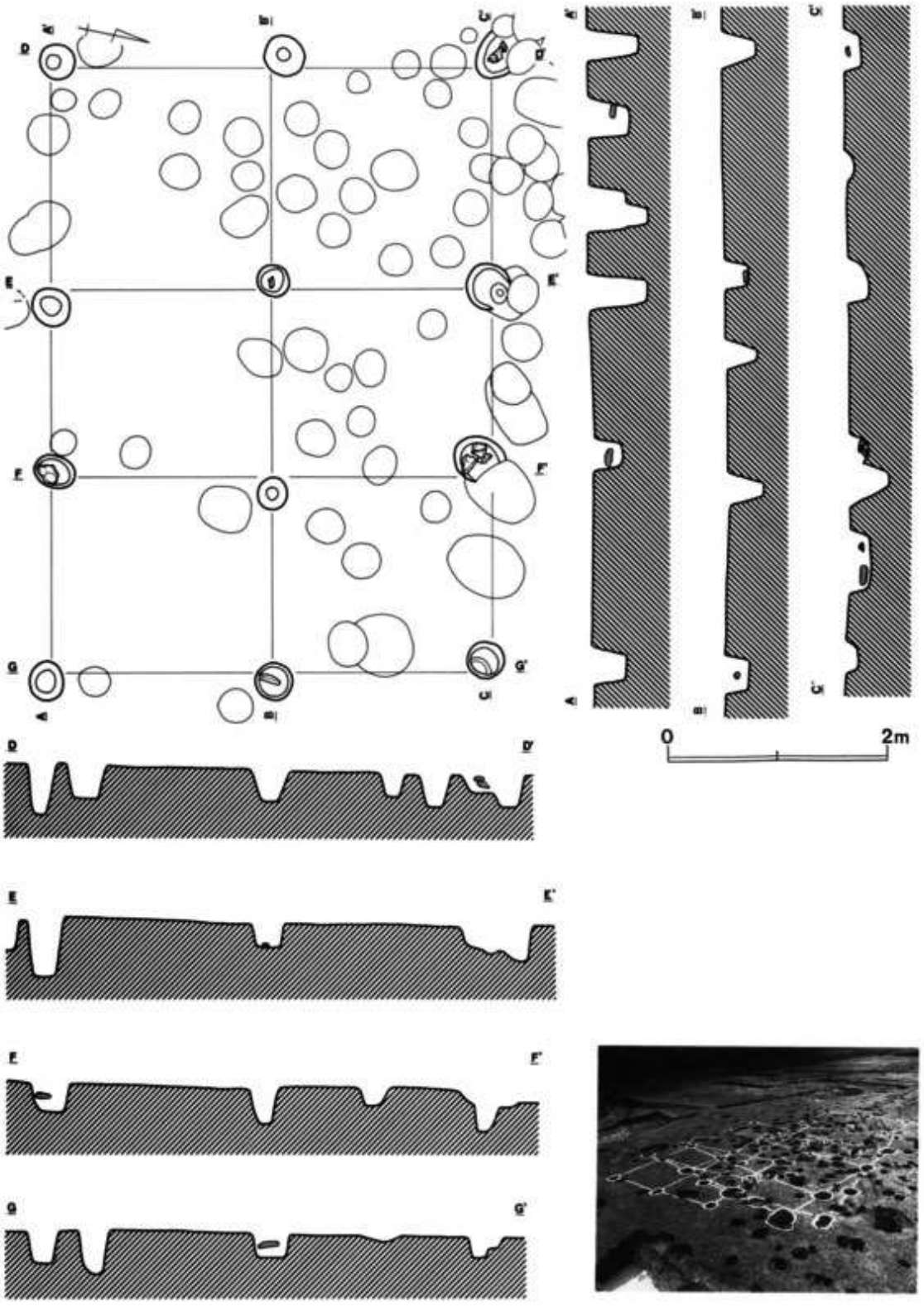


第49図　第13号掘立柱建物跡

第14号掘立柱建物跡（第50図）

B地点のⅢ区北側に位置し、重複する第15号掘立柱建物跡を切っている。また、第12号掘立柱建物跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、南北方向2間・東西方向3間の長方形を呈し、建物内部に束柱か棟持柱をもつ総柱式である。規模は、梁行が4.20m・桁行が5.60mを測る。建物跡の桁行方向は、重複する第12号掘立柱建物跡と同一のN−78°−Eを向いている。柱通りは、桁行方向の柱穴列は比較的良いが、梁行方向の柱穴列は若干ずれているものが多い。柱心間は、梁行はほぼ2.10mの等間隔であるが、桁行は西側から2.00m・1.80m・1.80mと、桁行3間のうちの一番西側の1間が他に比べて若干広くなっている。柱穴は、直径30cm～40cmの円形を呈するものが主体で、礎石もしくは根回しの石を伴うものも見られる。確認面からの深さは、最低20cm～最高55cmあるが、35cm程度のものが多い。柱穴覆土は、上半がローム粒子を微量ふくむ暗褐色土で、下半がロームブロックを微量に含む暗灰色土である。柱穴内からは遺物は何も出土しなかった。

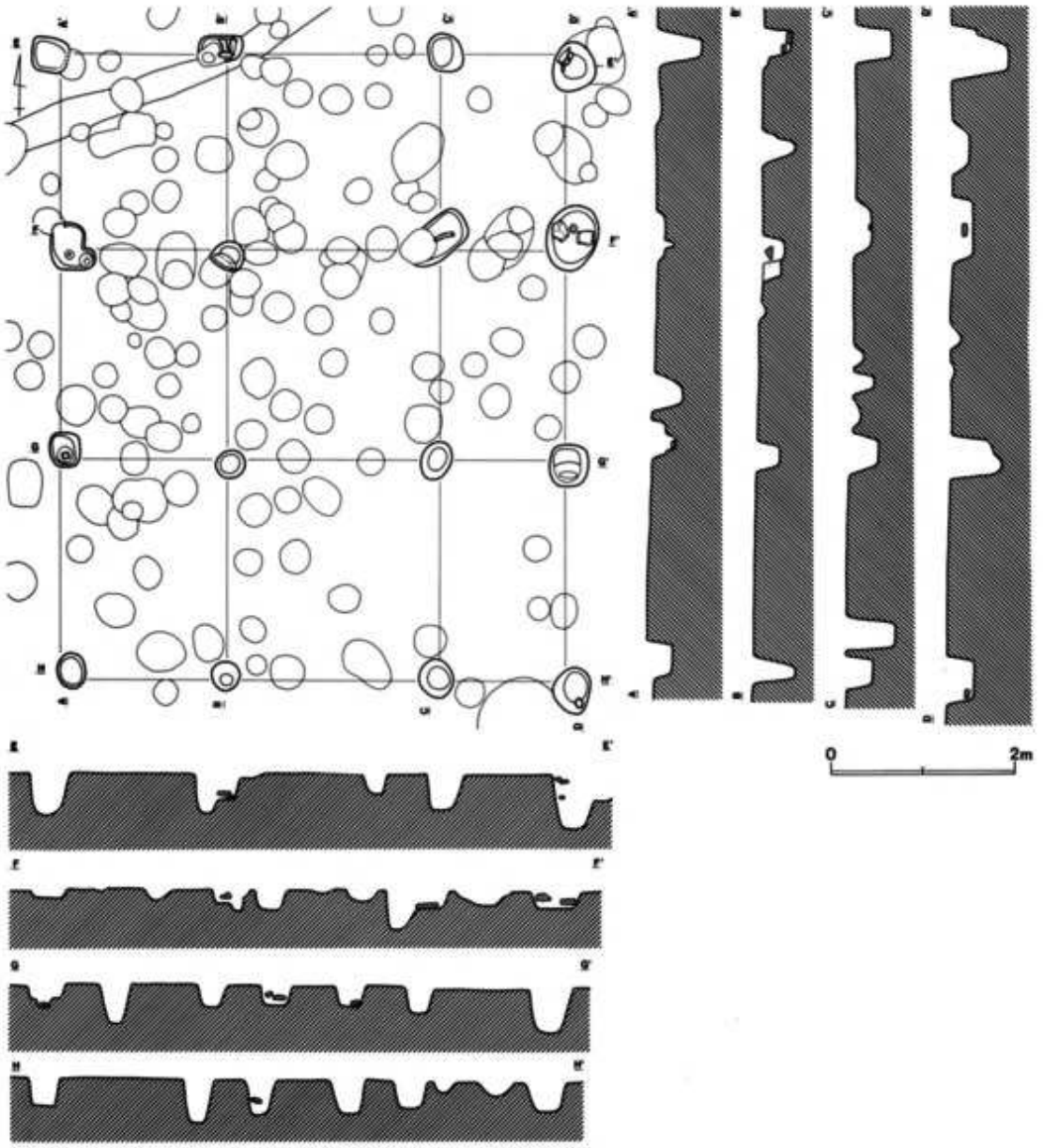


第50図　第14号掘立柱建物跡

第15号掘立柱建物跡（第51図）

B地点のⅢ区北側に位置し、重複する第12号掘立柱建物跡と第14号掘立柱建物跡及び第10号井戸跡に柱穴の一部を切られている。また、第16号掘立柱建物跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、南北方向3間・東西方向2間の南北に長い長方形を呈し、東側に庇を伴う構造と考えられ、建物内部に束柱か棟持柱をもつ総柱式である。規模は、身舎部分の梁行が4.20m・桁行が6.80mを測り、庇の幅は1.40mである。柱通りは、側柱は比較的通りが良いが、建物内部の柱穴は



第51図　第15号掘立柱建物跡

若干ずれている。建物跡の桁行方向は、ほぼ真北を向いている。柱心間は、梁行・桁行とも等間隔ではなくやや不揃いである。桁行は北側から2.20m・2.20m・2.40mで、建物跡の南端の1間が他に比べて若干広く、梁行は西側が1.80m・東側が2.40mで、東側の1間がかなり広くなっている。柱穴の掘り方は、円形・楕円形・方形・長方形と様々な形態があるが、方形と長方形ぎみの形態は、建物の側柱穴に多く見られる。確認面からの深さは、最低10cm～最高60cmあり、主体は30cm～40cm程度のものである。柱穴は素掘りのものが多いが、礎石あるいは柱の根回しや裏込めの石を伴うものもいくつか見られる。柱穴掘り方の規模が大きいものには柱痕が残っているものが多く、それらは柱を立てた後、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土によって埋め戻されている。柱穴内からは遺物は何も出土しなかった。

第16号掘立柱建物跡（第52図）

B地点のⅢ区北側に位置し、重複する第13号掘立柱建物跡と第14号掘立柱建物跡に柱穴の一部を切られている。また、第12号掘立柱建物跡や第15号掘立柱建物跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、南北方向2間・東西方向1間の南北方向に長い長方形を呈している。規模は、南北方向が3.80m・東西方向が2.60mあり、南北方向の柱心間は、1.90mの等間隔である。建物跡の南北方向は、N－2°－Wのほぼ真北に近い向きをとっている。柱穴は、様々な形態や規模が見られるが、柱穴列の東西で対応する柱穴は、それぞれ比較的類似した形態を呈している。また、南北方向の中間の柱穴には小さい礎石を伴っている。確認面からの深さは、30cm前後のものが主体である。覆土は、ロームブロックを均一に含む暗褐色土で、柱穴内からは遺物は何も出土しなかった。

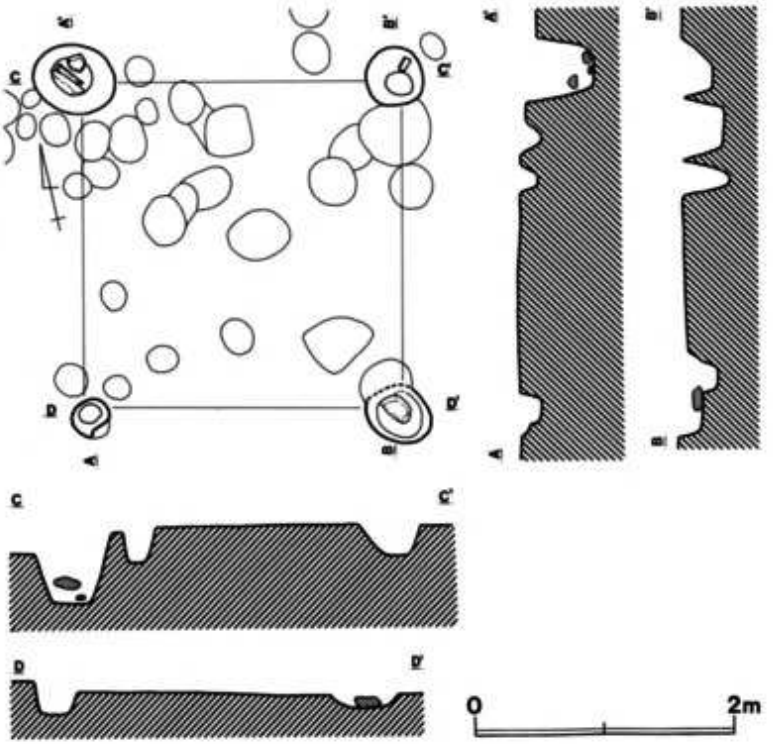
第52図　第16号掘立柱建物跡

第17号掘立柱建物跡（第53図）

B地点のI区西側に位置し、東側にはほぼ同じ方向に向いた第5号掘立柱建物跡と第29号掘立柱建物跡が近接している。本建物跡は、北西側の柱穴の一部を重複する第1号土壙に切られている。

建物跡の形態は、南北・東西方向とも1間の方形を呈し、柱心間は南北方向が2.50m・東西方向が2.40mのほぼ等間隔である。

建物跡の南北方向は、N−12°−Eをとり、東側に近接する第5号掘立柱建物跡や第29号掘立柱建物跡とほぼ同じ方向を向いている。柱穴は、長さ50cm～60cmの円形もしくは楕円形を呈するものが主体で、内部に礎石や柱の根回しか裏込めに使用した石を伴うものが多いが、南西側の柱穴だけは直径30cmと他の柱穴に比べて規模が小さく、柱穴内に石を伴わない。柱穴覆土は、ロームブロックを微量含む暗褐色土で、柱痕は見られなかった。柱穴内からは遺物は何も出土していない。

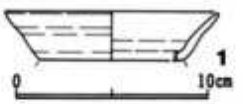


第53図　第17号掘立柱建物跡

第18号掘立柱建物跡（第55図）

B地点のI区北側に位置し、重複する第2号土壙と第4号土壙に柱穴の一部を切られている。また、本建物跡は第4号掘立柱建物跡や第5号掘立柱建物跡及び第29号掘立柱建物跡とも重複しているが、それぞれとの新旧関係は不明である。本建物跡の周辺は、撹乱によって遺構確認面が荒れており、遺存状態はあまり良好とは言えない。

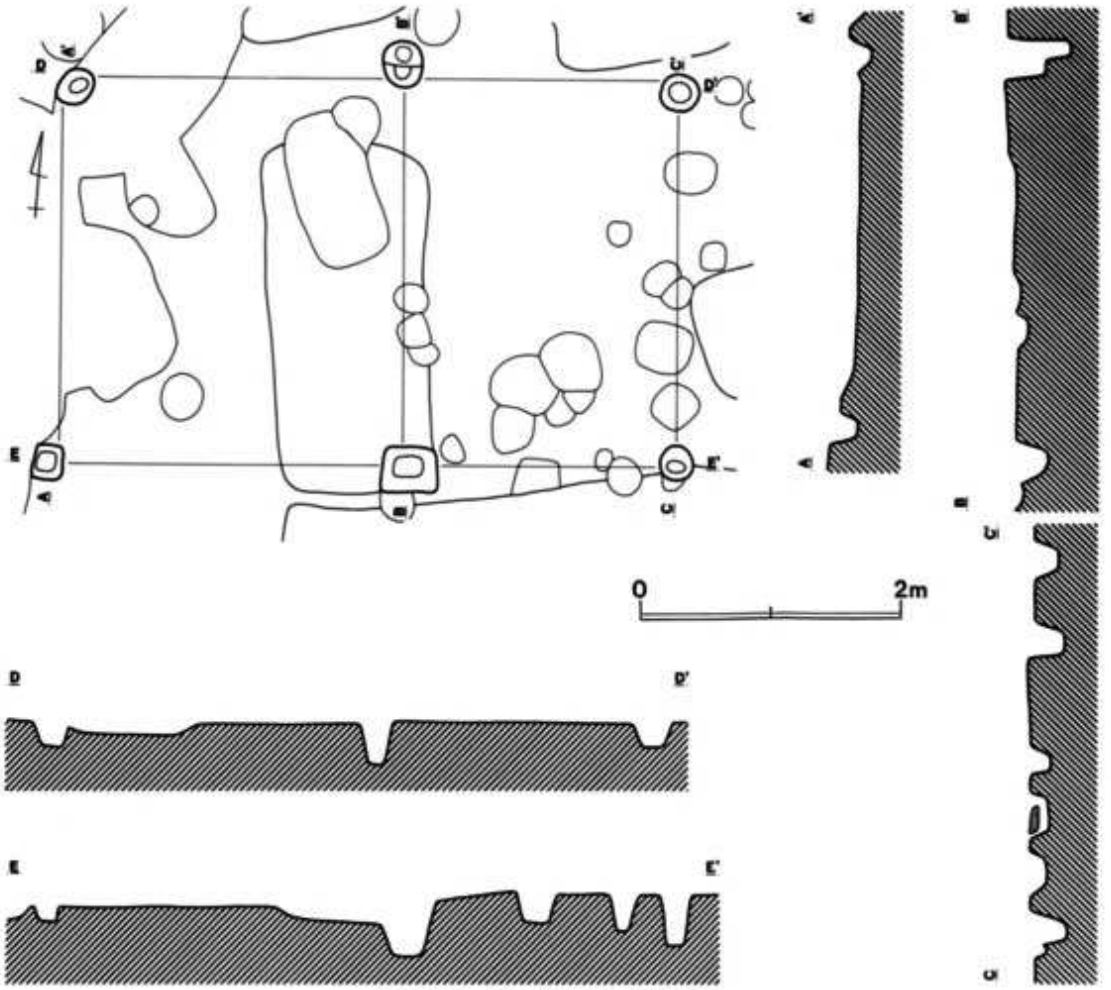
建物跡の形態は、東西方向2間・南北方向1間の東西に長い長方形を呈している。規模は、東西方向が4.80m・南北方向が3.00mあるが、東西方向の柱心間は等間隔ではなく、西側は2.60m・東側は2.40mと、西側の1間の方が若干広くなっている。柱通りは比較的良いが、東西方向の北側柱穴列



第54図　第18号掘立柱建物跡出土遺物

第18号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師質土器	口径(11.0) 器高 2.5 底径(7.5)	ロクロ成形。口縁部は直線的に外傾し、内面下端は凹線状に窪む。底部は平底。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面回転ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－橙褐色	口縁部1/6。 北東端柱穴内。



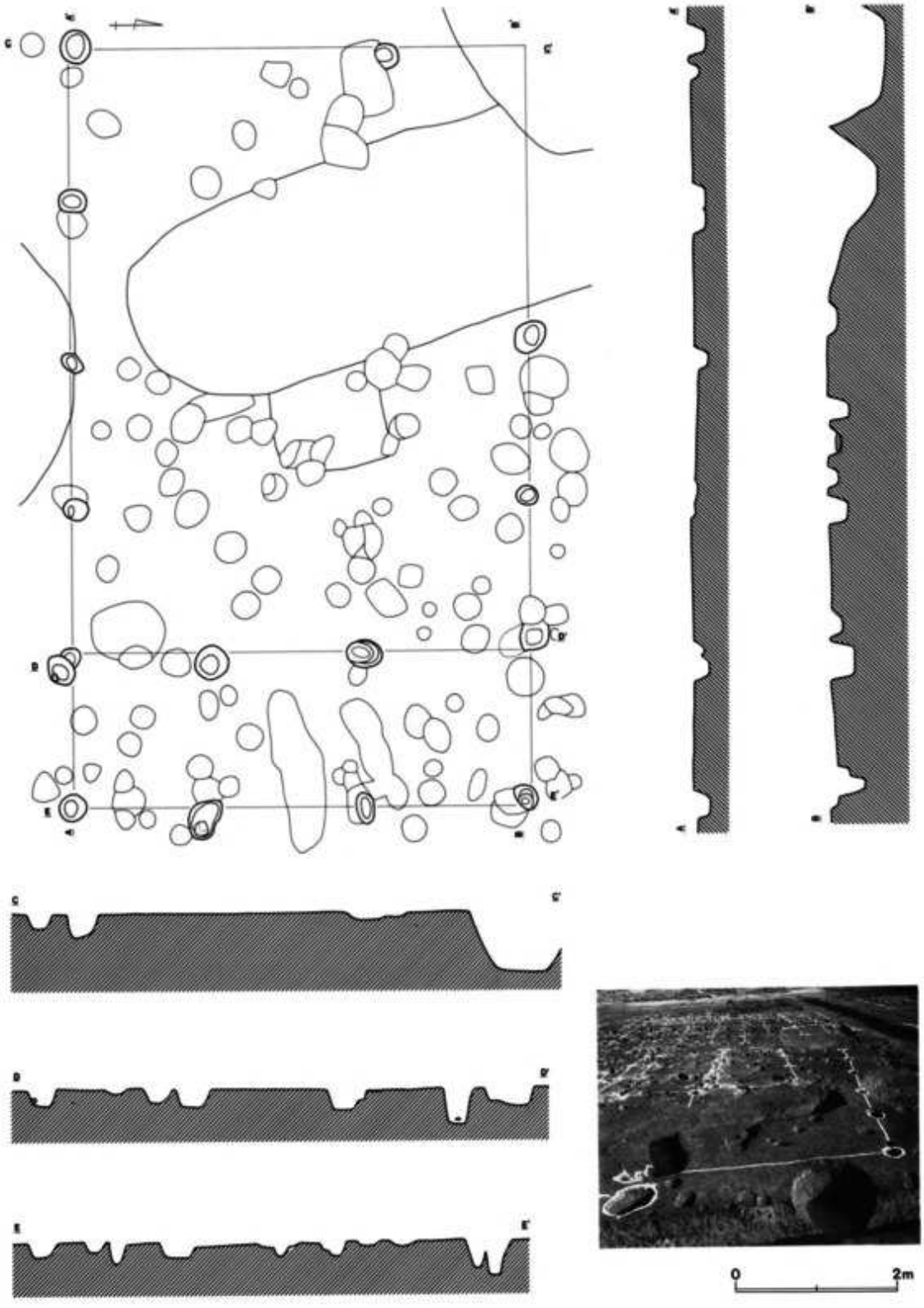
第55図　第18号掘立柱建物跡

では、真ん中の柱穴が若干外側にずれている。建物跡の東西方向は、N−3°−Wを向いている。柱穴は、直径30cm前後の比較的規模の小さい円形を呈するものが主体であるが、東西方向の南側柱穴列では方形や長方形を呈する柱穴が2本ある。確認面からの深さは、最低20cm～最高50cmあり、いずれも礎石等の石を伴わない。柱穴覆土は、ローム粒子を微量含む暗褐色土が主体である。遺物は、建物跡北東端の柱穴内から、土師質土器皿の破片（第54図№1）が1片出土しただけである。

第19号掘立柱建物跡（第56図）

B地点のⅠ区からⅡ区にかけて位置し、重複する第21号掘立柱建物跡や第12号土壙及びⅠ区とⅡ区を区切る堀跡に切られている。また、本建物跡は、第20号掘立柱建物跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、建物の西側と東側の側柱穴の一部が不明であるため明確ではないが、残存する部分から推測すると、おそらく東西方向が4間・南北方向が3間の長方形を呈する側柱式で、東側に身舎の1間と同じ幅の庇か下屋をもつ構造と思われる。規模は、身舎部分の桁行が約7.60m・梁行



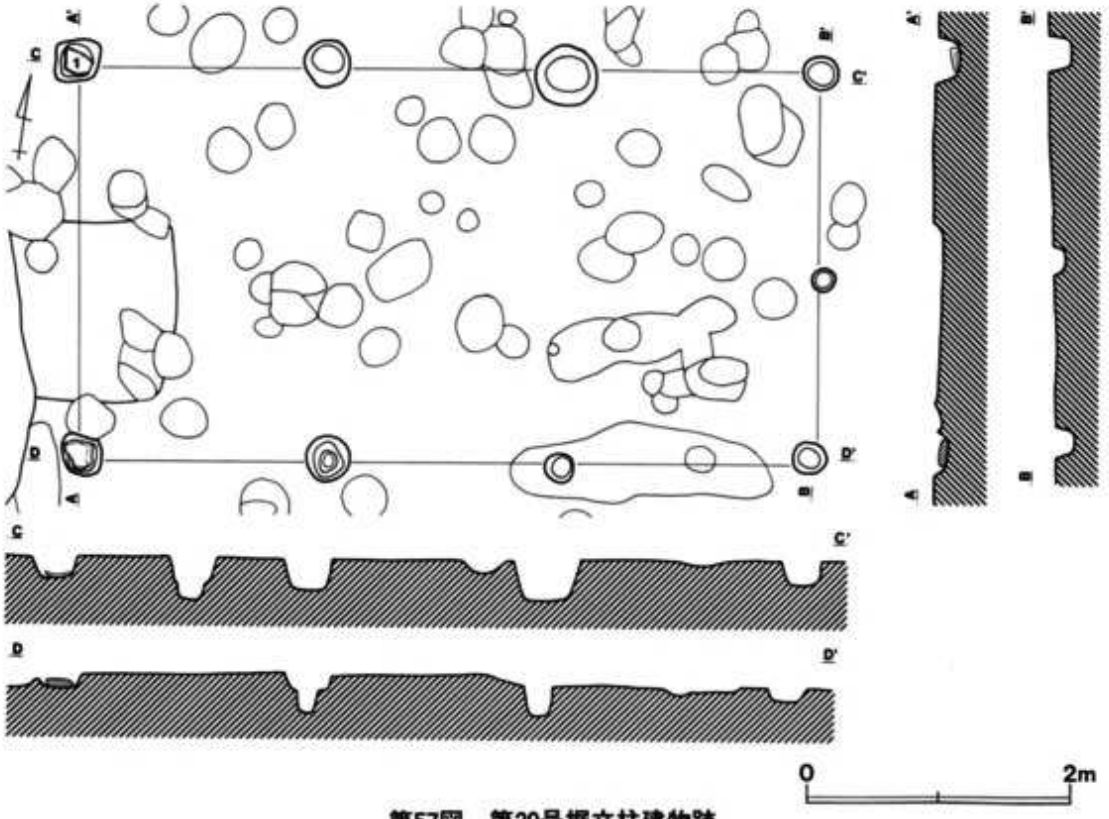
第56図　第19号掘立柱建物跡

が約5.70mあり、庇もしくは下屋の幅は1.90mある。建物跡の東西方向は、N−92°−Eのほぼ真東の方向を向いている。柱通りは比較的良いが、柱穴列の直線上から若干ずれるものもある。柱心間は、桁行梁行とも1間ほぼ1.90mの等間隔と思われる。柱穴は、長さ30cm～40cmの比較的規模の小さい円形か楕円形を主体としている。確認面からの深さは、最低10cm～最高45cmを測るが、20cm～30cmの比較的浅いものが多い。柱穴覆土は、ロームブロックを均一に含む黒褐色土で、柱穴内からは遺物は何も出土しなかった。

第20号掘立柱建物跡（第57図）

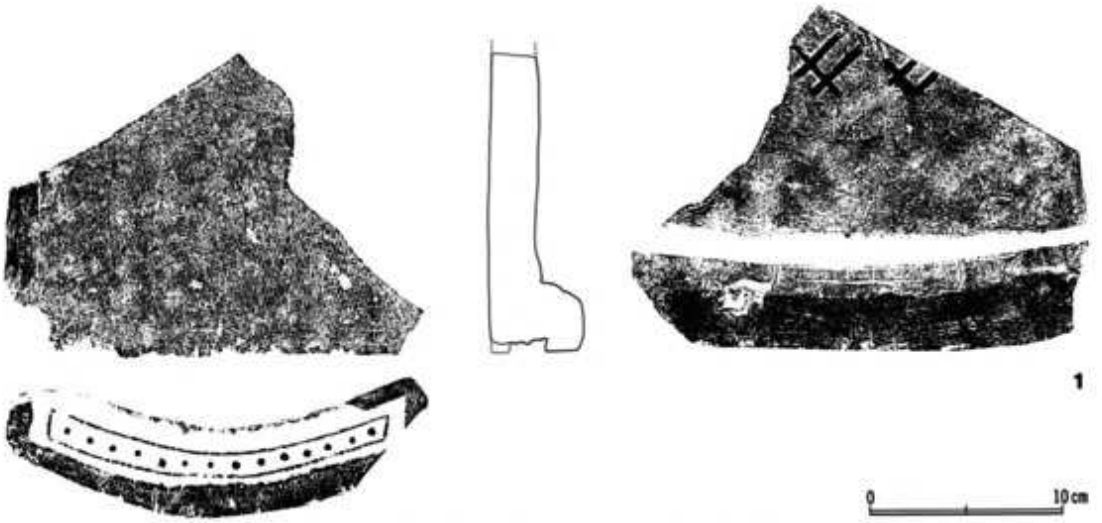
B地点のⅡ区西端に位置し、重複する第23号土壙に切られている。また、本建物跡は、第19号掘立柱建物跡や第21号掘立柱建物跡とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、東西方向3間・南北方向2間の東西に長い長方形を呈する側柱式である。規模は、梁行約3m・桁行5.70mを測る。建物の桁行方向は、N−82°−Eを向いている。柱心間は、桁行が1.90mの等間隔で、梁行は西側の棟持柱が第23号土壙に切られているため明確ではないが、東側では1.50mのほぼ等間隔と考えられる。柱通りは、比較的良い。柱穴は、直径25cm～50cmの円形を呈するものが主体であるが、西側梁行の棟持柱だけは、直径20cmと他に比べて規模が小さく、深さも10cmと浅い。また、西端の柱穴は、南側と北側のいずれもやや方形ぎみの形態を呈し、底面に礎石と礎石代わりの連珠文軒平瓦の破片（第58図No.1）を据えている。確認面からの深さは、最低10cm



第57図　第20号掘立柱建物跡

～最高40cmとややばらつきが見られるが、20cm～30cmのものが主体である。柱穴覆土は、ロームブロックを微量含む暗褐色土で、柱痕を残すものは少ない。遺物は、礎石代わりに据えられた連珠文軒平瓦の破片が1点出土しただけである。



第58図　第20号掘立柱建物跡出土遺物

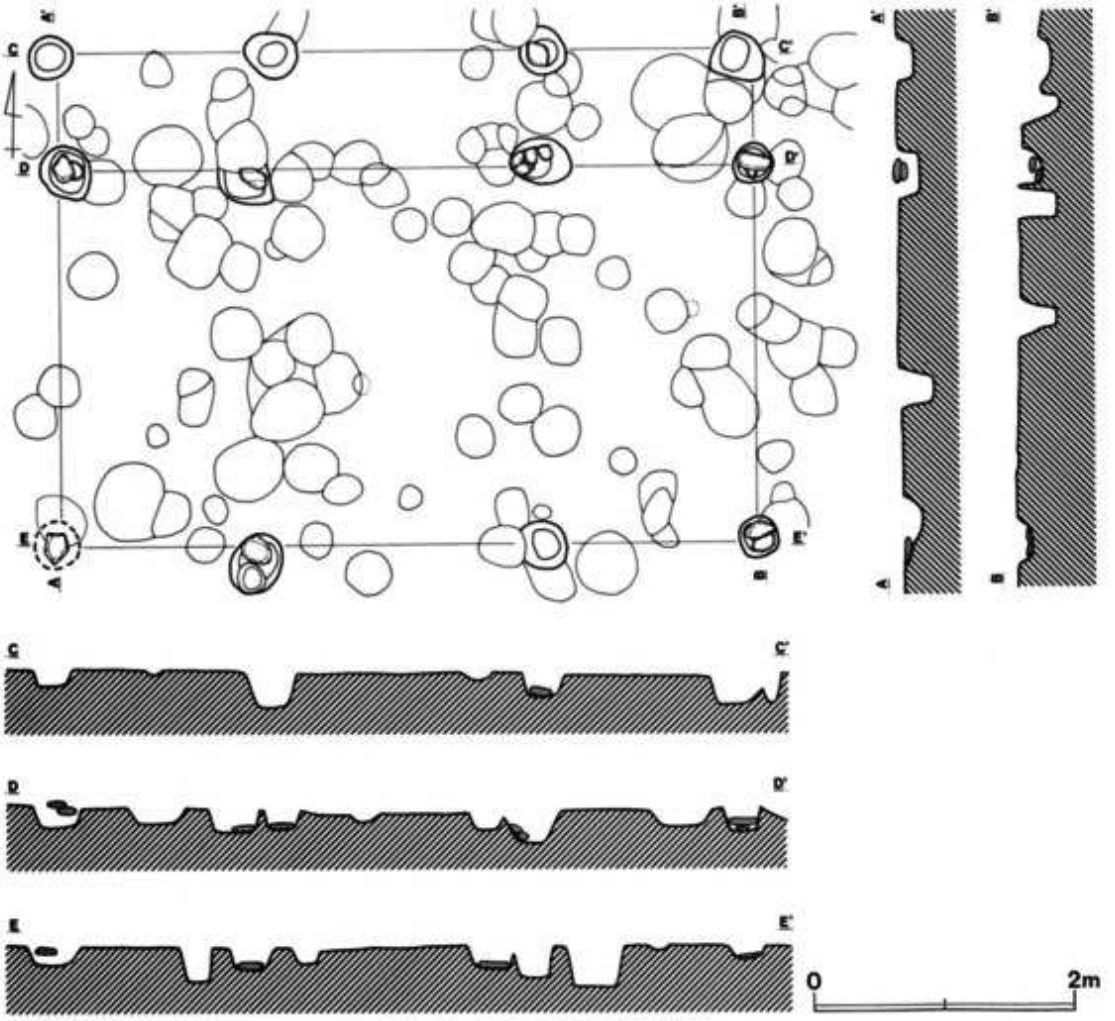
第20号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	軒平瓦	残存長 15.4 幅 21.5 厚さ 2.5	一枚作り、瓦当貼り付け。顎は厚く高い段をなす。瓦当文様は圏線と14個の小さい珠文による連珠文。	凸面文様叩きの後丁寧なナデ、顎部凸面側縦方向の施ナデの後横方向のナデ。凹面布目圧痕。側面ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	約1/3。 北西端柱穴内。

第21号掘立柱建物跡（第59図）

B地点のⅡ区西端に位置し、南側に第20号掘立柱建物跡が、北側に第22号掘立柱建物跡が隣接している。本建物跡は、第19号掘立柱建物跡と重複し、それを切っている。

建物跡の形態は、東西方向が3間・南北方向がおそらく2間の、東西方向に長い長方形を呈する側柱式で、北側に庇を伴っている。規模は、身舎の梁行が約3m・桁行が5.40mで、庇の幅は90cmを測る。建物跡の桁行方向は、N－87°－Eを向いている。柱通りは、桁行・梁行両方向とも比較的良い。柱心間は、桁行側は西から1.60m・2.20m・1.60mと、真ん中の1間が両側に比べて広くなっており、梁行側は、棟持柱の柱穴がないため明確ではないが、その規模から1.50mの2間であったものと思われる。柱穴は、長さ30cm～50cmの円形や楕円形を呈している。確認面からの深さは、最低12cm～最高25cmあるが、20cm前後のものが主体であり、身舎部分の側柱穴のほとんどは、比較的大きな1個の石や2～3個の複数の石による礎石を伴っている。庇部分の柱穴は、形態や規模的には身舎部分の側柱穴と大差ないが、礎石を伴うものは4本のうち1本だけである。柱穴覆土は、ロームブロックを微量含む黒褐色土で、柱穴内からは遺物は何も出土しなかった。

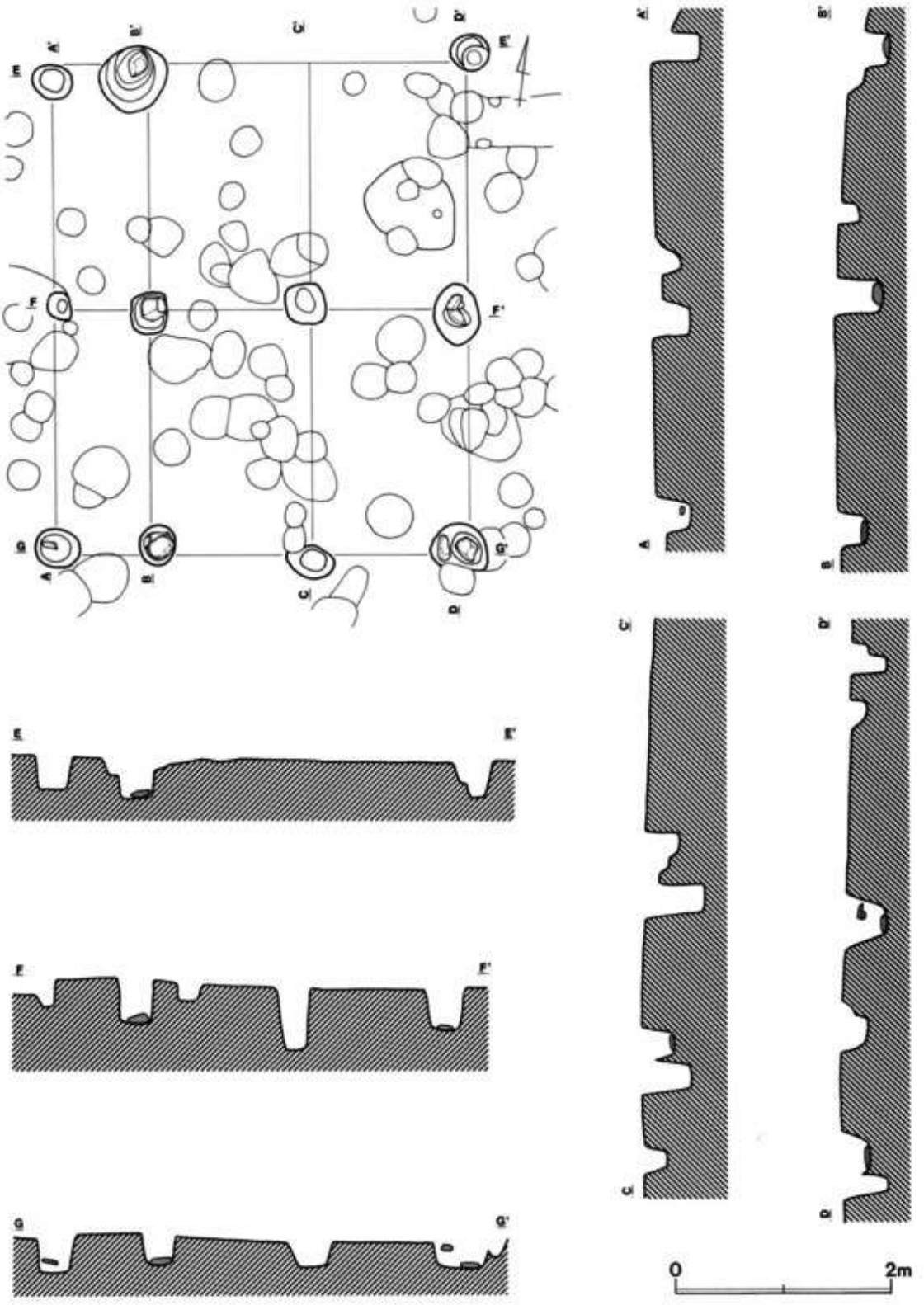


第59図　第21号掘立柱建物跡

第22号掘立柱建物跡（第60図）

B地点のⅡ区西端に位置し、南側に第21号掘立柱建物跡が、北側に第23号掘立柱建物跡が隣接している。本建物跡は、第25号土壙と重複し、それによって柱穴の一部を切られている。

建物跡の形態は、東西方向・南北方向とも2間の南北方向に長い長方形を呈し、真ん中に束柱か棟持柱をもつ総柱式で、建物の西側に庇を伴っている。規模は、身舎の梁行が3m・桁行が4.60mで、庇の幅は90cmを測る。建物跡の桁行方向は、N−7°−Wを向いている。柱通りは、比較的良好ではあるが、梁行・桁行方向とも若干ずれるものも見られる。柱心間は、梁行側が1.50mの等間隔で、桁行側が2.30mの等間隔である。柱穴は、長さ40cm～50cmの楕円形や不整円形を呈するものが多い。確認面からの深さは、30cm～40cmのもが主体で、身舎の側柱穴のほとんどには、柱穴底面に礎石が据えられているが、庇部分の柱穴には礎石は見られない。また、真ん中の束柱か棟持柱の柱穴は、深さが60cmと他に比べてかなり深くなっており、礎石も見られない。柱穴覆土は、ロームブロックや白色粘土ブロックを含む黒褐色土で、柱穴内からは遺物は何も出土しなかった。

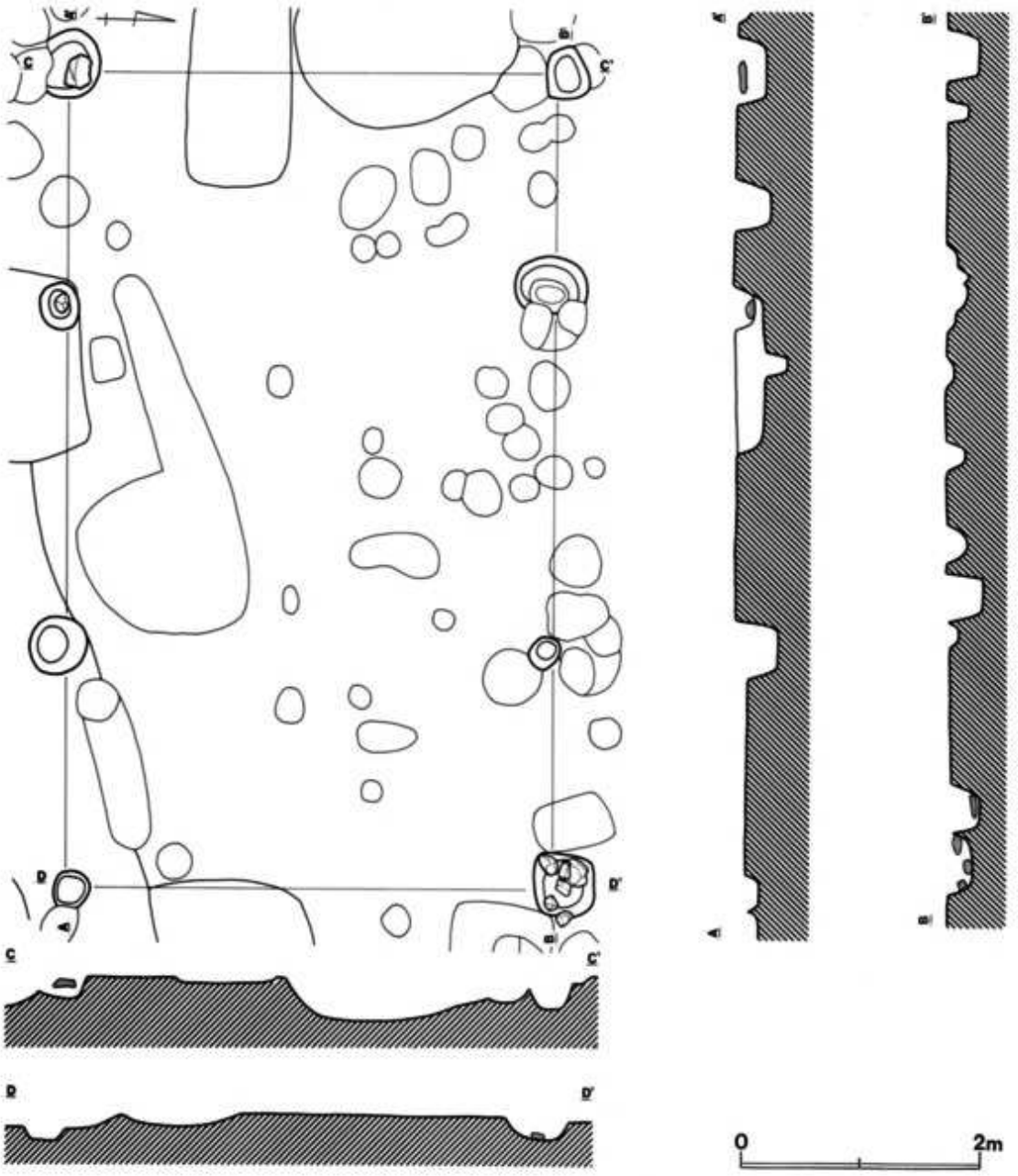


第60図　第22号掘立柱建物跡

第23号掘立柱建物跡(第61図)

B地点のII区北側に位置し、重複する第30号土壙を切っている。また、本建物跡は、北側の第24号掘立柱建物跡や東側の第3号井戸跡と第24号土壙や西側の第29号土壙とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、東西方向が3間・南北方向がおそらく2間の東西方向に長い長方形を呈する側柱式である。規模は、梁行が4.20m・桁行が6.80mを測る。建物の桁行方向は、N−88°−Eのほぼ真



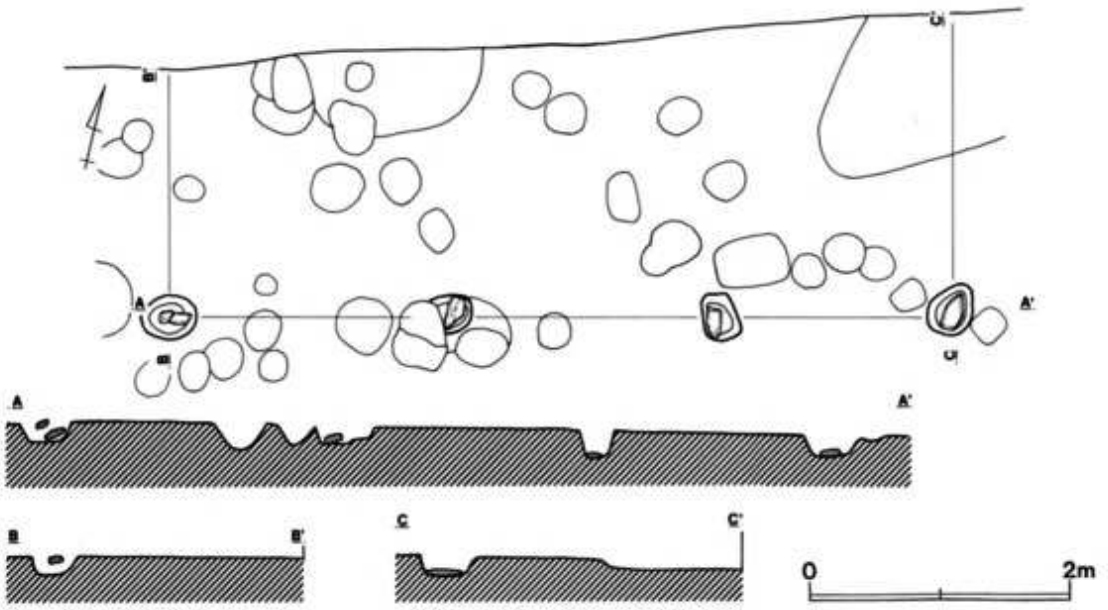
第61図　第23号掘立柱建物跡

東を向いている。柱通りは、ややずれが見られ蛇行ぎみである。柱心間は、桁行は西側から2.00m・2.80m・2.00mを測り、両端の1間に比べて真ん中の1間がかなり広くなっている。梁行は、その規模から見て2間間隔と思われるが、真ん中の棟持柱の柱穴が見られないため明確ではない。柱穴は、長さ30cm～55cmの円形や楕円形を呈するものが主体であるが、建物のコーナー部の柱穴は方形もしくは長方形ぎみの形態を呈するものが多い。確認面からの深さは、最低10cm～最高48cmとややばらつきがあり、礎石や根回しの石を伴うものもある。柱穴覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土で、柱穴内からは遺物は何も出土しなかった。

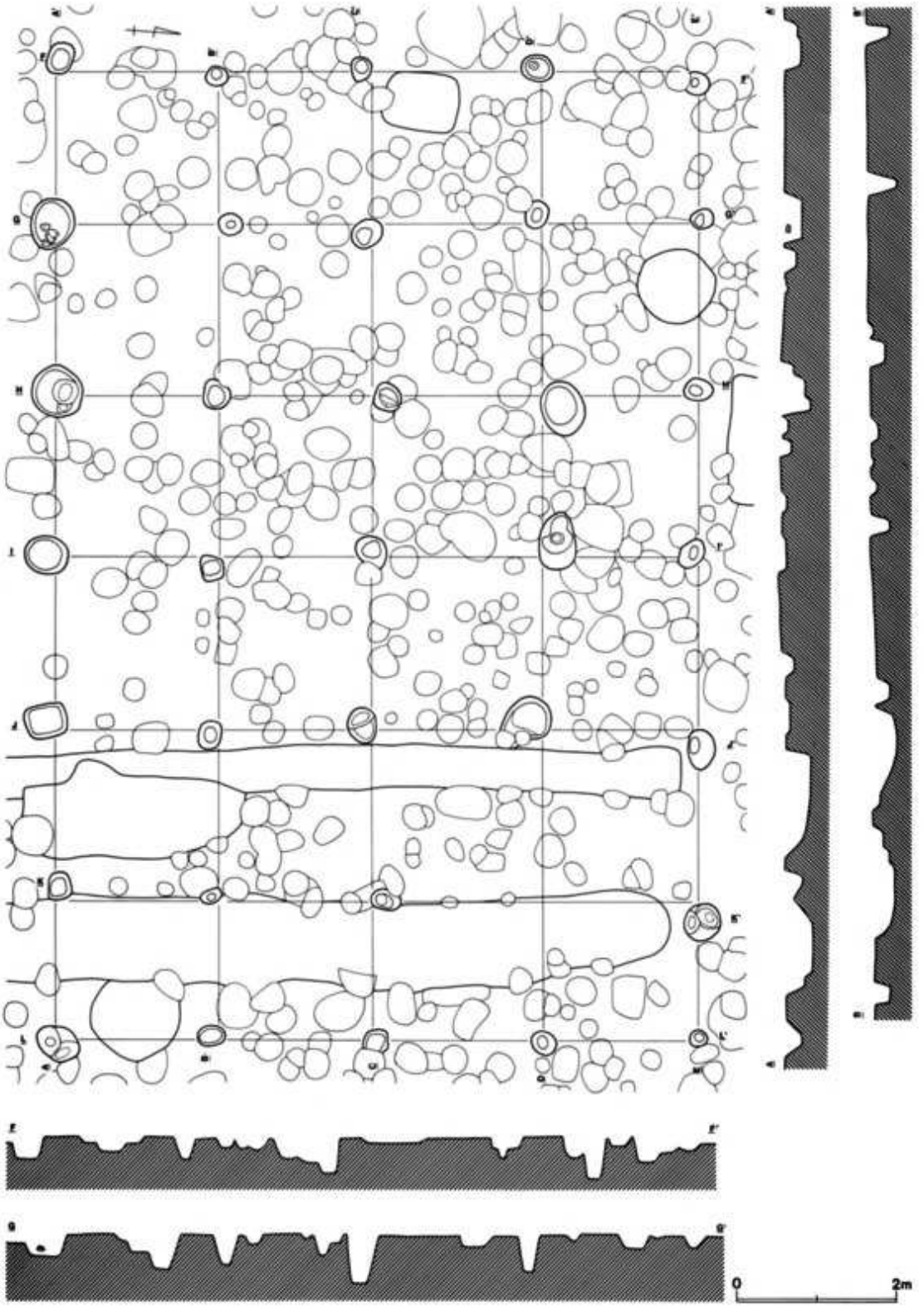
第24号掘立柱建物跡(第62図)

B地点のⅡ区北端に位置する。調査区内で検出されたのは、東西方向の直線上にほぼ近似した間隔で並ぶ4本の柱穴だけであるが、いずれも柱穴内に礎石を伴っていることから、建物を構成する柱穴列の一部である可能性が高いと考えられる。この東西方向に並ぶ柱穴列の南側には対応するような柱穴列が見られないため、この柱穴列は建物の南端の側柱穴と考えられ、建物の北側半分以上は調査区外に位置するものと思われる。このため、本建物跡は、南側の第23号掘立柱建物跡や第26号土壙及び第27号土壙と重複しているものと考えられるが、相互の新旧関係は不明である。

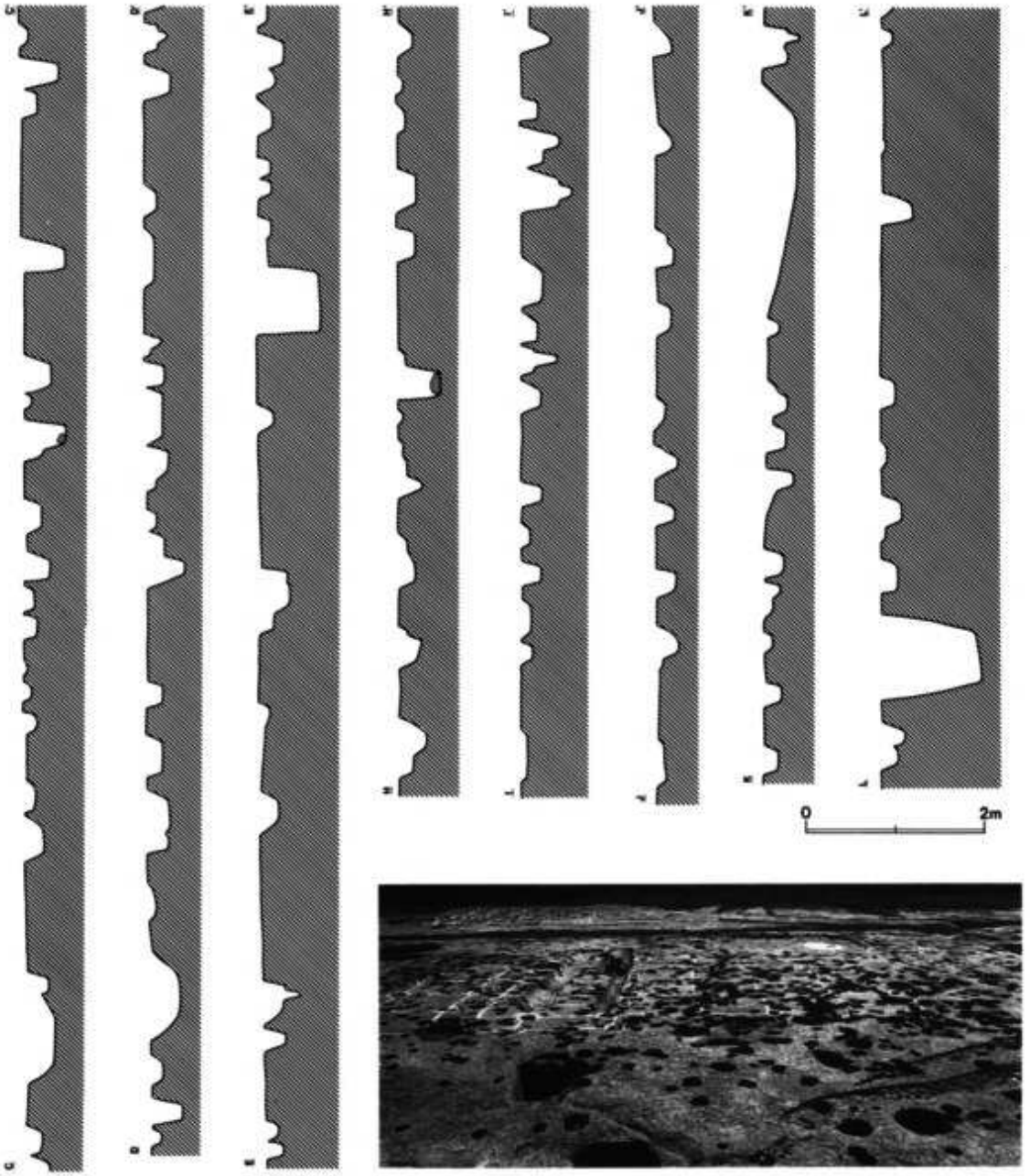
建物跡の形態は、南北方向は不明であるが、東西方向は3間で長さが6.00mを測る。建物跡の東西方向は、N−77°−Eを向いている。本建物跡の内部には東柱と考えられるような柱穴が見られないことから、側柱式の可能性が高いと思われる。柱心間は、西側から2.10m・2.10m・1.80mで、東端の1間が他に比べてやや短くなっている。柱穴は、長さ35cm～40cmの楕円形や不整形を呈している。確認面からの深さは、14cm～20cmと比較的浅く、いずれも柱穴底面に礎石を据えている。柱穴覆土は、ロームブロックを均一に含む黒褐色土で、柱穴内からは遺物は何も出土しなかった。



第62図　第24号掘立柱建物跡



第63図　第25号掘立柱建物跡(1)



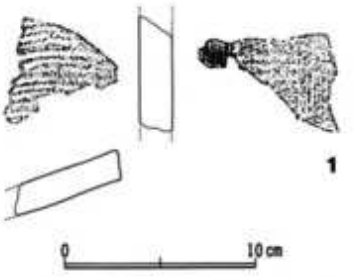
第64図　第25号掘立柱建物跡(2)

第25号掘立柱建物跡（第63図）

B地点のⅡ区中央に位置する。本建物跡は、他の掘立柱建物跡や土壙及び井戸跡等の多くの遺構と重複しているが、それらとの新旧関係は不明である。また、建物跡東側の柱穴の一部を、南北方向の2条の平行する最近の溝跡によって切られている。

建物跡の形態は、建物の内部や周囲に柱穴状のピットが多数あるため明確ではないが、南北方向

が4間・東西方向が6間の長方形を呈し、束柱や棟持柱をもつ総柱式と考えられる。規模は、梁行が8m・桁行が12mあり、本遺跡で検出された建物跡の中では最大の規模を誇る。建物跡の桁行方向は、N−82°−Eを向いている。柱通りは、建物跡の側柱穴は梁行・桁行側とも比較的通りが良いが、建物内部の柱穴は梁行・桁行側とも若干ずれているものが多い。柱心間は、梁行側が1間2.00mの等間隔であるが、桁行側は西側から2m・2m・2m・2.20m・2m・1.80mで、1間の間隔が若干異なる部分がある。柱穴は、長さ30cm～60cmの円形や楕円形を呈するものが多いが、方形や長方形ぎみのものも見られる。確認面からの深さは、最低10cm～最高60cmとばらつきがあるが、30cm前後のものが主体であり、柱穴内に石を伴うものもある。出土遺物は、建物内部の柱穴覆土中より、土師質土器皿の小破片と平瓦の破片(第65図No.1)が出土しただけである。



第65図　第25号掘立柱建物跡出土遺物

第25号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	平瓦	残存長 6.2 残存幅 6.3 厚さ 1.7	凸面の側面付近はやや窪む。凹凸面とも砂付着。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面横方向の篦ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹－黒灰色 凸－淡灰色	破片。 柱穴内覆土中。

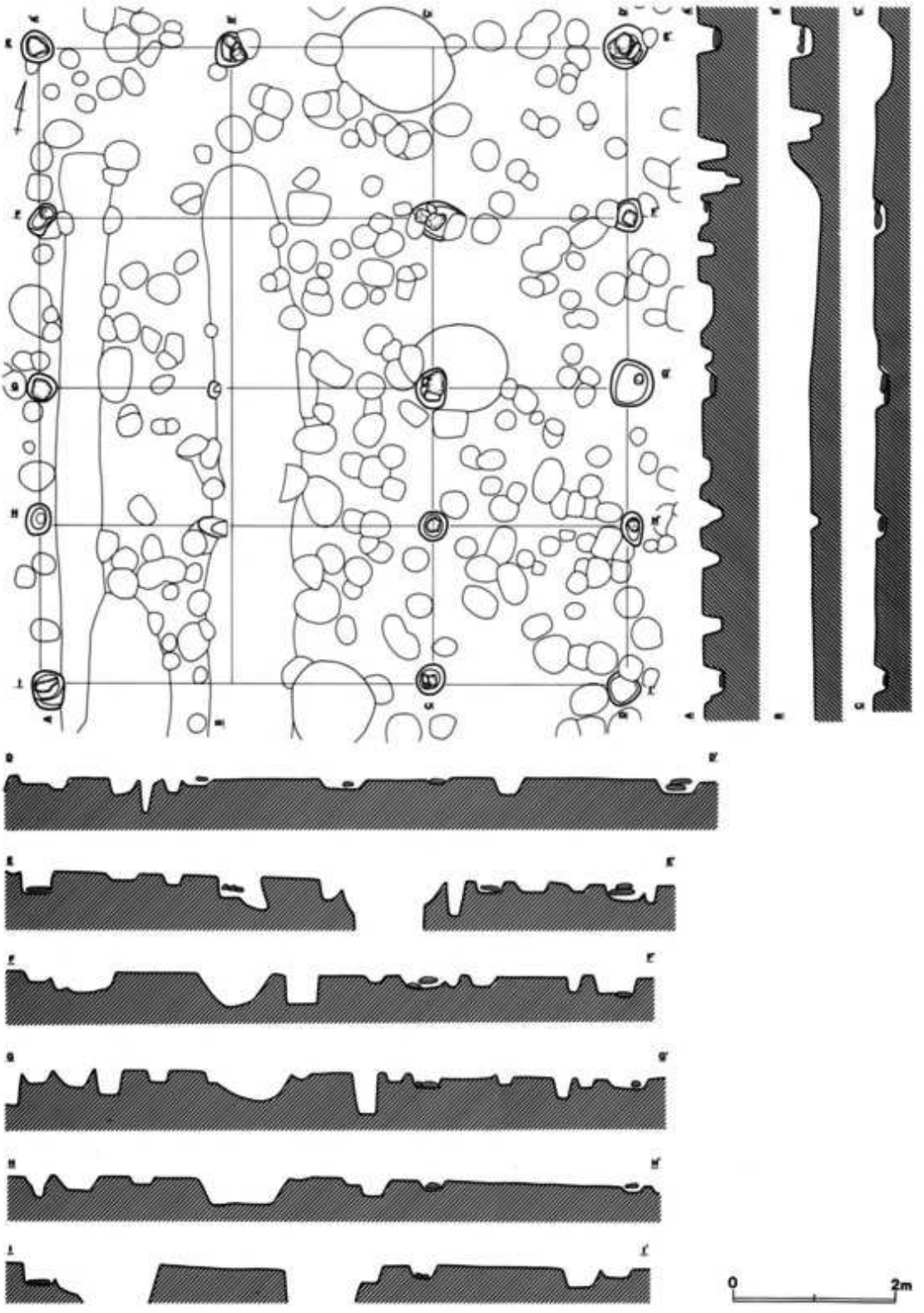
第26号掘立柱建物跡（第66図）

B地点のⅡ区中央に位置し、重複する第6号井戸跡と第50号土壙及び南北方向の2条の平行する最近の溝跡によって切られている。また、第27号掘立柱建物跡や第27号掘立柱建物跡及び第7号井戸跡とも重複しているが、それらとの新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、東西方向が3間・南北方向が4間のほぼ方形を呈し、建物内部に束柱や棟持柱を伴う総柱式である。建物の梁行は、その間数から南北方向と考えられ、規模は梁行方向が7.80m・桁行方向が7.20mあり、桁行に比べて梁行が若干長くなっている。建物跡の桁行方向は、N−81°−Eを向いている。柱通りは、梁行側・桁行側とも良好で、直線上に比較的よく並んでいる。柱心間は、桁行側は2.40mのほぼ等間隔であるが、梁行側は北から2.00m・2.00m・1.80m・2.00mと、北から3間目の1間幅だけが他に比べて若干短くなっている。柱穴は、長さ38cm～52cmの円形・楕円形・不整形等の様々な形態を呈し、多くは礎石を伴っている。確認面からの深さは、最低10cm～最高28cmを測るが、全体的に浅く15cm～20cm程度のものが主体である。礎石を据えた柱穴には、柱痕が確認できたものもあるが、それらの多くは白色粘土ブロックを含む黒褐色土で柱穴掘り方が埋められている。また、側柱穴の中には、礎石の上に白色粘土により柱の根回しを施したものが複数見られた。出土遺物は、側柱穴の覆土中より土師質土器皿と鉢か内耳鍋の破片が出土しただけである。

第27号掘立柱建物跡（第67図）

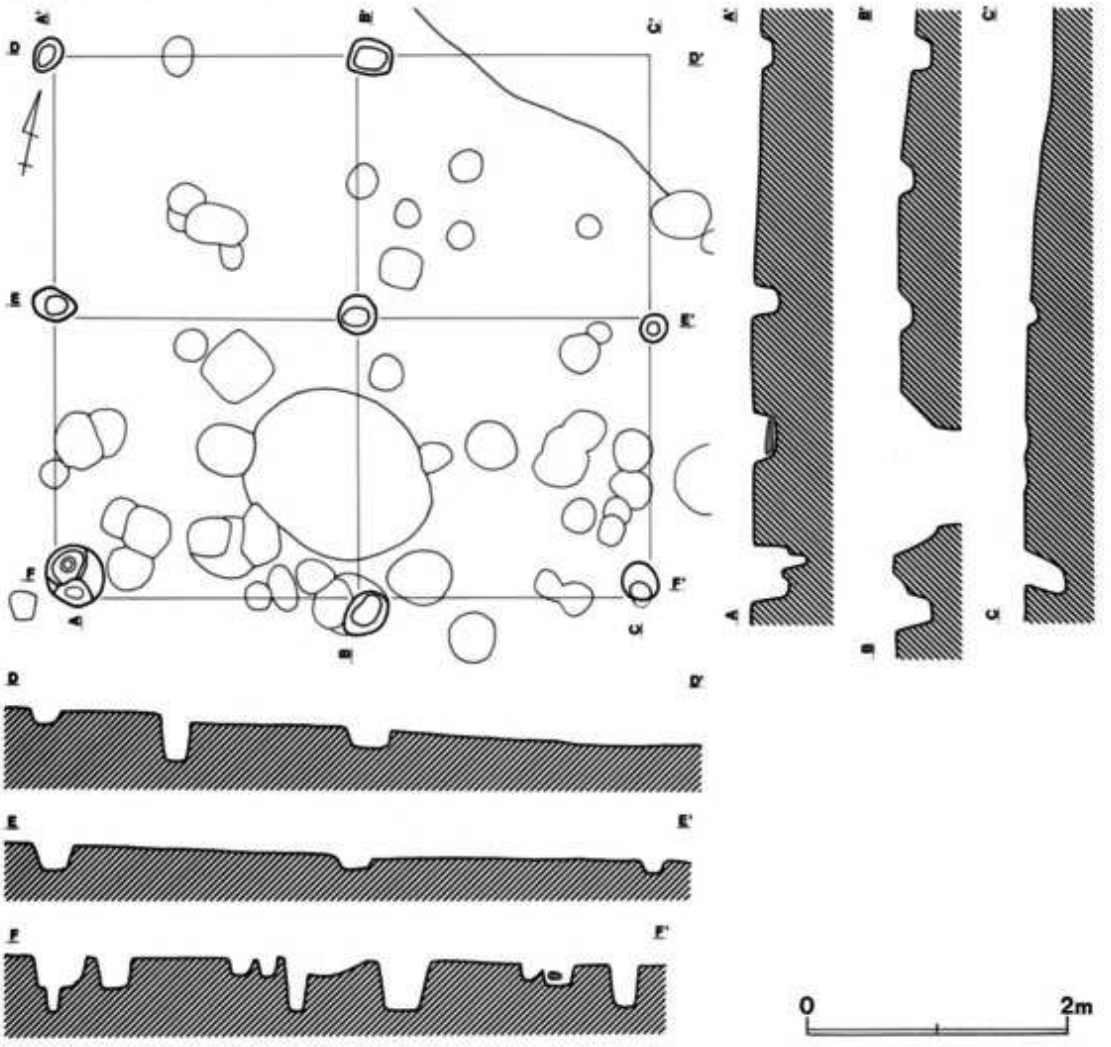
B地点のⅡ区北側に位置する。建物跡の北側は、調査前まで水田として利用されていたため、その耕作によって南西側の確認面よりも20cm程度深く削平されている。そのため本建物跡の柱穴配置



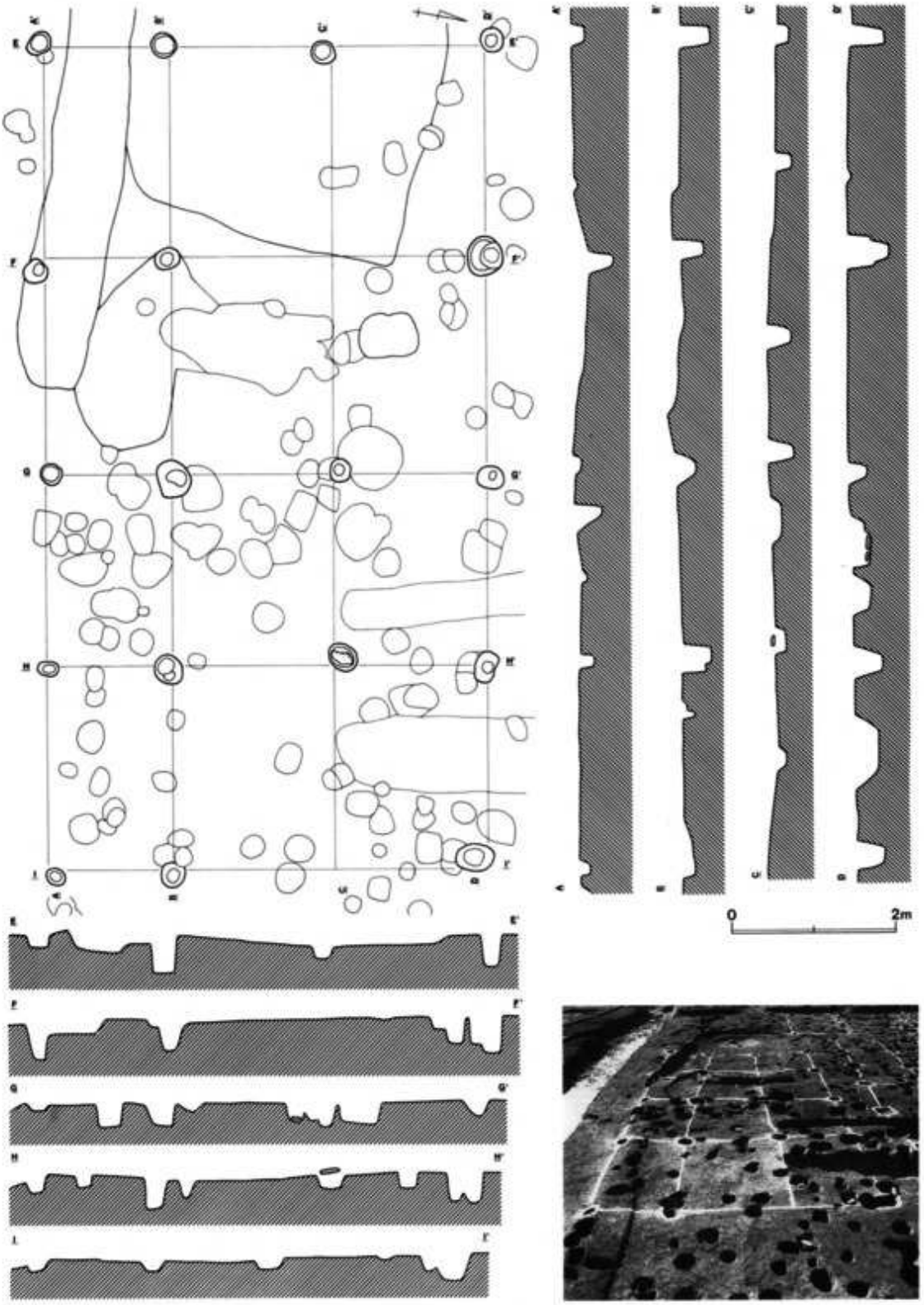
第66図　第26号掘立柱建物跡

の構成は、さらに北側に延びている可能性もあり、確認した柱穴配置が建物跡の全容であるか明確とは言えない。また、本建物跡は、第25号掘立柱建物跡や第26号掘立柱建物跡及び第6号井戸跡と重複しているが、それらとの新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、東西方向が2間で、南北方向は2間まで確認できる。建物の内部に束柱か棟持柱をもち、総柱式と考えられる。規模は、東西方向が4.60m・南北方向が2間で4.20mある。建物跡の南北方向は、N−13°−Wを向いている。柱通りは、比較的良いが、若干ずれているものもある。柱心間は、東西方向が2.30m・南北方向が2.10mのそれぞれほぼ等間隔で、南北方向に比べて東西方向の1間幅の方が若干長くなっている。柱穴は、直径20cm～40cmの円形や楕円形を呈するものが主体であるが、北側の東西方向の真ん中の柱穴だけは、やや長方形ぎみの形態をしている。確認面からの深さは、最低10cm～最高40cmまでばらつきがある。いずれも素掘りのもので、礎石等の石を伴うものはない。柱穴覆土は、ローム粒子やロームブロックを微量含む暗褐色土で、柱穴内からは遺物は何も出土しなかった。



第67図　第27号掘立柱建物跡



第68図　第28号掘立柱建物跡

第28号掘立柱建物跡（第68図）

B地点のⅡ区南端中央に位置し、重複する第12号溝跡を切り、第41号土壙や第2号集石と西側の第1号集石遺構と関係する規模の大きな不整の長方形状を呈する浅い掘り込みに切られている。また、本建物跡は、第43号土壙とも重複しているが、相互の新旧関係は不明である。

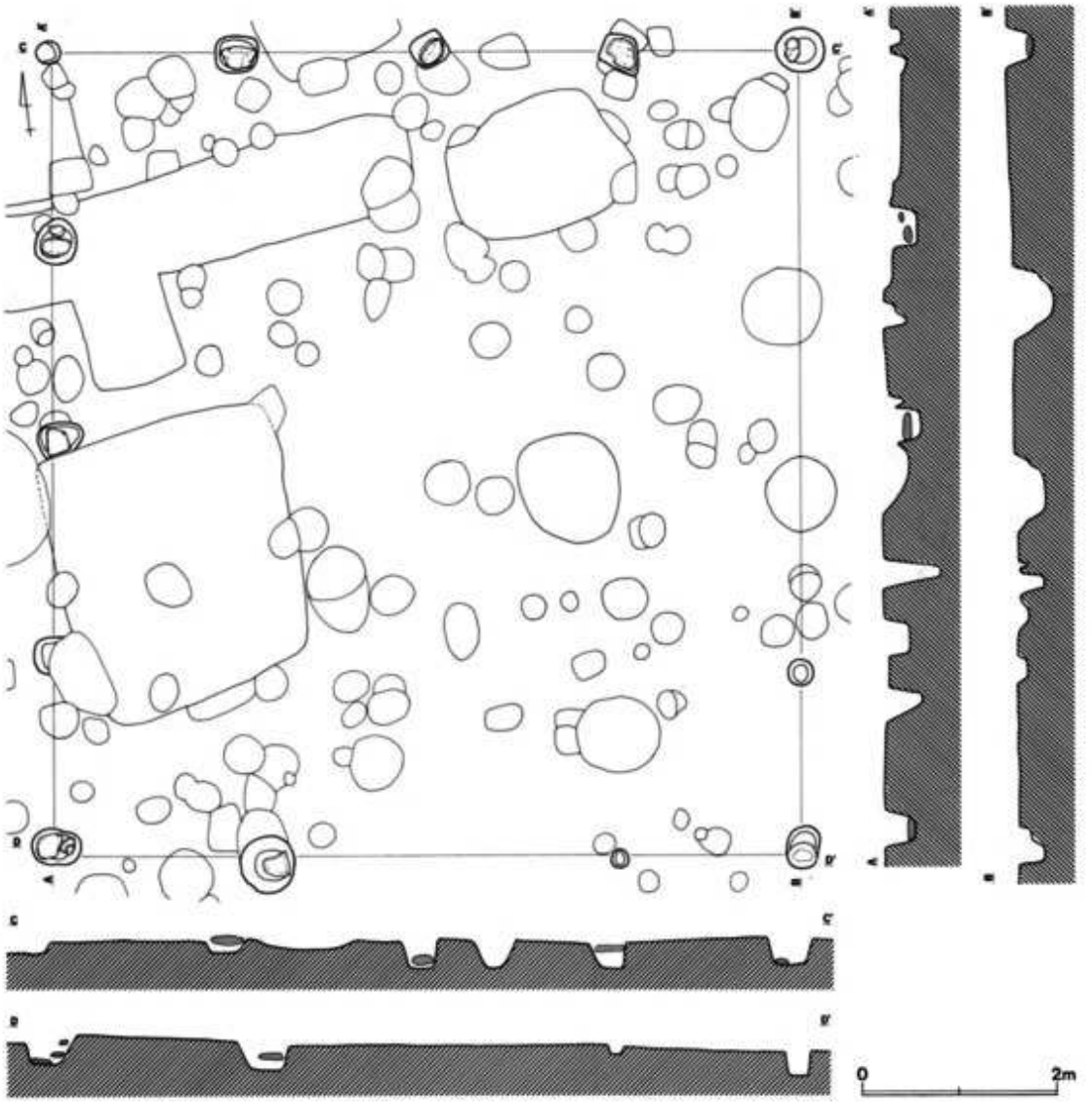
建物跡の形態は、南北方向が2間・東西方向が4間の長方形を呈し、建物内部に束柱か棟持柱をもつ総柱式で、南側に庇を伴っている。規模は、身舎の梁行方向が4.00m・桁行方向が10.30mを測り、庇の幅は1.60mある。建物跡の桁行方向は、N−79°−Eを向いている。柱通りは、桁行方向については比較的良いが、梁行方向は若干ずれるものが多く見られる。柱心間は、梁行方向はほぼ2mの等間隔で、桁行方向は西から2.70m・2.70m・2.40m・2.60mと間隔がやや不揃いである。柱穴は、長さ30cm～40cmの円形もしくは楕円形を呈しているが、30cm程度の円形を呈するものが比較的多い。確認面からの深さは、最低12cm～最高52cmを測るが、35cm前後の素掘りのものが主体である。柱穴覆土は、ロームブロックを含む黒灰色土で、柱穴内からは遺物は何も出土しなかった。

第29号掘立柱建物跡（第69図）

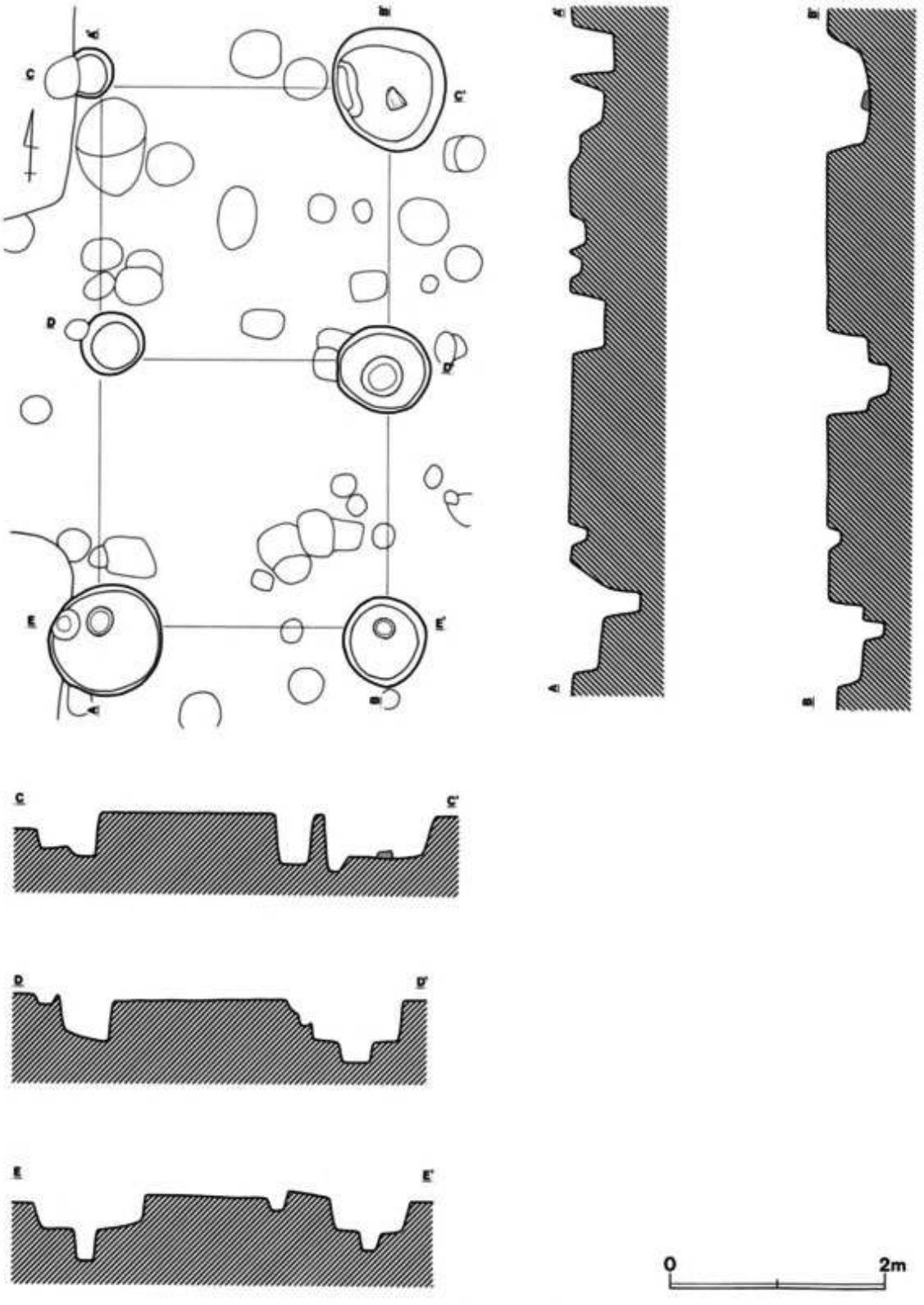
B地点のⅠ区中央に位置し、重複する第5号掘立柱建物跡や竪穴状遺構・第2号土壙・第4号土壙に切られている。また、第2号掘立柱建物跡や第13号井戸跡及び第7号土壙とも重複しているが、

それらとの新旧関係は不明である。本建物跡は、北側と西側の側柱穴と南側の側柱穴の一部しか残存していないため、建物跡の全容は不明である。

建物跡の形態は、東西・南北両方向とも4間の方形を呈し、規模は東西方向が8.00m・南北方向が8.20mで、建物の東西方向に比べて南北方向の方が若干長くなっている。建物跡の南北方向は、N－11°－Eを向いている。柱心間は、東西方向が2.00mの等間隔で、南北方向もほぼ同じ2.00mの等間隔であるが、北から3間目の柱心間だけが2.20mと他に比べて若干広くなっている。柱穴は、長さ40cm～50cmの比較的規模の大きなものが主体で、円形や楕円形や方形ぎみの形態を呈し、柱穴内に長さ30cm～40cmの比較的大きな礎石を据えているものが多い。確認面からの深さは、最低10cm～最高40cmまであるが、30cm前後のものが主体である。柱穴内からは、遺物は何も出土しなかった。



第69図　第29号掘立柱建物跡



第70図　第30号掘立柱建物跡

第30号掘立柱建物跡（第70図）

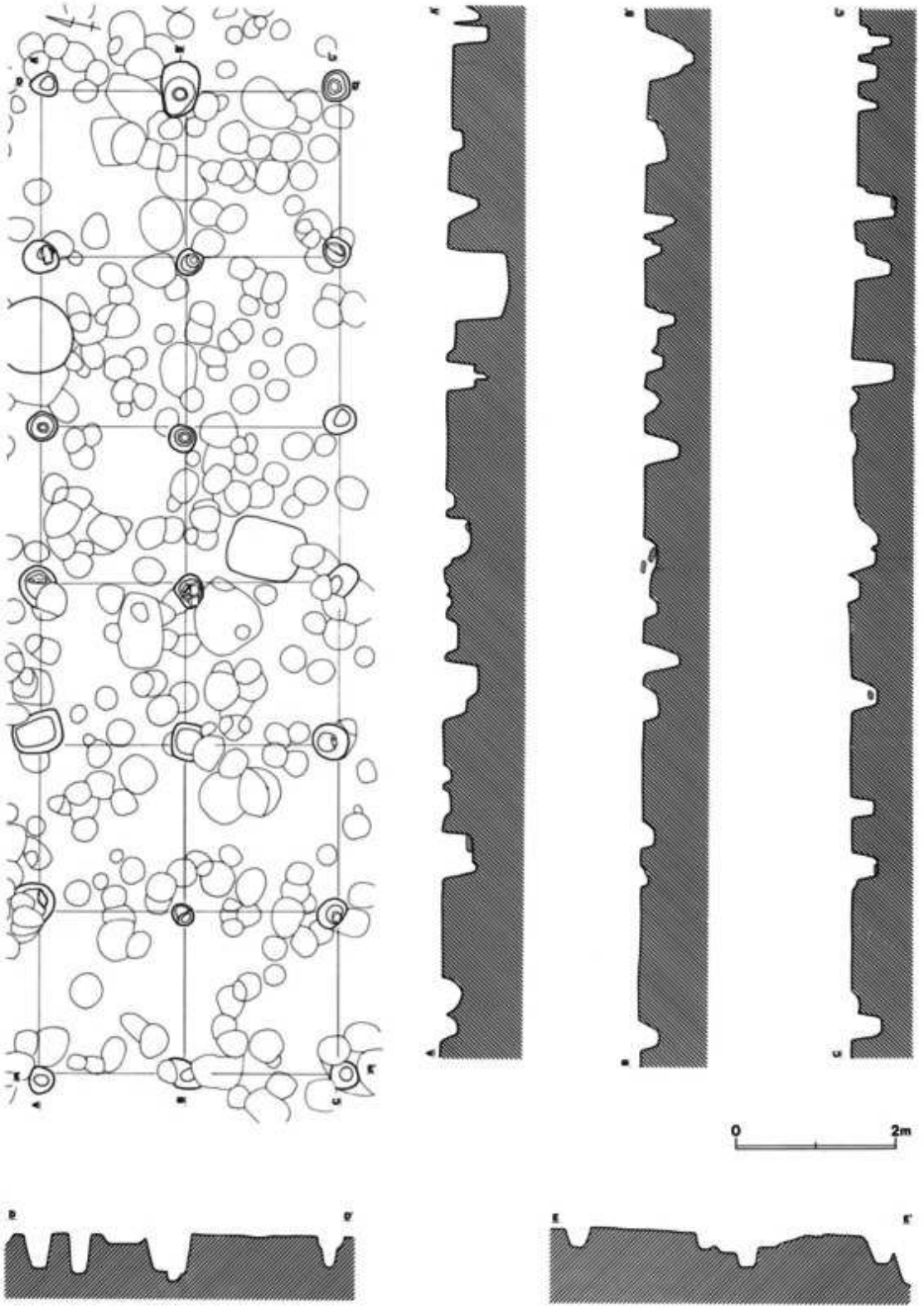
B地点のⅠ区中央に位置し、重複する竪穴状遺構と第7号土壙に切られている。本建物跡は、南西側の柱穴が第10号土壙と重複しているが、第10号土壙の土層の状態を見ると、それを切っているかあるいは第10号土壙自体が本建物跡の柱穴掘り方の可能性も考えられる。また、第7号土壙については、柱痕は見られないが土壙底面の中央に自然石が1個据えてあり、あるいは第10号土壙と同様に土壙自体が本建物跡の柱穴掘り方であった可能性もあると思われる。

建物跡の形態は、南北方向が2間・東西方向が1間の長方形を呈している。規模は、南北方向が約5.00m・東西方向が2.70mで、南北方向の柱心間は約2.50mのほぼ等間隔と思われる。建物跡の南北方向は、N−7°−Wを向いている。柱穴掘り方は、直径45cm～85cmの円形を呈しており、その中で規模が大きなものは底面に柱痕のような小ピットが見られる。確認面からの深さは、いずれも掘り方底面までは40cm前後で、底面に小ピットを伴うものは60cmを測る。柱穴内からは、遺物は何も出土しなかった。

第31号掘立柱建物跡（第71図）

B地点のⅡ区中央部に位置し、第21号掘立柱建物跡・第22号掘立柱建物跡・第25号掘立柱建物跡と重複している。

建物跡の形態は、東西方向6間・南北方向2間の東西方向に細長い長方形を呈し、建物内部に中間柱の棟持柱か束柱をもつ総柱式と考えられる。規模は、梁行方向が3.60m・桁行方向が12.00mを測る。建物跡の東西方向は、N−76°−Eを向いている。柱通りは、桁行方向の柱穴列については南北両側柱及び中間柱のいずれの柱穴列も比較的良く直線上に並んでいるが、梁行方向の柱穴列は真ん中の中間柱の柱穴が直線上から若干ずれるものが多い。柱心間は、梁行方向が1.80mの等間隔・桁行方向が2.00mのほぼ等間隔をなしている。柱穴掘り方は、直径30cm～50cmの円形もしくはそれに近い形態を呈するものが主体的であるが、やや角張った方形もしくは長方形ぎみの形態もいくつか見られる。確認面からの深さは25cm～50cmあり、全体的には40cm前後のものが主体である。また、本建物跡の柱穴には、礎石もしくは柱の根回しに使われたと思われる自然石を伴うものが比較的多くあるが、あまり大きな石を使用したものはない。柱穴内からは、遺物は何も出土しなかった。



第71図　第31号掘立柱建物跡

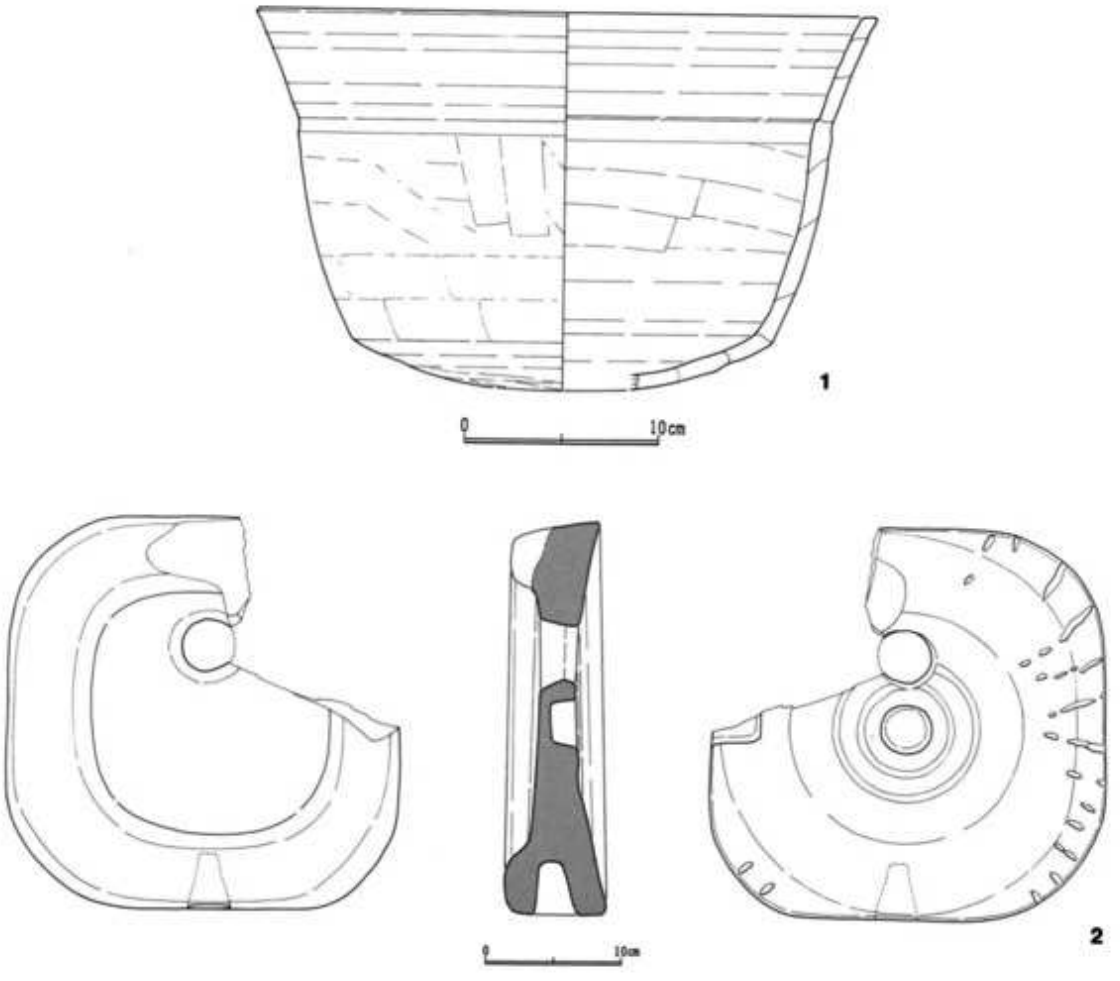
4．井　戸　跡

第１号井戸跡（第74図）

Ｂ地点Ｉ区の南東側寄りに位置し、重複する第９号溝跡を切っている。井戸跡の周囲には井桁や井戸の上屋構造と関係するような遺構は見られなかった。

井戸掘り方の平面形は、円形に近い形態を呈している。規模は、1.64ｍ×1.60ｍと比較的小形である。深さは、確認面から約２ｍまでしか掘れなかったため不明であるが、３ｍ程度はあるものと思われ、ローム層下の緑色粘土層を掘り込んでいる。断面の形態は、壁が確認面から約90cm程直線的に急傾斜して落ち込み、そこから中心が直径80cmの筒状に深くなっている。井戸内からは自然石がいくつか出土しているが、石組や木枠の痕跡が認められなかったことから、掘り方内に構造物を伴わない素掘りの井戸であったと推測される。

出土遺物は比較的少なく、覆土中より内耳鍋(№１)・土師質土器皿・粉挽臼の上臼(№２)の破片などが出土している。



第72図　第１号井戸跡出土遺物

第1号井戸跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	内耳鍋	口縁部径 (31.8cm) 残存高 19.3cm 底部径 (21.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部に平坦面をもつ。胴部はやや丸みをもち、内面の口縁部との境に若干段をもつ。底部は偏平な丸底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。胴部内外面篦ナデ。底部外面横方向の丁寧な篦ナデの後上半雑な縦方向の篦ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－暗茶褐色 内－明茶褐色	1/5。 口縁部～胴部外面及び底部内面に煤の付着顕著。 覆土中。
2	石製 粉挽臼 (上臼)	直径 28.7 高さ 7.4 くぼみ 1.8 ふくみ 2.0	平面形は隅丸方形を呈する。供給口・芯棒受け・挽木穴は直線上に並ぶ。断面は挽木木穴側が厚く、上縁は幅広で、かまぼこ状を呈する。	上面と側面は丁寧な研磨により調整されている。下面はかなり擦り減って摩滅しており、目は不明瞭である。	安山岩	3/4。 覆土中。

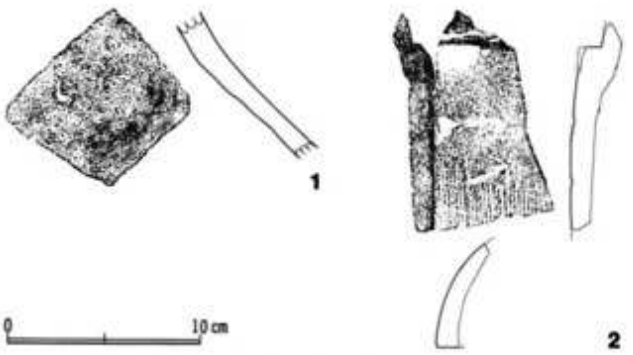
第2号井戸跡（第74図）

B地点Ⅰ区の北東端に位置し、重複する第9号溝跡を切っている。井戸の北側半分は調査区外に位置するため、本井戸跡の全容は不明である。

井戸掘り方の平面形は、円形もしくは楕円形に近い形態を呈するものと思われる。規模は、東西方向が3.50mあり南北方向は1.60mまで測れ、比較的大形のものである。深さは、完掘できなかったため不明である。断面の形態は、上半が規模が大きく壁が緩やかな椀状を呈し、そこから中心が直径90cm以上の筒状に深くなっている。

石組や木枠は見られなかったが、椀状を呈する掘り方上半部の壁際底面付近には比較的大きな石があり、また井戸内から散乱したような状態で多くの石が出土したことから、この上半部には石組等による構造物が存在した可能性も考えられる。

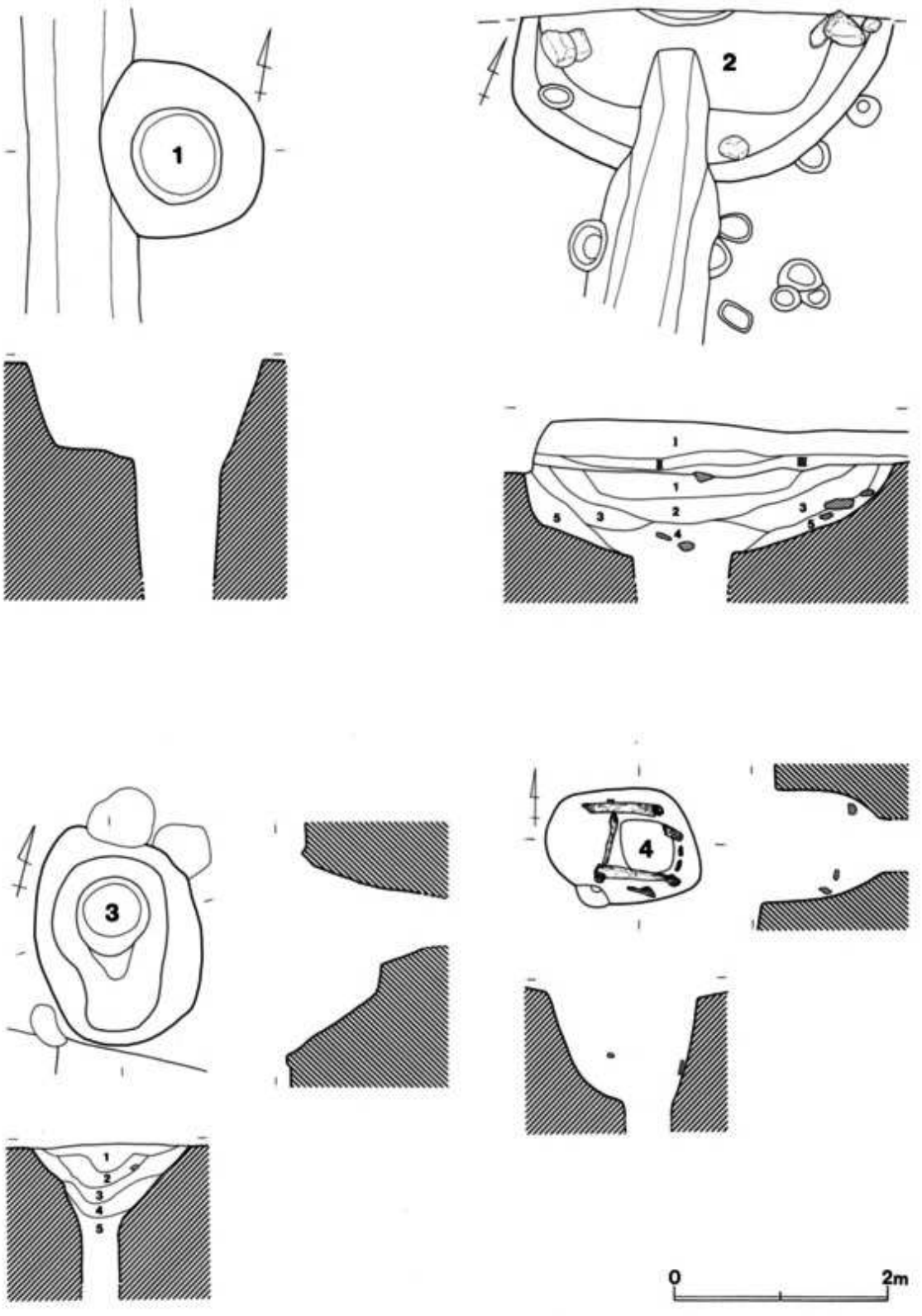
出土遺物は比較的少なく、覆土中より常滑系の甕(No1)や丸瓦の破片(No2)の他に、内耳鍋の破片も出土している。



第73図　第2号井戸跡出土遺物

第2号井戸跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	常滑窯系 甕		粘土紐積み上げ成形。	胴部外面篦ナデ、内面ナデ。外面に淡緑色釉がかかる。	橙褐色粒・白色粒 外－淡緑黄色 内－暗灰色	破片。 覆土中。
2	丸瓦	残存長 10.0cm		凸面縄目叩きの後ナデ、凹面は剥離している。側面篦切りの後丁寧なナデ。	白色粒 凸－黒灰色 凹－淡灰色	破片。 覆土中。



第74図　第1～4号井戸跡

第２号井戸跡土層説明

第Ⅰ層：暗灰褐色土層（現耕作土。）
第Ⅱ層：淡灰褐色土層（A軽石を多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第Ⅲ層：淡灰褐色土層（A軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
第１層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第２層：黒褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第３層：暗灰褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：淡灰色土層（鉄斑を多量に、ローム粒子・B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第５層：暗灰色土層（鉄斑・B軽石を微量含む。粘性・しまりともない。）

第３号井戸跡土層説明

第１層：暗褐色土層（鉄斑・ローム粒子・を多量に、B軽石を微量含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第３層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロック・B軽石微量含む。粘性・しまりともない。）
第４層：黒灰色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第５層：暗茶褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第３号井戸跡（第74図）

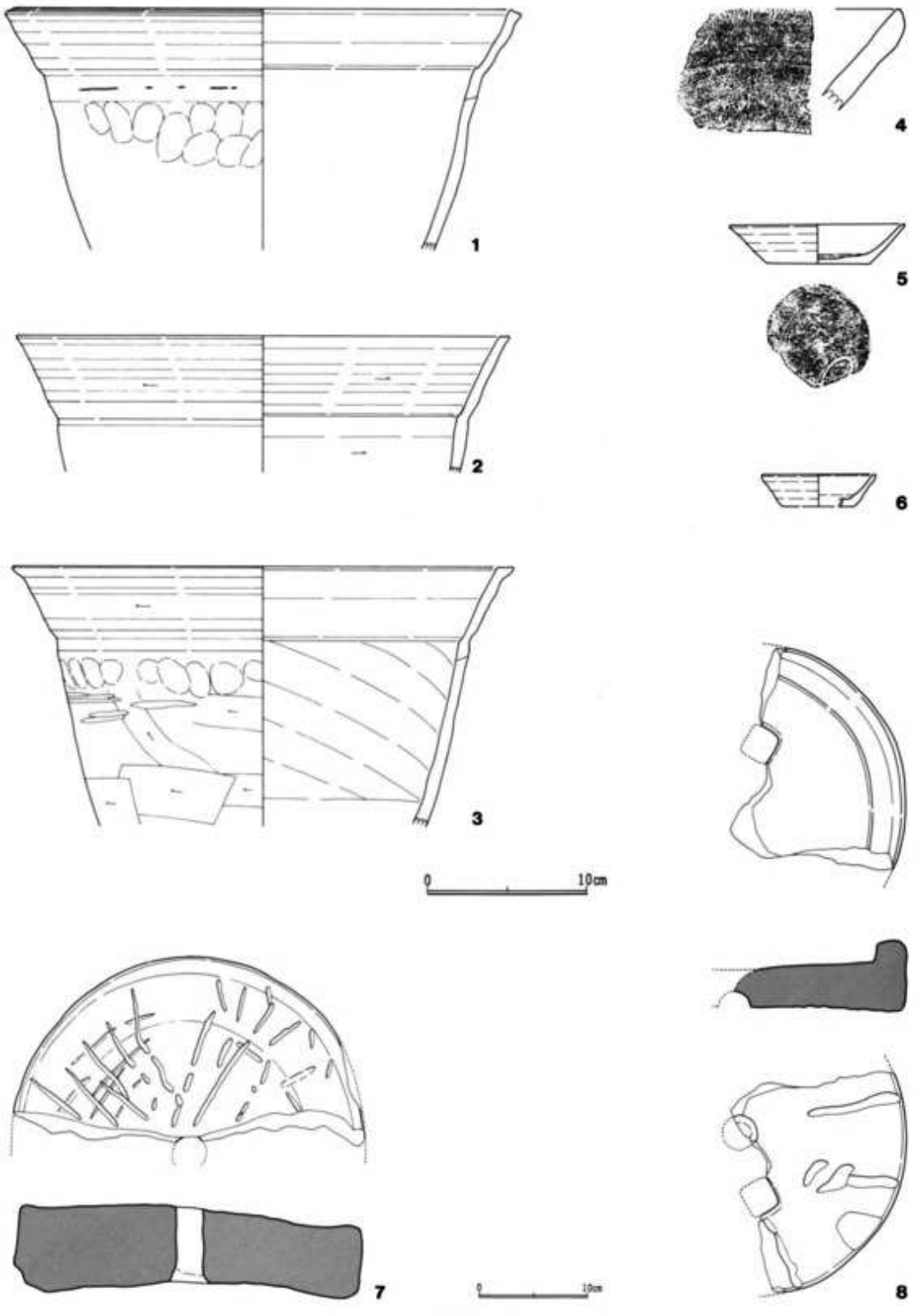
B地点Ⅱ区の北西側に位置し、重複する第23号掘立柱建物跡を切っている。井戸跡の周囲には、ピットがいくつか見られるが、井桁や井戸の上屋構造との関係は不明である。

井戸掘り方の平面形は、楕円形に近い形態を呈している。規模は、南北方向2.00m・東西方向1.56mと比較的小形である。深さは、確認面から約1.30mまでしか掘れなかったため不明であるが、おそらく２m近くはあるものと推測され、ローム層下の緑色粘土層を掘り込んでいる。断面の形態は、上半部が直線的でやや緩やかに傾斜する摺鉢状を呈し、中心からやや北側寄りで直径60cm～70cmの筒状に深くなっている。井戸跡内からは自然石がいくつか出土しているが、石組や木枠の痕跡が見られなかったことから、素掘りの井戸であったと推測される。

出土遺物は、内耳鍋（№１～３）・鉢（№４）・土師質土器（№５・６）・粉挽臼の上臼（№８）と下臼（№７）の破片などが、覆土上半から出土している。

第３号井戸跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	内耳鍋	口縁部径（32.2cm） 残存高 15.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾し、口唇部は平坦面をもつ。胴部は内湾ぎみに外傾し、内面の口縁部との境に段をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面指押さえの後ナデ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－暗灰褐色 肉－淡褐色	1/3。 外面煤の付着顕著。 覆土中。
2	内耳鍋	口縁部径（30.8cm） 残存高 8.5cm	粘土紐積み上げ成形。口唇平坦面をもつ。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－暗灰褐色 肉－淡褐色	口縁部1/6。 外面煤の付着顕著。 覆土中。
3	内耳鍋	口縁部径（31.4cm） 残存高 16.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は平坦面をもつ。胴部はやや直線的に外傾し、内面の口縁部との境に段をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後雑な篦ナデ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 外－暗灰褐色 肉－淡灰色	1/4。 外面煤の付着顕著。 覆土中。



第75図　第３号井戸跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	鉢		粘土紐積み上げ成形。口縁部は「半月状」を呈すが、内面は平坦である。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面雑なナデ、内面ヨコナデ。	白色粒 内外－灰色	口縁部破片。 瓦質。 覆土中。
5	土師質土器皿	口径 12.0 器高 2.5 底径 6.4	ロクロ成形。口縁部は直線的に外傾し、底部は突出しない平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	白色粒 内外－淡褐色	1/2。 覆土中。
6	土師質土器皿	口径 (7.0) 器高 2.0 底径 (4.4)	ロクロ成形。口縁部は直線的に外傾し、底部は突出しない平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	白色粒・黒色粒 内外－淡茶褐色	1/4。 覆土中。
7	石製 粉挽臼 (下臼)	直径 32.0 高さ 8.3 ふくみ 1.3	平面形は円形を呈し、断面は中央部がやや高く湾曲している。芯棒穴は貫通する。	側面打ち欠きの後雑な研磨。上面は外周部が良く擦れている。目は摩滅して不明瞭。	安山岩	1/2。 覆土中。
8	石製 粉挽臼 (上臼)	残存長 15.2 高さ 6.5 ふくみ 0.8	平面形は円形を呈すると思われる。上縁は狭くやや角張る。供給口は方形ぎみ。	側面打ち欠きの後雑な研磨。上面研磨、下面は擦り減って摩滅し、目は不明瞭。	安山岩	1/4。破損後二次焼成を受け、煤が付着している。 覆土中。

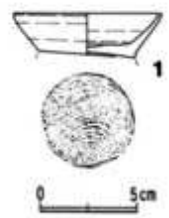
第4号井戸跡（第74図）

B地点Ⅱ区の北側中央に位置する。調査前までは水田として利用されていた場所であるため、水田耕作によって他より20cm程度深く削平を受けている。

井戸掘り方の平面形は、西側壁が丸くなっているが、四隅に丸みの強いコーナー部が見られることから、内部の木枠に合わせた隅丸長方形を基調にした形態のように思える。規模は、南北方向1.10m・東西方向1.40mと比較的小形である。深さは、確認面から約1.30mまでしか掘れなかったため不明であるが、おそらく2m近くはあるものと推測され、ローム層下の緑色粘土層を掘り込んでいる。断面の形態は、壁が確認面から約1.10m程やや内湾しながら急傾斜して落ち込み、そこから中心のやや東寄りで直径50cmの筒状に深くなっている。

井戸の上半部には木枠が付設されている。木枠は、最下段の横桟と隅柱と側板の一部だけしか残存しておらず、すでにかなり崩れた状態であることからも、木枠材の多くは井戸の廃棄とともに抜き取られたものと思われる。木枠の構造は、横桟として幅約10cm・厚さ3cm～5cm・長さ約70cmの断面長方形の平材を南北に、小枝を切り落として棒状にした長さ60cm・直径5cm程度の未製材の木を東西に配して四角に組み、その四隅の上に長さ25cm以上の横桟と同様の平材による隅柱を立て、外側に側板を巡らせたものと推測され、Ⅱ区南東側に位置する第5号井戸跡の木枠と構造的に類似したものであろう。しかしながら、木枠の遺存状態が悪いため明確ではないが、残存する横桟や隅柱にはその組み合わせのための特別な細工はなく、釘の使用も見られないため、木枠特に横桟の具体的な組み合わせ方法は不明である。また、木枠の横桟が、加工された製材と小枝を払い落とした程度の未製材をいっしょに使用して組まれていたことは、本遺跡の井戸木枠製作の事情が伺え、注目される。

出土遺物は非常に少なく、覆土中よりほぼ完形の土師質土器皿が1個



第76図　第4号井戸跡出土遺物

体出土しただけである。

第4号井戸跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師質土器	口径 7.6 器高 2.3 底径 5.0	ロクロ成形。口縁部は若干内湾ぎみに外傾し、底部はあまり突出しない平底。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	赤色粒・白色粒 外－淡橙褐色 内－淡褐色	ほぼ完形。 内面煤付着。 覆土中。

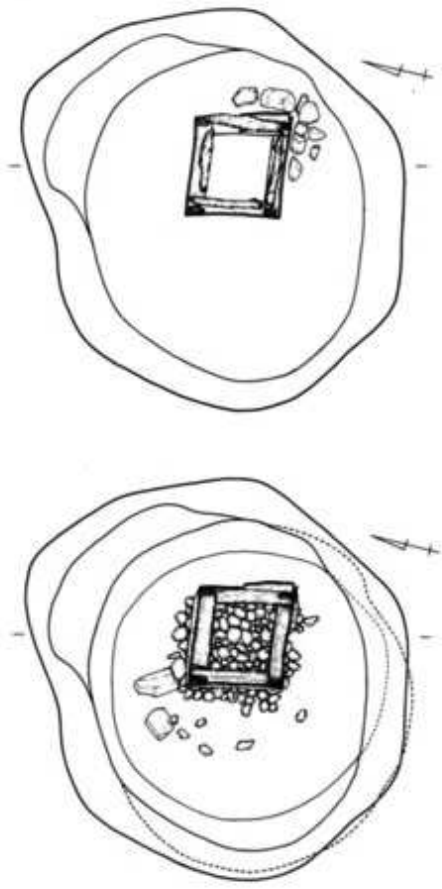
第5号井戸跡（第77図）

B地点Ⅱ区の南東側に位置し、北側には第51号土壙が近接している。本井戸跡は、本遺跡で検出された井戸の中では最大の掘り方規模を誇る。掘り方中央部の上半は井戸廃絶後に掘り返されて破壊されていたが、井筒に横桟隅柱側板式の方形木枠を設置し、木枠の上には石組の存在も予想されるもので、当地域周辺では比較的立派な構造をもつ井戸である。

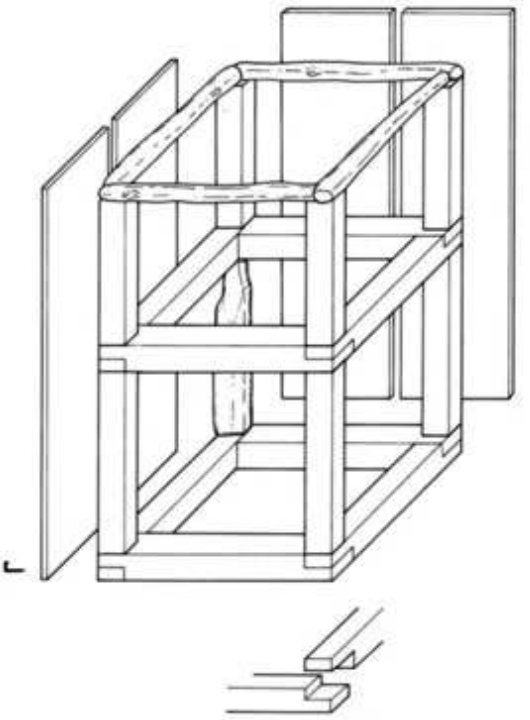
井戸掘り方の平面形は、円形に近い形態を呈し、北東側がテラス状にやや張り出している。規模は、南北方向3.00m・東西方向3.08mを測る大形のものである。確認面からの深さは2.00mあり、ローム層下の緑色粘土層を掘り込んでいる。断面の形態は、上半部がやや内湾ぎみで緩やかに傾斜し、下半部は直線的で垂直ぎみに落ち込み、南側の壁はオーバーハングしている。底面は、広く平坦に掘られており、中で大人2～3人が比較的楽に作業できるほどの空間である。掘り方底面の木枠が設置されている場所には、5cm～10cmの石が平坦に敷き詰められている。その周りにも比較的大きな石がいくつか見られるが、これらは掘り方内での作業のための足場に利用されたものではないかと思われる。

木枠は、横桟と隅柱による内径45cm～55cm四方・高さ約65cmと55cm以上の四角い枠を2段に組み、外側に側板を巡らせたものである。横桟は、最下段と中段の横桟がまったく同じ作りのもので、長さ70cm・幅12cm・厚さ12cm前後の角材を使用し、角材の両端を相欠き柄に加工して方形に組み合わせている。最上段の横桟は、小枝を雑に切り落として棒状にした残存長約60cm・直径6cm前後の未製材と思われる木を使用して方形に組んでいるが、端部の腐食が著しいため、その組み合わせの技法については不明である。隅柱は、長さ55cm・幅12cm・厚さ5cmの断面長方形を呈する平材を使用しているが、2段目の隅柱の上端は腐食が著しく最高43cmしか残存していない。この隅柱は、上下2段とも横桟との組み合わせに特別な細工はなく、いずれも平らな端部を横桟の上にただ乗せているだけである。また、1段目北東側の隅柱だけは、他の木製隅柱に形状が類似した柱状の自然石を利用している。側板は、表面や側面が比較的きれいに製材加工された厚さ1.5cm位の板材を2枚～3枚使って木枠の各側面を塞いでいる。側板の木枠への取り付けは、基本的には掘り方埋土の土圧による押さえだけである。北側と東側の側板の最下部隅には、外側から木枠横桟への釘による打ち付けが、すべての側板ではなく、それぞれ1箇所だけに見られる。これらは掘り方を埋め戻すまでの仮留め的な処置と思われ、同様に南側側板では外側に大きな板状の自然石を側板に立て掛けて側板の仮押さえにしている。ちなみに、最も広い掘り方空間に面する西側の側板には、仮止めや仮押さえの痕跡は見られなかった。

この木枠の上には、木枠に沿って比較的大きな石が配列されていた痕跡が一部見られる。側板の外側に沿って石の小口ではなく側面をそろえていることから、それ自体は木枠の裏込めと考えられる。しかしながら、その上部にあたる掘り方上半の井戸廃絶後に掘り返された部分からは、石組が崩されて散在したような状態で大形のやや偏平な自然石が大量に出土し、石の小口積みの痕跡も若干見られたことから、木枠上の井戸上半には小口積みによる石組の井筒が作られていたと考えられ



第77図　第５号井戸跡



第５号井戸跡・木枠模式図

第５号井戸跡土層説明

第１層：黒褐色土層（鉄斑・ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：黒褐色土層（鉄斑・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第３層：淡白褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第４層：黒灰色土層（ロームブロック・緑色粘土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

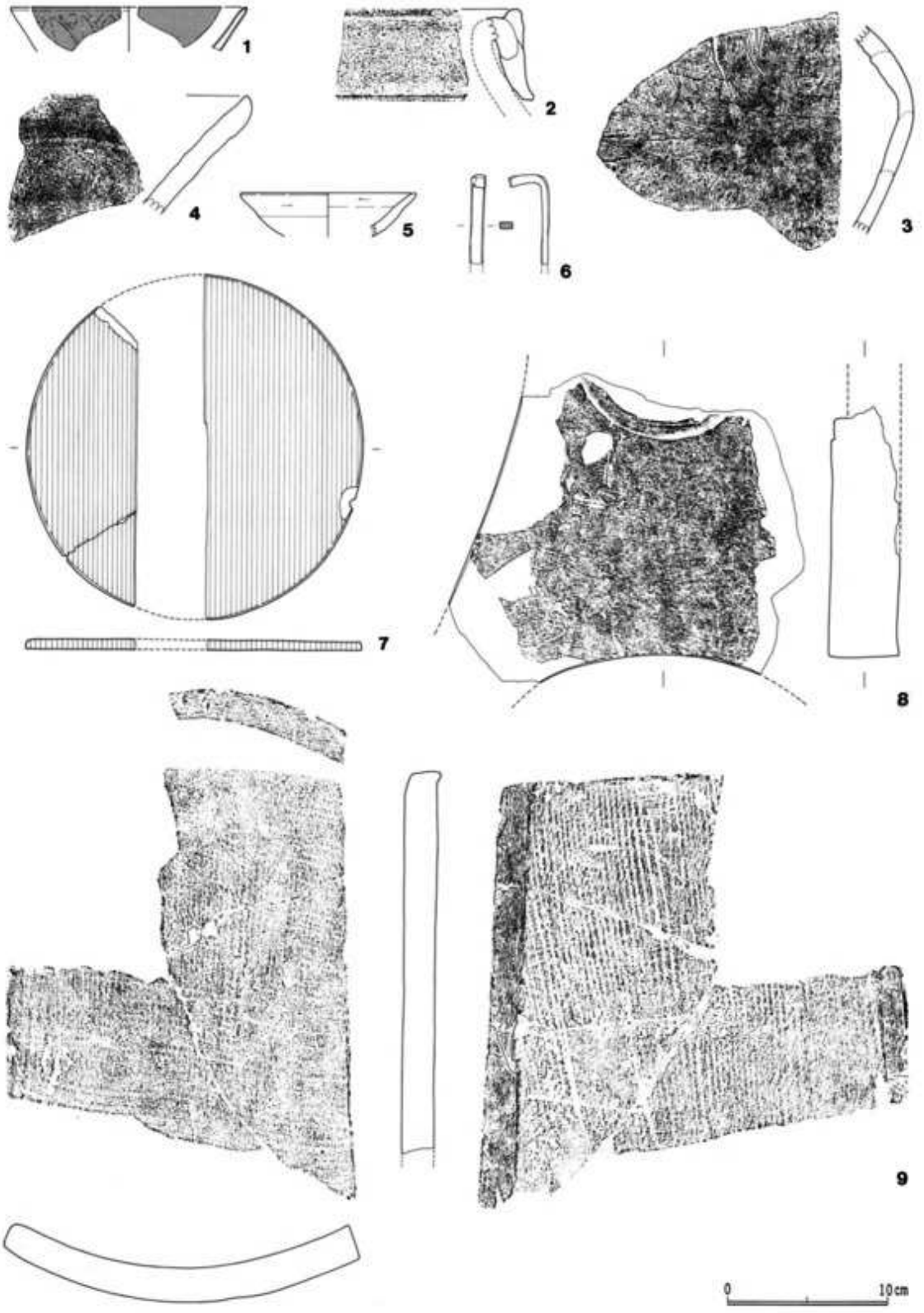
る。そのため、この木枠に沿って配列された比較的大きな石は、木枠の側板を押さえる裏込めの役割とともに、井戸上半の石組井筒の根石であった可能性も推測される。

このように、本井戸跡の井筒は木枠と石組によって形成されていたものと推測されるが、木枠を構成する横桟・隅柱・側板による木枠材自身の組み合わせ技法では木枠の形状を維持する力はなく、木枠の形状維持は掘り方埋土の土圧や上部石組の重圧による外部圧力の押さえ付けによってなされている。そのため、掘り方埋土も単純に埋め戻されたものではなく、埋土が残存する範囲では明確な不連続層を3回に分けてほぼ水平に埋め戻しており、おそらく版築的な技法により行われたものと思われる。このことから、本井戸の木枠の組み立ては、井戸の内部で行われたものと考えられ、その作業空間の必要から他の井戸の掘り方の形態とは異なった底面が平坦で大規模な掘り方が作られたのであろう。

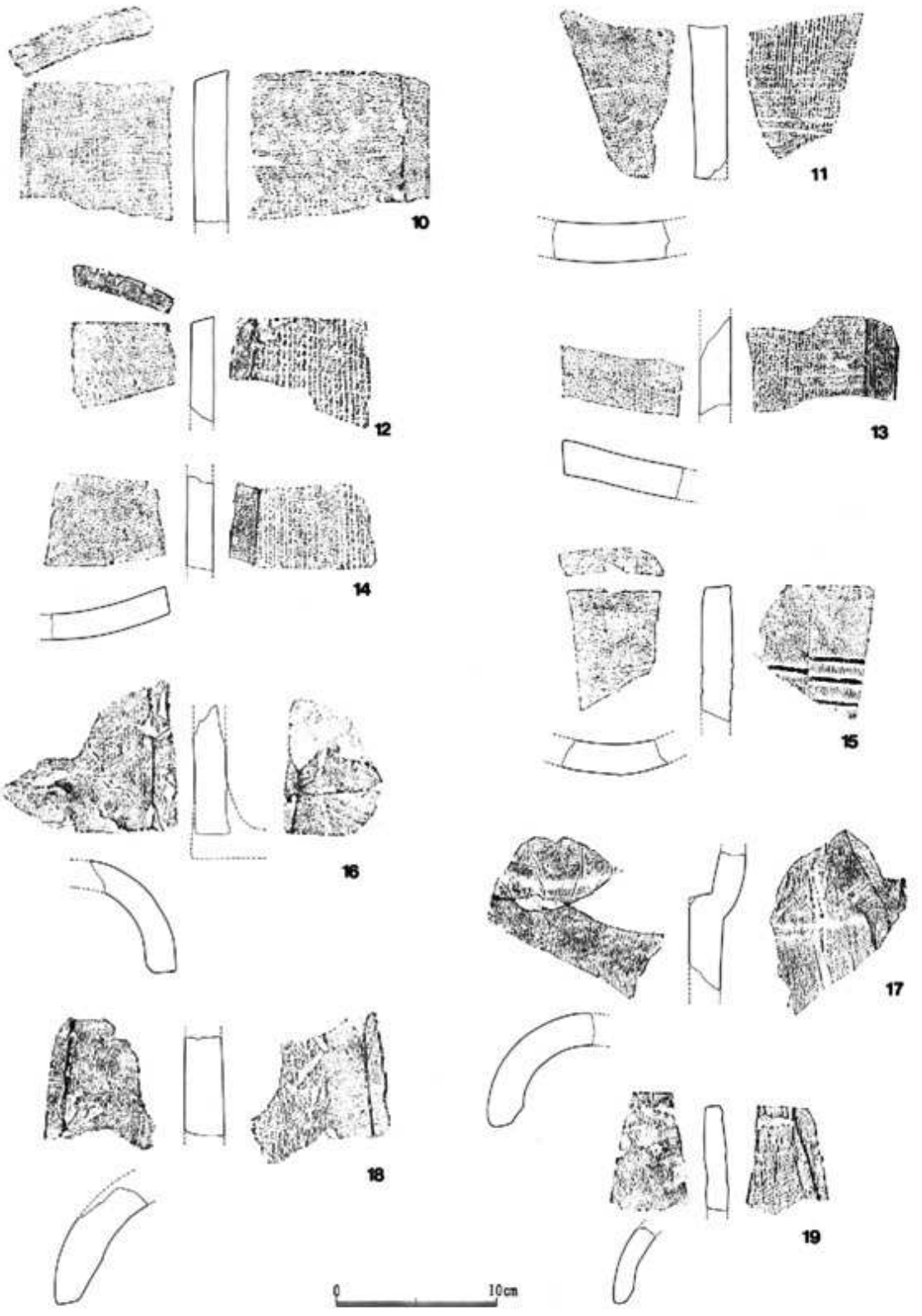
出土遺物は、青磁碗(№1)・常滑系甕(№2)・渥美系甕(№3)・在地産鉢(№4)・土師質土器皿(№5)・釘(№6)・底板(№7)・瓦(№8～19)等があるが、井筒の木枠内からは№2の常滑系甕の口縁部破片と№7の曲物底板が出土しただけであり、その他の遺物の多くは掘り方埋土から出土している。掘り方埋土からは、図示した瓦片の他に連珠文軒平瓦の破片も1片出土しているが、それは第16号土壙から出土した軒平瓦の破片と接合した(第104図№1)。№3の渥美窯系甕は、第10号溝跡出土の甕と同一個体の破片である。また、№6の釘は、木枠側板の仮留めに使われていたもので、同様の釘がもう1点側板に突き刺さったまま出土している。

第5号井戸跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	龍泉窯系青磁碗	口縁部径(14.8cm)	ロクロ成形。口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部はやや尖る。	口縁部内外面とも回転ナデ。外面に鎬手蓮弁文。内外面とも淡緑色釉を施す。	黒色粒 内外－淡緑色 肉－淡灰色	口縁部1/6。 掘り方埋土下層。
2	常滑窯系甕	縁帯幅5.5cm	粘土紐積み上げ成形。縁帯上部はやや突出し、下部内側は頸部に付着。	縁帯部内外面とも回転ナデ。縁帯上部に薄い自然釉。	白色粒 外－黒茶褐色 内－暗茶褐色	縁帯部破片。 井筒木枠内。
3	渥美窯系甕		粘土紐積み上げ成形。肩部はやや丸みをもつ。	外面上半横ハケの後縦ハケ、下半篦ナデ。内面ナデ。外面上半に薄い自然釉、下半に押印文を施す。	白色粒・黒色粒 内外－暗褐色	破片。 10号溝№2と同一個体。 掘り方埋土下層。
4	鉢		粘土紐積み上げ成形。体部は直線的に外傾し、口縁部は「半月」状を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。体部外面指押さえの後ナデ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－暗灰色 肉－淡灰色	破片。在地産。 還元焔焼成。 掘り方埋土。
5	土師質土器皿	口縁部径(11.0cm)	ロクロ成形。体部は内湾ぎみに開き、口縁部は若干外反する。	口縁部内外面回転ナデ。体部外面ナデ、内面回転ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	口縁部1/3。 掘り方埋土。
6	釘	残存長 5.6 幅 0.7 厚さ 0.4	断面は偏平な長方形を呈し、頭部は四角い平坦面をもつ。中位は「L」字状に曲がる。	錆は内部まで進行しており、地金はもろい。	鉄製	3/4程度。 側板打ち付け。
7	曲物(底板)	直径 21.3 厚さ 0.6	底板側面には、釘による打ち付けの痕跡は見られない。	上下面とも滑らかで平坦に仕上げられている。		底板3/4。 井筒木枠内。



第78図　第５号井戸跡出土遺物(1)

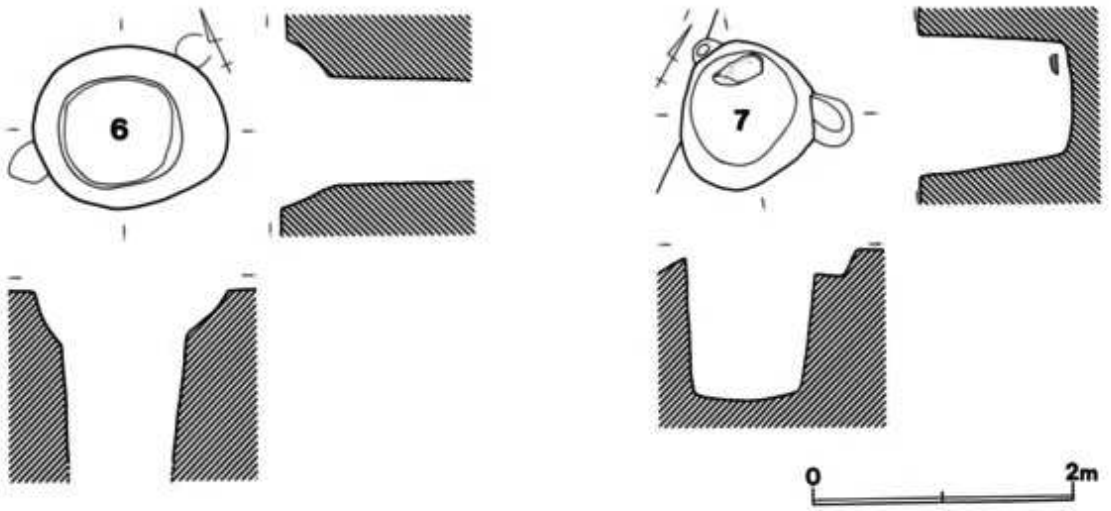


第79図　第５号井戸跡出土遺物(2)

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
8	鬼瓦？	残存長 19.3 残存幅 22.1 厚さ 4.3	表面は平坦で、上方に2段に深くなる円形の窪みがある。側面はいずれも平坦で、下側は湾曲が強く、横側は若干湾曲する程度である。	表面不定方向のナデ、裏面横方向のナデ。側面ナデ。	白色粒・黒色粒 表面－黒灰色 裏面－淡灰色 肉－淡灰色	2/3。 掘り方埋土下層。
9	平瓦	残存長 23.7 幅 22.1 厚さ 2.0	一枚作り。厚さは比較的均一で、狭端は凸面側に若干突出する。凹凸両面とも砂付着。	凸面縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデの後部分的に縦方向のナデを施す。側面・狭端面篦切り後ナデ。	白色粒・赤色粒 凹凸－淡灰褐色 肉－淡灰褐色	2/3。 焼成不良。凹面側に凸面の縄目の転写圧痕あり。 掘り方埋土。
10	平瓦	残存長 9.5 残存幅 10.0 厚さ 2.0	一枚作り。端面は凸面側に若干突出し、傾斜している。凹面砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。側面・狭端面篦切り後ナデ。	白色粒・赤色粒 凹凸－淡灰褐色 側面－暗灰色	破片。 焼成不良。 掘り方埋土。
11	平瓦	残存長 11.2 残存幅 7.1	一枚作り。厚さはやや不均一で、凹面側は緩やかな凹凸が見られる。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデの後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－暗灰色	破片。 凹面側に凸面の縄目の転写圧痕あり。 掘り方埋土。
12	平瓦	残存長 6.9 残存幅 7.5 厚さ 1.5	一枚作り。厚さは比較的薄く、端面は傾斜している。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。側面・狭端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 掘り方埋土。
13	平瓦	残存長 7.0 残存幅 8.1 厚さ 1.9	一枚作り。厚さは比較的均一で、側面付近は若干肥厚する。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面布目圧痕。側面篦切り。	白色粒 凹凸－黒灰色 肉－暗茶褐色	破片。 掘り方埋土。
14	平瓦	残存長 5.8 残存幅 7.6 厚さ 1.5	一枚作り。厚さは比較的薄い。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデの後縦方向のナデ。側面ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 掘り方埋土。
15	平瓦	残存長 8.4 残存幅 7.0 厚さ 1.9	一枚作り。端部凹面側はやや傾斜している。	凸面ナデの後文様叩き、凹面ナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－黒灰色 肉－淡灰色	破片。凹面側に凸面文様の転写圧痕あり。 掘り方埋土下層。
16	丸瓦	残存長 8.0 厚さ 2.0	瓦当面は剥離している。側面内側面取り。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕。側面ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－黒灰色	破片。 掘り方埋土下層。
17	丸瓦	残存長 8.6 厚さ 2.0	玉縁部取り付けは若干角度をもつ。側面内側面取り。	凸面篦ナデ、凹面布目圧痕。玉縁部凹凸両面ともナデ。	白色粒 凹凸－黒灰色	破片。 掘り方埋土。
18	丸瓦	残存長 8.9 厚さ 2.5	厚さは比較的厚く、側面内側幅広の面取り。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕。側面ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－黒灰色	破片。 掘り方埋土下層。
19	丸瓦	残存長 6.6 厚さ 1.4	玉縁部は比較的薄く、側縁内側面取り。	凸面ナデ、凹面布目圧痕。側縁・玉縁端ナデ。	白色粒 凹凸－黒灰色	玉縁部破片。 掘り方埋土。

第6号井戸跡（第80図）

B地点Ⅱ区の中央部に位置する。本井戸跡は、第26号掘立柱建物跡及び第27号掘立柱建物跡と重複し、第26号掘立柱建物跡を切っている。井戸跡の周囲には、多くのピットが見られるが、井桁や

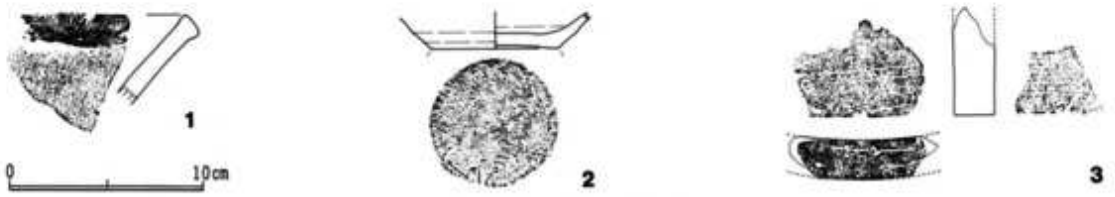


第80図　第6・7号井戸跡

上屋との関係は不明である。

井戸掘り方の平面形は、楕円形に近い形態を呈している。規模は、南北方向1.26m・東西方向1.50mを測り、比較的小形である。深さは、確認面から1.30mまでしか掘れなかったため不明であるが、ローム層下の緑色粘土層を掘り込んでおり、おそらく2m近くはあるものと思われる。断面の形態は、深さ40cmまでの上半部が内湾しながら緩やかに傾斜し、そこから直径80cm～90cmの円柱状に深くなっている。井戸内には木枠や石組の痕跡が見られないことから、素掘りの井戸であったと推測される。

出土遺物は、覆土中より土器や瓦の破片が少量出土しただけである。



第81図　第6号井戸跡出土遺物

第6号井戸跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢		粘土紐積み上げ成形。口唇部は平坦面をもち、内側と外側にやや肥厚する。	口縁部内外面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－暗灰色 肉－淡灰色	口縁部破片。 還元焔焼成。 覆土中。
2	土師質土器	底部径 6.6cm	ロクロ成形。体部はやや外反ぎみに開く。底部は突出せず、中央部が窪む。	体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	片岩粒・赤色粒 内外－淡褐色	底部のみ。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	平瓦	残存長 5.5 残存幅 7.5 厚さ 2.1		凹凸両面とも木口状工具によるヨコナデ、端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－黒灰色 肉－灰色	破片。 覆土中。

第7号井戸跡（第80図）

B地点Ⅱ区の中央部に位置する。西側壁の一部を最近の溝によって切られているが、遺存状態は良好である。

井戸掘り方の平面形は、やや不整ではあるが、円形に近い形態を呈している。規模は、南北方向1.16m・東西方向1.00mと比較的小形である。深さは、確認面から1.20mとやや浅いが、ローム層下の緑色粘土層を20cm程度掘り込んでいる。断面の形態は、壁は若干傾斜して直線的に掘られており、底面は広くほぼ平坦である。井戸内の底面付近には比較的大きな自然石が見られるが、木枠や石組の痕跡がないことから、素掘りの井戸であったと推測される。

出土遺物は、比較的少量であるが、覆土中から羽口(No1)・瓦(No2)・硯(No3)の破片が出土している。

第82図　第7号井戸跡出土遺物

第7号井戸跡出土遺物観察表

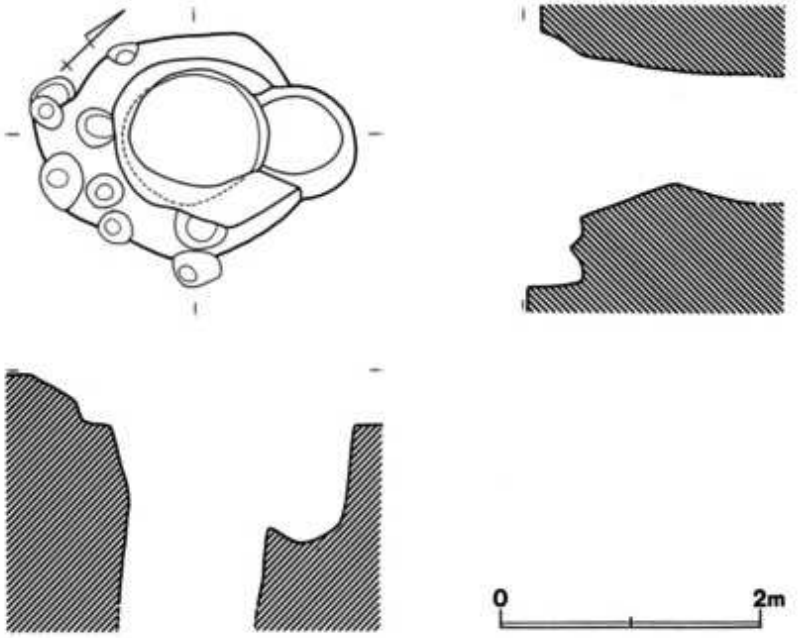
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	羽口	残存長 6.6 厚さ 2.2		外面篦ナデ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－淡灰褐色 内－淡橙褐色	破片。 上端は発泡し溶解している。 覆土中。
2	平瓦	残存長 9.3 残存幅 9.6		凹面布目圧痕の後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹－淡灰色	破片。 覆土中。
3	硯	残存長 5.3 残存幅 6.7	平面形は、台形を呈するものと思われる。	底面・端面・側面とも丁寧な研磨。	粘板岩	破片(上半剥離)。 覆土中。

第8号井戸跡（第83図）

B地点Ⅱ区の東側に位置し、重複する第8号溝跡を切っている。本井戸跡の北東側半分は、調査前まで水田として利用されていたため、南西側確認面より20cm程度深く削平されている。削平を受けていない井戸上半の南側壁面には、多くのピットが見られる。これらのピットは、井戸が埋没す

る以前に掘られていたものが多く、井桁や上屋に関係するピットである可能性も考えられる。

井戸掘り方の平面形は、やや楕円形に近い形態を呈し、北東側に幅86cm・深さ1.30mの土壙状の張り出しをもつ。規模は、北西～南東方向1.70m・北東～南西方向2.48mあり、やや小形のものである。深さは、ローム層下の緑色粘土層を掘り込んでおり、確認面から1.74mまでしか掘れなかったため不明であるが、おそらく2m以上はあるものと思われる。断面の形態は、深さ40cmまでの上半部は壁が内湾ぎみにやや緩やかに傾斜し、そこから直径90cm～110cmの平面楕円形の筒状に深くなっており、途中南側の壁は若干オーバーハングしている。井戸内には木枠や石組の痕跡が見られないことから、素掘りの井戸であったと推測される。

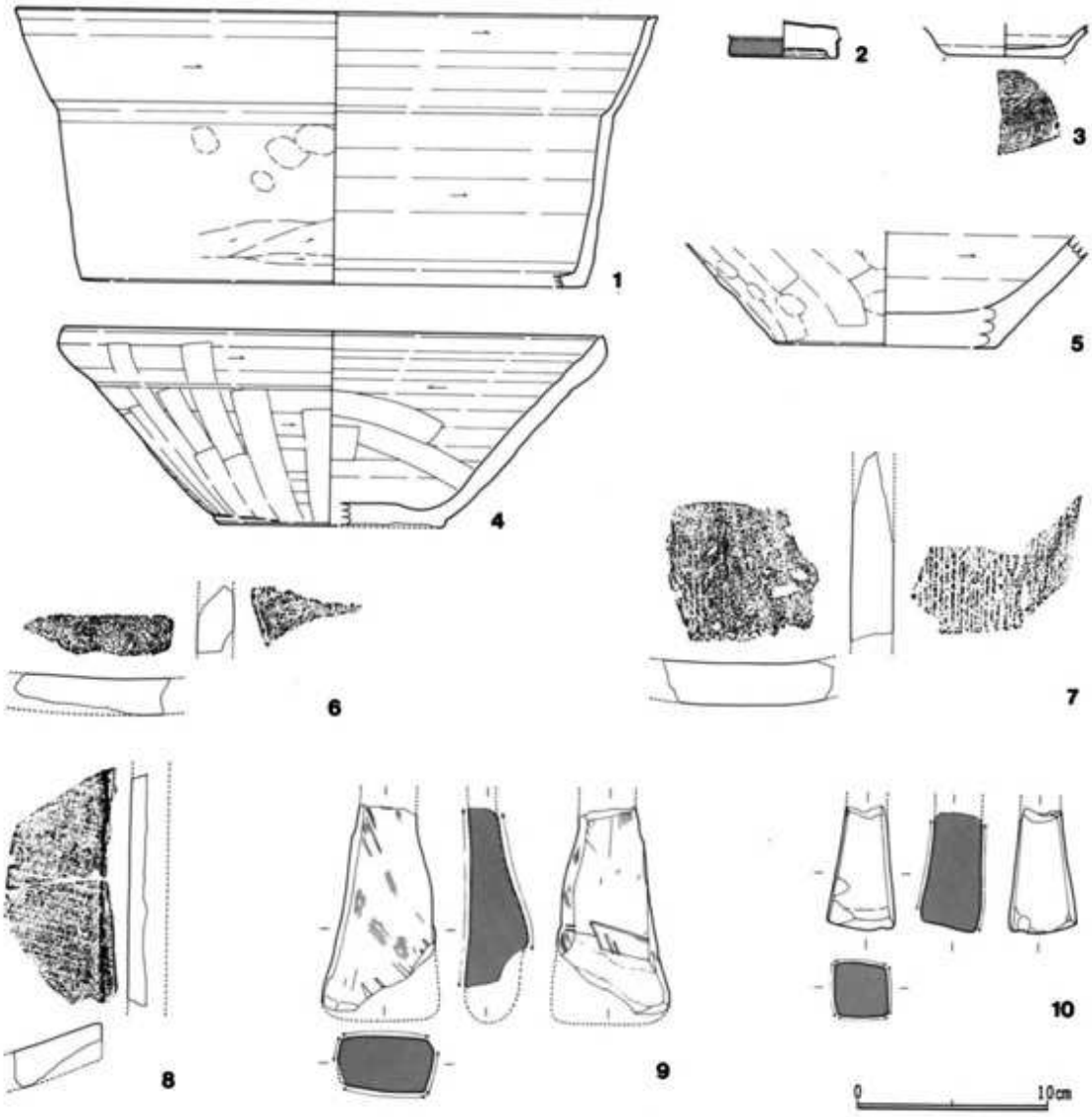


第83図　第8号井戸跡

第8号井戸跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	内耳鍋	口縁部径 (33.6cm) 器高 14.2cm 底部径 (26.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口唇部は平坦面をもち外側に若干突出する。口縁部は若干内湾ぎみに開き、内面の胴部との境に段をもつ。胴部は低く直線的で、底部は平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面指押さえの後上半ナデ・下半箆によるナデ付け、内面回転ナデ。底部内外面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－暗褐色 肉－淡橙褐色	1/6。 酸化焔焼成。 外面に煤の付着あり。 覆土中。
2	龍泉窯系青磁碗	底部径 5.8cm	ロクロ成形。削り出し高台。高台は低く、底部は厚い。	高台部及び底部内面回転箆ケズリ。高台部及び底部内面とも淡緑灰色釉を施す。	黒色粒 内外－淡緑灰色 肉－淡橙褐色	底部のみ。 覆土中。
3	土師質土器皿	底部径 (6.0cm)	ロクロ成形。体部は外反しながら開く。底部は突出しない平底を呈する。	体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	片岩粒・赤色粒 内外－淡茶褐色	1/4。 覆土中。
4	鉢	口縁部径 (28.6cm) 器高 10.2cm 底部径 (12.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は若干内湾し、体部との境に回転ナデによる段をもつ。口唇部外面は平坦ぎみ。体部は直線的で浅く、底部は平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。体部外面回転ナデの後縦方向のナデ、内面ナデ。底部内面ナデ、外面剥落顕著なため不明。	小石・白色粒 内外－淡灰色 肉－淡茶褐色	1/2。 在地産。 還元焔焼成。 覆土中。

出土遺物は、覆土上半を主体にして、青磁碗・内耳鍋・鉢・土師質土器皿・瓦・砥石など、比較的多くの破片が出土している。



第84図　第8号井戸跡出土遺物

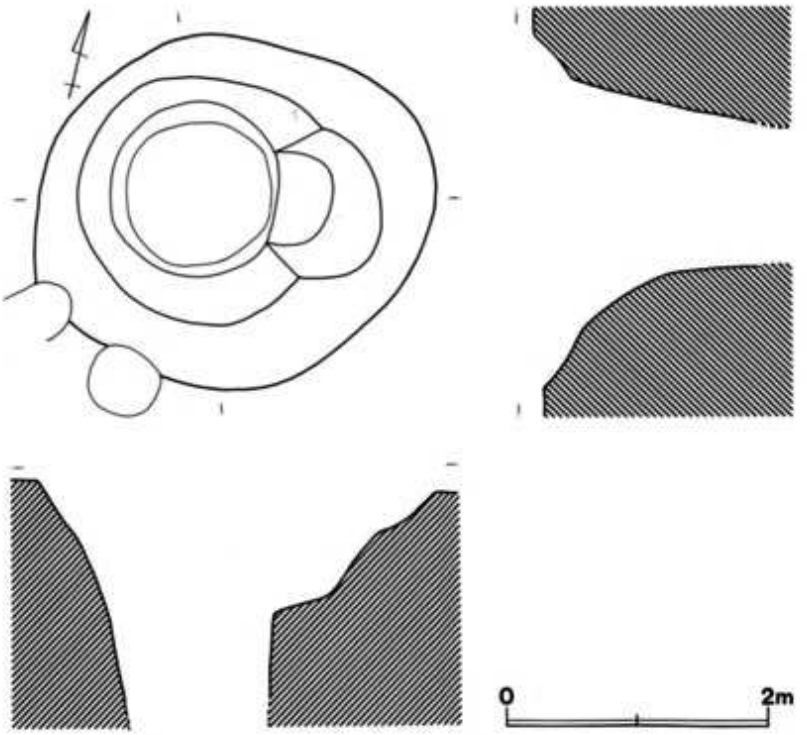
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	鉢	底部径 (10.6cm)	粘土紐積み上げ成形。体部はやや内湾ぎみに開く。底部は平底を呈する。	体部外面ナデ、内面ヨコナデ。	片岩粒・赤色粒 外－淡灰褐色 内－淡灰色	底部1/4。 覆土中。
6	平瓦	残存長 4.5 残存幅 8.2 厚さ 1.9		凸面木口状工具によるヨコナデ、凹面ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－暗灰色 肉－淡灰色	破片。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
7	平瓦	残存長 10.0 残存幅 8.9 厚さ 2.2		凸面縄目叩き、凹面ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－灰色	破片。凹面側に凸面の縄目の転写圧痕あり。覆土中。
8	平瓦	残存長 12.5 残存幅 4.7	側面は垂直ぎみ。凸面は剥離している。	凹面木口状工具によるヨコナデ。	白色粒 凹－淡灰褐色	破片。二次焼成を受けている。覆土中。
9	砥石	残存長 10.8 最大幅 6.0 厚さ 3.1	平面形は撥型、断面は長方形を呈する。上端及び下端の一部を欠損している。	表裏面及び両側面とも良く擦れている。各面とも刃物による傷痕あり。	凝灰岩	3/4。 重さ196g 覆土中。
10	砥石	残存長 6.2 最大幅 3.6 厚さ 3.2	平面形は撥型、断面は方形を呈する。上半を欠損している。	表裏面及び両側面とも良く擦れている。	凝灰岩	1/2。 重さ95g 覆土中。

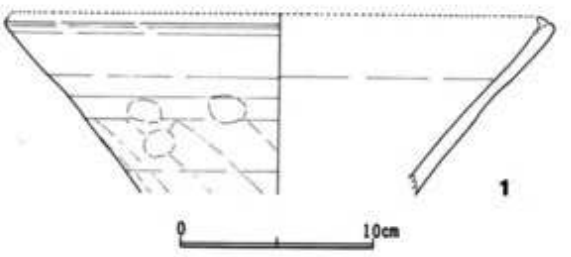
第9号井戸跡（第85図）

B地点Ⅲ区の西側に位置し、南側は第6号溝跡と接している。本井戸跡の周囲には、あまりピットは見られない。

井戸掘り方の平面形は、やや東西方向に長い楕円形に近い形態を呈している。規模は、東西方向3.06m・南北方向2.74mを測り、本遺跡内ではⅡ区の第5号井戸跡に次ぐ規模を誇る。深さは、確認面から1.90mまでしか掘れなかったため不明であるが、ローム層下の緑色粘土層を掘り込んでいる。断面の形態は、上半部が椀状を呈しながら途中から直線的に急傾斜し、深さ90cm～1mのところで、直径1.30mの円柱状に深くなっている。掘り方上半部の東側は、井筒に接してテラス状に一段深くなっている。井戸内に木枠や石組の痕跡は見られないため、素掘りの井戸であったと推測される。



第85図　第9号井戸跡



第86図　第9号井戸跡出土遺物

出土遺物は極めて少なく、覆土中より第86図№1鉢の破片が1片出土しただけである。

第9号井戸跡出土遺物観察表

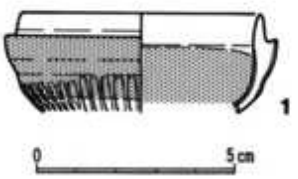
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口縁部径(28.2cm)	粘土紐積み上げ成形。体部は直線的に開き、口唇部は平坦面をもつ。器肉は薄い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面丁寧なナデ。	赤色粒・白色粒 内外－黒灰色 肉－茶褐色	1/5。在地産。 還元焔焼成。 覆土中。

第10号井戸跡（第89図）

B地点Ⅲ区の東側に位置する。本井戸跡の北側には掘立柱建物跡群が近接し、第15号掘立柱建物跡の柱穴の一部を切って掘削されている。本井戸跡の北西側と南東側に接して深さ30cm程度のピットがあるが、井戸の上屋に関係するものか不明である。

井戸掘り方の平面形は、北西～南東方向がやや長い楕円形に近い形態を呈している。規模は、北西～南東方向が1.24m・北東～南西方向が1.08mを測り、比較的小形の井戸である。深さは1.44mとやや浅いが、ローム層下の緑色粘土層を20cm程度掘り込んでいる。断面の形態は、深さ40cm～50cmの開析谷の覆土にあたる黒色土は直線的にやや傾斜しており、下半の地山がローム層の部分からは直径約85cm前後の円柱状に深く掘られている。底面は広く平坦である。井戸内からは長さ10cm～15cmの自然石が2～3個出土しただけであり、木枠や石組の痕跡が見られないことから、素掘りの井戸であったと推測される。

出土遺物は、覆土中より第87図№1の青白磁合子の破片が1片出土しただけである。



第87図　第10号井戸跡出土遺物

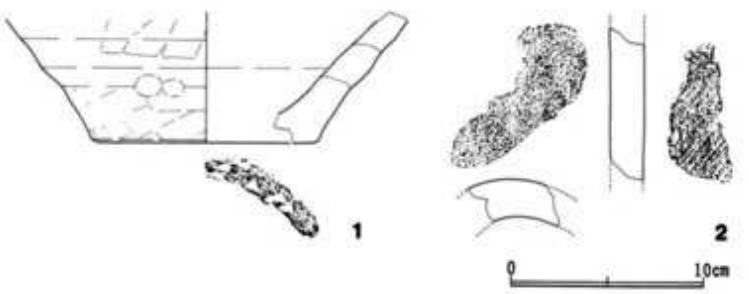
第10号井戸跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	青白磁合子	口縁部径(6.0cm)	ロクロ成形。体部は浅く、口縁部は短く直立する。器受部はあまり突出しない。	内外面回転ナデ。胴部外面押圧もしくは叩きによる平行線文を施す。内外面施釉。	黒色粒 内外－淡灰白色 釉－淡青色	1/4。 覆土中。

第11号井戸跡（第89図）

B地点Ⅲ区の東側に位置し、北側約1.50mには第10号井戸跡が近接している。本井戸跡の周囲には、ピットはまったく見られない。

井戸掘り方の平面形は、やや不整であるが円形に近い形態を呈している。規模は、南北方向1.20m・東西方向1.13mと比較的小形である。深さは1.38mとやや浅く、ローム

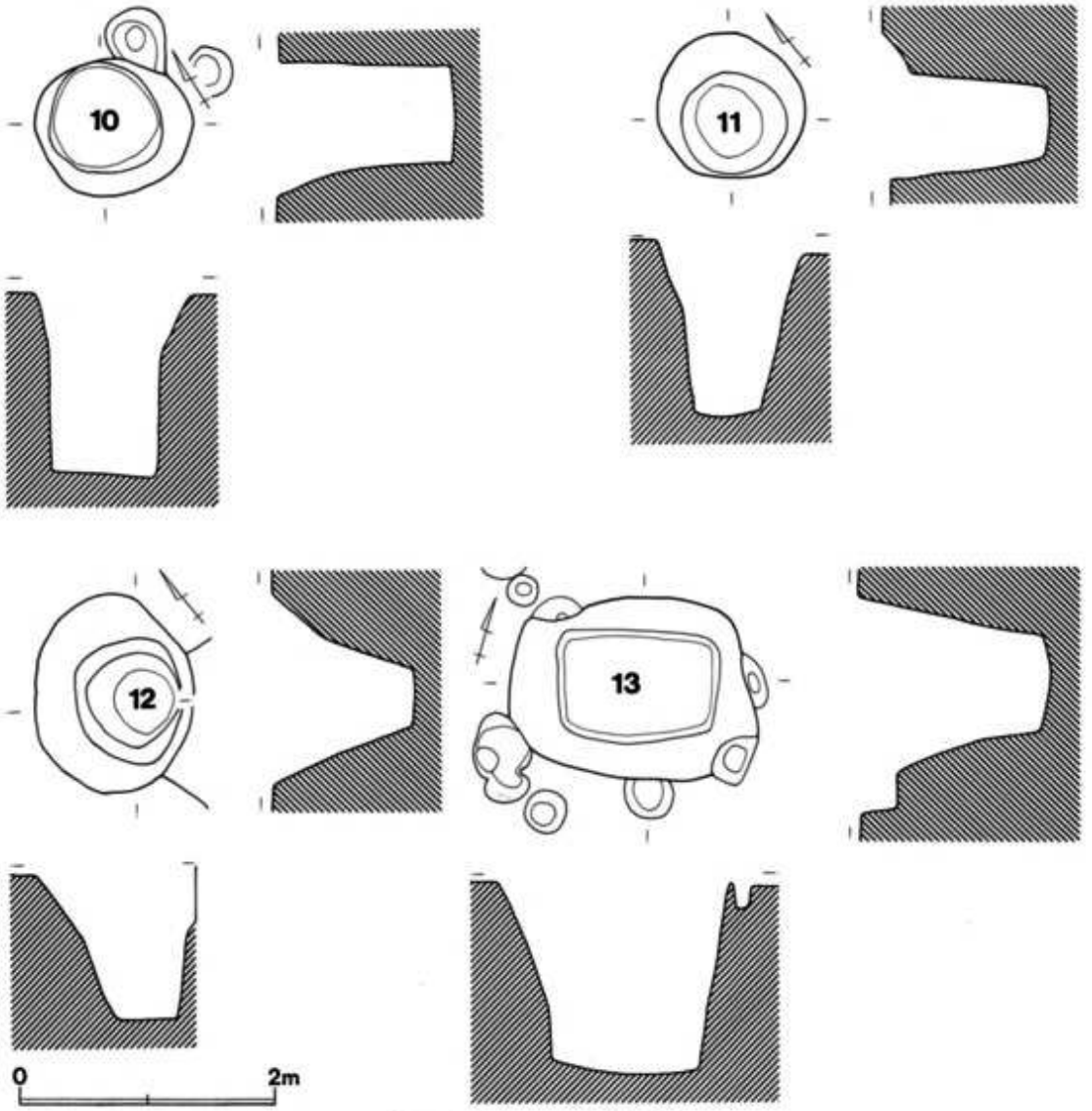


第88図　第11号井戸跡出土遺物

層下の緑色粘土層を20cm程度掘り込んでいる。断面の形態は、上半の開析谷の覆土にあたる黒色土部分は内湾ぎみに若干傾斜しており、深さ50cm前後の地山がローム層になる部分からは直径約80cm前後の円柱状に深く掘られている。井戸内には木枠や石組の痕跡が見られないことから、素掘りの井戸であったと推測される。

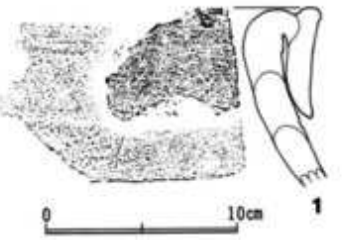
第11号井戸跡出土遺物観察表

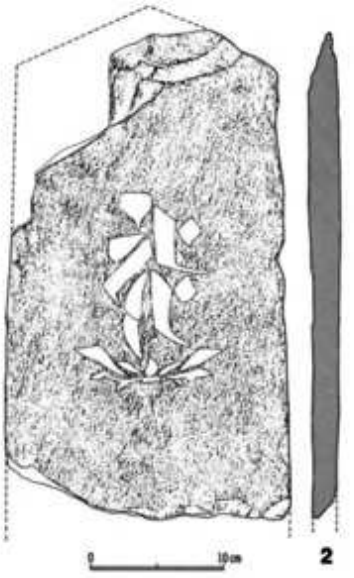
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	底部径 (11.6cm)	粘土紐積み上げ成形。体部は直線的に開き、底部は平底を呈する。	体部外面篦ナデ、内面ナデ、底部外面ナデ。	片岩粒・白色粒 外－明橙褐色 内－暗灰色	1/5。在地産。 底部外面下駄状の圧痕あり。 覆土中。
2	丸瓦	残存長 8.2 厚さ 1.7		凸面ナデ、凹面布目圧痕の後ナデ。	白色粒・黒色粒 凸－淡赤褐色	破片。 覆土中。



第89図　第10～13号井戸跡

出土遺物は比較的少ないが、二次焼成を受けた可能性がある鉢(No 1)や瓦(No 2)の破片が出土している。この他には、内耳鍋の小破片もある。





第90図　第12号井戸跡出土遺物

第12号井戸跡（第89図）

B地点Ⅲ区南端に位置し、堀によって四角に区画された敷地割りの南東隅に位置する。本井戸跡の周囲には、ピットはまったく見られない。

井戸掘り方の平面形は、北東～南西方向に長い楕円形に近い形態を呈している。規模は、北東～南西方向が1.55mあり、北西～南東方向は1.25mまで測れ、比較的小形の井戸である。深さは1.12mと比較的浅く、底面はローム層下の緑色粘土層に達していない。断面の形態は、上半が摺鉢状に緩やかに傾斜し、中位から直径70cmの円形状に急傾斜している。井戸内には木枠や石組の痕跡が見られないことから、素掘りの井戸であったと推測される。

出土遺物は比較的少ないが、井筒内の覆土下半より、比較的小形で中央に種子と蓮華座を配する板碑の破片(第90図No 2)が1点出土している。この他には、常滑甕の破片(No 1)が遺構確認面から出土しているが、混入の可能性が高い。

第12号井戸跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	常滑窯系甕	縁帯幅 5.6cm	粘土紐積み上げ成形。縁帯上部はやや突出し、下部内側は頸部に付着。	内外面とも回転ナデ。胴部外面に淡黄色の薄い自然釉がかかる。	白色粒 内外－暗茶褐色 肉－黒灰色	破片。 覆土中。
2	板碑	残存長 36.5 最大幅 21.0 厚さ 2.4	母石から板状に剥離し、縁を打ち欠き・ケズリにより形状を整える。	表裏面ともほとんど未調整。側縁は裏側から打ち欠き後雑な研磨。	緑色片岩	上端と下半を欠損。表面中央に浅い蓮華座と種子。覆土中。

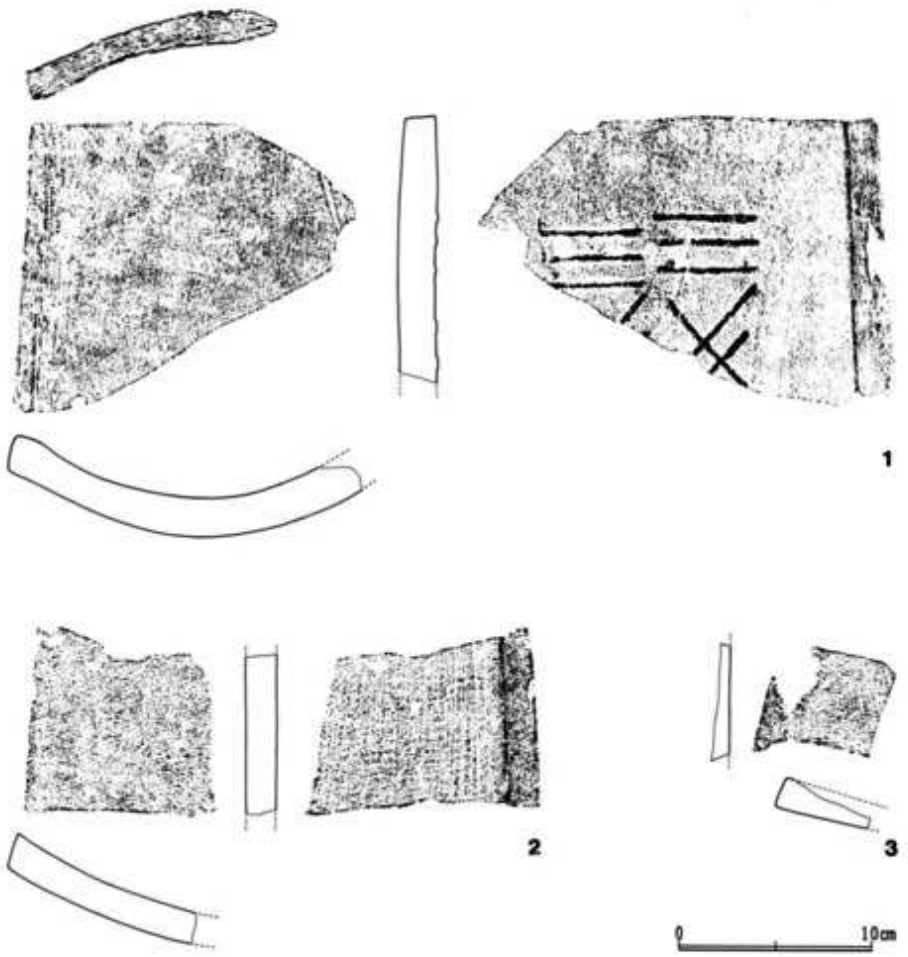
第13号井戸跡（第89図）

B地点Ⅰ区の中央やや北寄りに位置し、重複する第5号掘立柱建物跡の柱穴の一部を切っている。本井戸跡の周辺には多くのピットが見られるが、井桁や上屋との関係は不明である。

井戸掘り方の平面形は、コーナー部の丸みが強い隅丸長方形に近い形態を呈している。規模は、東西方向1.96m・南北方向1.44mを測る。深さは1.50mあり、ローム層下の緑色粘土層を20cm程度掘り込んでいる。断面の形態は、上半が直線的ではあるがやや傾斜して落ち込み、下半は比較的整った長方形を呈する箱形に深くなっている。底面は、広く平坦である。井戸内には木枠や石組の痕跡は見られないが、井戸の掘り方が四角形の木枠に合わせた形態のようにも思われ、使用時には井

筒内に木枠が存在し、井戸の廃絶とともに抜き取られた可能性も推測される。

出土遺物は比較的少なく、瓦の破片が3片(第91図)と、古墳時代中期の和泉式土器と考えられる破片が少量出土しただけである。



第91図　第13号井戸跡出土遺物

第13号井戸跡出土遺物観察表

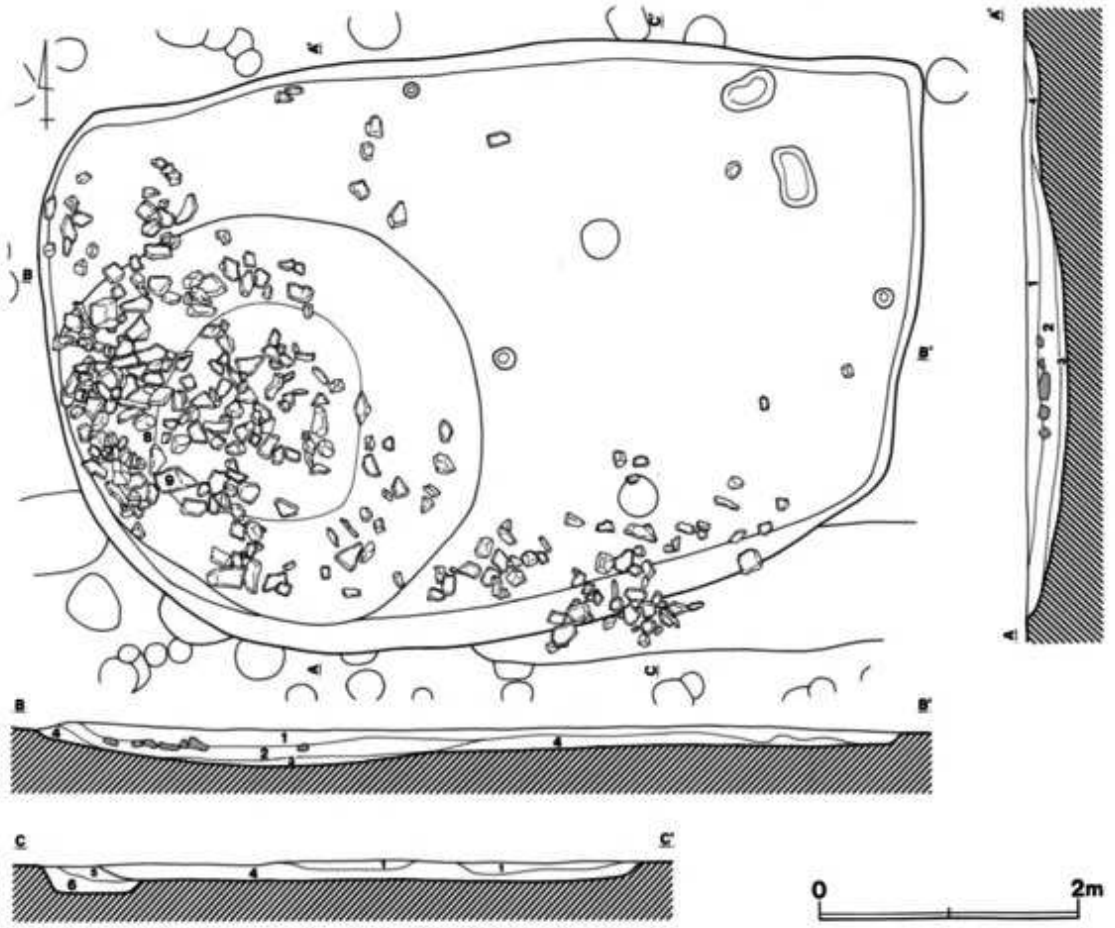
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	平瓦	残存長 14.6 残存幅 18.2 厚さ 2.0	一枚作り。狭端部はやや薄くなり、側面付近は若干肥厚する。	凸面ナデの後中央部に文様叩き、凹面布目圧痕の後ナデ。端面・側面ともナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	約1/3。 覆土中。
2	平瓦	残存長 9.1 残存幅 10.2 厚さ 1.6	厚さは比較的薄く、均一である。凹凸両面とも砂付着。	凸面ナデの後縄目叩き、凹面縦方向のナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色 肉－灰色	破片。 覆土中。
3	平瓦	残存長 6.6 残存幅 6.1 厚さ 1.6	厚さは比較的薄い。凹面側は剥離している。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凸－淡灰色 肉－淡灰褐色	破片。 覆土中。

5．集石遺構

第1号集石遺構（第92図）

B地点のⅡ区南西側に位置し、重複する第16号土壙や第12号溝跡及び第28号掘立柱建物跡を切っている。また、東側約6mにはほぼ同時期と考えられる第2号集石遺構がある。

本集石遺構は、比較的規模の大きな長方形ぎみの竪穴状遺構とでも言うべき掘り込みの覆土中に、多量の自然石が集中して見られるものである。この長方形ぎみの形態を呈する掘り込みは、東西方向6.87m・南北方向4.51mを測り、確認面からの深さが15cm前後の比較的浅いもので、壁は非常に緩



第92図　第1号集石遺構

第1号集石遺構土層説明

〈第1号集石遺構〉

第1層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、鉄斑を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：暗灰色土層（ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第3層：灰色土層（鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

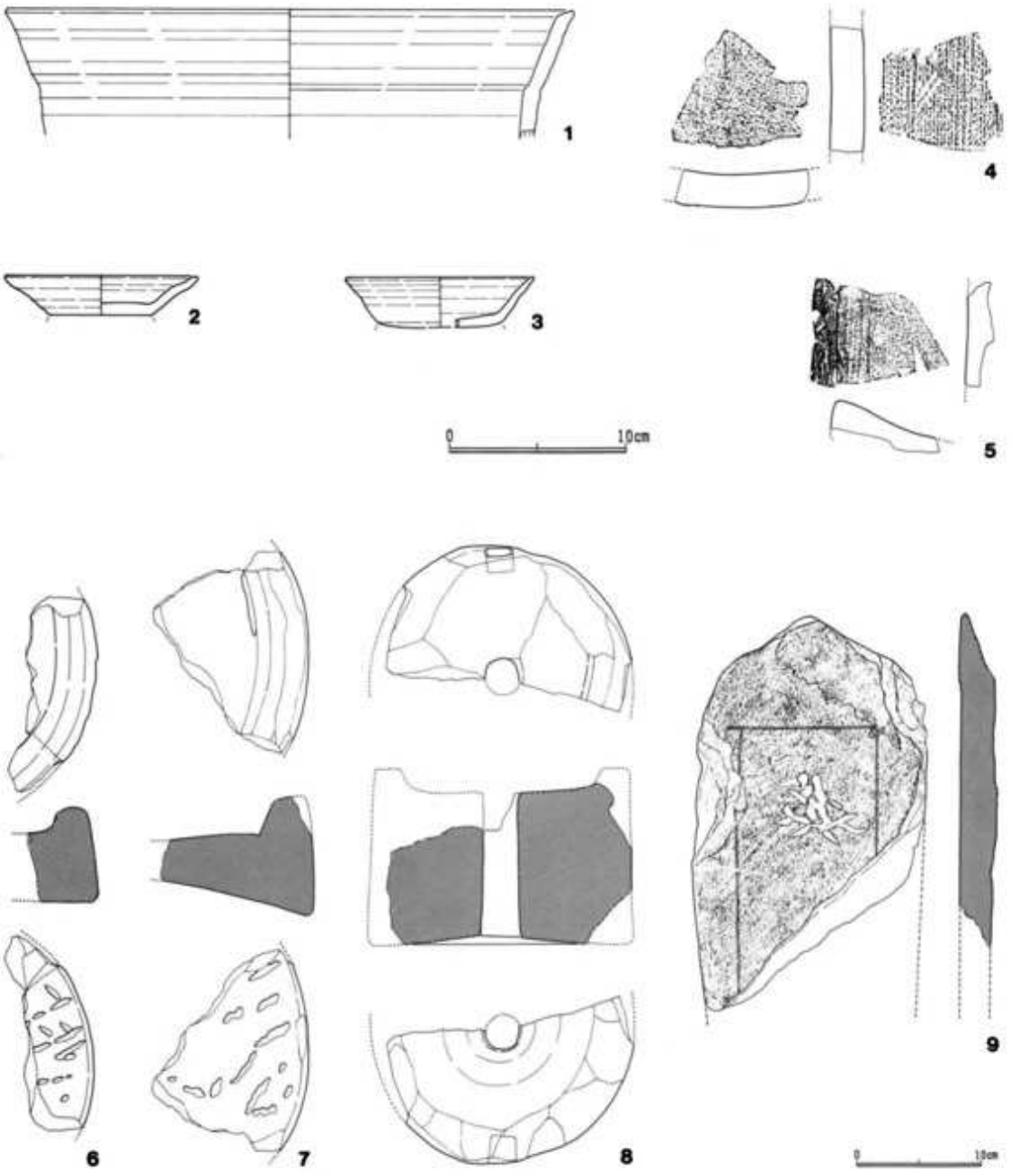
第4層：暗灰褐色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

〈第12号溝跡〉

第5層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

やかに立ち上がり、底面は比較的平坦に掘られている。掘り込み内の南西端には直径約３ｍ程度の円形を呈する浅い皿状の掘り込みがある。この円形の浅い掘り込みは、長方形状の掘り込みに当初から伴っていたものではなく、後に掘削されたものであるが、これらはいずれも人為的に埋め戻された可能性が高いことや集積された石の分布から見ても、両者はそれほど時間差を有するものではないと思われる。石は、５cm以下の比較的小形の石はあまり見られず、10cm以上の中形から大形の石が主体である。これらの石は、長方形状の掘り込みの南側から西側にかけて集中的に分布してい



第93図　第１号集石遺構出土遺物

るが、規則的な配列は見られず、周囲から投げ込まれたか乱雑に置かれただけのものと思われる。出土層位は、底面直上のものはほとんどなく、大半は第2層～第4層上面に集中している。遺物は、これらの多量の自然石に紛れて、石臼(No6～8)や板碑(No9)の破片とともに、内耳鍋(No1)や土師質土器皿(No2・3)と平瓦(No4・5)の破片なども出土している。また、No8の茶臼の破片は、第2号集石遺構から出土した破片と接合している。

第1号集石遺構出土遺物観察表

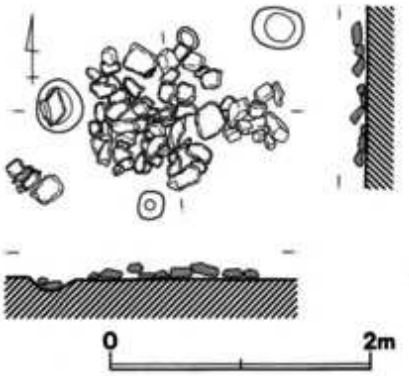
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	内耳鍋	口縁部径 (32.2cm) 残存高 7.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。口唇部は平坦面をなす。	口縁部内外面回転ナデ。胴部内外面ナデ。	片岩粒・白色粒 外－黒褐色 内－暗褐色 肉－淡茶褐色	1/5。 外面に煤付着。 覆土中。
2	土師質土器皿	口径(11.0) 器高 2.2 底径(5.8)	ロクロ成形。口縁部は外反ぎみに開き、口唇部はやや内湾する。底部は平底。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	赤色粒・白色粒 外－暗茶褐色 内－橙褐色	1/3。 内面煤付着。 覆土中。
3	土師質土器皿	口径(10.8) 器高 2.8 底径 (7.0)	ロクロ成形。口縁部はやや外反ぎみに開く。底部は突出しない平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	1/4。 器表面摩滅。 覆土中。
4	平瓦	残存長 5.3 残存幅 7.4 厚さ 1.9	厚さは比較的均一である。凹面側砂付着。	凸面縄目叩き。凹面ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。
5	平瓦	残存長 6.5 残存幅 6.6	凸面剥離。	凹面布目圧痕。側面箆切り後ナデ。	白色粒 凹－灰色	破片。 覆土中。
6	石製 粉挽臼 (上臼)	残存長 5.7 高さ 7.7 ふくみ 0.4	上縁は狭く、丸みを帯びている。挽木穴は方形ぎみ。	側面雑な研磨。上面研磨、下面は擦り減って摩滅し、目は不明瞭。	安山岩	側面約1/5。 覆土中。
7	石製 粉挽臼 (上臼)	残存長 12.4 高さ 9.6 ふくみ 2.9	上縁は高く角張っている。側面は垂直ぎみで、ふくみは深い。	側面雑な研磨。上面研磨、下面は擦り減って摩滅し、目は不明瞭。	安山岩	約1/5。 覆土中。
8	石製 茶臼 (上臼)	残存長19.8 高さ 13.0 ふくみ 0.6	表面の大部分は剥離している。芯棒穴は貫通し、挽木穴は方形を呈している。	側面及び上面は丁寧な研磨。下面は良く擦れて、目は見られない。	安山岩	約1/2。 2号集石の破片と接合。 覆土中。
9	板碑	残存長 32.2 幅 18.6 厚さ 3.0	母岩から板状に剥離後、側縁部を主に裏側から打ち欠き後、一部表面から細かな打ち欠きを行って形状を整えている。	表面は一部鑿ケズリの後研磨、裏面雑な鑿ケズリ。表面には細い1条の区画線を配し、中央に蓮華座と梵字を模した彫り込みをもつ。	緑色片岩	約1/2。 覆土中。

第2号集石遺構（第94図）

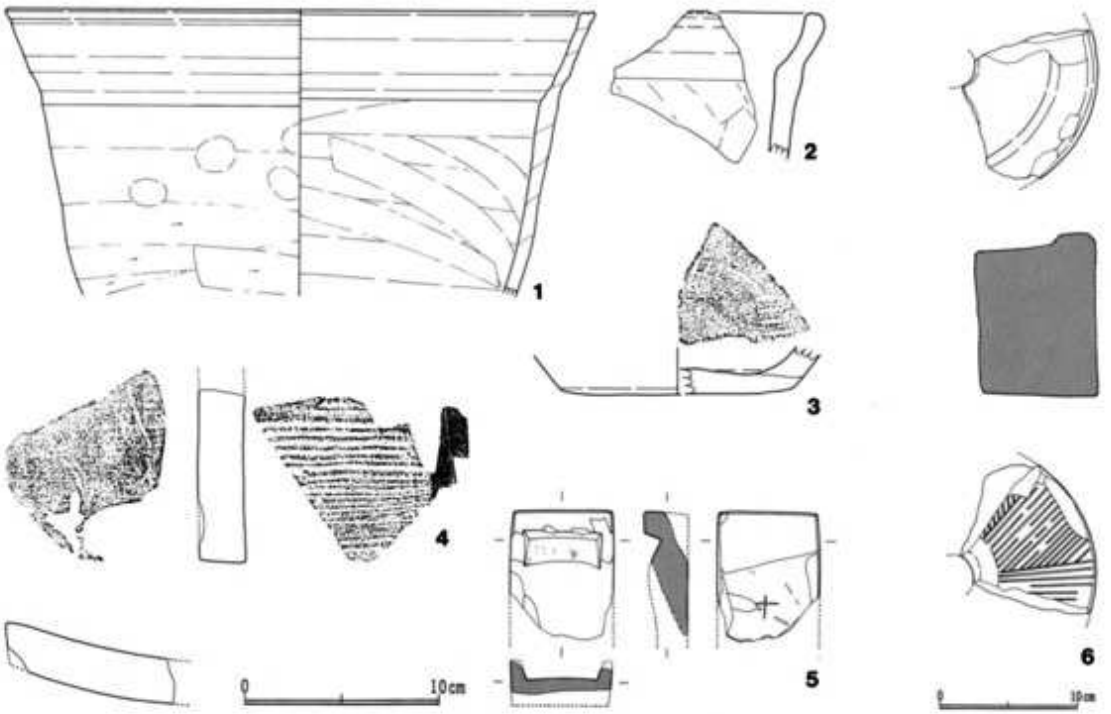
B地点のII区南端の中央部に位置し、西側約6mには第1号集石遺構がある。本集石は、第1号集石遺構とほぼ同時期と考えられることから、重複する第28号掘立柱建物跡よりも新しいものと推測される。

本集石は、南北方向1.20m・東西方向1.60mのほぼ楕円形の範囲に、約70個～80個の大小様々な

自然石が人為的に集積されたもので、掘り込み等の遺構は伴わない。石は、5cm以下の比較的小形の石はあまり見られず、10cm弱～25cm程度の中形から大形の石が主体であるが、石の大きさや形状はあまりそろっていない。これらの石は、規則的な配列やあるいは意図的に敷かれたような形跡はなく、また焼石なども見られないことから、その性格については不明である。遺物は、これらの石に紛れて茶臼(No 6)や硯(No 5)の破片とともに、内耳鍋(No 1・2)や摺鉢(No 3)及び瓦(No 4)の破片が少量混入して出土している。また、本集石内から出土した別の茶臼の破片は、第1号集石遺構から出土した茶臼の破片(第95図No 8)と接合している。



第94図　第2号集石遺構



第95図　第2号集石遺構出土遺物

第2号集石遺構出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	内耳鍋	口縁部径 (30.4cm) 残存高 14.6cm	粘土紐積み上げ成形。口唇部は平坦面をもち、外側に若干肥厚する。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。胴部はやや直線的である。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上半ナデ・下半ケズリの後ナデ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－暗茶褐色 内－茶褐色	1/4。 外面に煤付着。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
2	内耳鍋		粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや短く内湾ぎみに開く。器肉は比較的厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡橙褐色	破片。 覆土中。
3	擂鉢	底部径 (12.2cm)	粘土紐積み上げ成形。底部は平底を呈し、外周は摩滅している。	体部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ナデ。内面に間隔の広い擂目をもつ。	白色粒 外－暗灰褐色 内－淡灰褐色	底部1/4。 覆土中。
4	平瓦	残存長 10.4 残存幅 9.6 厚さ 2.3	厚さは均一で、比較的厚い。	凸面木口状工具によるナデ、凹面布目圧痕の後ナデ。端面・側面とも施切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色 側面－暗灰色	破片。 覆土中。
5	硯	残存長 6.6 幅 5.4 厚さ 2.3	平面形は、長方形もしくは台形を呈すと思われる。端部・側面とも若干外傾ぎみ。	表裏面及び各側面とも丁寧な研磨。裏面には傷が多く見られる。		約1/3。 覆土中。
6	石製 茶臼 (上臼)	残存長 9.0 高さ 12.0 ふくみ 0.2	上縁部は低い。芯棒穴は貫通している。擂り目は8角と思われる。	側面及び上面は丁寧な研磨。下面は良く擦れており、目の一部は摩滅している。	安山岩	約1/4。 覆土中。

6．土　壙

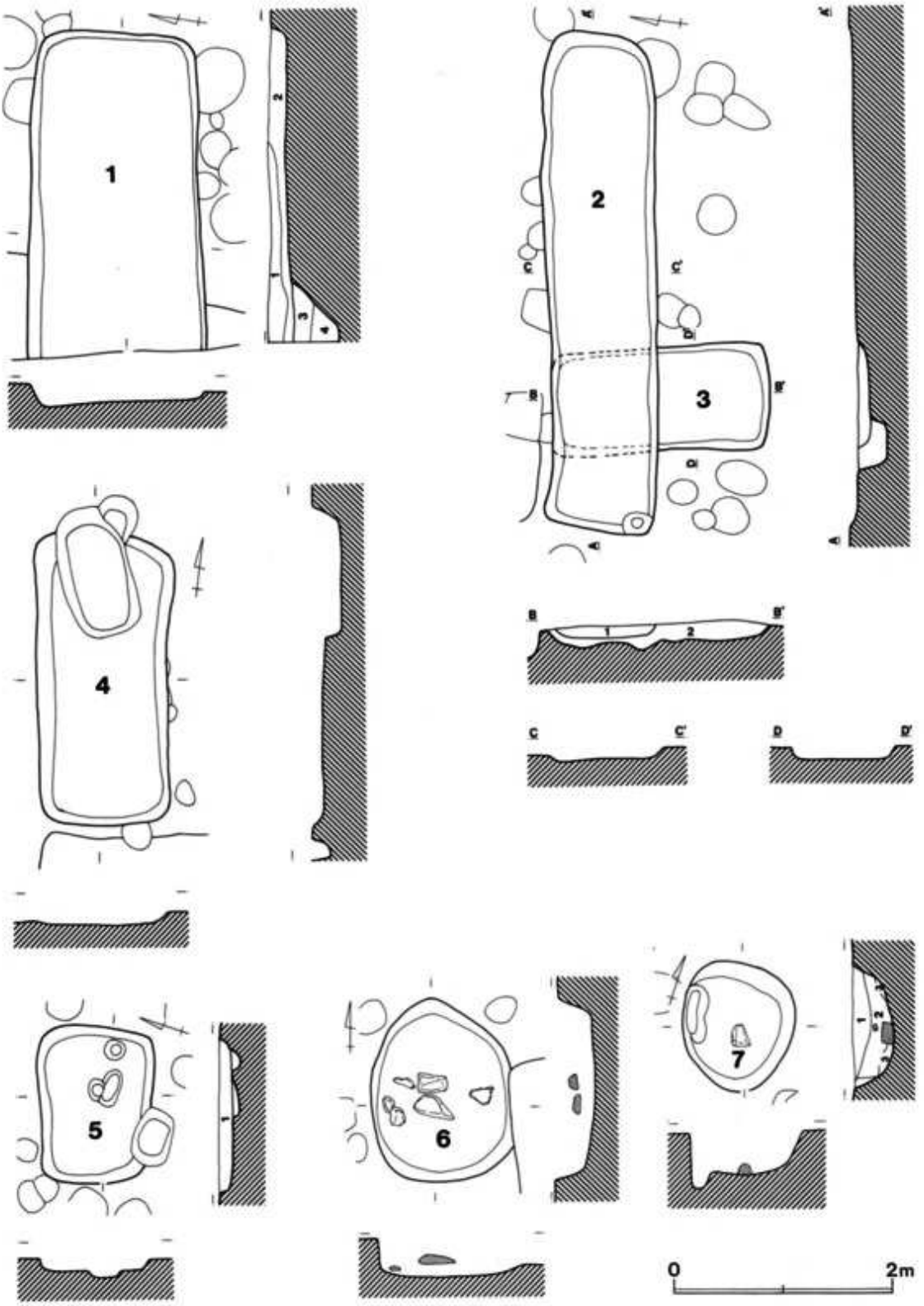
土壙番号	位置	形態	規模(m)	深さ(cm)	出土遺物	備考
1号土壙	BI区	隅丸長方形	(3.02)× 1.68	17		SD1を切っている。
2号土壙	BI区	長方形	4.64 × 1.06	10		SK3・SB5・SB29を切る。
3号土壙	BI区	長方形	4.64 × 1.06	10		SB29を切り、SK2に切られている。
4号土壙	BI区	隅丸長方形	2.70 × 1.30	12		SB18・SB29を切っている。
5号土壙	BI区	隅丸長方形	1.46 × 1.10	14		SB5・SB29と重複。
6号土壙	BI区	不整円形	1.72 × 1.30	38	古銭、土師質土器皿片、自然石。	竪穴状遺構に切られている。
7号土壙	BI区	不整円形	1.20 × 1.06	38	自然石。	SB5・SB29と重複。底面中央に自然石を1個据えている。
8号土壙	BI区	隅丸長方形	2.70 × 1.34	20		SK9・SK10を切る。土壙底面に黒褐色土が薄く堆積している。
9号土壙	BI区	隅丸長方形	1.42 × 0.98	10		SK8に切られている。
10号土壙	BI区	円形	1.08 × 1.08	30		SK8に切られている。
11号土壙	BI区	楕円形	1.24 × 1.04	12		SD11を切っている。
12号土壙	BI区	隅丸長方形	3.00 × 1.36	80		堀跡に切られている。

第1号土壙土層説明
第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第3・4層：第1号溝跡覆土。

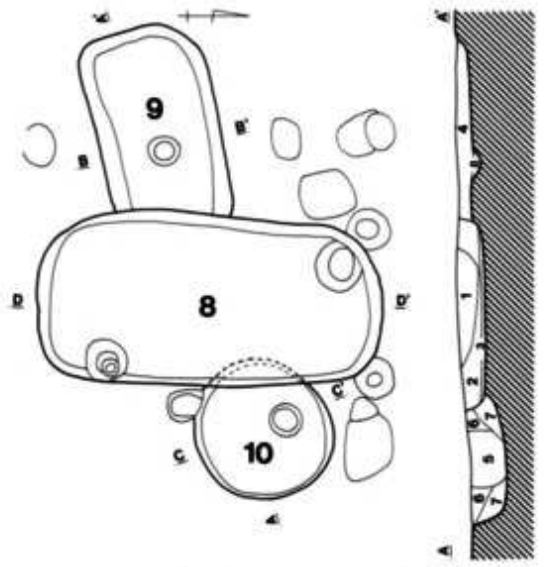
第2・3号土壙土層説明
第1層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

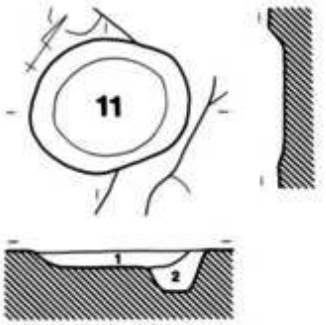
第5号土壙土層説明
第1層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

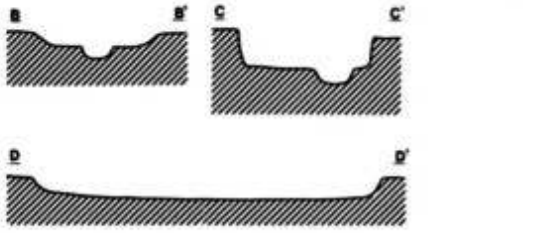
第7号土壙土層説明
第1層：暗褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：黒色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

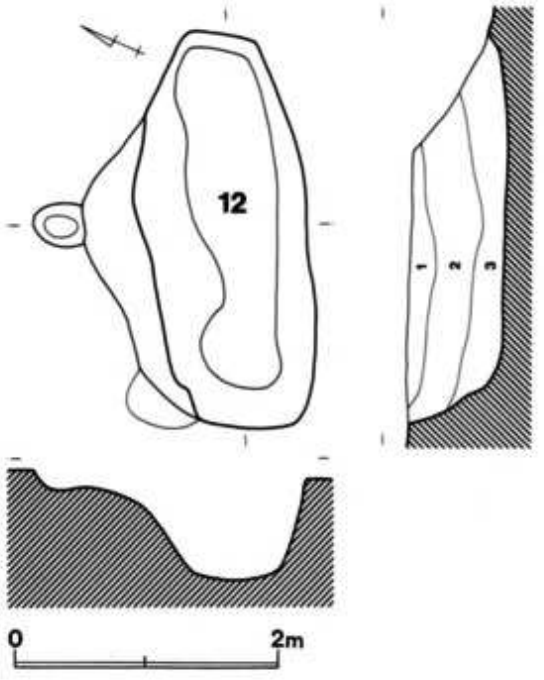


第96図　土　　壙(1)









第8～10号土壙土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第3層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：暗褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第5層：黒褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第6層：黒褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第7層：黒褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第8層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

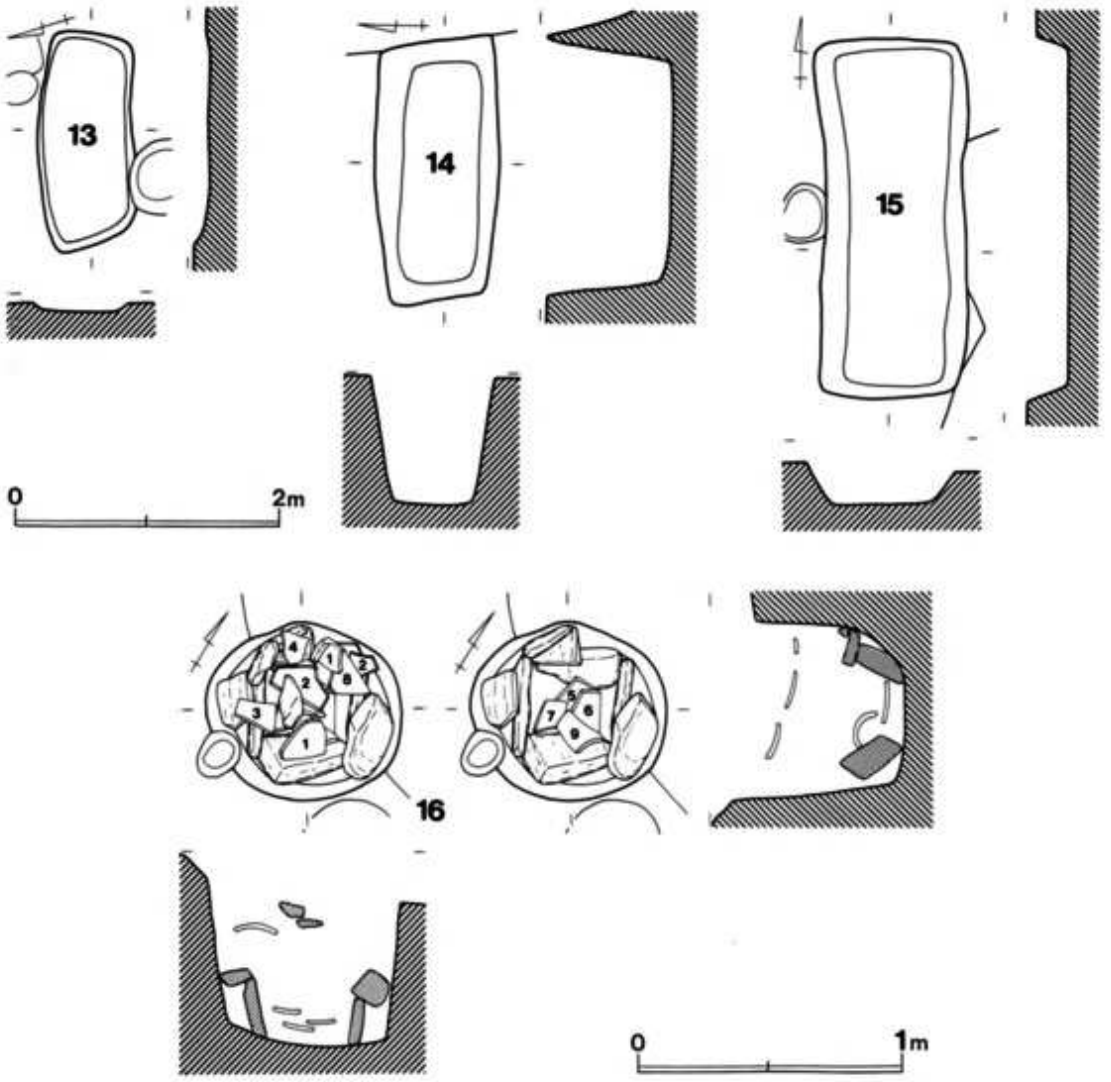
第11号土壙土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第12号土壙土層説明

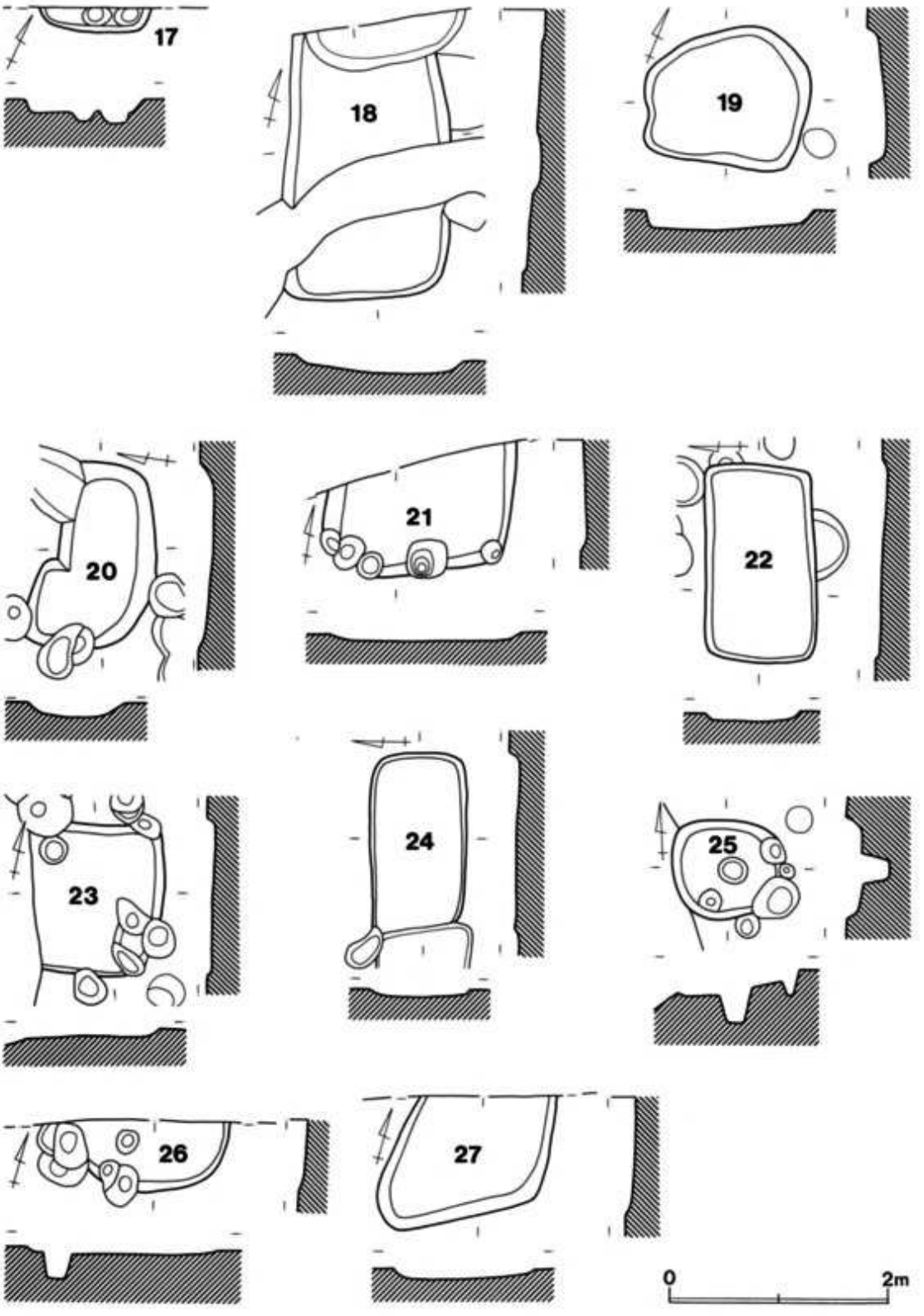
第1層：暗茶褐色土層（鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第2層：黒褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：黒褐色土層（鉄斑・ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第97図　土　　壙(2)

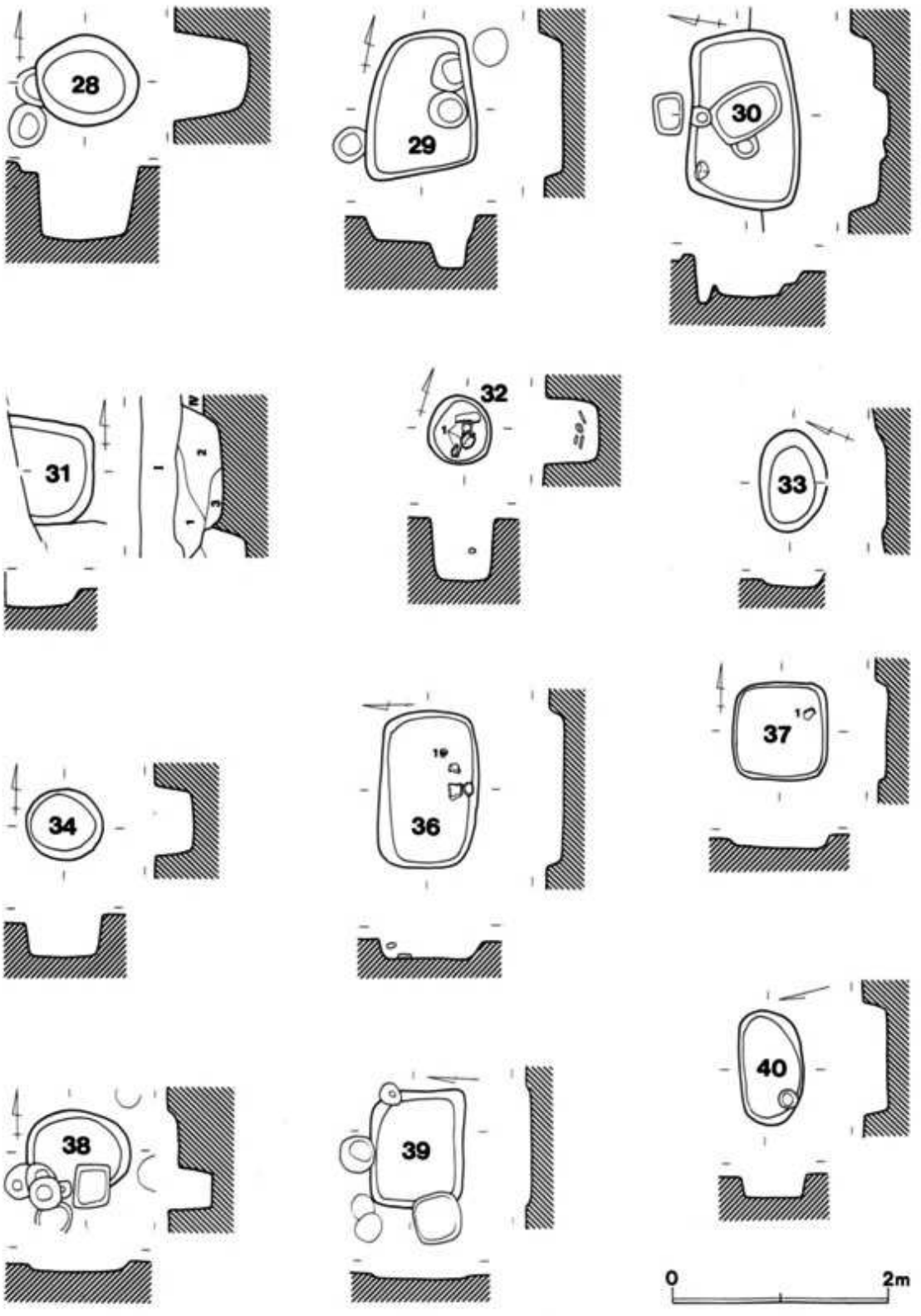


第98図　土　　壙(3)

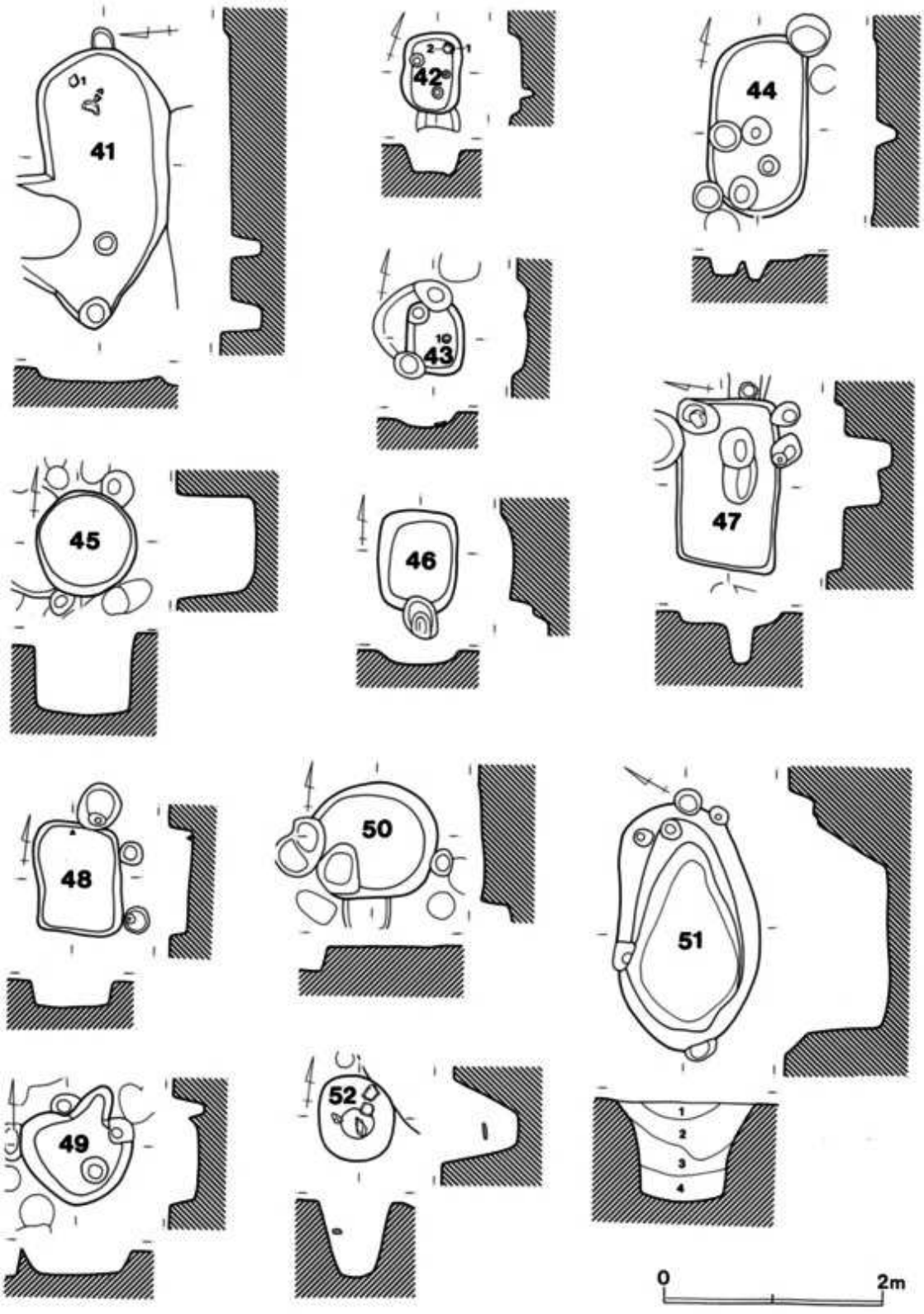
土壙番号	位置	形態	規模(m)	深さ(cm)	出土遺物	備考
13号土壙	BI区	不整長方形	1.70 × 0.76	8		
14号土壙	BI区	長方形	2.00 × 0.98	100	常滑窯系甕破片。	SD9に切られている。
15号土壙	BI区	長方形	2.98 × 1.18	32		SB4を切っている。
16号土壙	BII区	円形	0.76 × 0.69	73	軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、自然石。	第1号集石遺構に切られている。土壙底面に方形の石囲いを伴う。
17号土壙	BI区	不明	1.06 ×(0.22)	14		土壙の大部分は調査区外にあるため全容は不明である。
18号土壙	BI区	(隅丸長方形)	(2.48)× 1.52	18		土壙の中央部と北側を攪乱に切られている。
19号土壙	BI区	不整形	1.56 × 1.32	18		
20号土壙	BI区	(隅丸長方形)	1.72 × 0.94	16		
21号土壙	BI区	不明	(1.10)× 1.72	8		土壙の北側半分は調査区外にあるため全容は不明である。
22号土壙	BI区	長方形	1.84 × 1.04	10		SD9を切っている。
23号土壙	BII区	不明	1.40 ×(1.24)	8		堀跡に切られている。
24号土壙	BII区	隅丸長方形	(1.62)× 0.90	8	在地産鉢破片。	SB23と重複し、土壙の西端を攪乱を切られている。
25号土壙	BII区	隅丸長方形	1.04 × 0.92	16		SB22と堀跡を切っている。



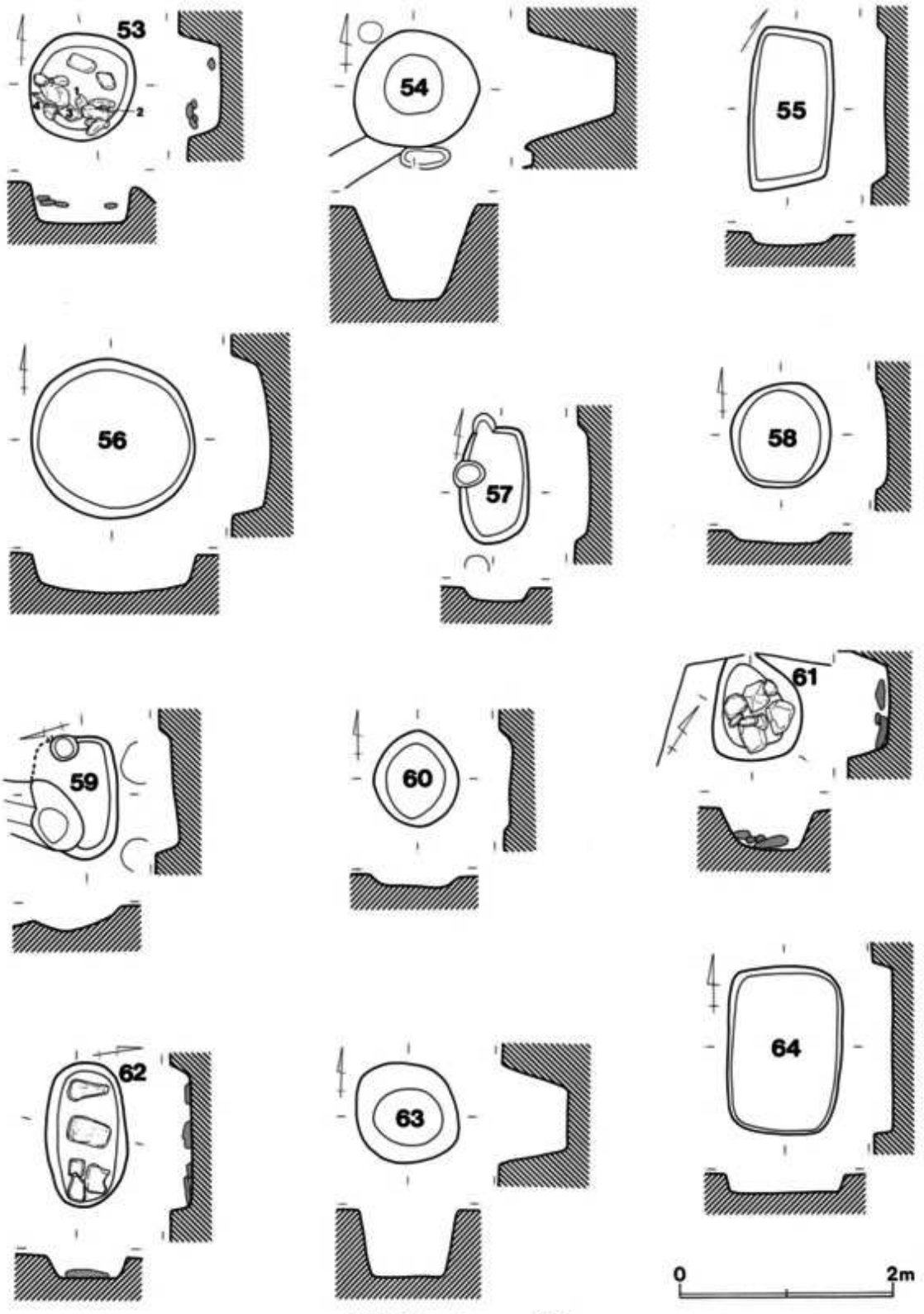
第99図　土　　壙(4)



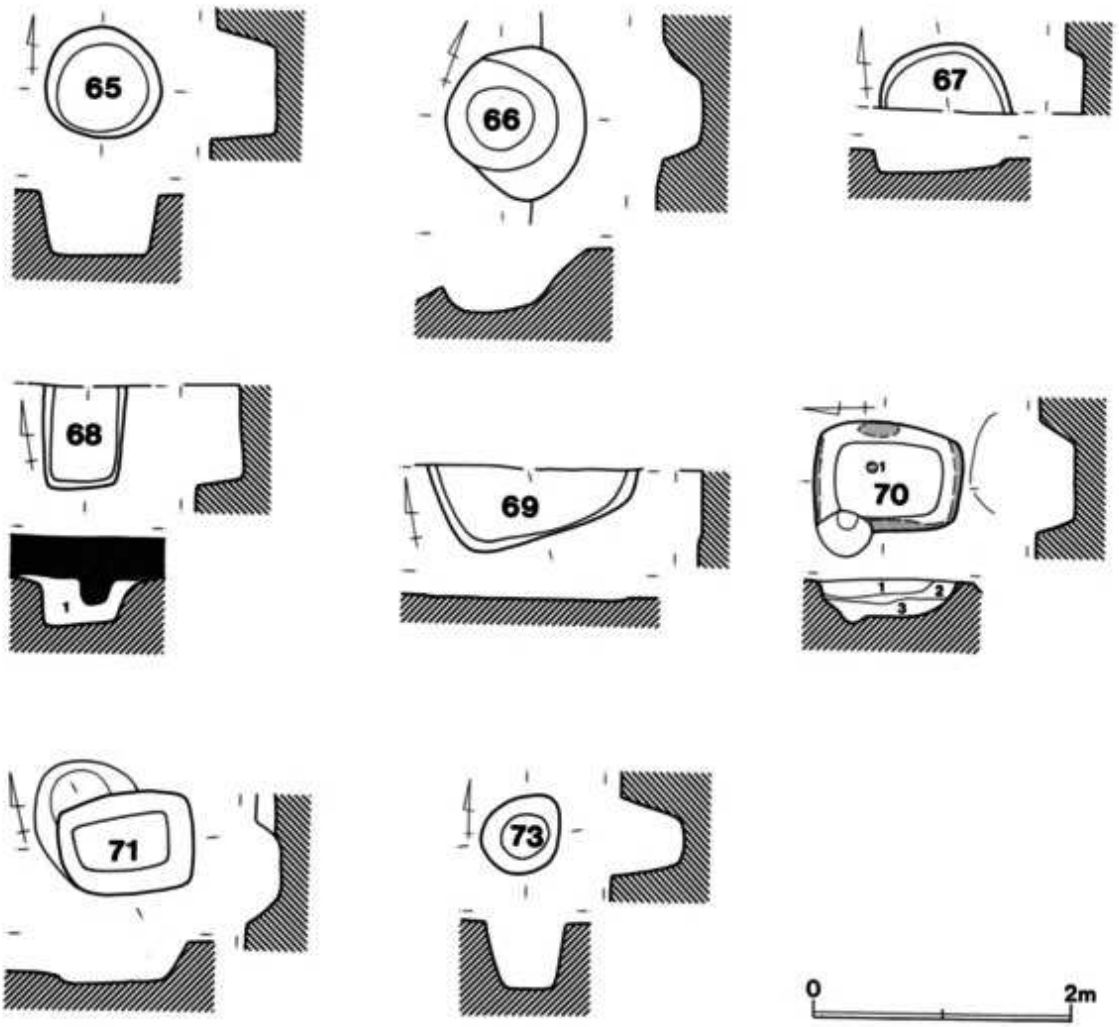
第100図　土　　壙(5)



第101図　土　　壙(6)



第102図　土　　壙(7)



第103図　土　　壙(8)

第31号土壙土層説明

第1層：暗茶褐色土層（B軽石を均一に、ロームブロック・焼土粒子を微量含む。ねんせい・しまりともない。）
第2層：暗褐色土層（ローム粒子･ロームブロックを多量に､焼土粒子･炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第3層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第51号土壙土層説明

第1層：暗褐色土層（B軽石を多量に、ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黒褐色土層（鉄斑を多量に、B軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：黒色土層（ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：黒褐色土層（B軽石・鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第68号土壙土層説明

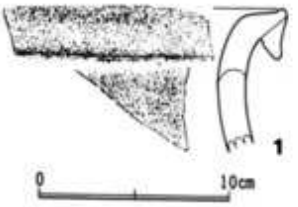
第1層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）

第70号土壙土層説明

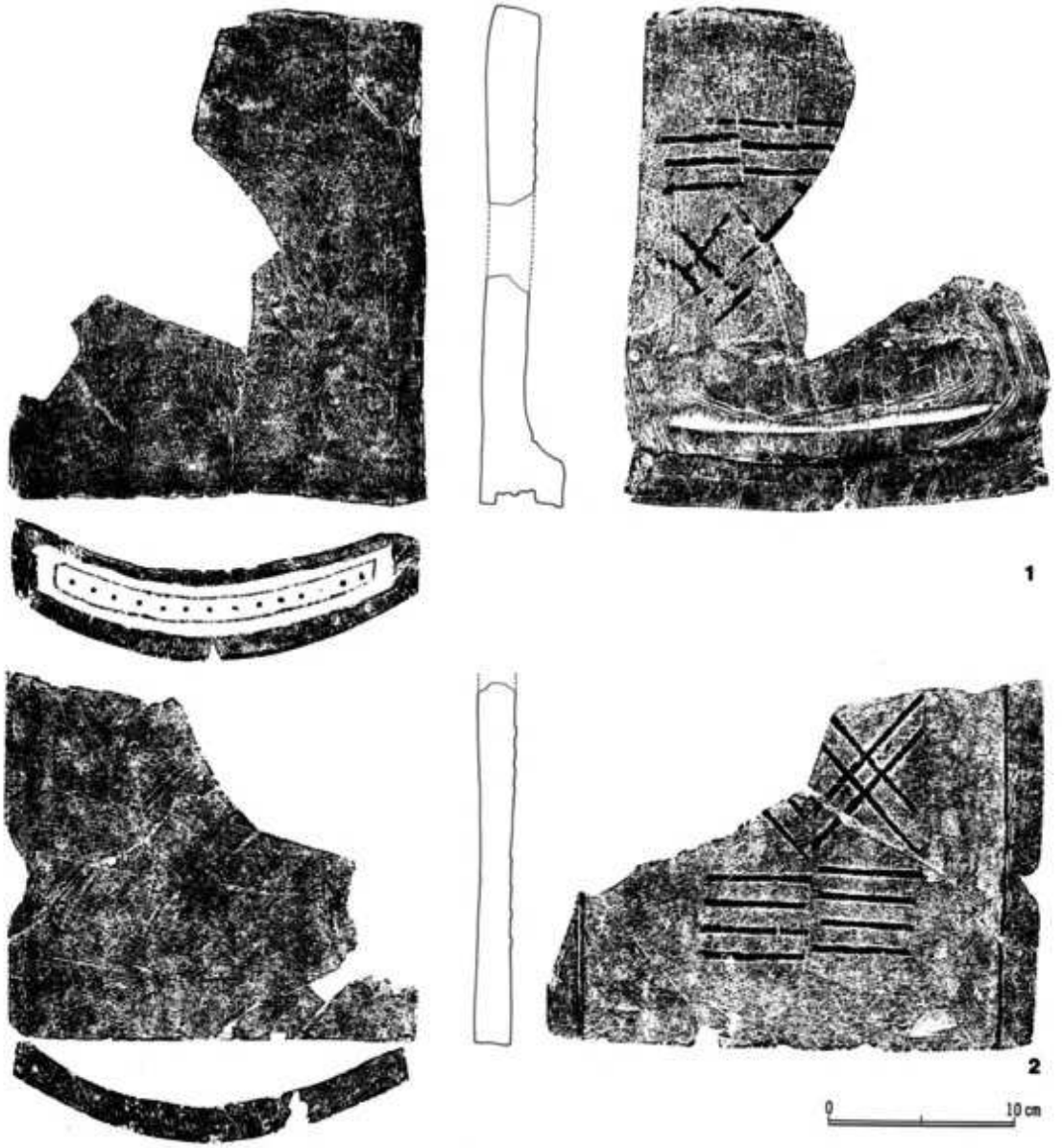
第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、B軽石・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第3層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

土壙番号	位置	形態	規模(m)	深さ(cm)	出土遺物	備考
26号土壙	BII区	不明	(1.54)×(0.68)	6		土壙の大部分は調査区外にあるため全容は不明である。
27号土壙	BII区	不明	1.50 ×(1.24)	11		土壙の北側半分は調査区外にあるため全容は不明である。
28号土壙	BII区	楕円形	0.96 × 0.84	72	土師質土器皿破片。	
29号土壙	BII区	不整長方形	1.32 × 1.00	24	在地産鉢破片。	SB23と重複し、土壙の南端を攪乱に切られている。
30号土壙	BII区	不整長方形	1.64 × 1.04	22	内耳鍋破片。	SB23を切り、土壙の南側を攪乱に切られている。
31号土壙	BI区	不明	0.98 ×(0.76)	16		SD11を切っている。
32号土壙	BV区	円形	0.64 × 0.60	60	常滑窯系甕破片多数、自然石。	
33号土壙	BV区	楕円形	0.94 × 0.62	12		
34号土壙	BV区	円形	0.72 × 0.66	36		
36号土壙	BI区	隅丸長方形	1.46 × 0.92	18	瀬戸窯系小壺、自然石。	1号住を切っている。
37号土壙	BI区	隅丸方形	0.90 × 0.90	12	平瓦。	1号住を切っている。
38号土壙	BI区	(楕円形)	0.98 ×(0.80)	10		SB1に切られている。
39号土壙	BI区	長方形	1.10 × 0.88	6		第1号構列跡に切られている。
40号土壙	BIV区	不整形	1.06 × 0.60	24		
41号土壙	BII区	不整形	2.62 × 1.25	14	内耳鍋破片。	SB28やSD12を切り、北側の一部に攪乱を受けている。
42号土壙	BII区	隅丸長方形	0.74 × 0.55	26	土師質土器皿、古銭。	SB28と重複している。
43号土壙	BII区	隅丸長方形	(0.66)× 0.54	14	土師質土器皿、古銭。	SB22と重複し、西側上半に攪乱を受けている。
44号土壙	BII区	隅丸長方形	1.68 × 0.94	5		
45号土壙	BII区	円形	1.00 × 0.96	76	丸瓦。	SB25と重複している。
46号土壙	BII区	隅丸長方形	0.94 × 0.64	13		SB25と重複している。
47号土壙	BII区	長方形	1.60 × 0.96	16	在地産鉢破片。	
48号土壙	BII区	隅丸長方形	1.02 × 0.81	24	古銭。	
49号土壙	BII区	不整形	1.06 × 1.02	23		
50号土壙	BII区	楕円形	1.16 × 1.08	8		SB26を切っている。
51号土壙	BII区	不整楕円形	2.28 × 1.26	98	平瓦、自然石。	
52号土壙	BII区	不整円形	0.80 × 0.70	72	平瓦、自然石。	SD8に切られている。
53号土壙	BII区	不整円形	1.00 × 0.98	40	石製粉挽臼、板碑、自然石。	
54号土壙	BIII区	円形	1.18 × 1.10	90	内耳鍋破片、鬼瓦。	土壙上面をSD7に切られている。
55号土壙	BIII区	不整長方形	1.52 × 0.80	12		近世後半以降のもので、覆土中にA軽石を多量に含む。
56号土壙	BIII区	円形	1.53 × 1.48	36		近世後半以降のもので、覆土中にA軽石を多量に含む。
57号土壙	BIII区	不整長方形	1.10 × 0.65	16		
58号土壙	BIII区	不整円形	0.98 × 0.92	14		
59号土壙	BIII区	不整形	1.14 × 0.80	22		土壙上面に攪乱を受けている。
60号土壙	BIII区	不整円形	0.90 × 0.80	12		SB9と重複している。
61号土壙	BI区	不整形	(1.00)× 0.82	42	自然石。	底面上から自然石が多数出土。
62号土壙	BIII区	隅丸長方形	1.36 × 0.76	20		底面上に平坦な石が敷かれている。
63号土壙	BIV区	不整円形	0.96 × 0.94	66		
64号土壙	BIV区	隅丸長方形	1.58 × 1.06	17	平瓦、在地産鉢破片。	
65号土壙	BII区	不整円形	0.90 × 0.84	50	在地産片口鉢破片。	
66号土壙	BV区	不整円形	1.20 × 1.06	36		堀跡に上半を切られている。
67号土壙	C地点	不明	1.02 ×(0.52)	16		土壙の南側半分は調査区外にあるため全容は不明である。
68号土壙	C地点	(長方形)		38		
69号土壙	C地点	不明	1.64 ×(0.68)	2		土壙の北側半分は調査区外にあるため全容は不明である。
70号土壙	C地点	長方形	1.14 × 0.84	30	土師質土器皿、古銭。	各壁の一部は焼けている。
71号土壙	C地点	長方形	1.04 × 0.80	24		第1号門跡を切っている。
73号土壙	BIII区	不整円形	0.60 × 0.60	52	内耳鍋。	内耳鍋は底抜けで、伏せた状態で出土している。

第6号土壙

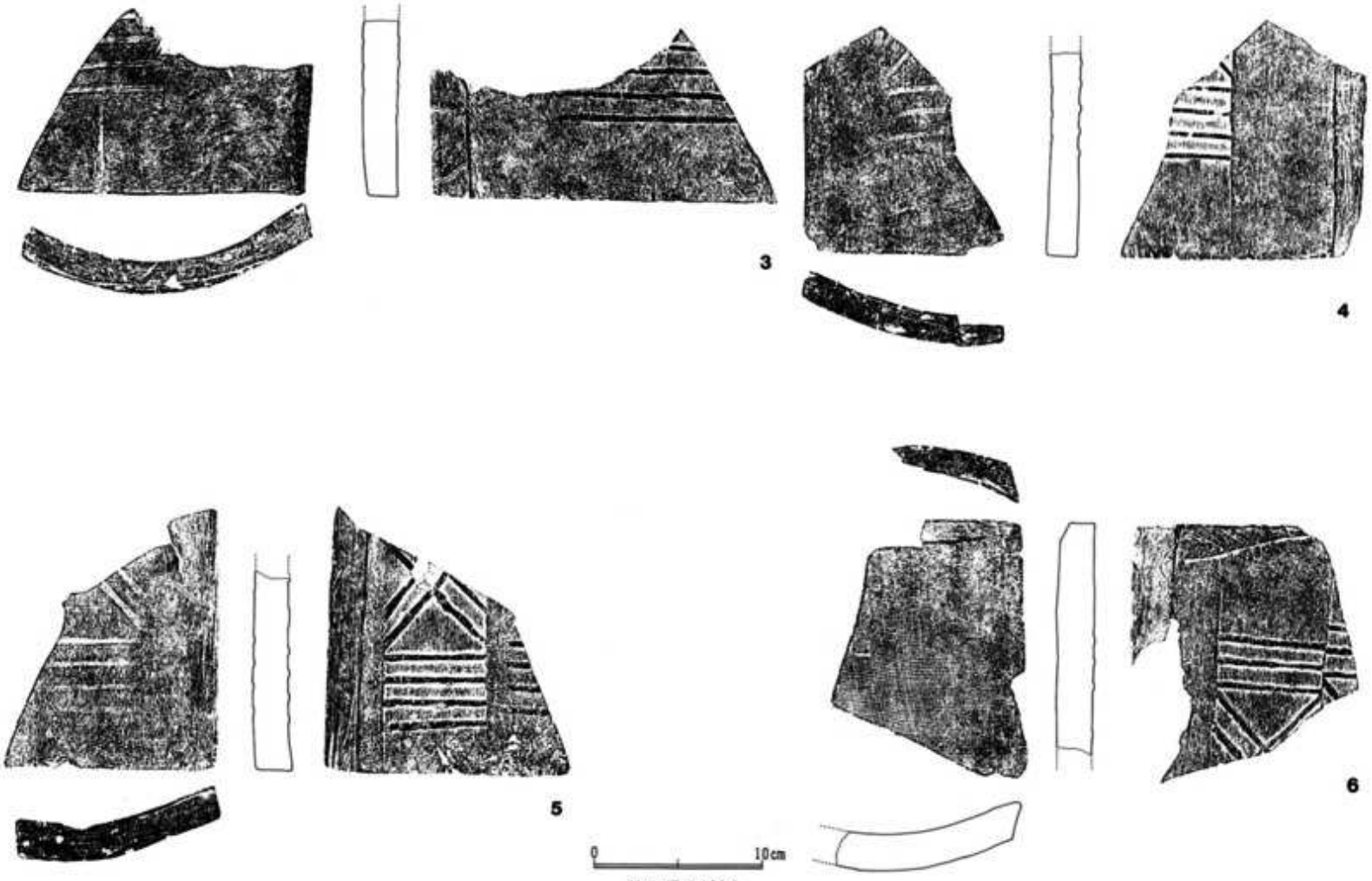


第14号土壙



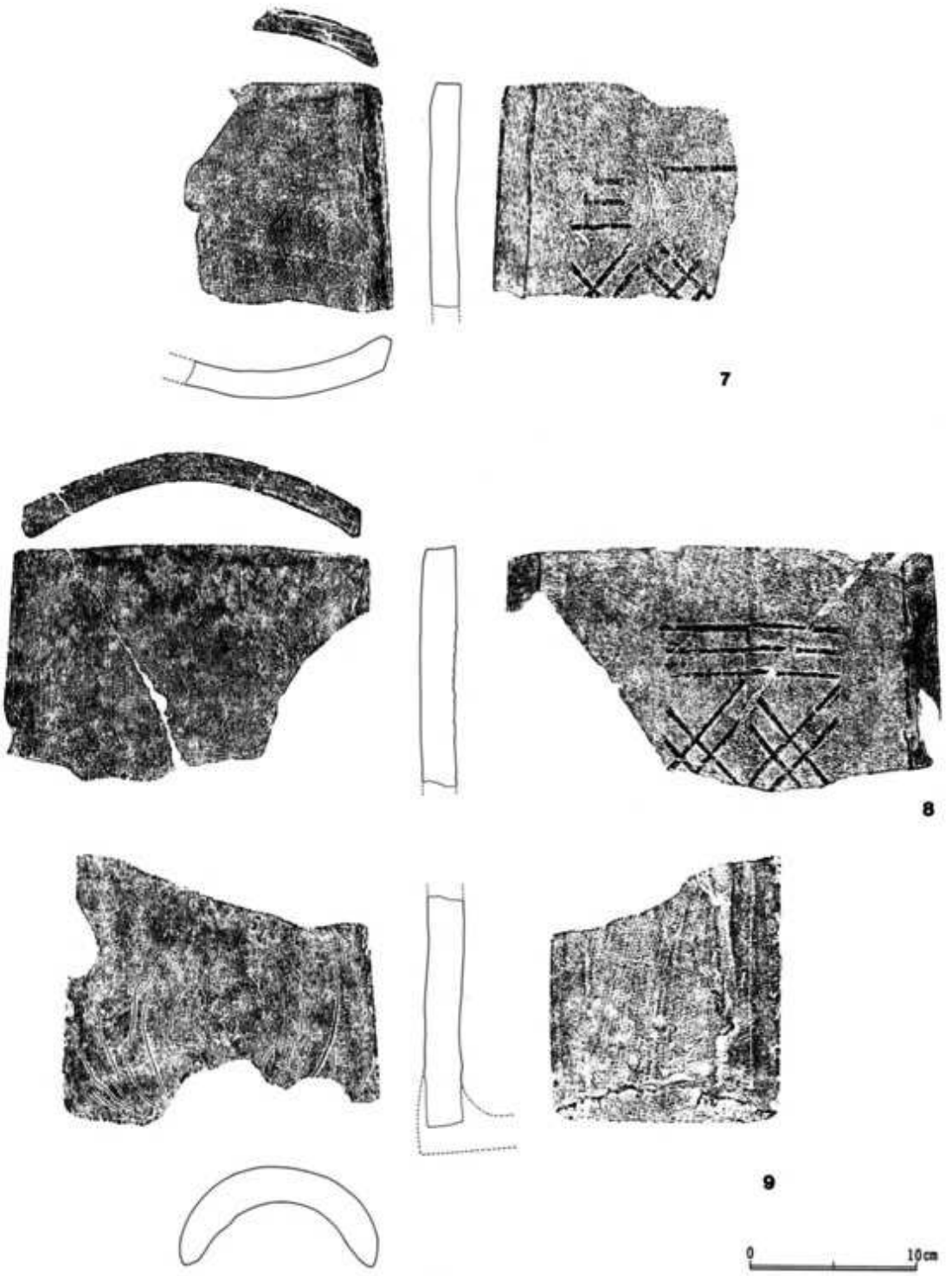
第16号土壙(1)

第104図　土壙出土遺物(1)



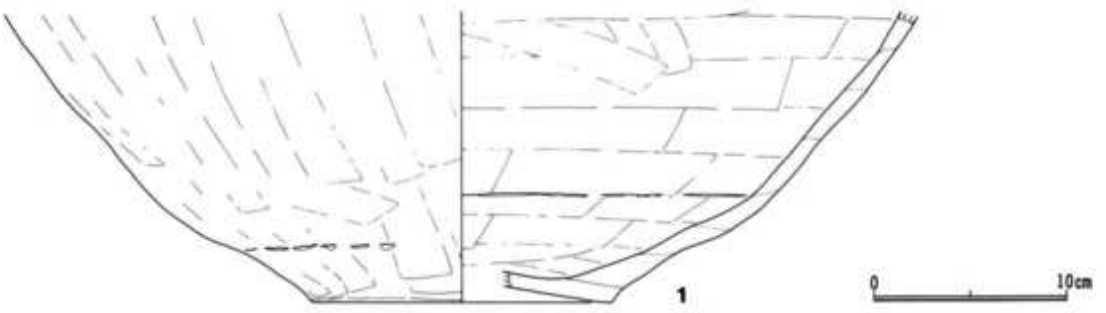
第16号土壙(2)

第105図　土壙出土遺物(2)

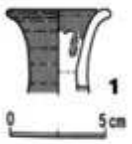


第16号土壙(3)

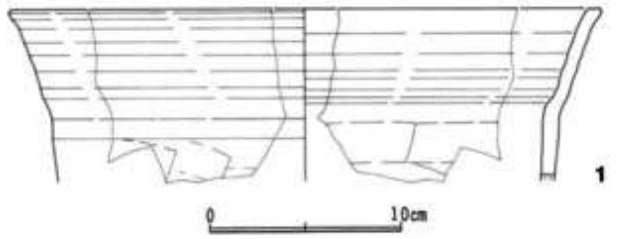
第106図　土壙出土遺物(3)



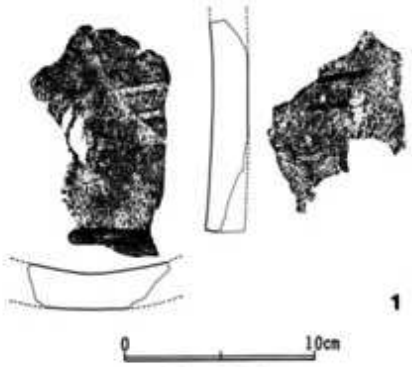
第32号土壙



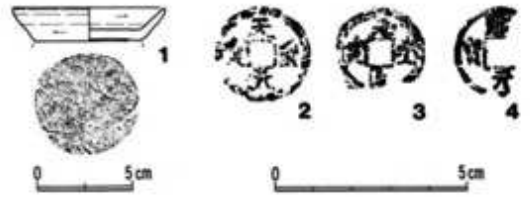
第36号土壙



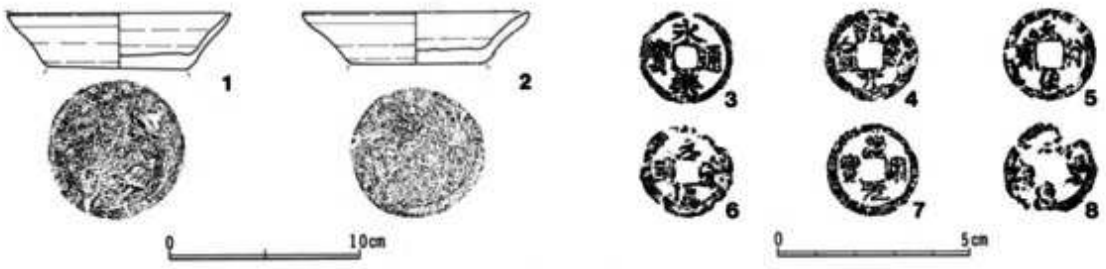
第41号土壙



第37号土壙

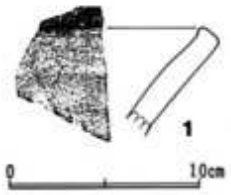


第43号土壙

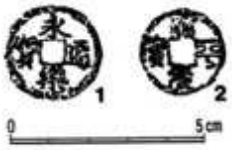


第42号土壙

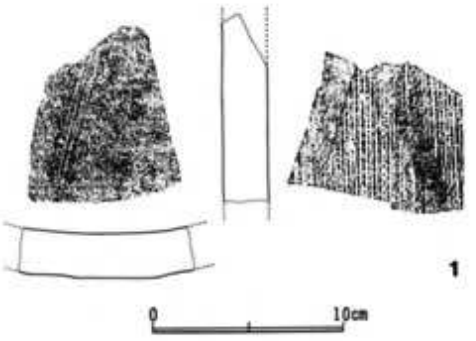
第107図　土壙出土遺物(4)



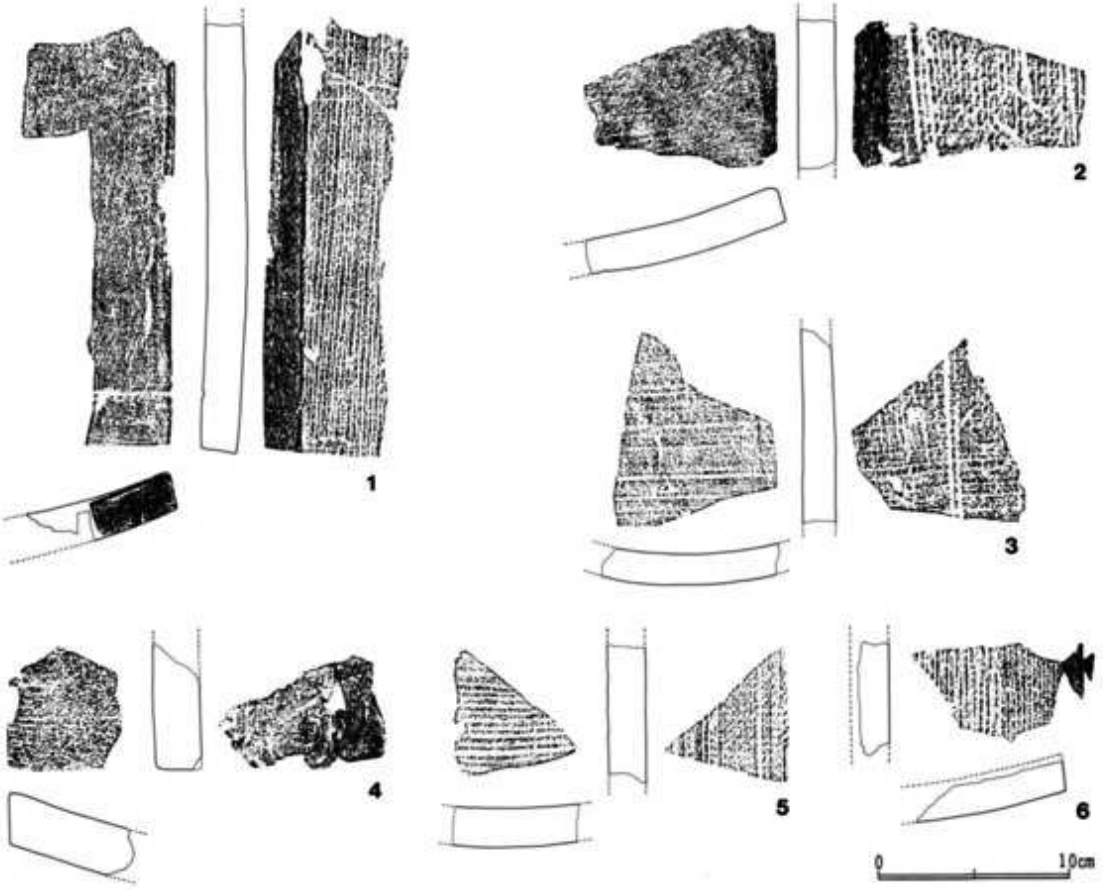
第47号土壙



第48号土壙

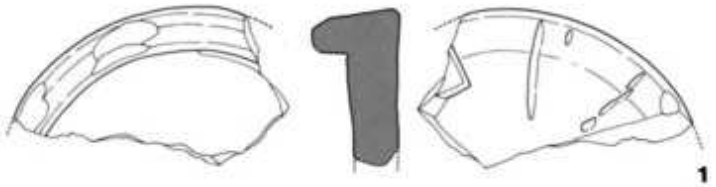


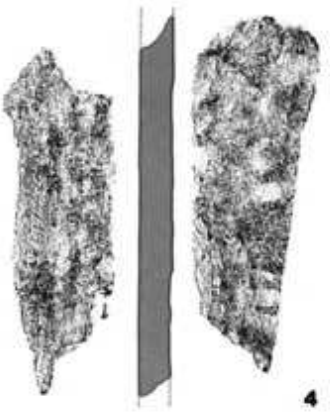
第52号土壙



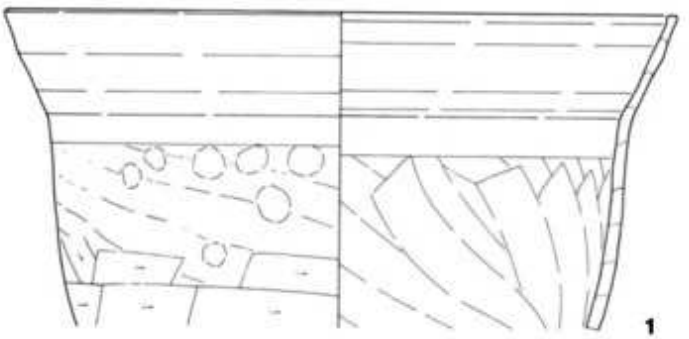
第51号土壙

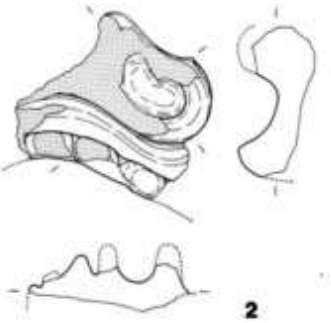
第108図　土壙出土遺物(5)





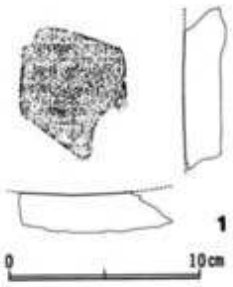
第53号土壙



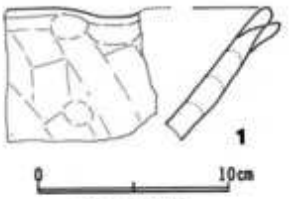


第54号土壙

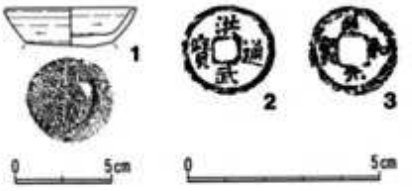
第109図　土壙出土遺物(6)



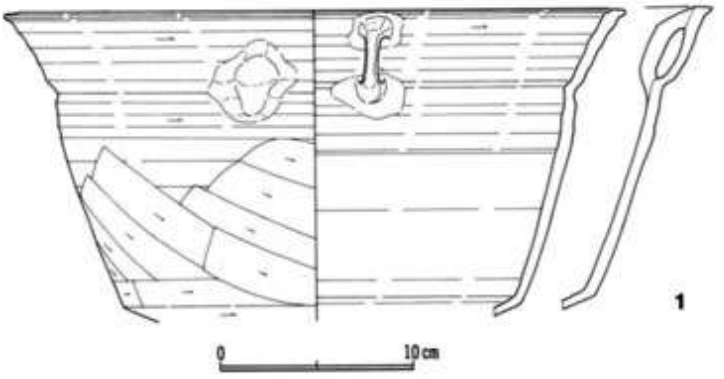
第64号土壙



第65号土壙



第70号土壙



第73号土壙

第110図　土壙出土遺物(7)

第6号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態等の特徴	材質	備考
1	古銭	直径 2.45	祥符通寶。初鋳1008年。文字は若干摩滅ぎみ。	銅製。	完形。覆土中。

第14号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	常滑窯系 甕	縁帯幅 2.7cm	粘土紐積み上げ成形。縁帯部は断面三角形で下方に延びる。頸部は直立ぎみ。	縁帯部及び頸部内外面ヨコナデ。口縁部内面上端と頸部外面に自然釉がかかる。	白色粒・黒色粒 内外－茶褐色 肉－淡茶褐色	破片。 覆土中。

第16号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	軒平瓦	長さ 26.8 幅 21.9 厚さ 2.5	一枚作り。瓦当貼り付け。厚さは平瓦に比べて厚い。顎は厚く高い段をなす。瓦当文様は圏線と14個の小さな珠文による連珠文。	凸面文様叩きの後ナデ。顎部凸面背部縦方向の篦ナデ、端部横方向の篦ナデ。凹面布目圧痕の後両端部ナデ。側面・端面とも丁寧なナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	2/3。 第5号井戸跡出土の破片と接合。 覆土中。
2	平瓦	残存長 19.8 幅 21.4 厚さ 2.0	一枚作り。厚さは比較的均一で、端部・側面とも若干傾斜する。凹凸両面砂付着。	凸面ナデの後中央部に2箇所文様叩き、凹面ナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒・赤色粒 凹凸－淡灰褐色 肉－淡灰色	1/2。凹面側に凸面文様叩きの転写圧痕あり。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	平瓦	残存長 10.5 残存幅 17.4 厚さ 2.1	一枚作り。湾曲はやや強い。側面付近は肥厚し、丸みをもつ。凹面砂付着。	凸面ナデの後中央部に文様叩き、凹面ナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－黒灰色 肉－淡灰色	破片。凹面側に凸面文様叩きの転写圧痕あり。 覆土中。
4	平瓦	残存長 14.5 残存幅 12.4 厚さ 1.8	一枚作り。厚さは比較的均一で、側面は垂直ぎみである。凹面砂付着。	凸面板状工具による叩きの後中央部に文様叩き、凹面ナデ。端面・側面ともナデ。	白色粒 凹凸－黒灰色 肉－淡灰色	破片。凹面側に凸面文様叩きの転写圧痕あり。 覆土中。
5	平瓦	残存長 16.3 残存幅 12.2 厚さ 2.1	一枚作り。厚さは比較的均一であるが、側面側は若干肥厚する。	凸面ナデの後文様叩き、凹面ナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。凹面側に凸面文様叩きの転写圧痕あり。 覆土中。
6	平瓦	残存長 16.6 残存幅 12.0 厚さ 2.2	一枚作り。厚さは比較的均一で、狭端部凹面側は斜めに面取りされている。	凸面ナデの後文様叩き、凹面布目圧痕の後周辺ナデ。端面・側面ともナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。凸面側狭端部付近に弧線状圧痕あり。 覆土中。
7	平瓦	残存長 14.5 残存幅 13.0 厚さ 1.7	一枚作り。凸面側はやや凹凸があり、側面付近は若干肥厚する。狭端部凹面側は斜めに面取りされている。	凸面ナデの後文様叩き、凹面布目圧痕の後周辺ナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒・赤色粒 凹凸－淡褐色	破片。 覆土中。
8	平瓦	残存長 14.3 幅 20.5 厚さ 2.1	一枚作り。厚さは比較的均一で、狭端部凹面側は斜めに面取り。凹凸両面砂付着。	凸面文様叩きの後周辺ナデ、凹面布目圧痕の後周辺ナデ。端面・側面ともナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	1/2弱。 覆土中。
9	軒丸瓦	残存長 16.4 幅 11.8 厚さ 2.1	瓦当面は剥離している。側面はやや尖り、内側は2段に面取りされている。	凸面縦方向の篦ナデ、凹面布目圧痕。側面内側ナデ。	白色粒・赤色粒 凹凸－淡灰褐色 肉－淡灰色	約1/2。 覆土中。

第32号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	常滑窯系 甕	底部径 (12.6cm)	粘土紐積み上げ成形。底部はやや歪んでいる。	胴部外面縦方向のナデ、内面篦ナデ。底部外面ナデ。	橙褐色粒・白色粒 外－茶褐色 内－暗茶褐色	約1/2。底部外面は二次約成を受けている。 覆土中。

第36号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	瀬戸窯系 瓶	口縁部径 5.4cm	ロクロ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は若干横に開く。	口縁部内外面とも回転ナデ。口縁部外面及び内面上半に淡緑白色釉を施す。	白色粒 内外－淡白褐色	口縁部のみ。 覆土中。

第37号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	平瓦	残存長 10.9 残存幅 7.3 厚さ 1.8	一枚作り。厚さは比較的均一であるが、端部に向かっ若干湾曲している。	凸面文様叩きの後ナデ、凹面ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色 肉－淡灰色	破片。凹面側に凸面文様叩きの転写圧痕あり。 覆土中。

第41号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	内耳鍋	口縁部径 (30.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 外－茶褐色 内－淡茶褐色	破片。 外面煤付着。 覆土中。

第42号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師質土器	口径 11.6 器高 2.9 底径 7.2	ロクロ成形。口縁部はやや外反ぎみに開き、口唇部は若干内湾する。底部は平底。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	赤色粒・白色粒 内外－暗茶褐色	完形。内面にタール状の付着物あり。底面直上。
2	土師質土器	口径 11.8 器高 2.7 底径 6.9	ロクロ成形。口縁部はやや外反ぎみに開く。底部は平底をなす呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	赤色粒・白色粒 内外－明橙褐色	完形。 №1と口縁部を合わせ、重なって出土。
3	古銭	直径 2.40	永楽通寶。初鋳1408年。		銅製	完形。底面直上。
4	古銭	直径 2.40	開元通寶。初鋳621年。		銅製	完形。底面直上。
5	古銭	直径 2.38	元符通寶。初鋳1098年。		銅製	完形。底面直上。
6	古銭	直径 2.43	元豊通寶。初鋳1078年。		銅製	ほぼ完形。底面直上。
7	古銭	直径 2.40	聖宋元寶。初鋳1101年。		銅製	完形。底面直上。
8	古銭	直径 2.42	元豊通寶？。初鋳1078年。文字はやや摩滅している。		銅製	4/5。底面直上。

第43号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師質土器	口径 8.0 器高 1.7 底径 5.5	ロクロ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は尖る。底部は平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－橙褐色	完形。 底面直上。
2	古銭	直径 2.50	天聖元寶。初鋳1023年。		銅製	ほぼ完形。底面直上。
3	古銭	直径 2.37	元豊通寶。初鋳1078年。文字はやや摩滅している。		銅製	3/4。底面直上。
4	古銭	直径 2.40	開元通寶。初鋳621年。		銅製	1/2。底面直上。

第47号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢		口唇部は平坦面をもち、内側が肥厚する。	内外面ヨコナデ。	白色針状物質 内外－淡灰褐色	破片。在地産。 覆土中。

第48号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態等の特徴	材質	備考
1	古銭	直径 2.45	永楽通寶。初鋳1408年。	銅製	完形。底面直上。
2	古銭	直径 2.27	治平元寶。初鋳1064年。	銅製	ほぼ完形。底面直上。

第51号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	平瓦	残存長 22.2 残存幅 7.8 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、側面は傾斜している。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕の後周縁ナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
2	平瓦	残存長 7.7 残存幅 10.4 厚さ 1.9	厚さは比較的均一で、側面は傾斜している。	凸面縄目叩き、凹面横方向のナデ。側面篦切り後ナデ。	赤色粒・白色粒 凹凸－淡褐色	破片。 覆土中。
3	平瓦	残存長 10.0 残存幅 9.1 厚さ 1.6	厚さはやや薄く、比較的均一である。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 覆土中。
4	平瓦	残存長 6.5 残存幅 7.0 厚さ 2.5	厚さは厚く、端面・側面とも垂直ぎみである。凹面側砂付着。	凸面縦方向の篦ナデ、凹面横方向の篦ナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	平瓦	残存長 7.2 残存幅 6.6 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。	凸面縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 覆土中。
6	平瓦	残存長 5.9 残存幅 8.0	凹面側は剥落している。	凸面縄目叩き。側面箆切り後ナデ。	白色粒 凸－淡灰色	破片。 覆土中。

第52号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	平瓦	残存長 9.6 残存幅 9.1 厚さ 2.4	厚さは比較的均一である。	凸面縄目叩きの後縦方向のナデ状の窪み、凹面縦方向の箆ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。

第53号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	石製 粉挽臼 (上臼)	残存長 11.5 高さ 6.7 ふくみ 1.0	上縁は幅が狭く高い。ふくみは浅く、下面の外縁付近に長方形ぎみの窪みがある。	上面研磨、下面は擦り減って摩滅し、目は不明瞭。側面は雑な研磨。	安山岩	約1/4。 覆土中。
2	石製 粉挽臼 (上臼)	残存長 7.8 高さ 10.5 ふくみ 0.7	上縁は幅が広く低い。下面に外縁に長方形ぎみの窪みと挽木穴が見られる。	上面研磨、下面は良く擦れており、目はない。側面は雑な研磨。	花崗岩	破片。 覆土中。
3	板碑	長さ 44.5 残存幅 21.1 厚さ 2.5	長さが短く幅広の形態を呈する。上端は三角で、下端は平坦である。	表面研磨、裏面整による横方向のケズリ。上下端面及び側面打ち欠き後雑な研磨。	緑色片岩	約1/2。 表面は無文。 覆土中。
4	板碑	残存長 28.0 残存幅 7.7 厚さ 2.5		表面研磨、裏面整による横方向のケズリ。側面打ち欠き後雑な研磨。	緑色片岩	破片。 覆土中。

第54号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	内耳鍋	口縁部径 (34.8cm) 残存高 15.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は平坦をなす。胴部はやや内湾ぎみである。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－暗茶褐色 肉－淡灰褐色	1/4。 胴部外面に煤の付着あり。 覆土中。
2	鬼瓦		表面の一部と裏面剥離。鼻と口の一部が残存している。	鼻と口は、丁寧な指ナデによつて強調されている。	白色粒 外－黒灰色	破片。 覆土中。

第64号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	平瓦	残存長 9.3 残存幅 7.9	凸面側は剥離している。凹面側砂付着。	凹面ナデ。	白色粒 凹－淡灰色	破片。 覆土中。

第65号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	片口鉢		体部は内湾ぎみに開き、口唇部は丸みをもつ。	体部外面ナデ、内面箆ナデ。	白色粒 内外－暗灰褐色	破片。 覆土中。

第70号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師質土器	口径 6.8 器高 2.0 底径 4.5	ロクロ成形。口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部はやや尖る。底部は平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面一定方向のナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡橙褐色	完形。底部外面に板状圧痕あり。外面黒斑あり。底面直上。
2	古銭	直径 2.40	洪武通寶。初鋳1367年。		銅製	完形。覆土中。
3	古銭	直径 2.40	至和元寶。初鋳1054年。文字はやや摩滅し、縁は一部欠けている。		銅製	ほぼ完形。覆土中。

第73号土壙出土遺物観察表

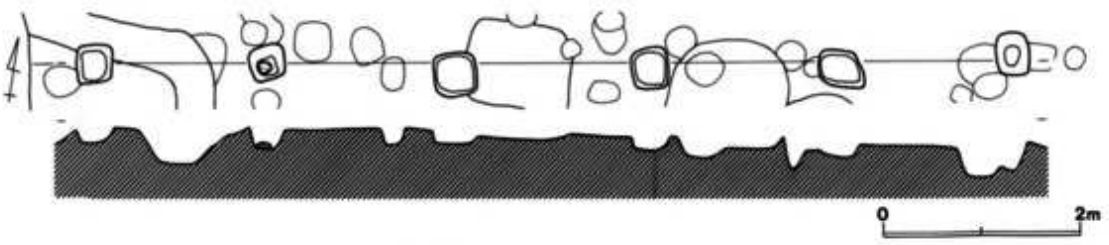
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	内耳鍋	口縁部径 32.2cm 残存高 16.0cm	粘土紐積み上げ成形。内耳貼り付け。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。口唇部は平坦で外側に肥厚し、内側に沈線を施す。胴部は直線的で、底部は丸みをもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヨコナデの後下半ケズリ、内面ヨコナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 黒色粒 外－暗茶褐色 内－淡褐色	底部欠失。 底部は円形に抜けている。 外面煤付着。 胴部下半は荒れている。 底面直上。

7．柱穴列

第1号柱穴列（第111図）

B地点のI区南西側に位置し、重複する第11号溝跡と第39号土壙を切っている。調査区内では、ほぼ東西方向の直線上に規則的に並ぶ6個の柱穴が検出されており、その西側はさらに調査区外に延びる可能性がある。

柱穴の平面形は、長さ40cm前後の方形もしくは長方形を呈し、確認面からの深さは15cm～25cmで比較的浅いが、底面に自然石を1個据えているものが見られる。柱穴列の方向は、N－81°－Eを向いている。柱心間は、等間隔ではなく不揃いであるが、真ん中の1間が2.00m、その左右両側の1間がいずれも1.90m、さらにその左右両端の1間がいずれも1.80mで、真ん中の1間を中心として左右対称になっている。本柱穴列は、出土遺物がないため明確な時期は不明であるが、本柱穴列の南側に近接する第1号掘立柱建物跡と柱穴の形態や覆土が類似しており、恐らくその建物跡に関係する構列ではないかと考えられる。

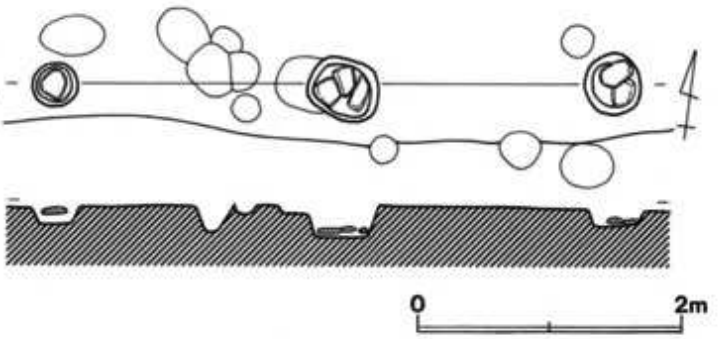


第111図　第1号柱穴列

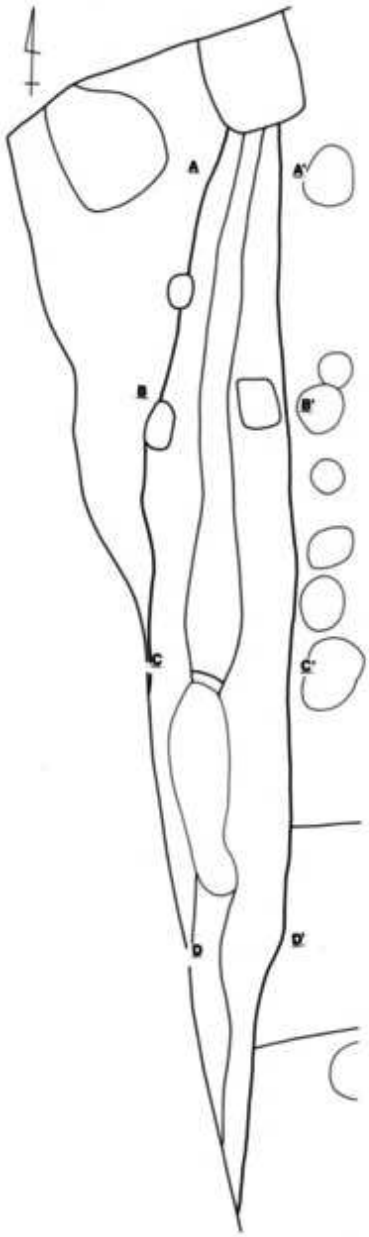
第２号柱穴列（第112図）

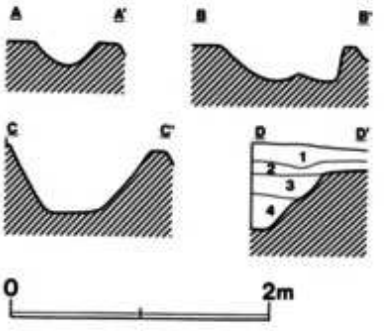
Ｂ地点のⅡ区南端に位置し、南側のⅡ区とⅣ区を区切る東西方向の堀跡と接している。本柱穴列は、ほぼ東西方向の直線上に等間隔に並ぶ３個の柱穴であるが、いずれも柱穴内に比較的大きく偏平な礎石を伴っている。

柱穴の平面形は、真ん中の柱穴が54cm×45cmのコーナー部が丸みを持つ長方形ぎみの形態で、両端の柱穴は直径36cmと44cmの円形を呈している。柱穴列の方向は、N−83°−Eを向いている。柱心間は、ほぼ2.20mの等間隔で、確認面からの深さは真ん中の柱穴が25cmで一番深く、両端がいずれも13cmと若干浅くなっている。礎石は、長さ20cm～30cmの偏平な片岩系の自然石を１個から３個いずれも水平に据えている。本柱穴列は、柱穴内に礎石を伴うことから単純な構造の棚列とは考え難く、比較的重量のかかる何だかの構造物であった可能性が高く、あるいは南側を堀跡に切られた建物の北側の柱穴列だけが残存したものではないかとも推測されるが明確なことは不明である。

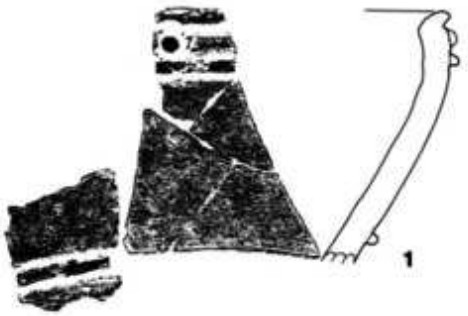


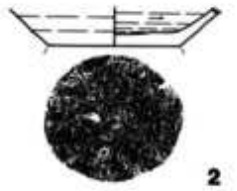
第112図　第２号柱穴列

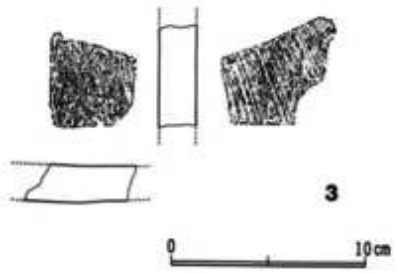




第113図　第１号溝跡







第114図　第１号溝跡出土遺物

第１号溝跡土層説明

第１・２層：第１号土壙覆土。

第３層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第４層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

8．溝　跡

第1号溝跡（第113図）

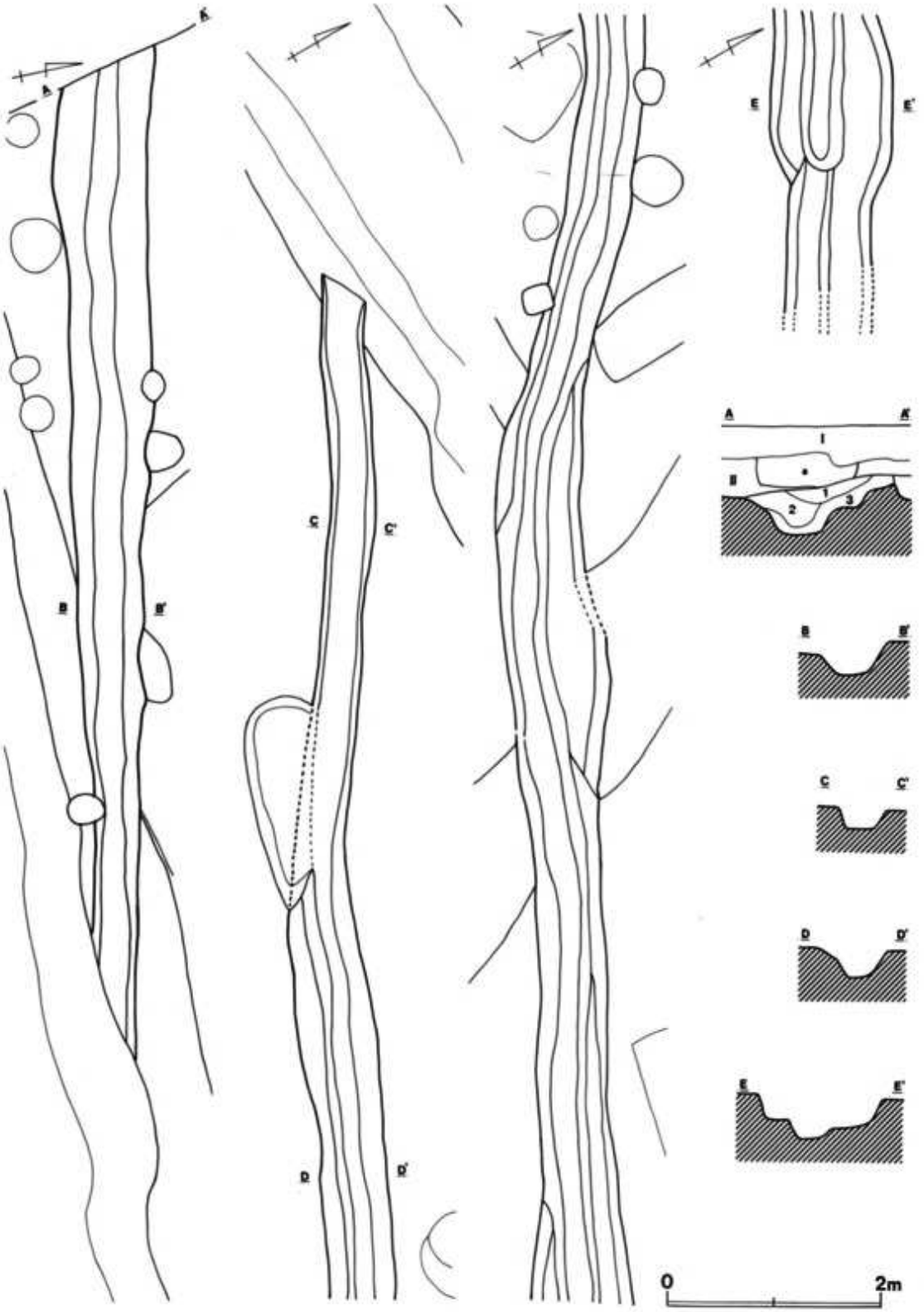
B地点のI区北西端に位置し、南側上面を第1号土壙に、北端を長方形を呈する最近の土壙状の掘り込みによって切られている。調査区内では、約8m程が検出されただけであるため、溝の全容は明確ではないが、形態は直線的でほぼ南北方向に向いており、その南側延長がC地点第1号門跡石敷前庭部の掘り込み東側壁の位置にほぼ一致していることは、本溝跡の掘削時期やその計画的な配置が伺え注目されよう。溝の上幅は、南側で1.07m・北端で52cmあり、北に向かって溝幅が徐々に狭くなっている。確認面からの深さは、南端で最高52cmあるが、地形の傾斜とは逆に北に向かうほど緩やかに立ち上がりながら徐々に浅くなっており、北端では18cm程度になっている。断面の形態は、溝幅が比較的広く深さも深い南側では底面が平坦で壁が直線的に傾斜する逆台形を呈しているが、規模が徐々に縮小する北側では壁や底面が丸みもつ異なった形態になっている。本溝跡は、その形態から溝の北端部が途切れる可能性があり、また覆土の状態からは一時的な滞水はあったであろうが、水が頻繁に流れていたような形跡が認められないことから、おそらく敷地もしくは敷地内の区画と排水を目的とした溝ではないかと考えられる。遺物は、覆土中から火鉢・土師質土器皿・平瓦等の破片がごく少量出土しただけである（第114図）。これらの破片は、周囲からの混入の可能性が高いものであり、本溝跡の掘削時期を直接示すものではないが、時期の新しいものについては本溝跡の埋没時期に近いものと思われる。

第1号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	火鉢		粘土紐積み上げ成形。体部は内湾しながら開き、口唇部はやや丸みを帯びる平坦面をもつ。口縁部外側に2条・体部下半に1条の凸帯を巡らせ、珠文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面ヨコナデ。凸帯貼り付け後ヨコナデ。珠文張り付け後ナデ。	白色粒 内外－暗灰色 肉－淡灰色	破片。 瓦質。 覆土中。
2	土師質土器皿	底部径 6.8cm	ロクロ成形。体部は直線的に外傾し、底部は平底を呈する。	体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡橙褐色	底部のみ。 外面黒斑あり。 覆土中。
3	平瓦	残存長 5.5 残存幅 5.8 厚さ 2.0		凸面糸切り後ナデ、凹面布目圧痕の後ナデ。	白色粒 凹凸－黒灰色 肉－暗灰色	破片。 覆土中。

第2号溝跡（第115図）

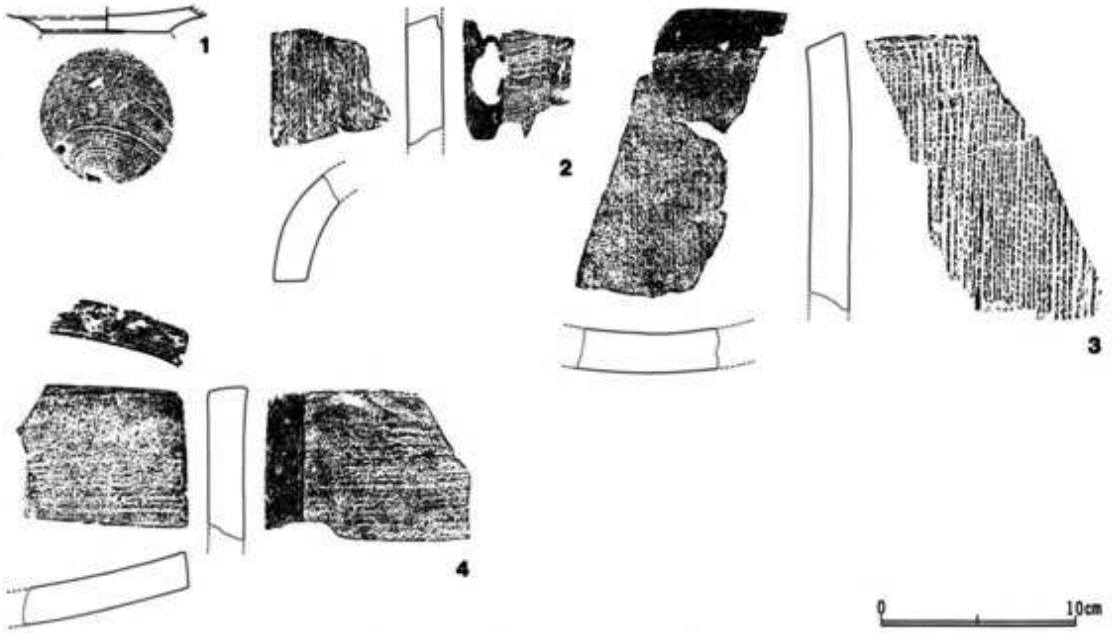
B地点のI区から南側のIII区とIV区にかけて位置し、堀跡や第2号門跡及び第9号掘立柱建物跡に切られている。調査区内での流路は、北西から南東方向に向かって比較的緩やかに蛇行し、III区では東に向かって緩やかに湾曲するようである。本溝跡は、調査区内で検出された溝跡の中では、唯一地割り区画に規制されず、ほぼ地形の等高線に沿いながら地形条件に規制された流路をとっている。本溝跡は、比較的均一な形態をとっているが、IV区東側では一部掘り返しによる重複が見ら



第115図　第２号溝跡

れる。規模は、確認面での上幅が平均50cm前後あり、底面の下幅は20cm～30cmである。断面の形態は、壁が直線的に傾斜し、底面が平坦な逆台形を呈し、確認面からの深さは30cm～40cmを測る。覆土は、炭化粒子や焼土粒子を含む黒褐色粘質土を主体にしている。遺物は、覆土中から土師質土器皿や平瓦の破片(第116図)が少量出土している。この他には、和泉式土器の破片が比較的多量に出土しているが、これらは本溝跡がⅢ区とⅣ区で古墳時代中期頃にほぼ埋没した山際の浅い開析谷の覆土を掘り込んでいるため、その開析谷覆土中に包含された破片が混入したものである。

なお、B地点調査区外の北西側延長上には、本溝跡と同一方向を向くA地点(鈴木・西口1981)のSA1aとSA1bの途切れた溝跡があるが、溝の形態や覆土が異なっており、本溝跡とは直接関係しないものと考えられる。



第116図　第2号溝跡出土遺物

第2号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師質土器皿	底部径 6.6cm	ロクロ成形。底部は若干突出ぎみで、平底を呈する。	体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	白色粒 内外－淡橙褐色	底部のみ。 覆土中。
2	丸瓦	残存長 6.6 厚さ 1.8	側面内側に面取りは施されない。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕。側面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。

第2号溝跡土層説明

第Ⅰ層：現耕作土
第Ⅱ層：黒色土層
第1層：黒褐色土層（B軽石・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：黒褐色土層（B軽石・炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：黒褐色土層（B軽石・炭化粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	平瓦	残存長 14.2 残存幅 12.1 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、端面は傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕の後ナデ。端面箆切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 覆土中。
4	平瓦	残存長 7.8 残存幅 8.8 厚さ 1.9	厚さは端部に向かって若干肥厚し、端面・側面ともやや傾斜する。凸面砂付着。	凹凸両面とも木口状工具による横方向のナデ。端面・側面とも箆切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。

第3号溝跡（第117図）

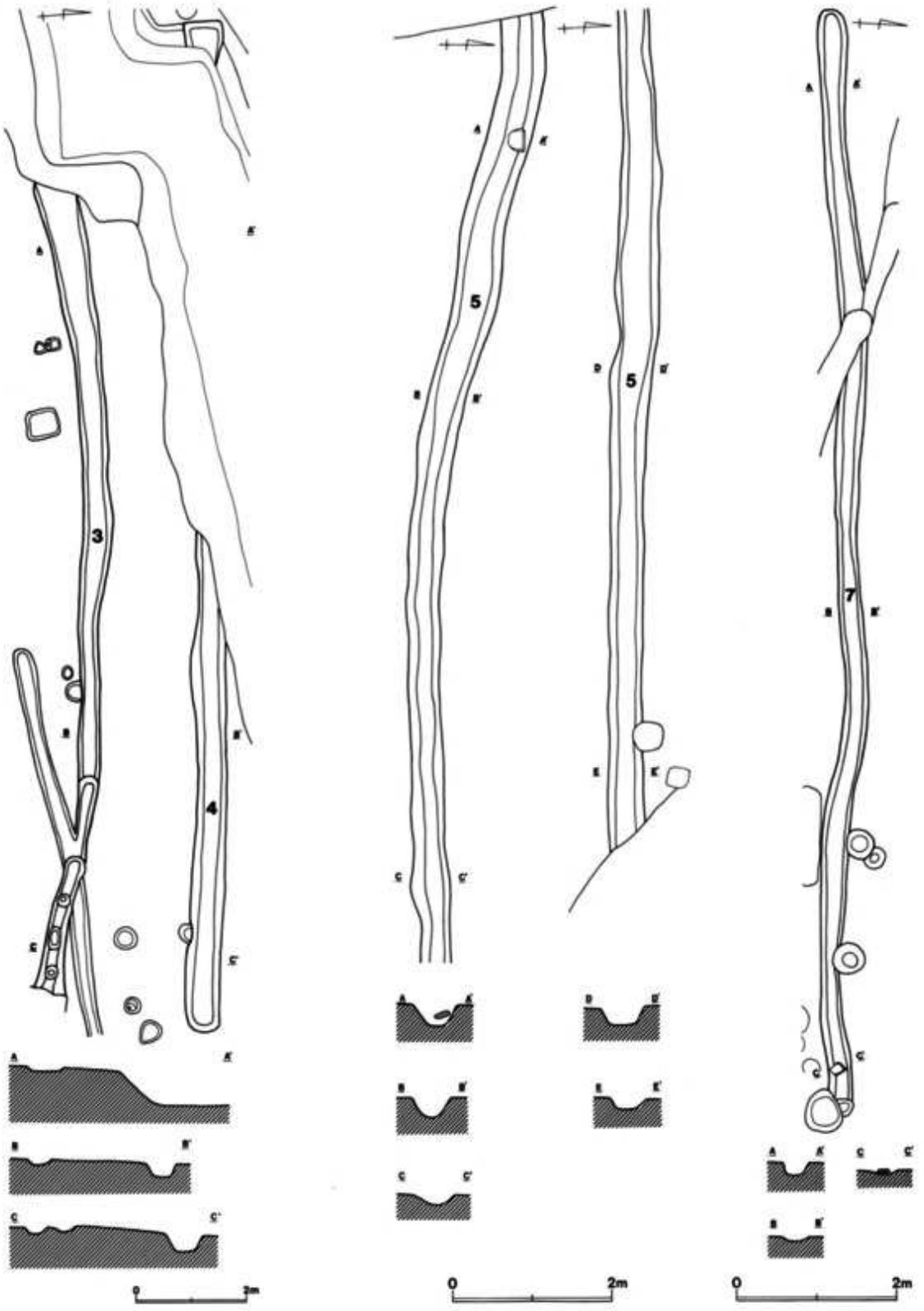
B地点のⅣ区北東端に位置する。溝跡の両端を堀跡に切られているため全容は不明である。形態は、若干湾曲ぎみであるが、ほぼ東西方向に向いており、北側の第4号溝跡や南側の第5号溝跡及び第13号溝跡とほぼ併走している。規模は、溝の上幅が西側で66cm・東側で38cmを測り、溝底面とともに東に向かって徐々に狭くなっている。断面の形態は、確認面からの深さが10cm程度しかないため明確ではないが、溝幅の広い西側では底面が平坦をなし、溝幅の狭くなる東側では底面は丸みをもっている。覆土は、暗灰褐色粘質土を主体とし、遺物は何も出土しなかった。本溝跡は、明確な時期は不明であるが、溝の形態や掘り込みの浅さから恒常的な溝であったとは考え難く、その位置から見て両端の堀を結ぶ一時的な上水を落とす小排水路のようなものであったかもしれない。

第4号溝跡（第117図）

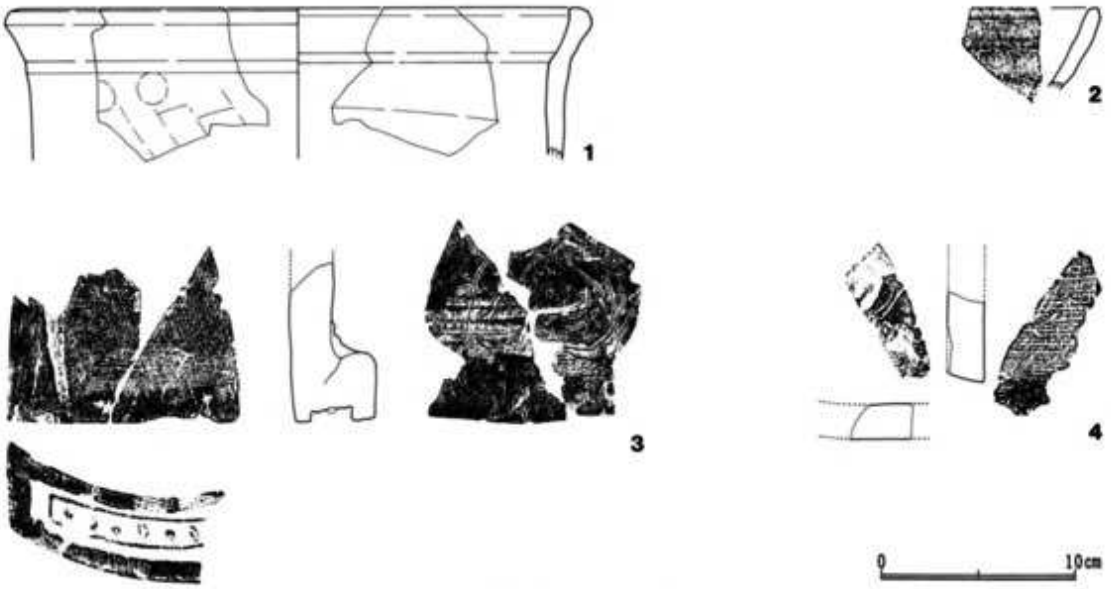
B地点のⅣ区北東端に位置する。溝跡の西側半分をⅡ区とⅣ区を区切る堀跡に切られているが、溝跡の西端部は堀跡が鉤の手状に屈曲する部分の西側に残存している。本溝跡の形態は、比較的均一で整っており、直線的にほぼ東西方向を向いている。規模は、全長が約18mあり、溝の上幅は55cm前後を測る。断面の形態は、壁が直線的に傾斜し底面が平坦な逆台形を呈し、確認面からの深さは30cm前後ある。覆土は、上半分が黒褐色粘質土で、下半はロームブロックを含む暗灰褐色粘質土である。遺物は、覆土中より内耳鍋や瓦の破片（第118図）が少量出土しただけであるが、このうちのNo.3の連珠文軒平瓦の破片は、第20号掘立柱建物跡や第16号土壙出土のものと同笵である。

第4号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	内耳鍋	口縁部径 (30.2cm) 残存高 7.7cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く内湾ぎみに外傾し、口唇部は丸みをもち、やや内側に肥厚する。胴部は垂直ぎみである。器肉は厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	淡橙褐色粒・白色粒 外－黒色 内－暗灰色	破片。 覆土中。
2	鉢？		口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部は狭い平坦面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外－黒灰色	破片。 覆土中。
3	軒平瓦	残存長 8.2 残存幅 11.5 厚さ 2.2	一枚作り、瓦当貼り付け。顎は厚く高い段をなす。瓦当文様は圏線と小さい珠文による連珠文。	凸面ナデ。顎部凸面側縦方向の箆ナデの後ナデ。凹面布目圧痕の後側面・瓦当付近ナデ。側面箆切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 瓦当の珠文は剥離している。 覆土中。



第117図　第3・4・5・7号溝跡

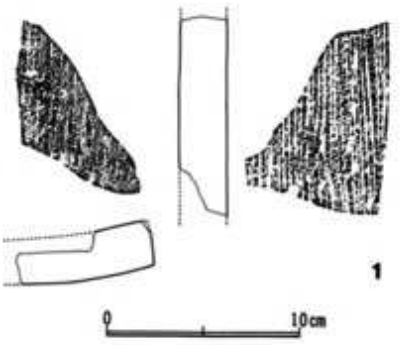


第118図　第４号溝跡出土遺物

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	平瓦	残存長 7.1 残存幅 5.5 厚さ 1.9	端面はやや傾斜する。	凸面木口状工具による横方向のナデ、凹面篦ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。

第５号溝跡（第117図）

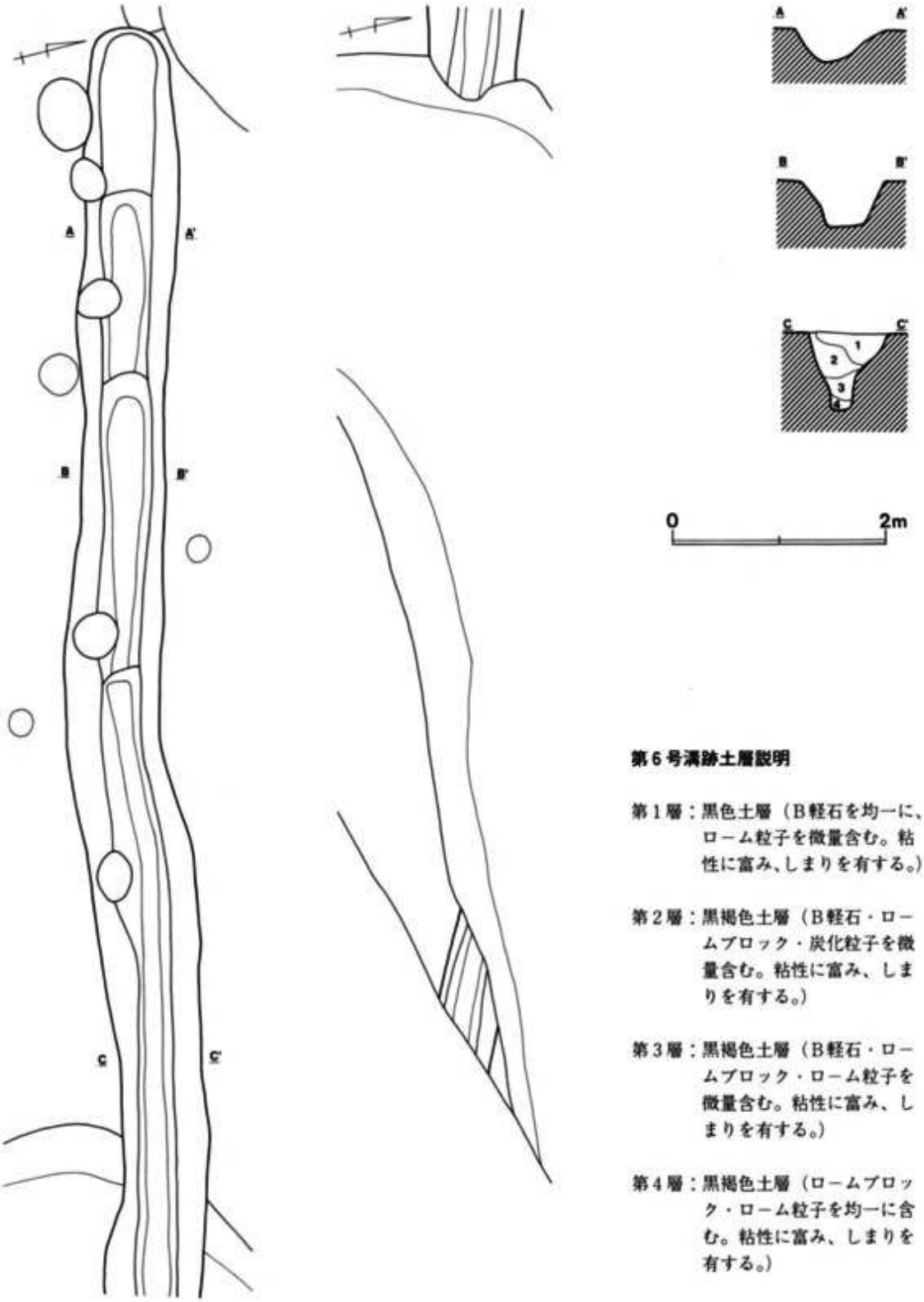
Ｂ地点のⅣ区中央部に位置し、第８号掘立柱建物跡や第２号溝跡と重複している。本溝跡は、重複する第２号溝跡以東では検出されていないが、溝の深さは東に向かって徐々に浅くなっており、東側についてはすでに削平された可能性もある。流路は、若干蛇行ぎみであるが、ほぼ東西方向に向いている。規模は、溝の上幅が比較的均一で50cm前後ある。断面の形態は、壁がゆるやかに立ち上がり、底面がやや丸みをもつ形態で、確認面の深さは溝跡の西端で28cm・東端で10cmを測る。覆土は、Ｂ軽石やローム粒子を含む暗灰色粘質土であるが、溝底面には薄い砂の沈殿層が部分的に見られる。本溝跡に関係するか近い時期の遺物は、平瓦の小破片（第119図）が１片出土しただけである。



第119図　第５号溝跡出土遺物

第５号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	平瓦	残存長 10.0 残存幅 7.1 厚さ 2.5	厚さは厚く、側面はやや傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面縦方向の篦ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 覆土中。



第6号溝跡土層説明

第1層：黒色土層（B軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：黒褐色土層（B軽石・ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

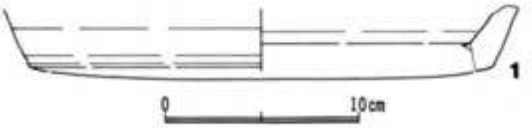
第3層：黒褐色土層（B軽石・ロームブロック・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：黒褐色土層（ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第120図　第6号溝跡

第6号溝跡（第120図）

B地点Ⅲ区の中央部から東側にかけて位置し、重複する第10号掘立柱建物跡と堀跡に切られている。流路は、若干蛇行ぎみであるが、ほぼ東西方向に向いており、溝の西側は途切れている。規模は、溝の上幅は比較的均一で80cm前後あるが、溝底面は西側から東側に向かうほど段々と狭くなっている。断面の形態は一様ではなく、西側では壁がゆるやかに立ち上がり、底面が比較的広く平坦な逆台形に近い形態を呈しているが、東側では壁が中位から直線的に急傾斜し底面が狭い「V」字状の形態になっている。確認面からの深さは、西側から順番に20cm・31cm・70cm・75cmと4段に深くなっている。覆土は、黒褐色粘質土を主体としている。遺物は、覆土中より内耳鍋の破片がごく少量出土しただけである。本溝跡は、その形態や覆土の状態より、地割りの区画と排水を目的とした溝と考えられる。



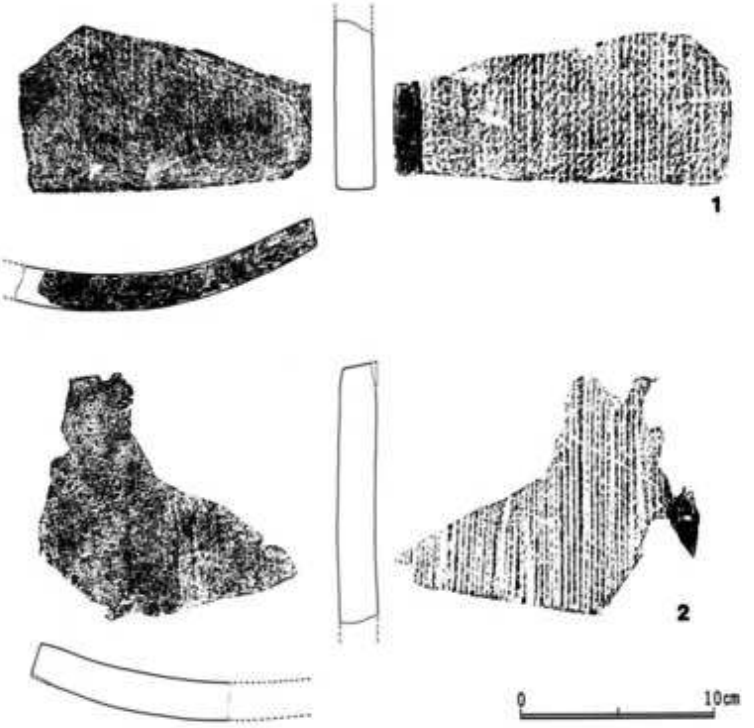
第121図　第6号溝跡出土遺物

第6号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	内耳鍋	底部径（23.6cm）	粘土紐積み上げ成形。器肉は厚く、底部はやや丸みをもった平底を呈する。	胴部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	白色粒 内外－暗灰色	底部1/4。 覆土中。

第7号溝跡（第117図）

B地点のⅢ区からⅣ区にかけて位置し、重複する第3号溝跡を切っている。調査区内ではほぼ14mにわたって検出されているが、溝跡の両端は削平されている。形態は、比較的均一で若干蛇行ぎみであるが、ほぼ東西方向を向いている。溝の上幅は30cm程度で、確認面からの深さは6cm～16cmと非常に浅い。断面の形態は、壁がゆるやかに立ち上がり底面は丸みをもっている。遺物は、平瓦の破片（第122図）が少量出土しているが、これらの瓦は本溝跡の時期を反映するものではなく混入品



第122図　第7号溝跡出土遺物

であろう。本溝跡の時期は明確ではないが、その形態や規模は本溝跡の東側のA軽石を含む近世後半以降の溝跡に類似しており、あるいはその溝跡と同一の溝であった可能性が高い。

第7号溝跡出土遺物観察表

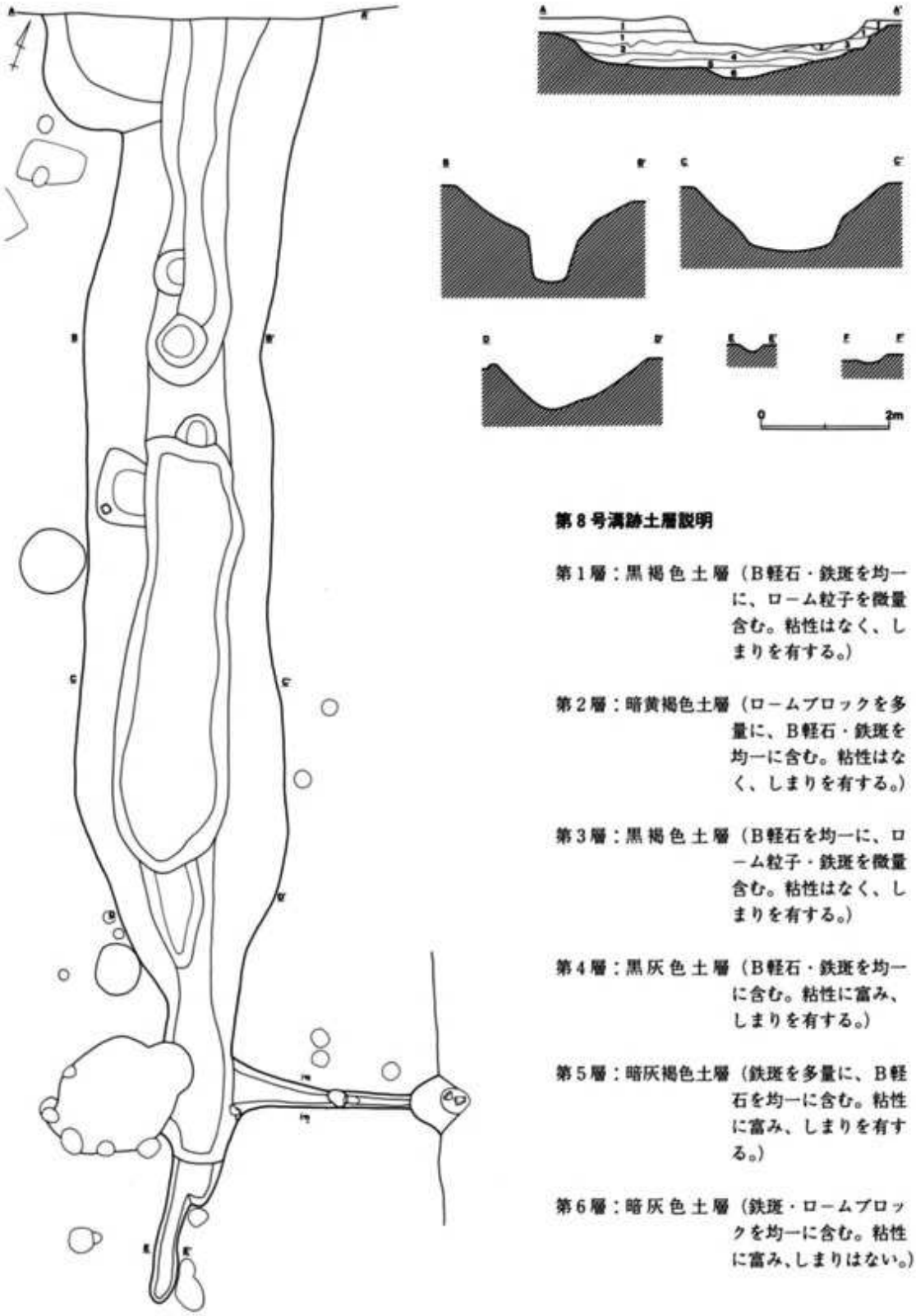
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	平瓦	残存長 8.7 残存幅 15.7 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、端面は垂直ぎみである。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。端面・側面とも箆切り後ナデ。	片岩粒・白色粒 凹凸－淡褐色	破片。凹面側に凸面縄目叩きの転写圧痕あり。 覆土中。
2	平瓦	残存長 13.4 残存幅 13.9 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、端面・側面ともやや傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面縦方向のナデ。端面・側面とも箆切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。

第8号溝跡（第123図）

B地点のⅡ区東側に位置し、重複する第52号土壙を切り、第8号井戸跡に切られている。本溝跡の上面は、調査前までは水田として利用されていた場所で、その耕作による強い削平を受けている。本溝跡は、調査区内でほぼ20m程検出され、さらに北側の調査区外に延びているが、調査区内ではほぼ直線的でやや北西～南東方向に向いている。形態は、比較的規模が大きく均一ではあるが、南端部は急激に細くなり、深さも徐々に浅くなって途切れている。溝の上幅は、全体的に約3m前後を測り、南端の小溝は20cm程度である。また、北端部の溝が西側に大きく張り出す部分は、本溝跡と直接関係するものか明確ではないが、人為的に埋め戻された痕跡が見られる。断面の形態は、壁の上半が若干湾曲ぎみで緩やかに傾斜し、下半は角度を変えて直線的に急傾斜している。溝の底面は、調査区内で検出された部分のほぼ中央部が約1mの幅で畝堀状に20cm程度高くなっており、その北側には直径70cm・深さ50cmの比較的規模が大きく深いピットが掘られている。この畝状の掘り残し部分の北側と南側では溝底面の形態が異なっており、北側では底面の幅が狭く薬研堀のような形態であるが、南側は底面の幅が広く平坦で箱堀のような形態になっている。確認面からの深さは、北側で75cm・南側で1.03mを測る。遺物は、覆土中から鉢・瓦・石臼等の破片（第124・125図）の他に、内耳鍋や常滑窯系甕の破片と鉄滓が1点出土している。本溝跡は、東側2m～3mにある堀跡と併走して、その堀跡とともに二重堀の形態を構成しており、おそらく両者の間には、土塁が構築されていたものと思われる。また、本溝の南側の浅くなった部分では、幅20cm～50cm・深さ7cmの小溝が東側に分岐して堀と連結している。この小溝跡は、小溝が連結する堀側の壁面におそらく落水によると思われる窪みが見られることから、第8号溝跡のオーバーフロウを防ぐための排水溝と推測され、その構造は土塁の存在を考慮すると暗渠であった可能性もある。

第8号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口径(26.9) 器高 10.1 底径(12.0)	粘土紐積み上げ成形。体部は直線的に開き、口縁部は若干肥厚する。口唇部はやや丸みを帯びた平坦面をもつ。底部は平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヨコナデの後縦方向のナデ、内面ヨコナデの後横方向のナデ。底部内外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－暗灰色 内－淡灰色 肉－淡橙褐色	口縁部1/5、底部1/6。体部上半分と下半は接合しない。器形は図上復元。 覆土中。



第8号溝跡土層説明

第1層：黒褐色土層（B軽石・鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量に、B軽石・鉄斑を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）

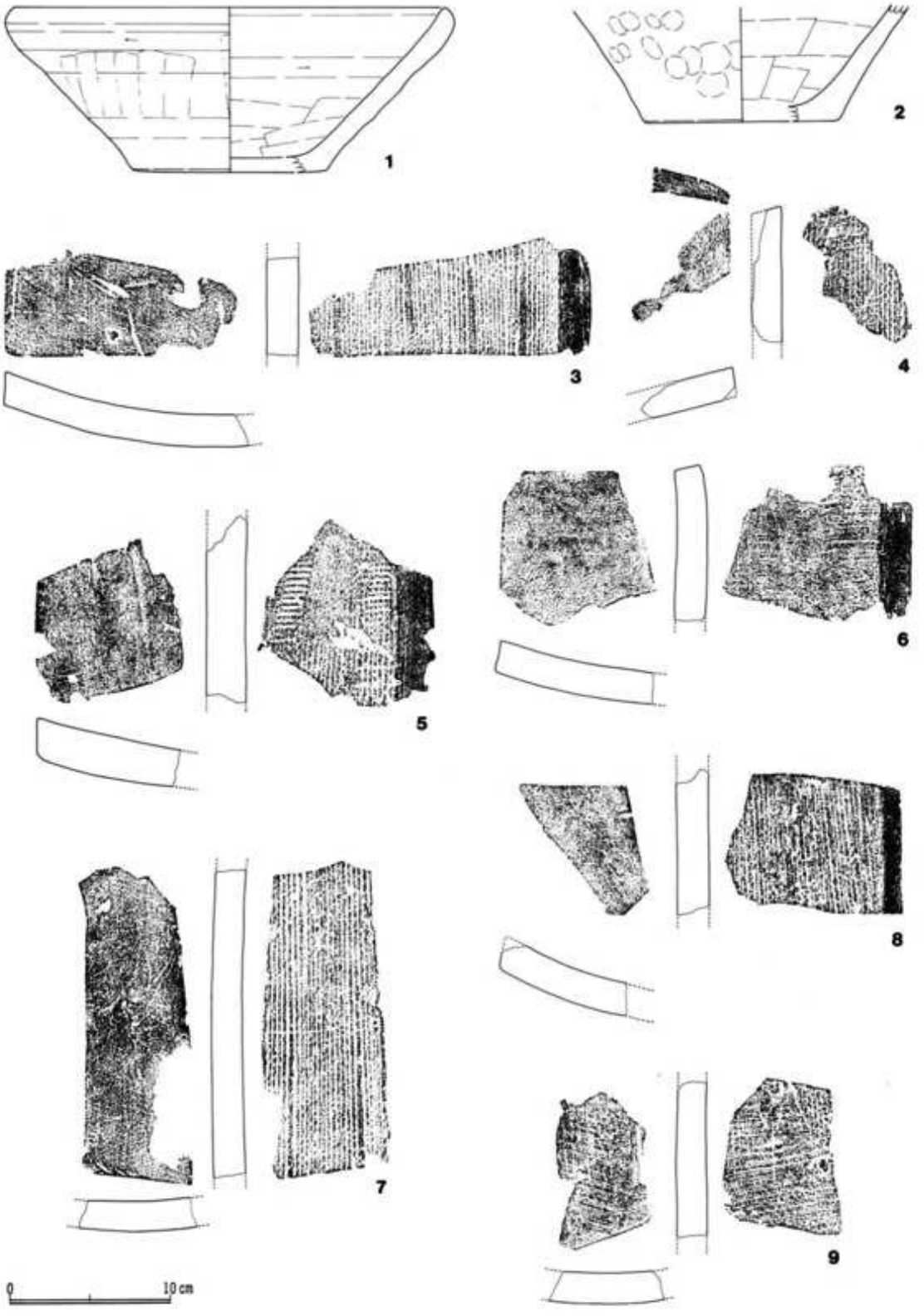
第3層：黒褐色土層（B軽石を均一に、ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第4層：黒灰色土層（B軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

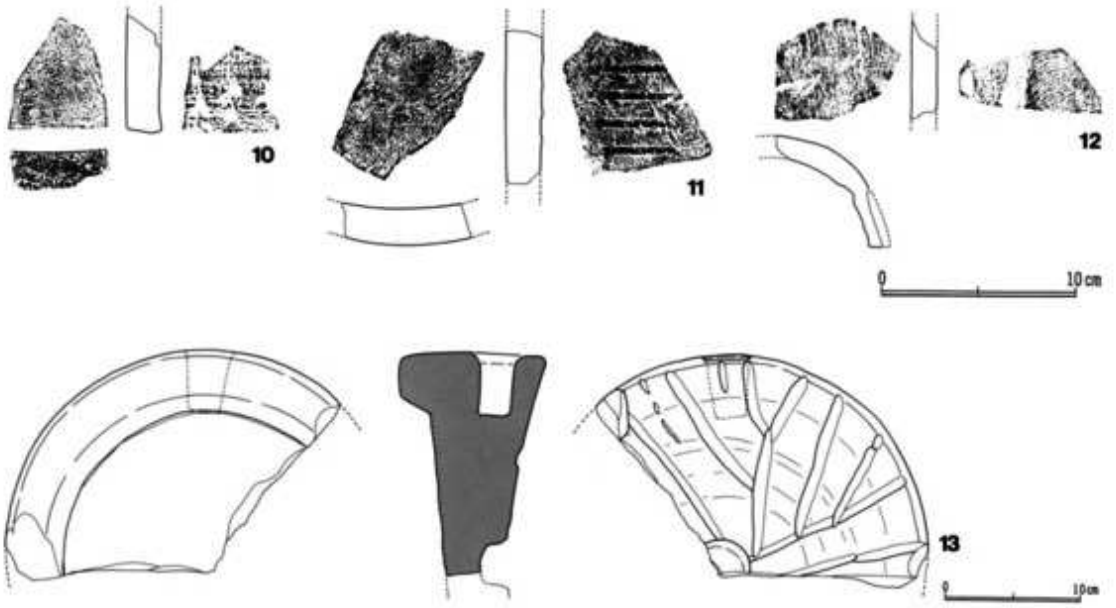
第5層：暗灰褐色土層（鉄斑を多量に、B軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：暗灰色土層（鉄斑・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第123図　第8号溝跡



第124図　第８号溝跡出土遺物(1)



第125図　第8号溝跡出土遺物(2)

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
2	鉢	底部径 (12.0cm)	粘土紐積み上げ成形。体部は直線的に開き、底部は平底を呈する。	体部外面ナデ、内面篦ナデ。底部内外面ナデ。	白色粒・黒色粒 外－暗灰色 内－淡灰色	底部1/4。 外面指頭圧痕顕著。 覆土中。
3	平瓦	残存長 7.5 残存幅 15.7 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、側面は垂直ぎみである。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕。側面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
4	平瓦	残存長 8.5 残存幅 7.1 厚さ 1.9	厚さは比較的均一で、側面・端面ともやや傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。側面・端面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹－黒灰色 凸－淡灰褐色	破片。 覆土中。
5	平瓦	残存長 7.0 残存幅 9.1 厚さ 2.5	厚さは比較的厚く、側面は垂直ぎみである。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
6	平瓦	残存長 10.2 残存幅 10.0 厚さ 1.9	厚さは比較的均一で、側面・端面ともやや傾斜する。	凸面横方向のナデの後縦方向のナデ、凹面ナデ。側面・端面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色 肉－暗茶褐色	破片。 覆土中。
7	平瓦	残存長 20.5 残存幅 7.8 厚さ 1.9	厚さは比較的均一であるが、縦方向に若干反っている。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕。	白色粒・黒色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
8	平瓦	残存長 9.4 残存幅 8.6 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、側面はやや傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 覆土中。
9	平瓦	残存長 9.6 残存幅 7.1 厚さ 1.9	厚さは比較的均一である。	凹凸両面とも木口状工具による横方向のナデの後、凸面縄目叩き。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。
10	平瓦	残存長 6.0 残存幅 5.1 厚さ 1.8	端面はやや傾斜する。	凸面木口状工具による横方向のナデの後縄目叩き、凹面横方向のナデ。端面ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。

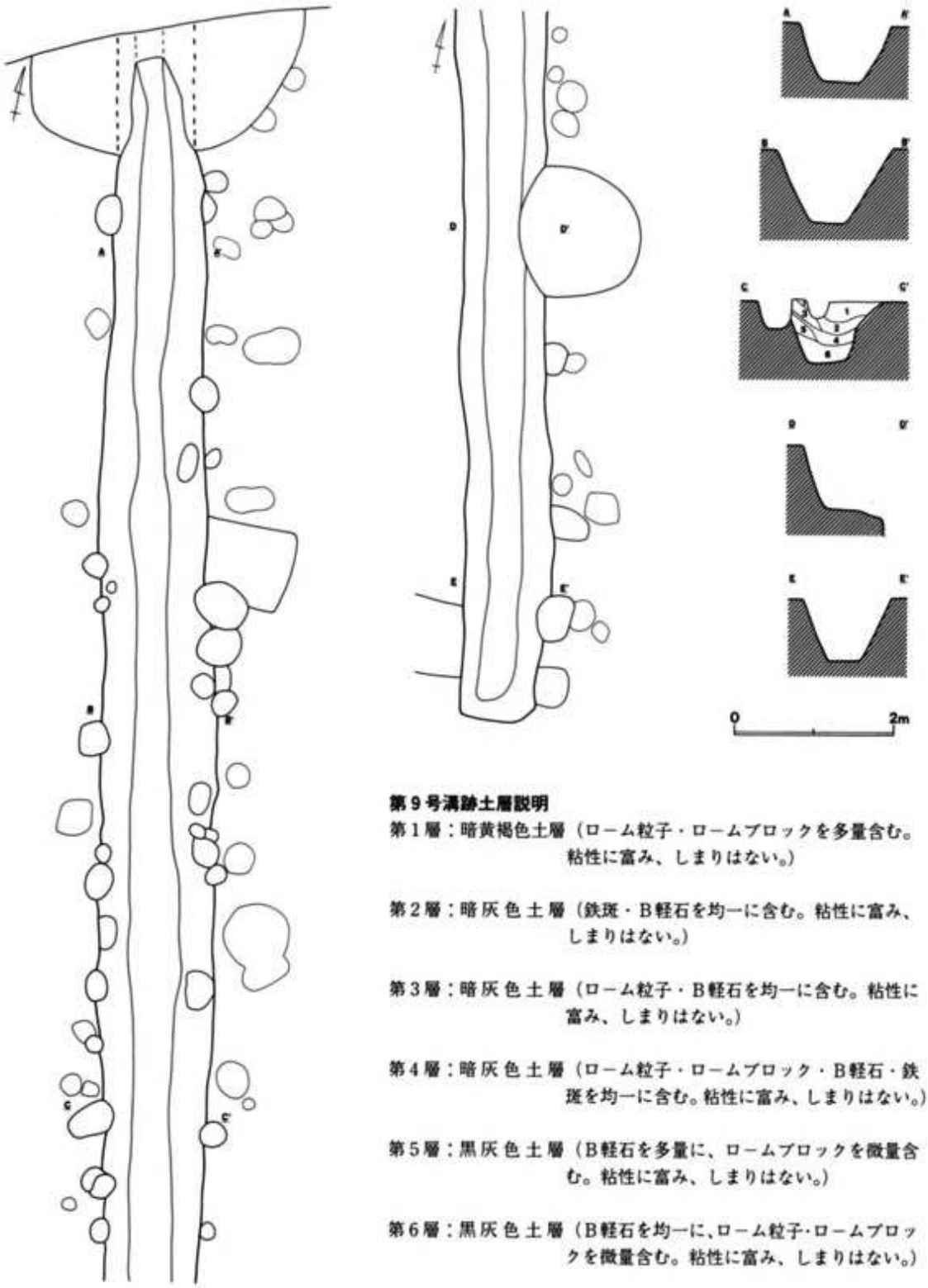
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
11	平瓦	残存長 7.9 残存幅 5.2 厚さ 1.9	厚さは比較的均一である。	凸面文様叩き、凹面布目圧痕。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
12	丸瓦	残存長 5.1 厚さ 1.3	厚さは比較的薄く、側面内側の面取りはない。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕。側面篦切り後ナデ。	片岩粒・白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 覆土中。
13	石製粉挽臼（上臼）	残存長 16.2 厚さ 10.8 ふくみ 3.2	上縁は高く角張っており、ふくみは深い。挽木穴は方形ぎみである。	上面と側面は研磨。下面は良く擦り減っている。目は荒いが、8角と思われる。	安山岩	1/3。下面は被熱し、煤が付着している。 覆土中。

第9号溝跡（第126図）

B地点のⅠ区東側に位置し、重複する第1号井戸跡・第2号井戸跡・第22号土壙に切られ、第14号土壙を切っている。本溝跡は、調査区内でほぼ24m程検出され、さらに北側の調査区外に延びているが、調査区内では直線的にやや北西～南東方向に向いており、溝の南端はⅠ区とⅣ区を区切る堀跡の手前で途切れている。本溝跡は、東側2m～3mにある堀跡と併走しており、その堀跡とともに二重堀の形態を構成している。おそらく両者の間には、土塁か塀が構築されていたのではないかと思われる。規模は、上幅が1.40m前後で比較的均一であるが、南側に行くにしたがい若干狭くなっている。断面の形態は、壁は直線的に傾斜し、底面は比較的狭く平坦をなす逆台形を呈しており、確認面からの深さはほぼ一定で80cm前後を測る。覆土は、粘性の低い暗灰色土や黒灰色土を主体とし、最終的にはロームブロックを多量に含む暗黄褐色土（第1層）により、埋め戻された可能性が高い。遺物は、覆土中より常滑窯系甕・鉢・土師質土器皿・瓦・石臼等の破片（第127～130図）が出土しているが、この他に羽口の破片や鉄滓が比較的多く見られることは注目され、北側の調査区外に小鍛冶が存在することも予想される。

第9号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口縁部径（27.6cm）	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや内湾ぎみに開き、口唇部は若干丸みを帯びる。	内外面ともヨコナデの後ナデ。	片岩粒・赤色粒 内外－暗灰褐色	口縁部1/5。 覆土中。
2	片口鉢	口縁部径（26.0cm）	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや内側が窪み、口唇部は丸みを帯びる。	内外面ともヨコナデの後ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－暗灰褐色 肉－淡茶褐色	口縁部1/6。 覆土中。
3	鉢	底部径（14.2cm）	粘土紐積み上げ成形。底部はやや突出した平底を呈す。	体部及び底部内外面ナデ。	小石・白色粒 内外－暗灰色	底部1/3。須恵質。 覆土中。
4	常滑窯系甕	底部径 15.4cm	粘土紐積み上げ成形。底部は大きく平底を呈する。	胴部外面縦方向の篦ナデ、内面横方向の篦ナデ。底部内外面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－茶褐色	底部1/2。 内外面は緑色釉が垂下。 覆土中。
5	常滑窯系甕		粘土紐積み上げ成形。	胴部外面平行叩きの後ナデ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－淡灰色	破片。 覆土中。
6	土師質土器皿	底部径（5.8cm）	ロクロ成形。底部は突出しない平底を呈する。	底部内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	底部のみ。 覆土中。



第９号溝跡土層説明

第１層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第２層：暗灰色土層（鉄斑・Ｂ軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

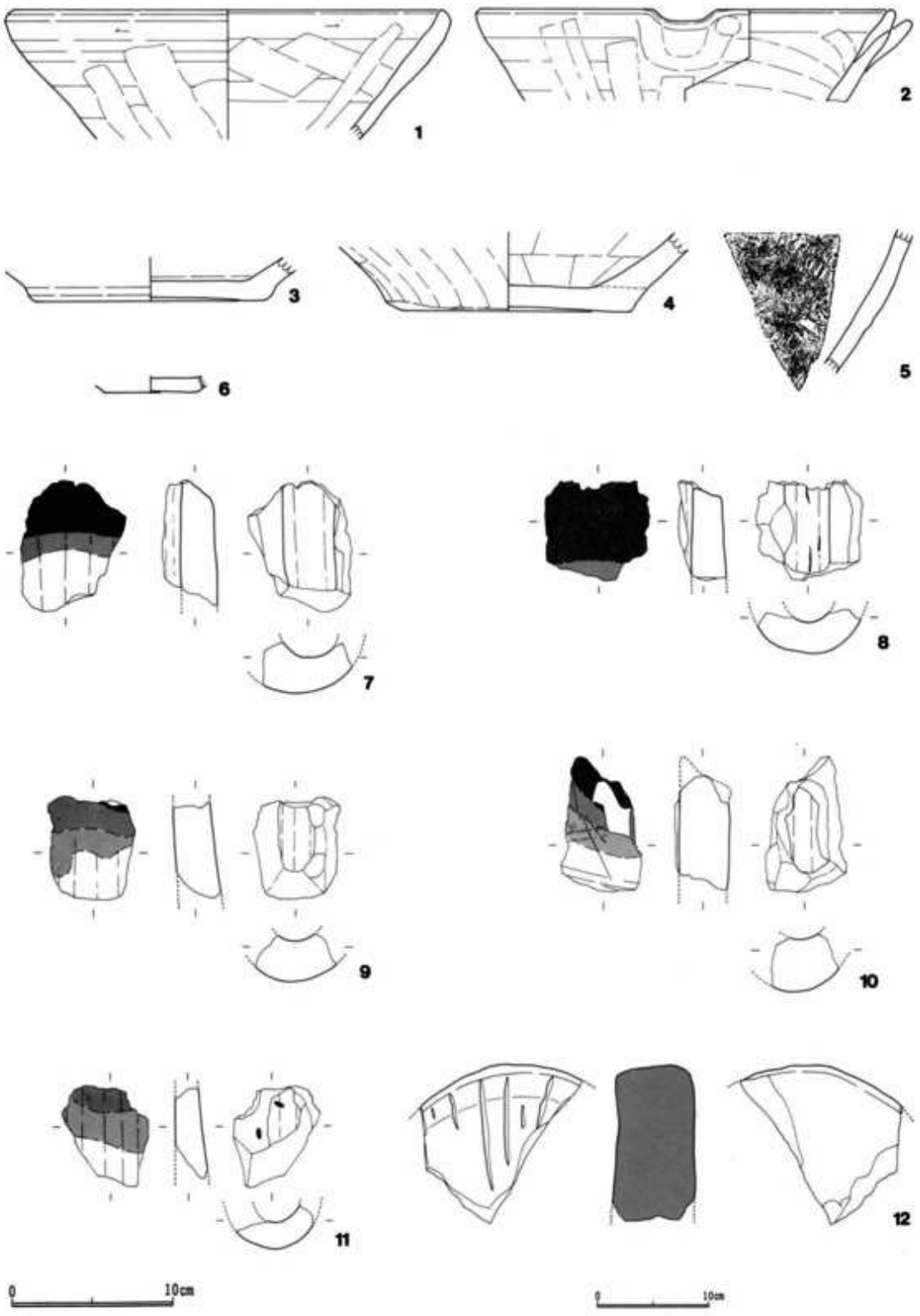
第３層：暗灰色土層（ローム粒子・Ｂ軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第４層：暗灰色土層（ローム粒子・ロームブロック・Ｂ軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

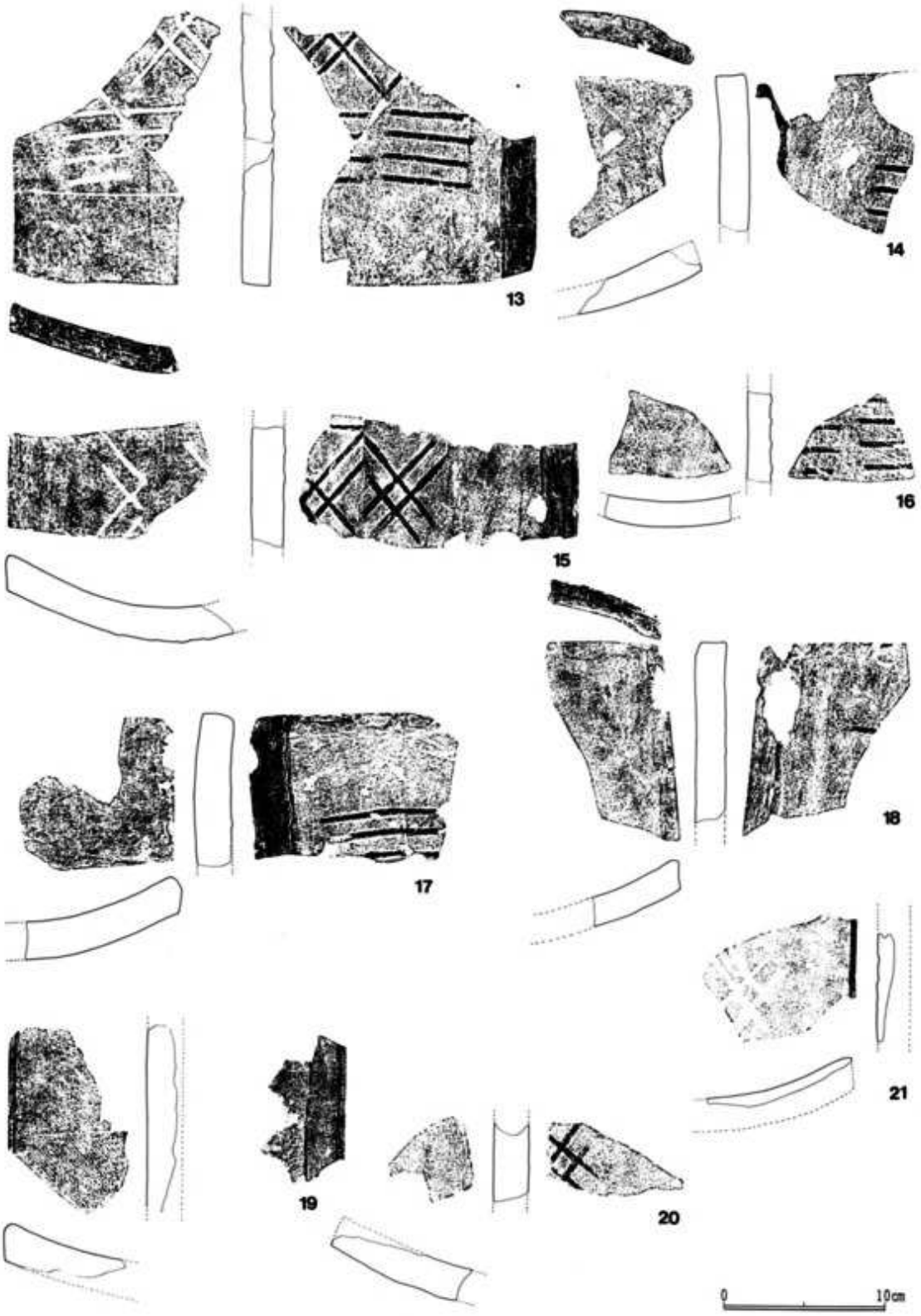
第５層：黒灰色土層（Ｂ軽石を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第６層：黒灰色土層（Ｂ軽石を均一に、ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

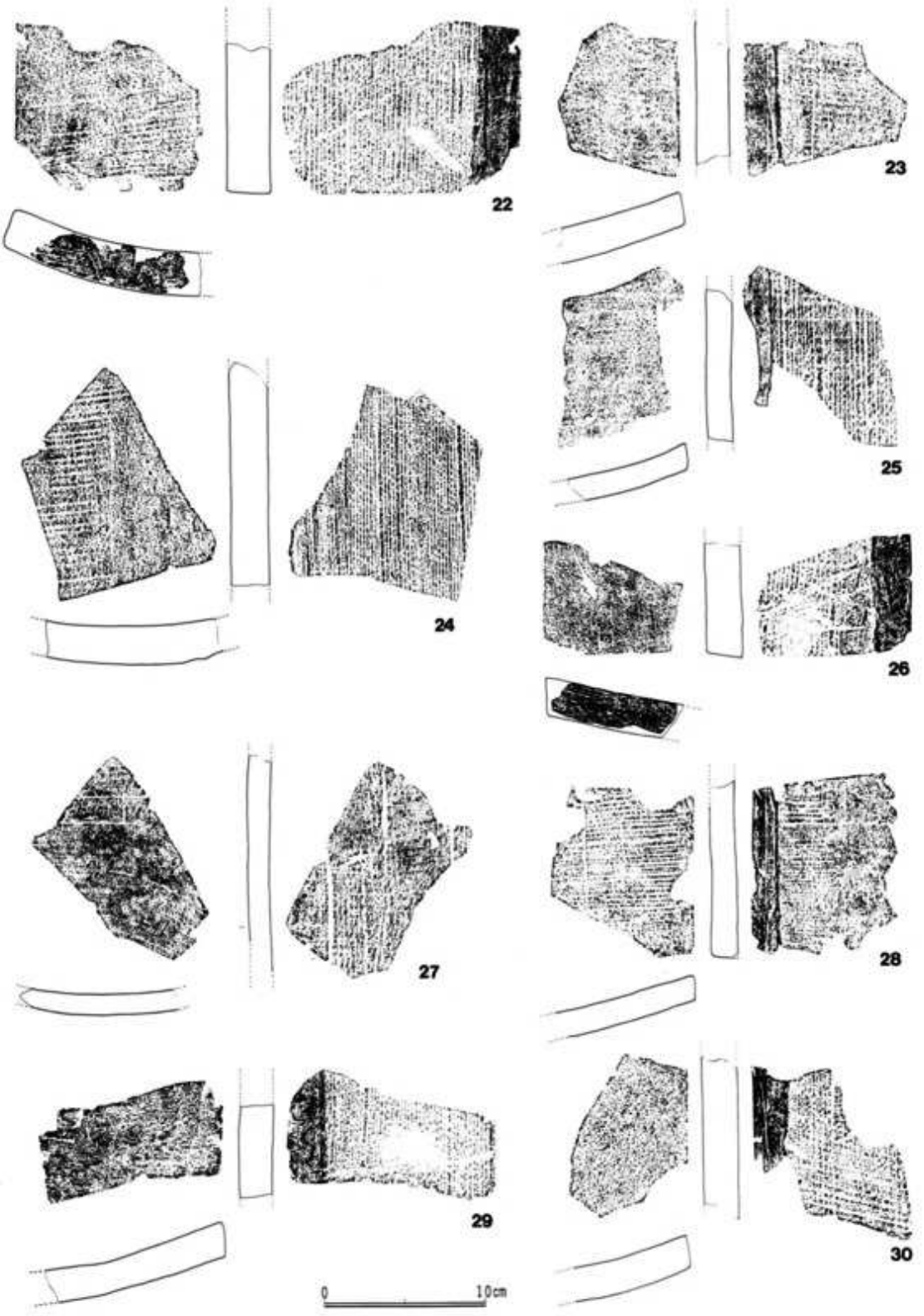
第126図　第９号溝跡



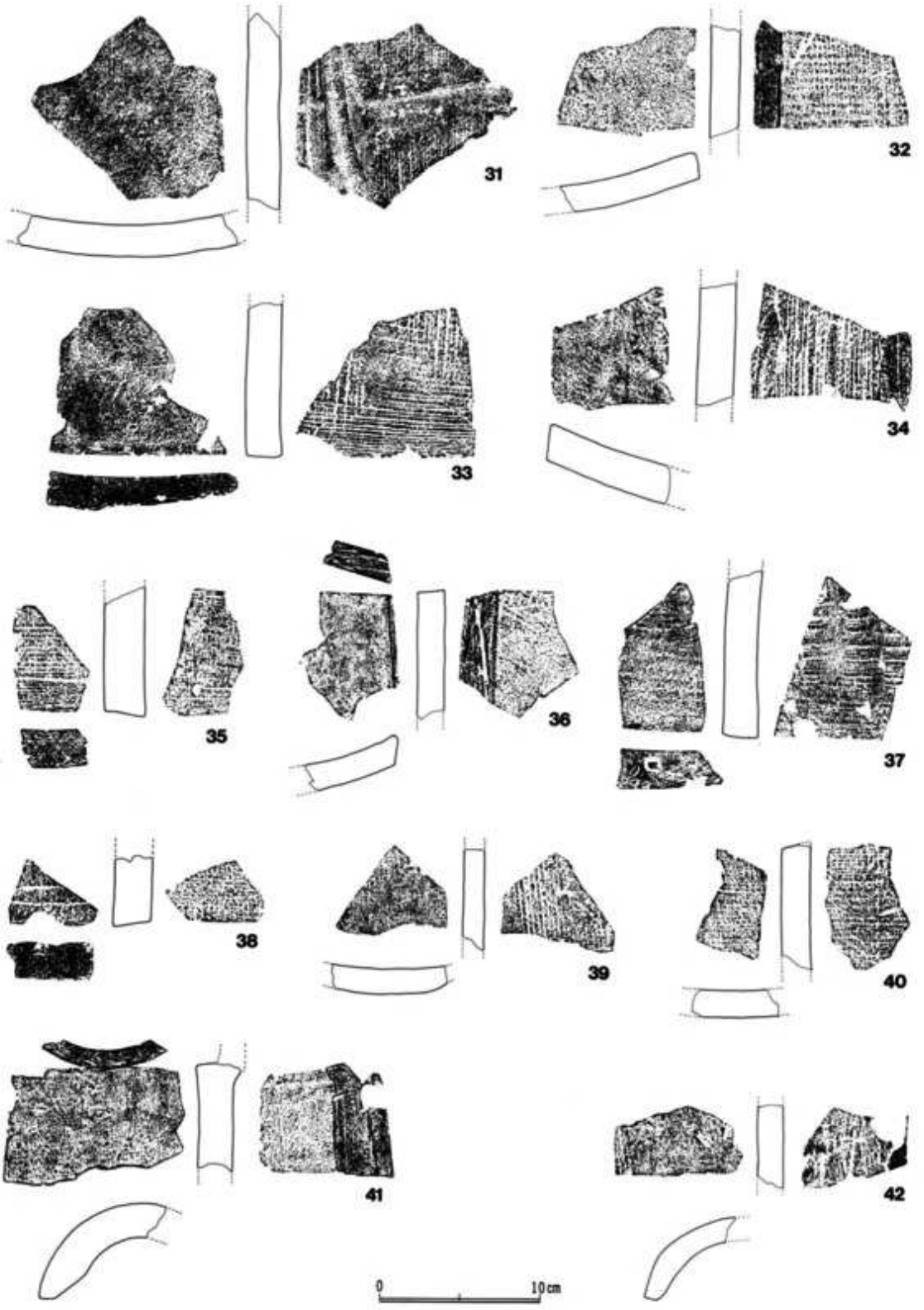
第127図　第９号溝跡出土遺物(1)



第128図　第９号溝跡出土遺物(2)



第129図　第９号溝跡出土遺物(3)



第130図　第９号溝跡出土遺物(4)

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
7	羽口	残存長 8.1 厚さ 2.2	外面上端部は加熱による発泡と溶解が著しく、黒色化している。	内外面とも縦方向のナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡茶褐色	破片。 覆土中。
8	羽口	残存長 6.2 厚さ 2.2	外面は加熱による発泡と溶解が著しく黒色化し、一部に砂が付着している。	内外面とも縦方向のナデ。	赤色粒・白色粒 外－黒色 内－明橙褐色	破片。 覆土中。
9	羽口	残存長 6.4 厚さ 2.5	外面は加熱により漸移的に変色し、上半部に砂が付着している。	外面縦方向のケズリ、内面縦方向のナデ。	赤色粒・白色粒 外－暗茶褐色 内－暗橙褐色	破片。 覆土中。
10	羽口	残存長 8.4 厚さ 3.1	外面上端部は加熱による発泡と溶解が著しく、黒色化している。	外面斜め及び横方向の篦ナデ。内面縦方向のナデ。	赤色粒・白色粒 外－淡黄褐色 内－暗橙褐色	破片。 覆土中。
11	羽口	残存長 6.3 厚さ 2.0	外面は加熱により漸移的に変色している。	外面縦方向のケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－淡黄褐色 内－暗茶褐色	破片。内面に初圧痕あり。 覆土中。
12	石製 粉挽臼 (下臼)	残存長 14.0 高さ 8.4 ふくみ 1.0	断面は中央部が高く、周縁部は若干湾曲している。	下面と側面は雑な研磨。上面は良く擦れて、目は摩滅している。	安山岩	破片。 覆土中。
13	平瓦	残存長 14.9 残存幅 13.4 厚さ 1.9	厚さは比較的均一で、端面はやや傾斜する。	凸面ナデの後文様叩き、凹面ナデ。側面・端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	約1/4。凹面側に凸面文様叩きの転写圧痕あり。 覆土中。
14	平瓦	残存長 10.2 残存幅 9.1 厚さ 1.9	厚さは比較的均一で、狭端部に向かってやや湾曲している。	凸面ナデの後文様叩き、凹面布目圧痕。側面・端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹－黒灰色 凸－暗灰色	破片。 覆土中。
15	平瓦	残存長 8.5 残存幅 15.6 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、側面は垂直ぎみである。	凸面ナデの後文様叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹－淡灰色 凸－暗灰色	破片。凹面側に凸面文様叩きの転写圧痕あり。 覆土中。
16	平瓦	残存長 6.1 残存幅 7.8 厚さ 1.5	厚さは比較的薄い。	凸面ナデの後文様叩き、凹面ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
17	平瓦	残存長 9.5 残存幅 10.6 厚さ 2.2	厚さは比較的均一で、狭端部はやや反る。狭端面・側面はやや丸みをもつ。	凸面文様叩きの後端部付近ナデ、凹面布目圧痕の後端部付近ナデ。狭端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。軒平瓦の可能性あり。 覆土中。
18	平瓦	残存長 12.4 残存幅 9.3 厚さ 1.9	厚さは比較的均一で、狭端面・側面とも垂直ぎみ。狭端部凹面側に面取りを施す。	凸面文様叩きの後ナデ、凹面ナデ。狭端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色 肉－淡灰白色	破片。 凹面側砂付着。 覆土中。
19	平瓦	残存長 12.3 残存幅 8.1 厚さ 2.2	側面は垂直ぎみである。凸面側の大部分は剥離している。	凸面ナデ、凹面布目圧痕の後ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹－暗灰色 凸－灰色	破片。 覆土中。
20	平瓦	残存長 5.0 残存幅 8.7 厚さ 2.2	厚さはやや厚く、側面は傾斜する。	凸面ナデの後文様叩き、凹面布目圧痕。側面ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰褐色	破片。 覆土中。
21	平瓦	残存長 6.7 残存幅 9.2	凸面側は剥離している。	凹面・側面ともナデ。	白色粒 凹－黒灰色	破片。凹面側に凸面文様叩きの転写圧痕あり。覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
22	平瓦	残存長 11.1 残存幅 12.4 厚さ 2.7	厚さは比較的均一で厚い。端面は垂直ぎみで、側面は傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面ナデの後端部付近木口状工具による横方向のナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹－淡灰色 凸－黒灰色	破片。 覆土中。
23	平瓦	残存長 9.6 残存幅 8.4 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、側面はやや傾斜する。	凸面木口状工具による横方向のナデの後縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
24	平瓦	残存長 14.8 残存幅 12.5 厚さ 2.3	厚さは比較的均一で、やや厚い。凹面側に砂付着。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕の後木口状工具による横方向のナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。
25	平瓦	残存長 9.4 残存幅 7.6 厚さ 1.6	厚さは比較的薄く、側面はやや傾斜する。凹面側に砂付着。	凸面縄目叩き、凹面木口状工具による横方向のナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。
26	平瓦	残存長 7.5 残存幅 8.7 厚さ 2.2	厚さは比較的均一でやや厚い。側面は垂直ぎみで、端面はやや傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕の後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
27	平瓦	残存長 14.0 残存幅 12.5 厚さ 1.4	厚さは比較的均一で薄い。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面糸切り。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 覆土中。
28	平瓦	残存長 11.5 残存幅 9.0 厚さ 1.5	厚さは比較的均一で薄い。	凹凸両面木口状工具による横方向のナデの後、凸面側縄目叩き。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 覆土中。
29	平瓦	残存長 9.3 残存幅 11.4 厚さ 2.1	厚さは比較的均一である。凹面側に砂付着。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰褐色	破片。 覆土中。
30	平瓦	残存長 11.4 残存幅 8.0 厚さ 2.2	厚さは比較的均一で、側面はやや傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	片岩粒・白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 覆土中。
31	平瓦	残存長 12.1 残存幅 13.7 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。	凸面縄目叩きの後指ナデ状の凹線を十文字に施す。凹面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 凹凸－淡茶褐色	破片。 覆土中。
32	平瓦	残存長 7.6 残存幅 8.6 厚さ 1.8	厚さは比較的均一で、側面はやや傾斜する。凹面側砂付着。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	赤色粒・白色粒 凹凸－淡灰褐色 側面－黒褐色	破片。 覆土中。
33	平瓦	残存長 9.8 残存幅 11.8 厚さ 2.1	厚さは比較的均一で、端面は垂直ぎみである。凹面側砂付着。	凸面木口状工具による横方向のナデの後縄目叩き、凹面ナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
34	平瓦	残存長 7.7 残存幅 8.3 厚さ 2.3	厚さは比較的均一でやや厚い。側面はやや傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
35	平瓦	残存長 7.9 残存幅 5.3 厚さ 2.5	厚さは比較的均一で厚い。端面はやや傾斜する。	凹凸両面木口状工具による横方向のナデの後、凸面縄目叩き。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹－黒灰色 凸－淡灰色	破片。 覆土中。
36	平瓦	残存長 8.1 残存幅 6.3 厚さ 1.7	厚さは比較的均一である。狭端面・側面とも垂直ぎみである。	凹凸両面ともナデ。狭端面側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹－暗灰色 凸－淡灰色	破片。 覆土中。

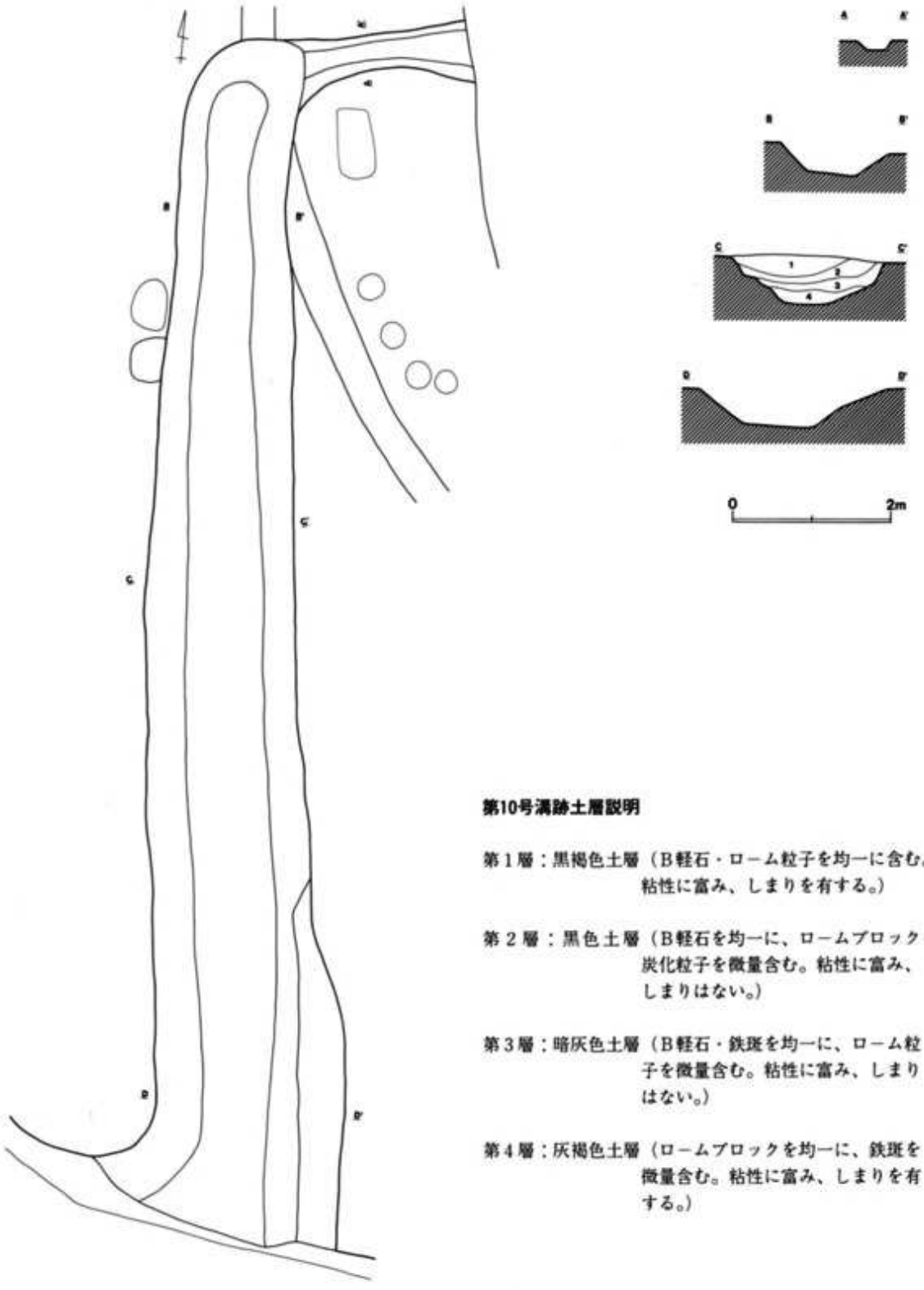
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
37	平瓦	残存長 10.4 残存幅 8.1 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。端面は垂直ぎみで、やや丸みをもつ。凹凸両面砂付着。	凸面木口状工具によるナデの後縦方向のナデ、凹面ナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
38	平瓦	残存長 6.5 残存幅 4.4 厚さ 2.3	厚さは比較的均一で厚い。端面はやや傾斜する。凹面側砂付着。	凸面木口状工具による横方向のナデの後縄目叩き。凹面ナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
39	平瓦	残存長 6.2 残存幅 7.1 厚さ 1.3	厚さは比較的均一で薄い。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕の後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 覆土中。
40	平瓦	残存長 8.1 残存幅 5.9 厚さ 1.7	厚さは比較的均一で、端面はやや傾斜する。	凹凸両面とも木口状工具による横方向のナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹－黒灰色 凸－淡灰色	破片。 覆土中。
41	丸瓦	残存長 6.7 厚さ 2.1	厚さは比較的厚く、側面内側に幅広の面取りを施す。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。
42	丸瓦	残存長 5.1 厚さ 1.6	厚さは比較的薄く、側面内側には面取りを施さない。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰褐色 肉－淡褐色	破片。 覆土中。

第10号溝跡（第131図）

B地点のⅢ区東側に位置し、溝跡の北端部を蛇行しながら南北方向に向かう後世の小溝に切られている。本溝跡は、Ⅲ区南端の直角に曲がる堀跡から分岐して、ほぼ北に向かって約15mほど直線的に延び、Ⅱ区とⅢ区を区切る東西方向の堀跡の手前で途切れている。また、Ⅱ区の第8号溝跡と同様に、溝跡が途切れる北端部では、幅50cm・深さ12cm程度の小溝が東に向かって分岐し、東側の堀跡と連結している。本溝跡は、この東側の堀跡と併走して、二重堀の形態を構成しているが、本溝跡と堀跡の向きは平行せずにややずれており、北側に向かって両者の間隔は狭くなっている。この両者の間には、Ⅱ区東端と同様におそらく土塁が構築されていたのではないかと思われる。規模は、上幅が南側で2.40m・中央部で1.70m・北側で1.40mで、北側に行くにしたがい徐々に狭くなっている。断面の形態は、壁は直線的で緩やかに傾斜し、底面は比較的広い平坦をなす逆台形で、箱堀に近い形態を呈している。確認面からの深さは、南側で50cm・北側で32cmを測り、北側に向かって若干浅くなっている。覆土は、下半が灰色系の粘質土、上半が黒色系の粘質土を主体にしている。遺物は、鉢・渥美窯系甕・土師質土器皿・瓦・石鉢・石碑等の破片（第132・133図）が出土しているが、この中でNo.2の渥美窯系甕の破片は第5号井戸跡出土の破片と同一個体と考えられ、またNo.4の連珠文軒平瓦の破片は、第20号掘立柱建物跡・第16号土壙・第4号溝跡出土のものと同笵である。図示したもの以外では、内耳鍋や在地産擂鉢の破片も出土している。

第10号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	口縁部径 (24.7cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部は丸みをもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	片岩粒・小石 外－淡灰褐色 内－暗灰褐色	口縁部1/8。 覆土中。



第10号溝跡土層説明

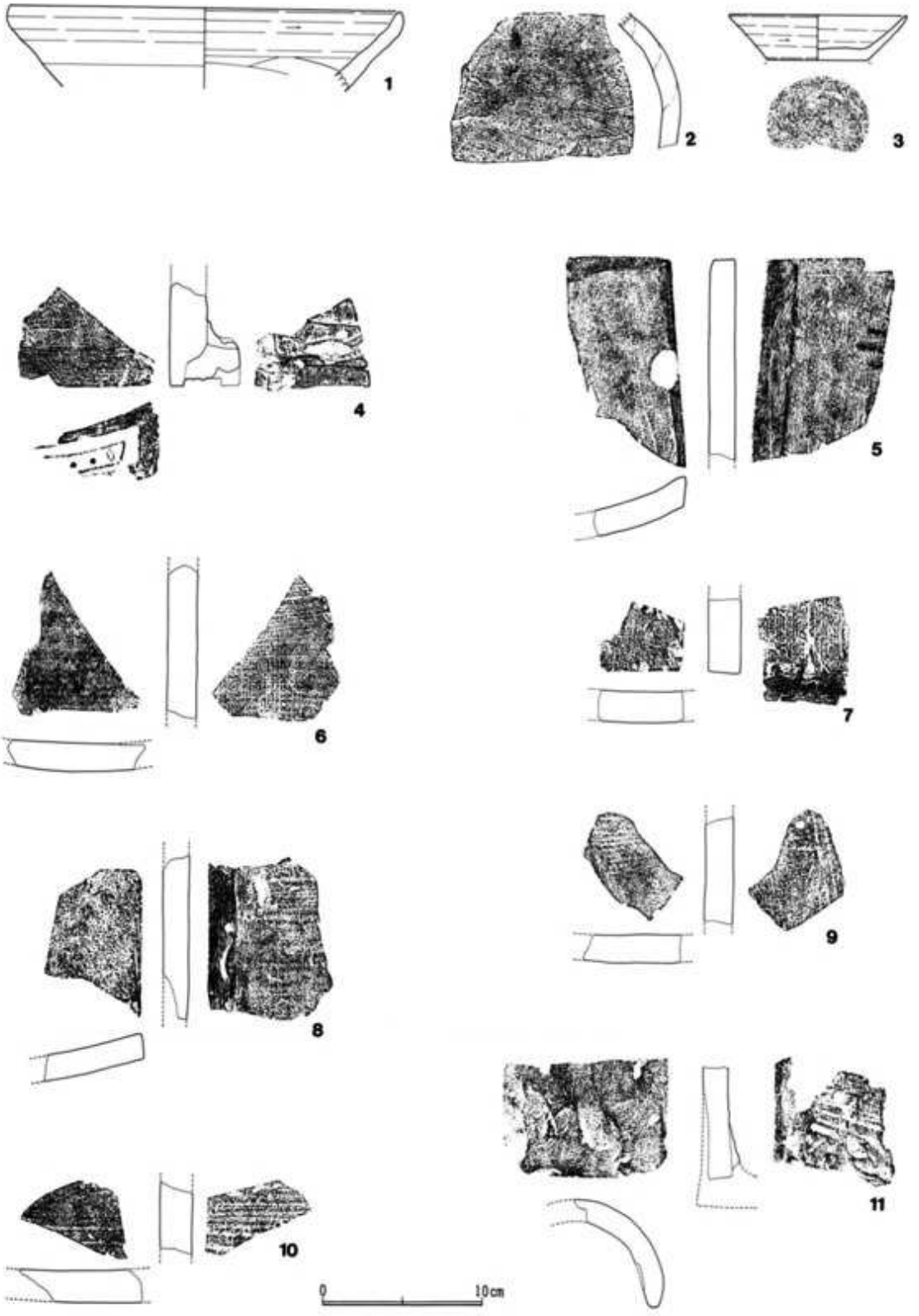
第１層：黒褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第２層：黒色土層（B軽石を均一に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第３層：暗灰色土層（B軽石・鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第４層：灰褐色土層（ロームブロックを均一に、鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第131図　第10号溝跡



第132図　第10号溝跡出土遺物(1)

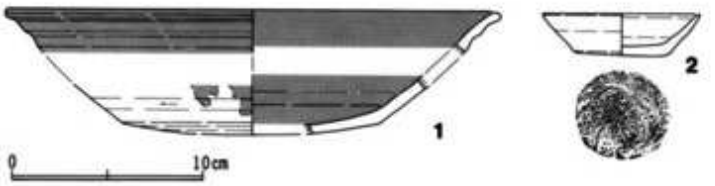
第133図　第10号溝跡出土遺物(2)

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
2	瀬美窯系 甕		粘土紐積み上げ成形。	胴部外面斜方向のハケの後縦方向のハケ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－暗灰色	破片。第5号井戸跡No3と同一個体。覆土中。
3	土師質土器	口径 11.0 器高 2.8 底径 6.4	ロクロ成形。口縁部は直線的に開き、底部は突出しない平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切りの後ナデ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡褐色	約2/3。 覆土中。
4	軒平瓦	残存長 6.3 残存幅 8.8 厚さ 2.3	一枚作り、瓦当貼り付け。顎は厚く高い段をなす。瓦当文様は圏線と小さい珠文による連珠文。	顎部凸面背部縦方向の篦ナデ、端部横方向のナデ。凹面布目圧痕の後端部付近ナデ。側面・端面ともナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。
5	平瓦	残存長 12.4 残存幅 6.0 厚さ 1.6	厚さは比較的均一でやや薄い。狭端面・側面とも垂直ぎみ。狭端部凹面側面取り。	凸面ナデの後文様叩き、凹面布目圧痕。狭端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。
6	平瓦	残存長 9.6 残存幅 8.6 厚さ 1.9	厚さは比較的均一である。	凹凸両面とも木口状工具による 面縄目叩き。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。
7	平瓦	残存長 4.6 残存幅 5.3 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、端面は若干傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。
8	平瓦	残存長 10.1 残存幅 6.5 厚さ 1.5	厚さは比較的均一で薄い。側面は垂直ぎみである。	凹凸両面とも木口状工具によるナデの後、凸面縄目叩き。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色 肉－淡灰褐色	破片。 覆土中。
9	平瓦	残存長 7.9 残存幅 6.3 厚さ 1.7	厚さは比較的均一である。	凹凸両面とも木口状工具による横方向のナデの後、凸面側縄目叩き。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 覆土中。
10	平瓦	残存長 4.6 残存幅 7.7 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。	凹凸両面とも木口状工具による横方向のナデの後、凸面側縄目叩き。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 覆土中。
11	軒丸瓦	残存長 7.0 厚さ 1.6	厚さは比較的薄い。側面は丸みをもち、内側に面取りを施さない。瓦当面剥離。	凸面縦方向のナデ、凹面布目圧痕の後篦ナデ。	白色粒・黒色粒 凸－淡褐色 凹－暗褐色	破片。瓦当剥離面に煤付着。 覆土中。
12	石鉢	底部径 (20.8cm)	底部は垂直ぎみに突出し、大きな平底を呈する。	外面荒い研磨、内面は良く擦れている。	安山岩	底部1/6。 覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
13	板碑	残存長 16.9 幅 18.5 厚さ 2.8	側面は打ち欠きにより形状調整。表面中央部に梵字状の彫り込み。	表面未調整、裏面荒いケズリ。	緑色片岩	約1/4。 覆土中。
14	板碑	残存長 28.8 幅 13.6 厚さ 2.3	側面は打ち欠きにより形状調整。表面中央部に梵字状の浅い窪み。	表面雑な調整、裏面未調整。	片岩	約2/3。 覆土中。

第11号溝跡（第135図）

B地点のI区西端に位置し、第1号掘立柱建物跡・第11号土壙・第31号土壙及び第1号柱穴列に切られている。本溝跡は、調査区内で検出されたのは溝跡の東側の一部だけであるため、その全容は不明であるが、調査区内で検出された部分から推測すると、平面形が方形もしくは長方形の周溝状を呈するものと思われる。溝は、南北東の各溝とも上幅が40cmの比較的均一な幅で、南東側のコーナー部は連続せずに途切れている。規模は、南北方向が6.34mあり、東西方向は2.03mまで測れる。断面の形態は、各溝とも壁が直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面が平坦な逆台形を呈しており、確認面からの深さは北側溝が35cm・東側溝が22cm・南側溝が18cmを測る。覆土は、焼土粒子や炭化粒子を微量に含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、東側溝中央部の底面上より、瀬戸窯系大皿の破片と完形の土師質土器皿が出土しただけであり、自然石もまったく見られなかった。



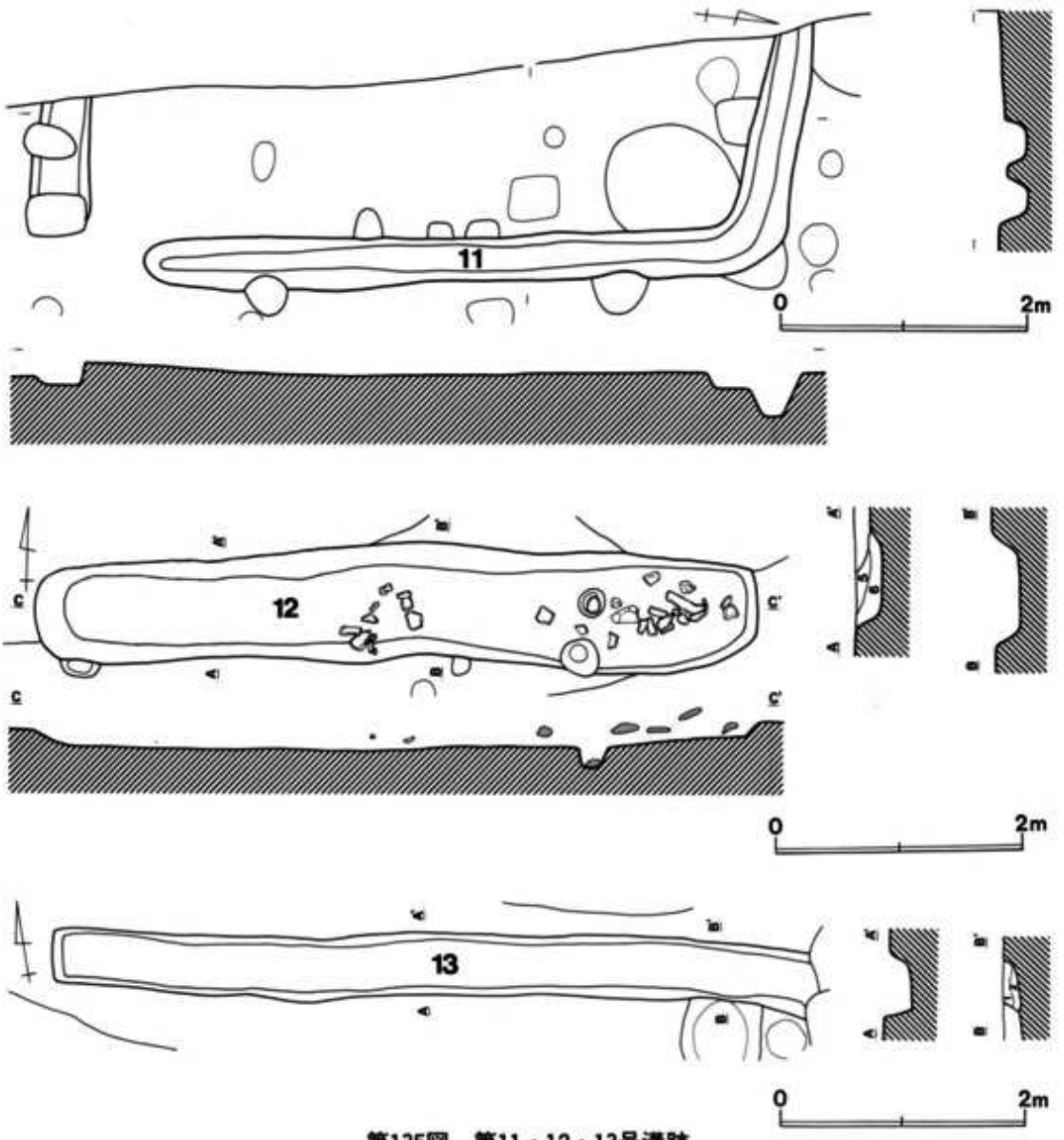
第134図　第11号溝跡出土遺物

第11号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	瀬戸窯系 大皿	口縁部径 (25.6cm)	ロクロ成形。口唇部は丸く若干短く外反する。底部はやや丸みをもつ。	口縁部内外面回転ナデ。体部及び底部外面回転篦ケズリ、内面回転ナデ。	白色粒 内外－淡緑色 肉－淡灰白色	口縁部小破片、底部1/4。内外面に淡緑色釉がかかる。 底面。
2	土師質土器	口径 8.1 器高 2.1 底径 5.0	ロクロ成形。口縁部は若干内湾ぎみに外傾し、口唇部は尖る。底部は平底を呈す。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面回転ナデ。	赤色粒・白色粒 外－淡褐色 内－黒褐色	ほぼ完形。内面及び外面の一部にタール状の付着物。 底面。

第12号溝跡（第135図）

B地点のII区南端に位置し、第1号集石遺構と第41号土壙に切られている。本溝跡は、ほぼ東西方向に向く全長5.87m・最大幅91cmの非常に小規模なもので、形状的には第2号土壙のような平面形が超長方形を呈する土壙に類似している。断面の形態は、壁が直線的でやや緩やかに傾斜し底面が広く平坦な逆台形を呈し、確認面からの深さは約20cmを測る。遺物は、覆土上面を主体に比較的多くの自然石が出土し、それらの自然石に混じって内耳鍋・鉢・石臼の破片が少量出土しているが、これらの遺物は、その出土状態と時期から見て、重複する第1号集石遺構と関係する可能性が高い。



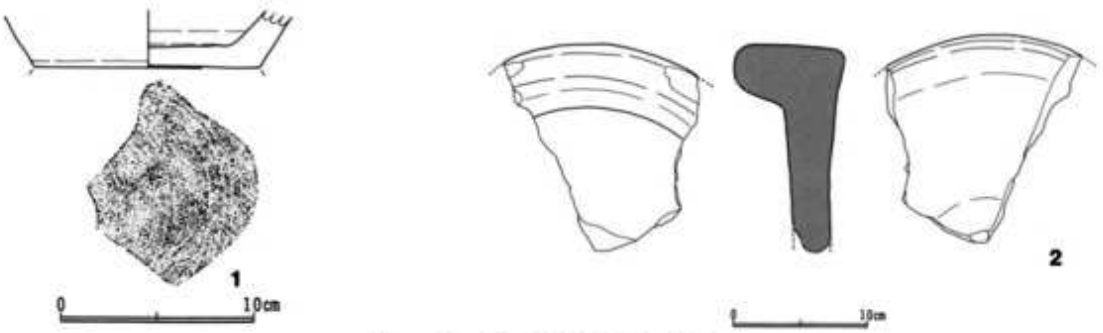
第135図　第11・12・13号溝跡

第12号溝跡土層説明

第5層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第6層：黒褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

第13号溝跡土層説明

第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黒色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）



第136図　第12号溝跡出土遺物

第12号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	鉢	底部径 (11.6cm)	粘土紐積み上げ成形。底部は平底を呈する。	体部外面ナデ、内面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	黒色粒・白色粒 内外－淡灰褐色	底部1/3。 覆土中。
2	石製 紡錘臼 (上臼)	残存長 15.3 高さ 8.2 ふくみ 1.3	上縁は高く丸みを帯び、側面は垂直ぎみである。	上面及び側面研磨。下面は良く擦れており、目はない。	安山岩	約1/5。 覆土中。

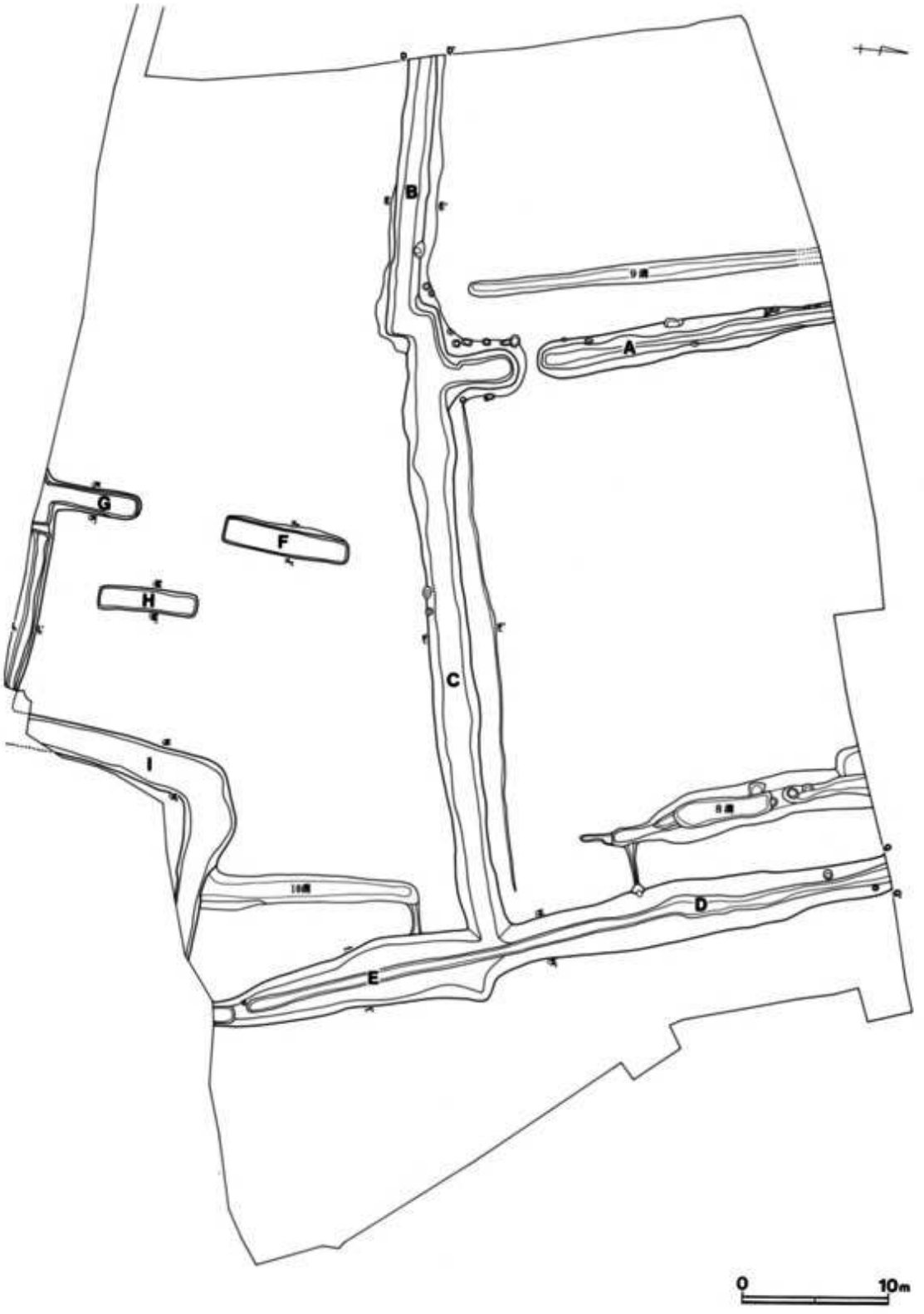
第13号溝跡（第135図）

B地点のⅢ区からⅣ区にかけて位置し、重複する第2号門跡に切られている。本溝跡は、第2号門跡の東側に溝跡の延長部分が見られないことから、全長6.50m～7m位の比較的小規模な溝と考えられる。溝の向きは、ほぼ東西方向を向いて周囲の第3～6号溝跡と平行している。溝の上幅は50cm程度あり、直線的で均整のとれた形態を呈している。断面の形態は、底面が広く平坦な逆台形を呈し、確認面からの深さは15cm～20cmを測る。遺物は、本溝跡に伴うものはなく、和泉式土器の小破片が少量出土しただけである。

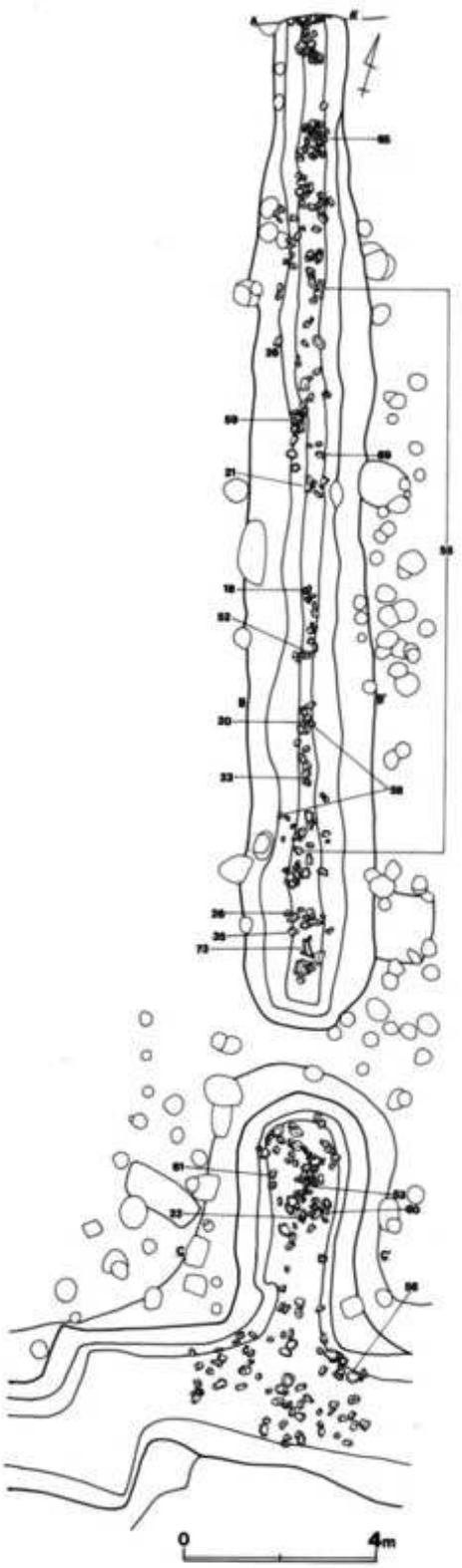
9．堀　　跡（第137～140図）

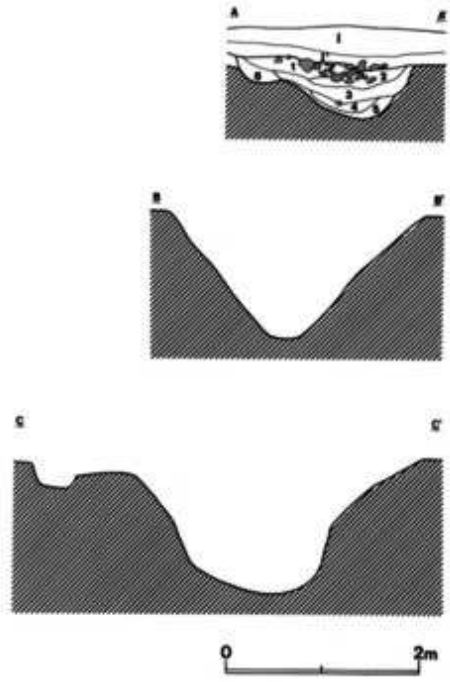
堀跡は、B地点の調査区内を敷地割りとしてⅠ～Ⅴ区（第3図）に区画しているもので、溝に比べて相対的に規模が大きく直線的な形態をとっている。この堀跡は、堀の配置や出土遺物から見て同時に存在したものと考えられるが、地点によって堀の形態が若干異なっているため、便宜的にA～Iの9区に分けて説明する（第137図）。なお、B地点の調査区内の敷地を一次的に区画している東西方向のB・C区の堀跡と南北方向のD・E区の堀跡は、調査前の地表面に見られた現在の地割りと一致しており、特にC区は畑の中に帯状の窪地としてその痕跡を残していた。

A区（第138図）は、B地点の中央部を東西方向に延びる堀跡B区とC区が鉤の手状に連結する部分の若干東に寄った場所から、ほぼ直角に北に向かって直線的に調査区外に延びる堀で、北端部の上半は後世の耕作による強い削平を受けている。堀跡の西側約2m～3mにはやや規模の小さな第9号溝跡が併走しており、それとともに二重堀の形態を構成している。堀の南側には掘り残しによる陸橋部をもち、その陸橋部の南側と北側では堀の形態が異なっている。陸橋部の南側は、上幅が



第137図　堀　　跡





堀跡A区北端土層説明

第Ⅰ層：現 耕 作 土（A軽石混入）。
第Ⅰ'層：旧 耕 作 土（A軽石混入）。

第1層：暗 褐 色 土 層（B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第2層：暗灰褐色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に、B軽石・ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

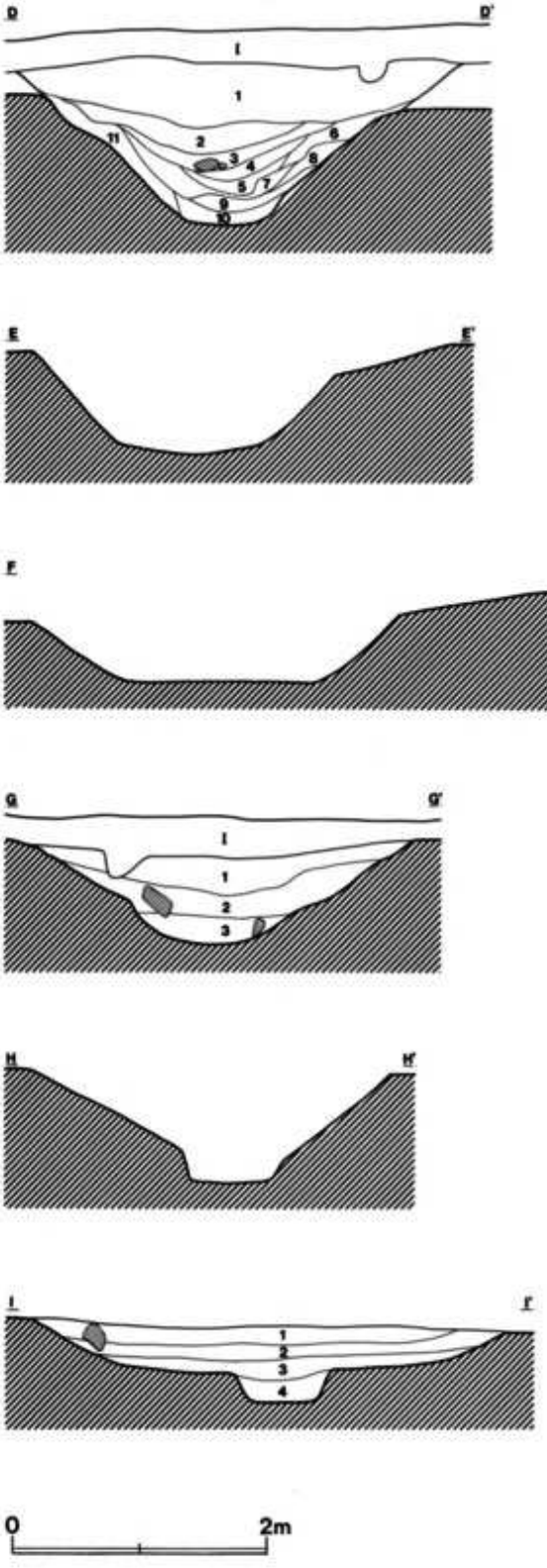
第3層：暗灰褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

第4層：暗灰褐色土層（B軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第5層：暗黄灰色土層（B軽石・ロームブロック・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第6層：淡灰褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第138図　堀跡A区遺物出土状態図



第139図　堀跡断面図(1)

堀跡B区西端（D－D′）土層説明

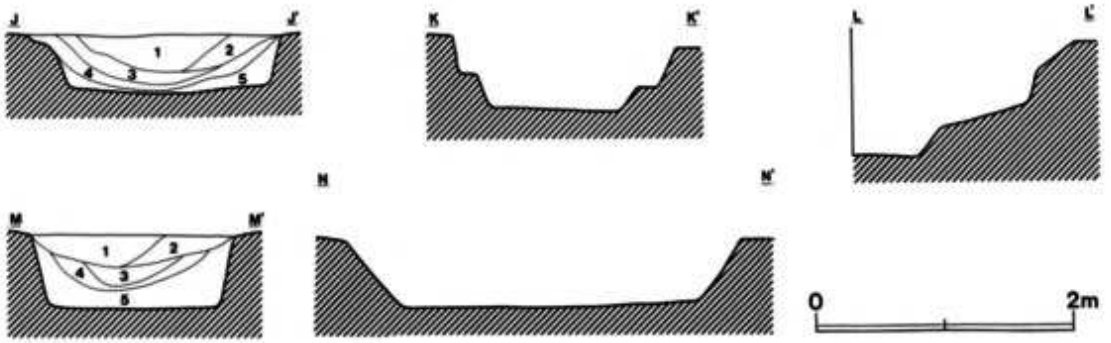
第Ⅰ層：現耕作土。
第Ⅱ層：黒色土層
第1層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子・小石を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：暗褐色土層（B軽石・鉄斑・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：灰褐色土層（鉄斑を均一に、B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：黒灰褐色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：灰褐色土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第6層：暗灰褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第7層：暗灰色土層（ロームブロックを多量に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第8層：黒灰色土層（B軽石・鉄斑を均一に、ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第9層：暗灰色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第10層：暗灰色土層（鉄斑を多量に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第11層：暗灰褐色土層（B軽石・ローム粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

堀跡D区北端（G－G′）土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。
第1層：黒灰色土層（A軽石を均一に、鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黒灰色土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗灰色土層（ロームブロック・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

堀跡E区（I－I′）土層説明

第1層：暗灰色土層（B軽石・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗灰褐色土層（鉄斑を多量に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第3層：暗灰色土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第4層：暗灰色土層（鉄斑・白色粘土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第140図　堀跡断面図(2)

堀跡F・H区（J—J'・M—M'）土層説明
第1層：暗褐色土層（B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第2層：淡褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）
第3層：淡灰褐色土層（鉄斑を均一に、B軽石・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：暗灰色土層（B軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：黒灰色土層（B軽石・ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

約3mで確認面からの深さが約70cmを測るが、断面の形態は上半部が緩やかに傾斜し、下半部は中位から方向を変えて直線的に急傾斜している。底面は比較的広く平坦で箱堀に似た形態を呈し、連結する南側のB区やC区の形態に類似している。陸橋部の北側は、上幅が約2.60mで確認面からの深さが約65cmを測る。断面の形態は、壁が直線的に傾斜し、底面が比較的狭く平坦な薬研堀に似た形態を呈している。覆土は、自然堆積の様相を示し、明確な掘り返しの痕跡は見られない。

B区とC区は、B地点の中央部をほぼ東西方向に直線的に延びる堀跡で、西側はさらに調査区外に延び、東側は南北方向に向くD・E区の堀跡と直角につながっている。このB区とC区は、形態や規模はほぼ同じであるが、若干堀跡の方向がずれており、その連結する部分は鉤の手状に屈曲している。規模は、堀の上幅が3.50m前後あり、確認面からの深さは70cm～80cmであるが、B区西端の調査区断面では最高95cmを測る。断面の形態は、壁が直線的で緩やかに傾斜し、底面が広く平坦な箱堀状を呈している。覆土は、自然堆積の様相を示し、明確な掘り返しの痕跡は見られない。

D区とE区は、B地点の東側を南北方向に向いて直線的に延びる堀跡で、その南北両端はそれぞれ調査区外にさらに延びている。堀跡の西側には、やや規模の小さな第8号溝跡と第10号溝跡がC区の堀跡を挟んで対称に併走しており、A区の堀跡と同様にそれらとともに二重堀の形態を構成している。この堀跡も、C区の堀跡が直角につながる地点から北側のD区と南側のE区では堀跡の形態や規模が若干異なっている。D区は、現状で堀の上幅が3m前後あり、確認面からの深さは80cm程度を測るが、このD区上面は水田耕作により強く削平されているため、本来はもっと規模が大きく深さも深かったものと考えられる。断面の形態は、壁は直線的で比較的緩やかに傾斜し、底面はやや狭く箱堀状に一段深くなっている。E区は、堀の上幅は南端が狭く北に行くに従って徐々に広くなり、最高で4m前後となる。断面の形態は、規模の大きな部分では壁が緩やかに傾斜し、底面は広く平坦で中央部が箱堀状に一段深くなっている。この堀底面の一段深くなっている箱堀状の溝は、E区からD区に向かって緩やかに傾斜しているが、E区南側では一部連続せず畝堀状に掘り残

されて途切れている。覆土は、自然堆積の様相を示し、明確な掘り返しの痕跡は見られない。

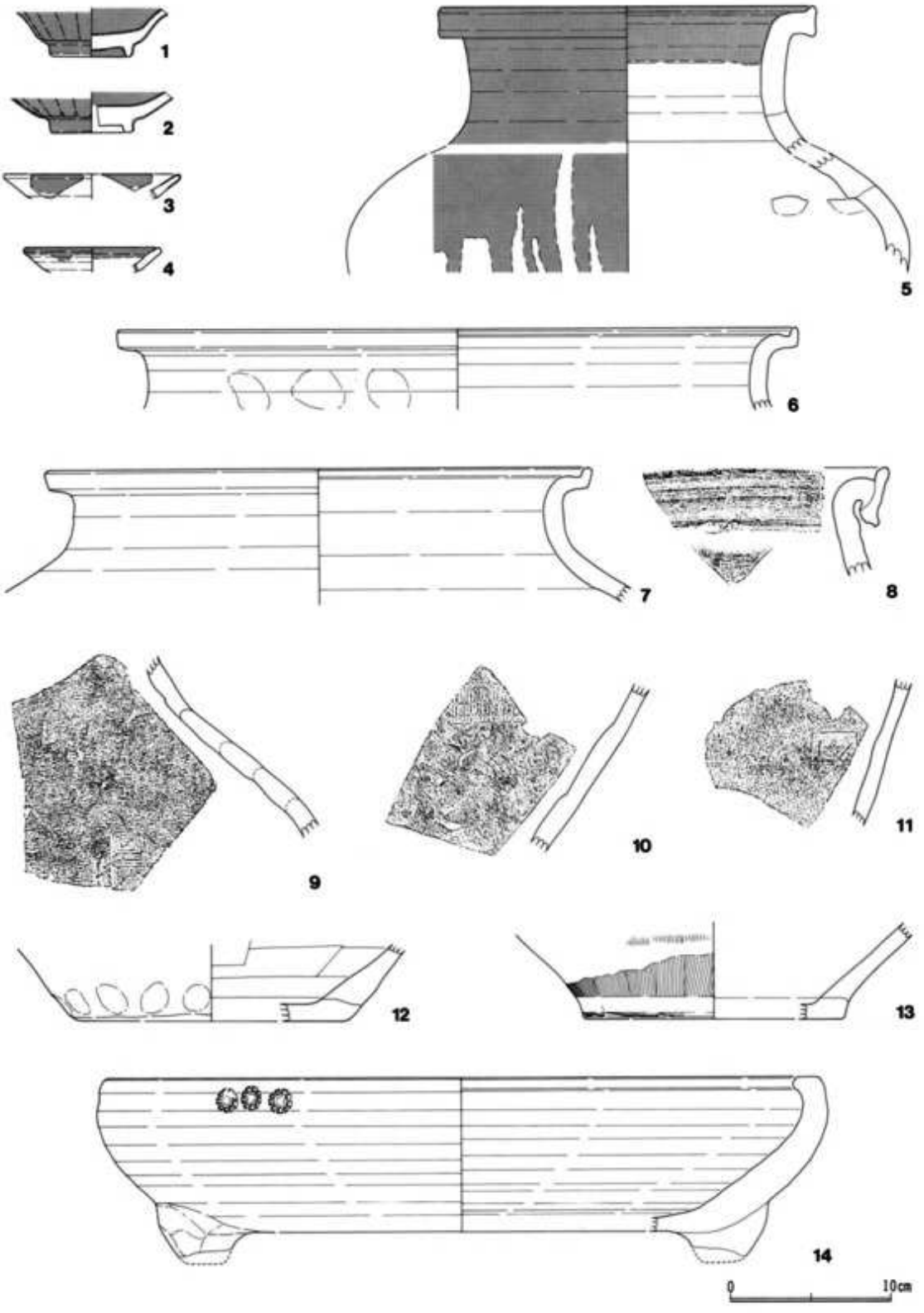
F～H区は、B地点の南側に位置する。G区の堀跡は、南側の残丘斜面に沿って東西方向に延び、一部北側のF区の堀跡に向かってほぼ直角に分岐している。残丘斜面に沿って東西方向に延びる部分は、調査区の関係から堀跡の幅の半分(1.70m)しか調査できなかったため、その形態や規模は不明である。断面は上半が緩やかに傾斜し、下半は方向を変えて直線的に急傾斜し、底面は広く平坦で中央部が一段深い二段堀になっているようであり、確認面からの深さは約90cmある。形態的には堀跡E区の形態に類似しており、東側調査区外の延長でE区とつながる可能性もあるが、堀跡の西側の分岐するやや手前には、堀底面よりも畝状に一段高く掘り残された部分があり、それより西側の堀底面は広く平坦で二段堀は見られない。北に分岐する堀跡は、上幅1.72m・確認面からの深さは54cmを測る。断面の形態は、壁は直線的に二段に急傾斜し、底面は広く平坦な箱堀である。北側のF区は、上幅2.00m・確認面からの深さが44cmを測り、断面の形態はG区と同じ箱堀である。G区との間には広い陸橋による通路があり、当初は第2号門跡が存在していたようである。H区の堀跡は、この通路の西側に近接して位置し、F区とG区に平行している。形態的にはF区の堀跡に類似しており、規模は、堀跡の上幅が1.57m・確認面からの深さが56cmを測る。H区は、第9号掘立柱建物跡と第2号門跡の控柱の柱穴を切っていることから、通路(入口)の改修に伴って新しく掘られたものであることが解る。

I区は、B地点の南側に位置し、直線的でほぼ直角に曲がるL字状の形態を呈している。おそらく、東側のE区の堀跡と西側のG区の堀跡につながるものと思われ、南東側の調査区外に方形もしくは四角形の区画が存在するものと思われる。規模は、堀跡の上幅が広い所で約3mあるが、堀の西側はやや狭くなっている。確認面からの深さは55cmあり、断面は底面が広く平坦な箱堀である。

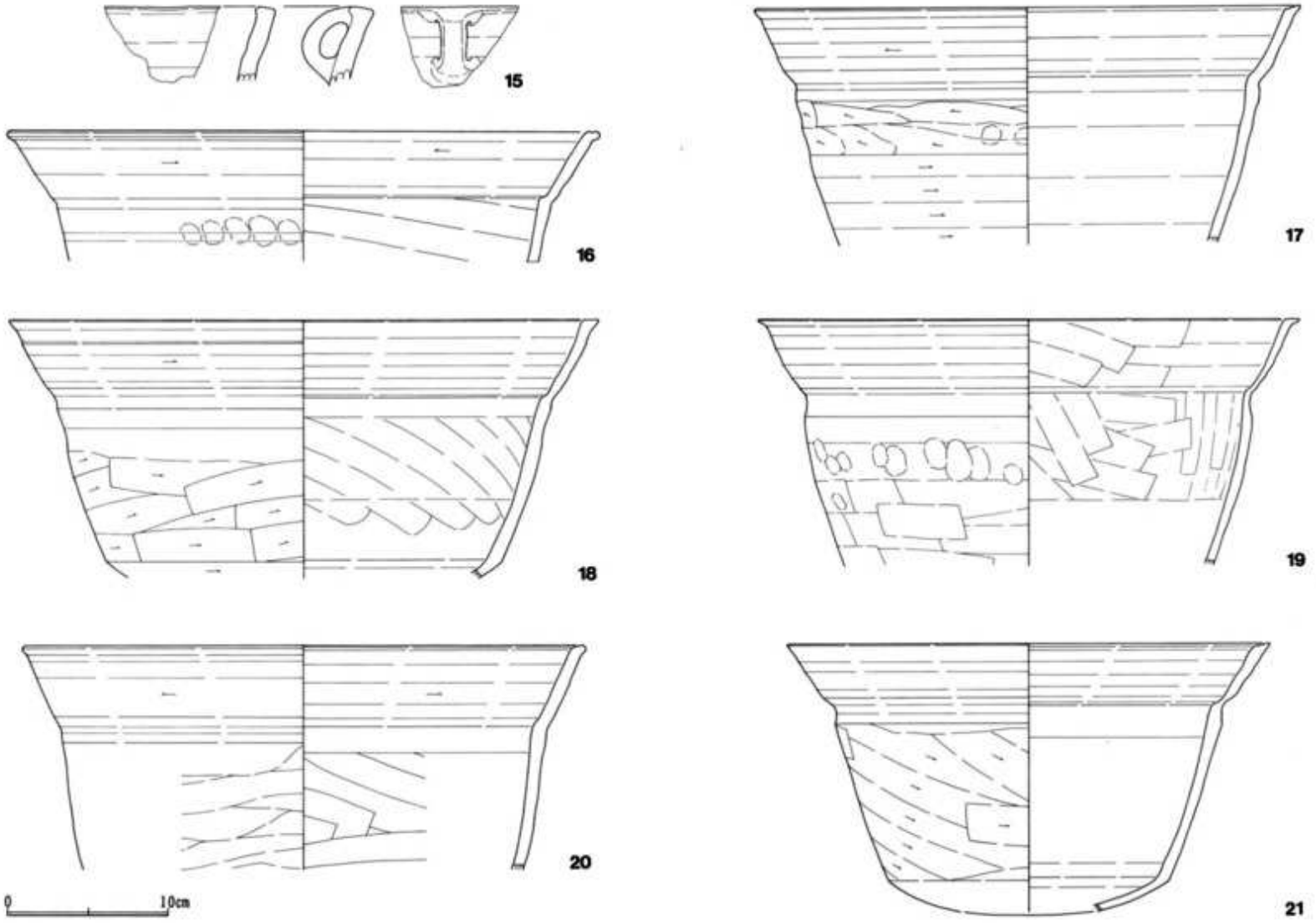
出土遺物は、堀跡の覆土中から比較的多く出土しているが、破片が主体で完形品は少ない。種類は、龍泉窯系青磁碗・瀬戸窯系小皿・常滑窯系製品(広口壺・甕・小皿)と在地産の火鉢・内耳鍋・片口鉢・擂鉢・土釜・皿や羽口・瓦があり、石製品では石鉢・石臼・砥石・板碑・石塔、木製品では漆椀・底板・板材、金属製品では古銭(永楽通寶)が出土している(第141図～第153図)。これらの遺物のうち、内耳鍋や土師質土器皿と石臼はA区とB区及びC区の東端に集中しており、木製品はすべてE区二段堀の底面から出土している。また、堀跡から出土したNo73の板碑破片には、「文永十年」(1273年)の年号が見られる。

堀跡出土遺物観察表

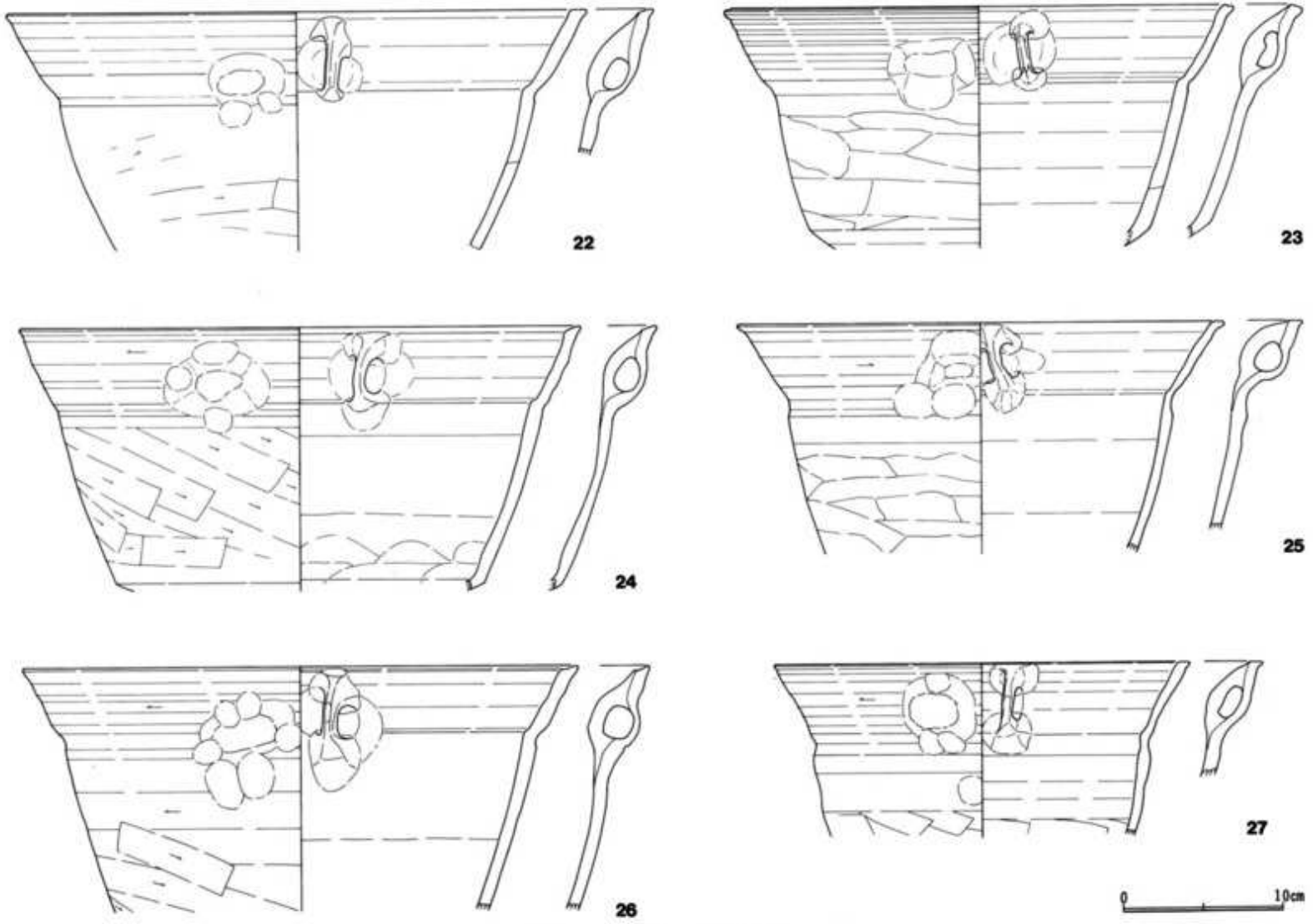
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	龍泉窯系青磁碗	底部径 5.2cm	ロクロ成形。削り出し高台。体部は外反する。高台は低く、端部は丸みをもつ。	高台部及び底部外面回転篦ケズリ。外面に蓮弁文。内外面に淡緑色釉を施す。	黒色粒 内外－淡緑色 肉－淡灰色	底部のみ。 C区覆土中。
2	龍泉窯系青磁碗	底部径 (5.2cm)	ロクロ成形。削り出し高台。体部は内湾ぎみに開く。高台は低く、底部は厚い。	高台部及び底部外面回転篦ケズリ。外面に蓮弁文。内外面に淡緑色釉を施す。	黒色粒 内外－淡緑色 肉－淡灰色	底部1/2。 B区覆土中。
3	瀬戸窯系小皿	口縁部径 (13.0cm)	ロクロ成形。口縁部は短く直線的に外傾し、下端に稜をもつ。	口縁部内外面回転ナデの後、淡緑色釉を施す。	黒色粒 内外－淡緑色 肉－淡灰白色	口縁部小破片。 C区覆土中。



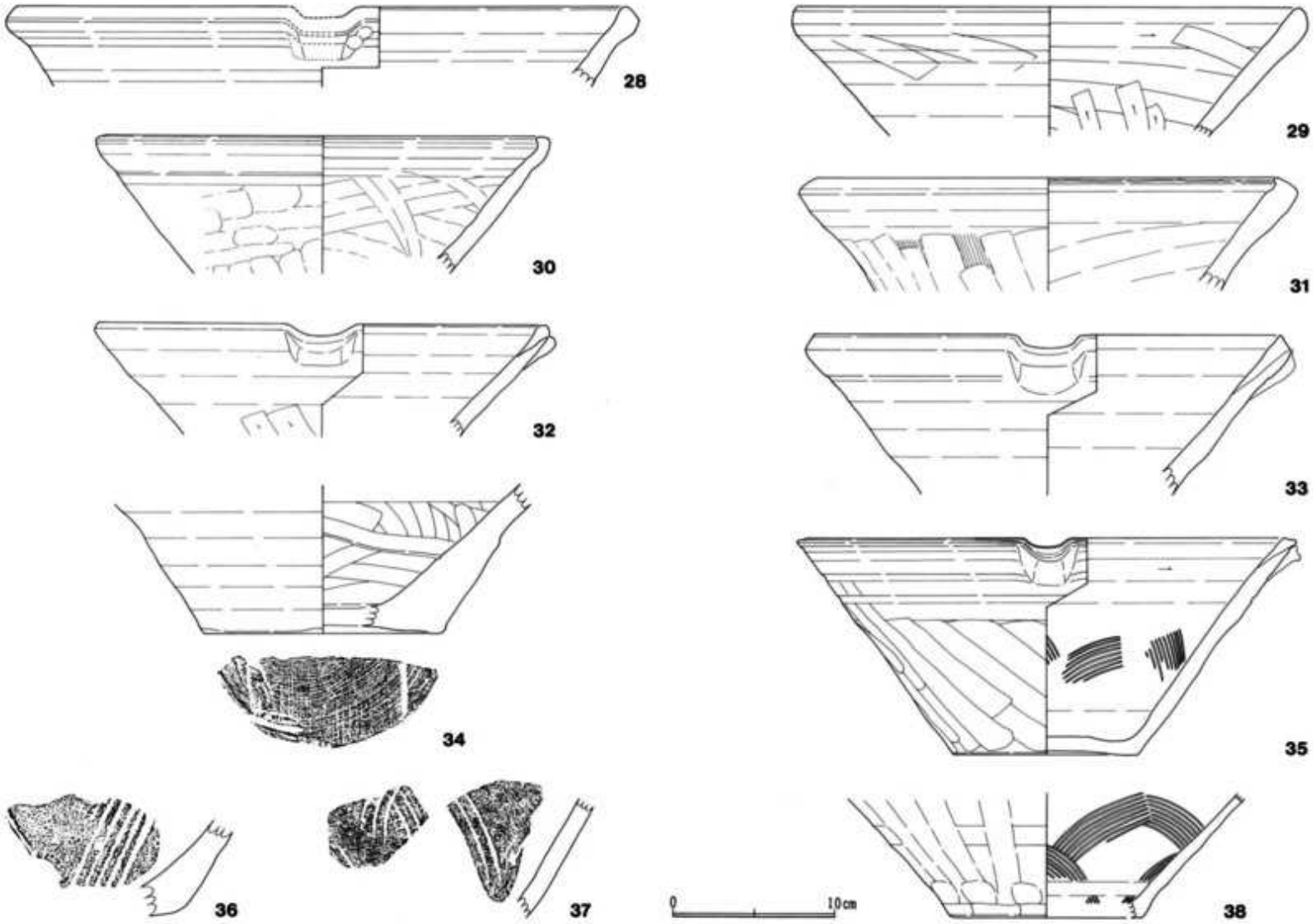
第141図　堀跡出土遺物(1)



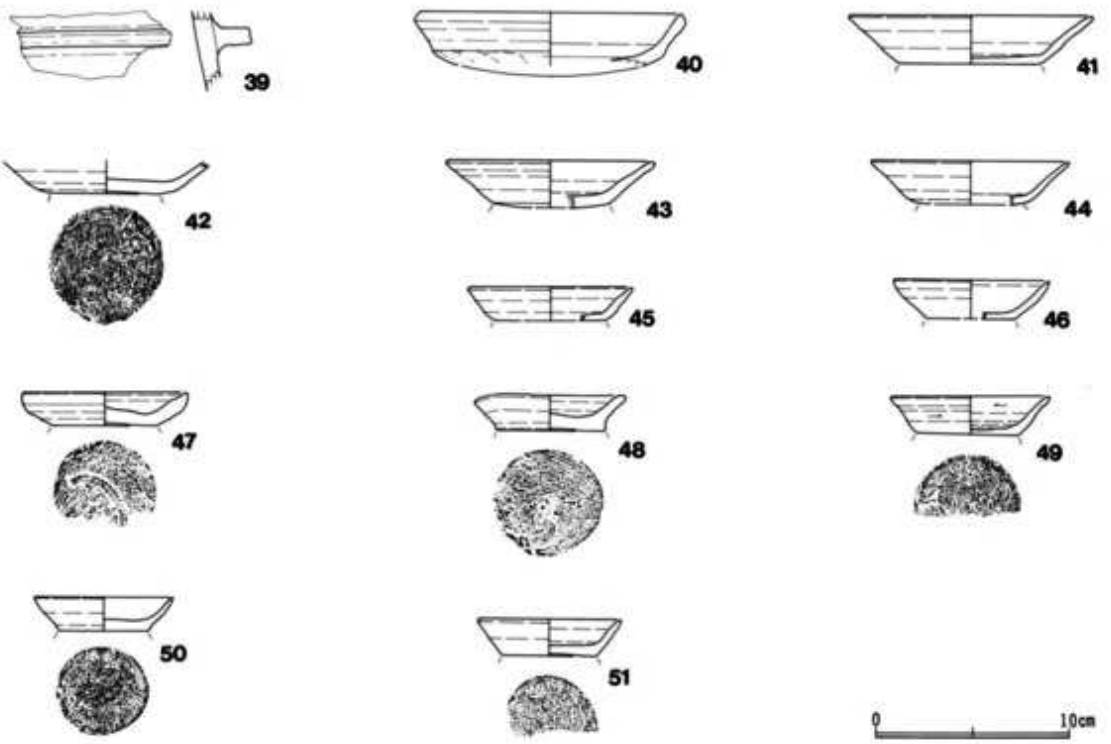
第142図　堀跡出土遺物(2)

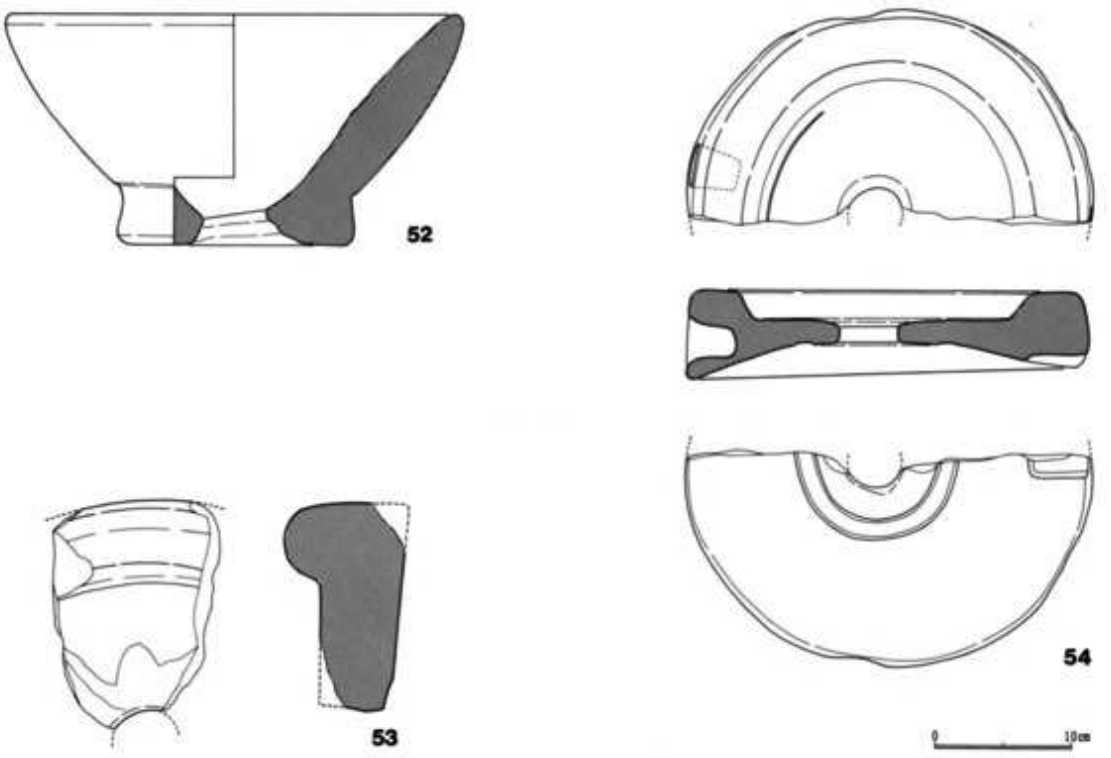


第143図　堀跡出土遺物(3)

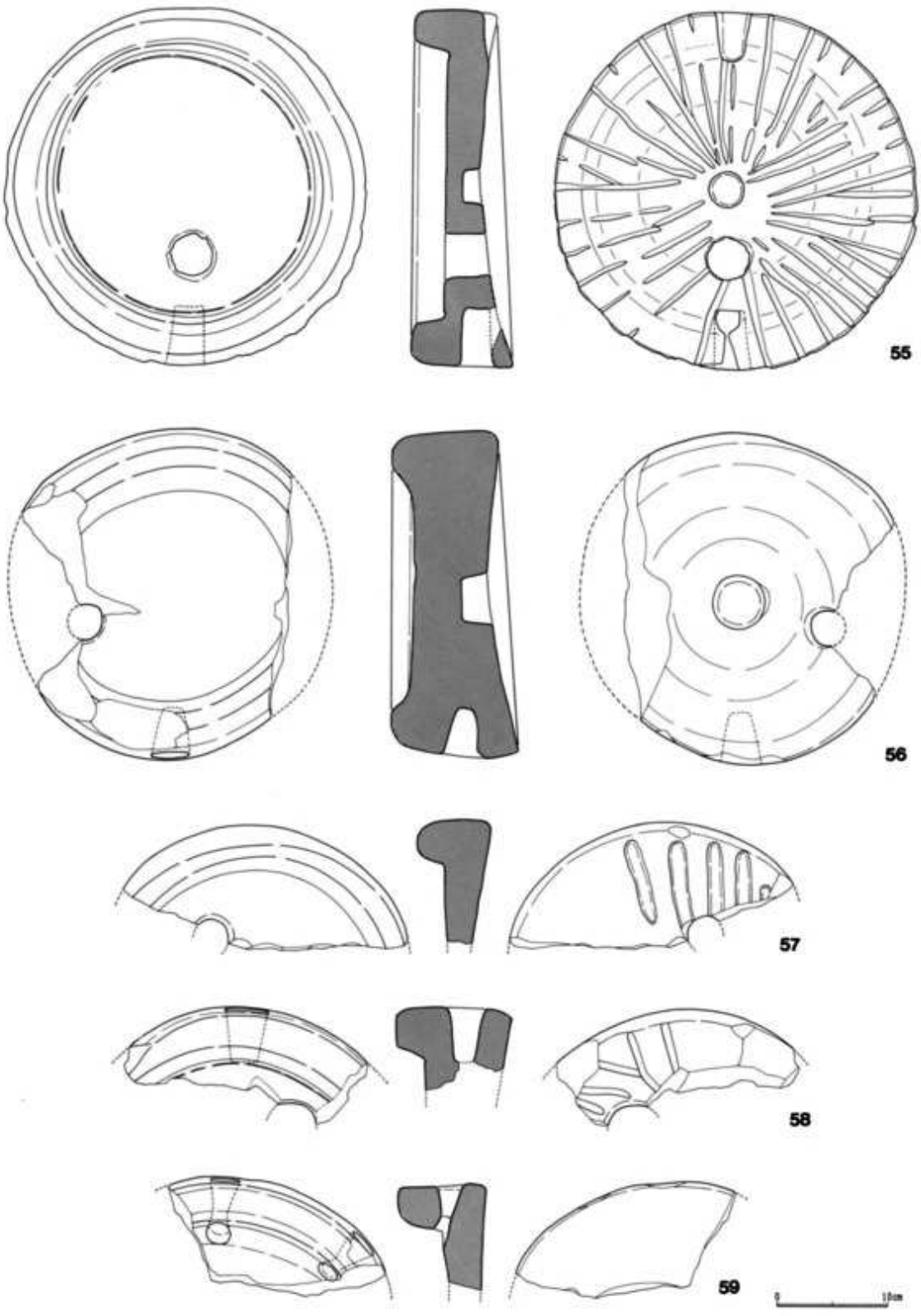


第144図　堀跡出土遺物(4)

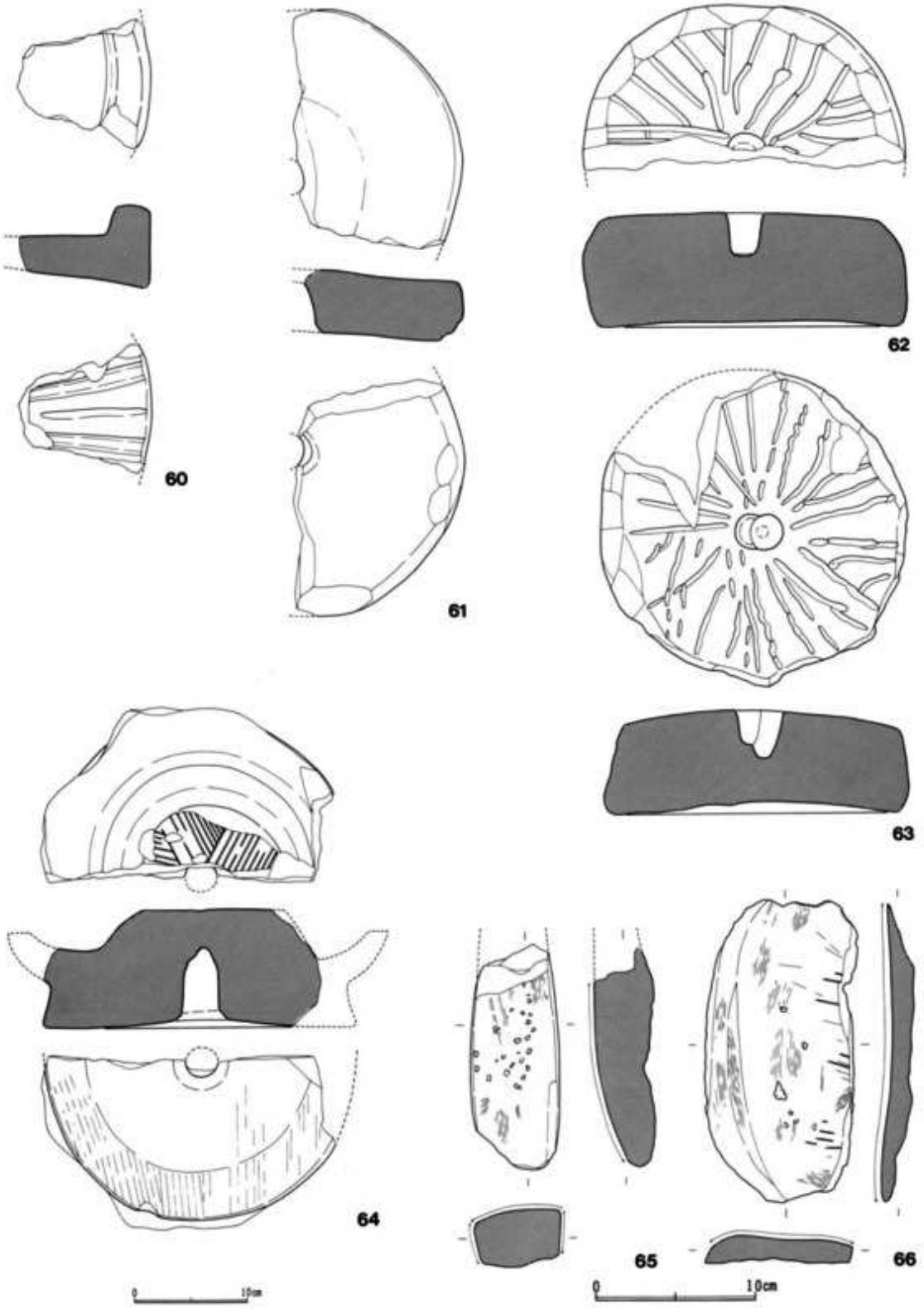




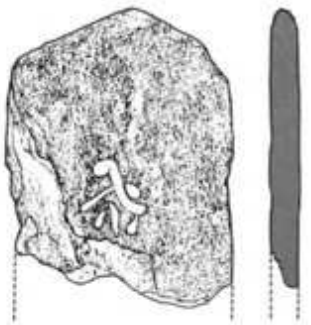
第145図　堀跡出土遺物(5)

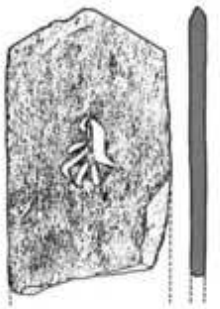


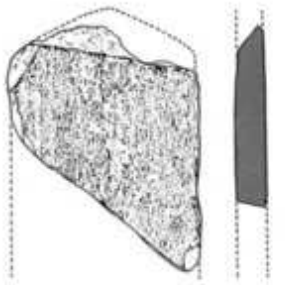
第146図　堀跡出土遺物(6)

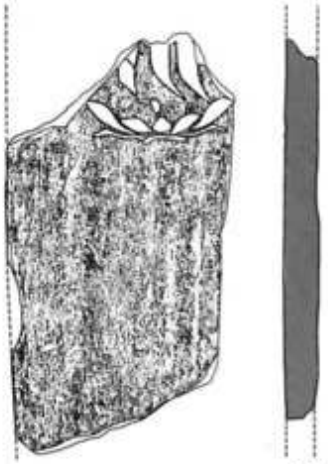


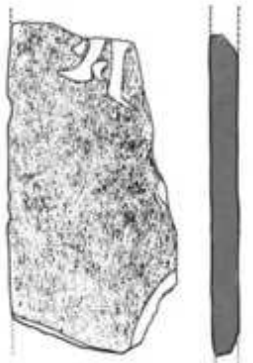
第147図　堀跡出土遺物(7)

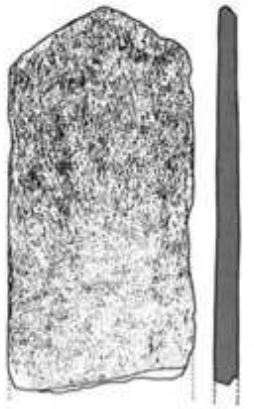

67


68


69


70

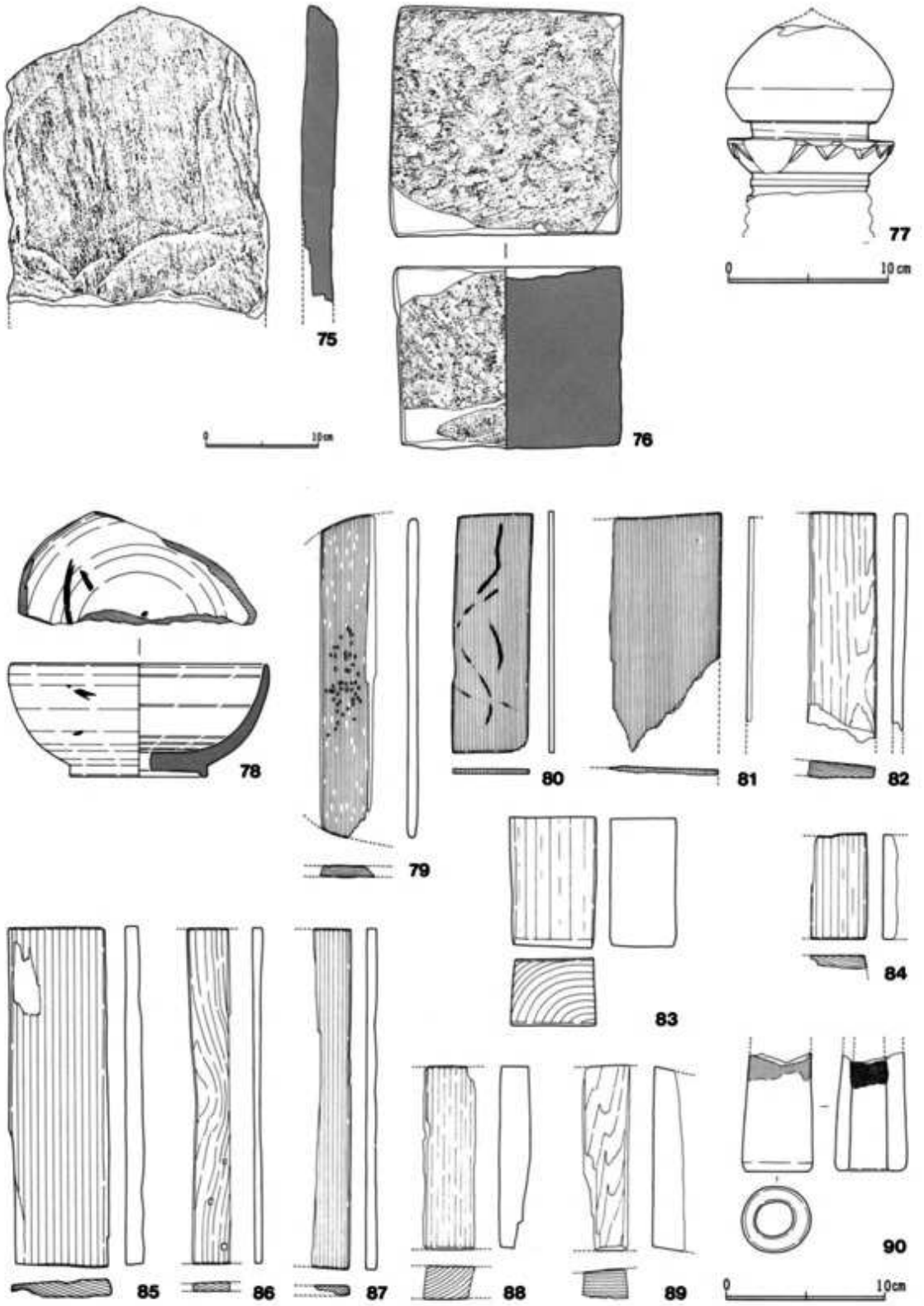

71


72

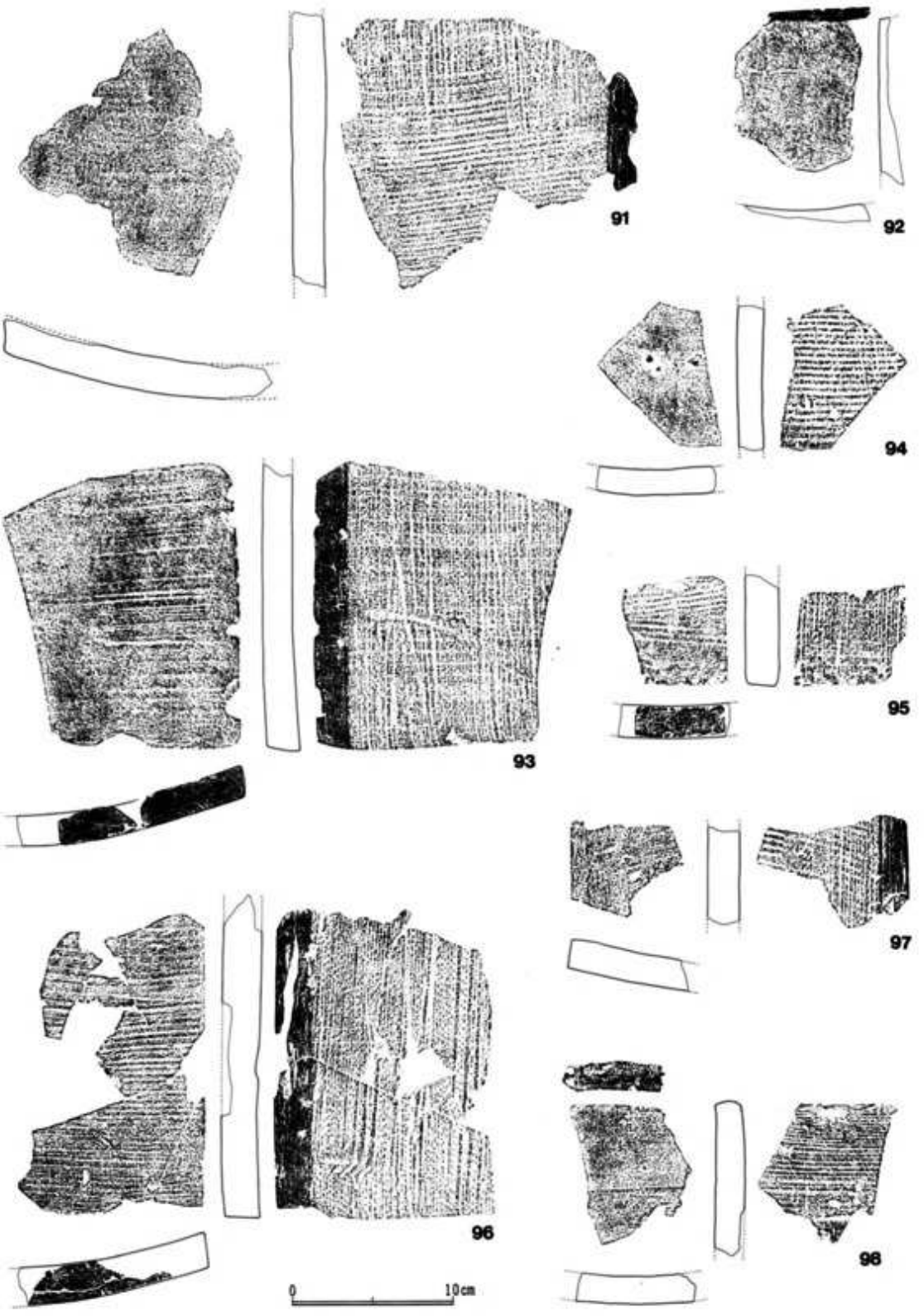
73

74

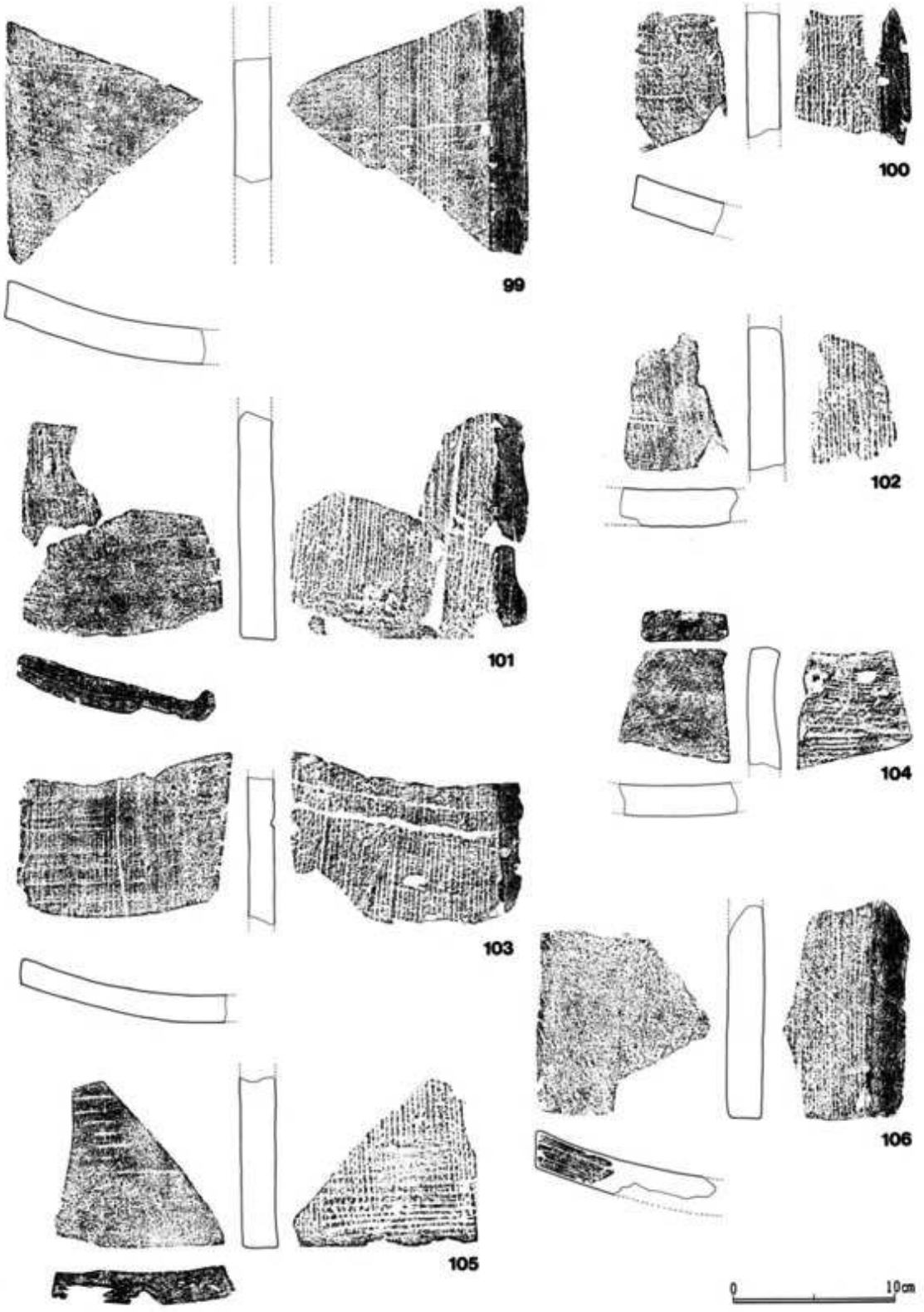
第148図　堀跡出土遺物(8)



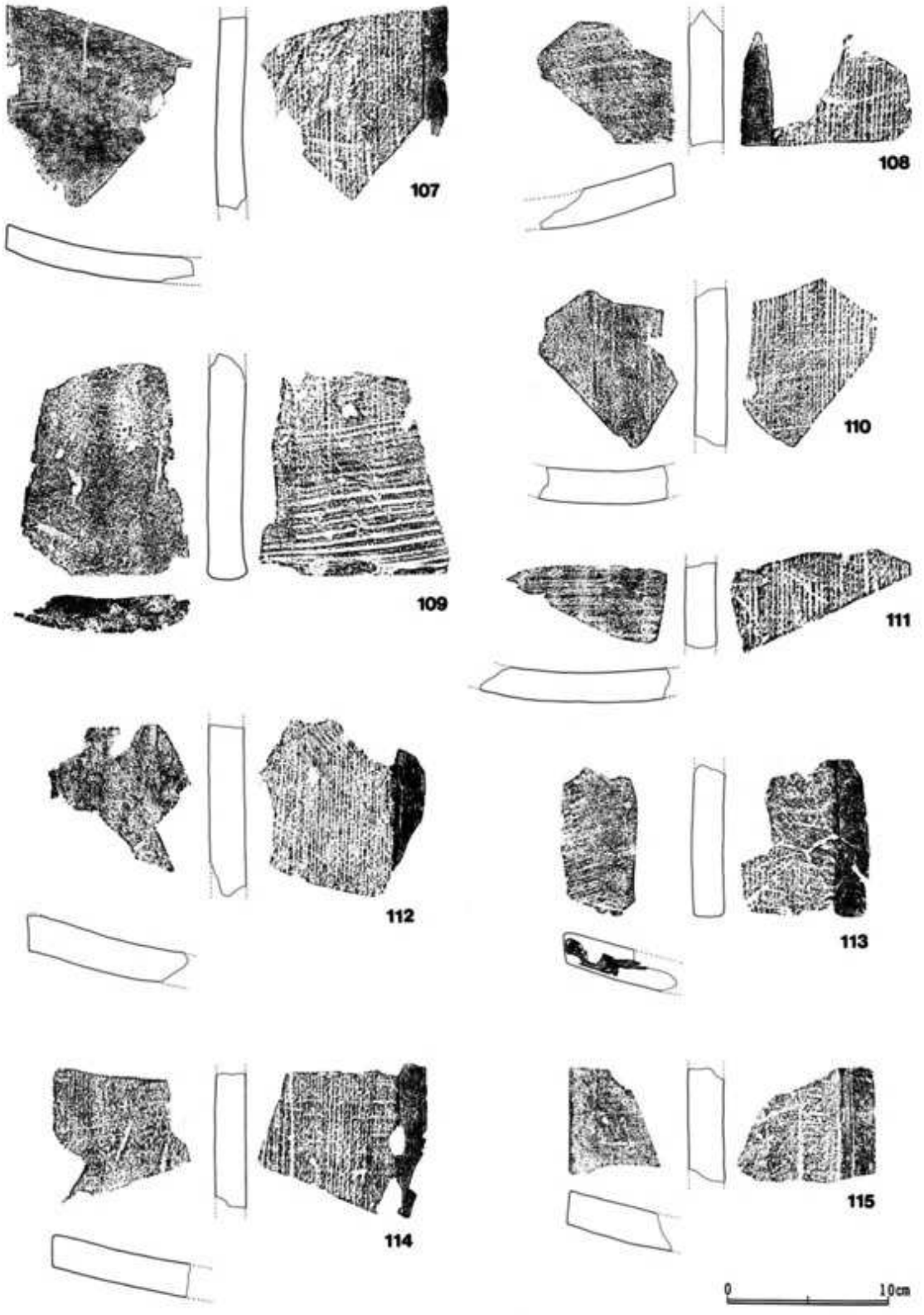
第149図　堀跡出土遺物(9)



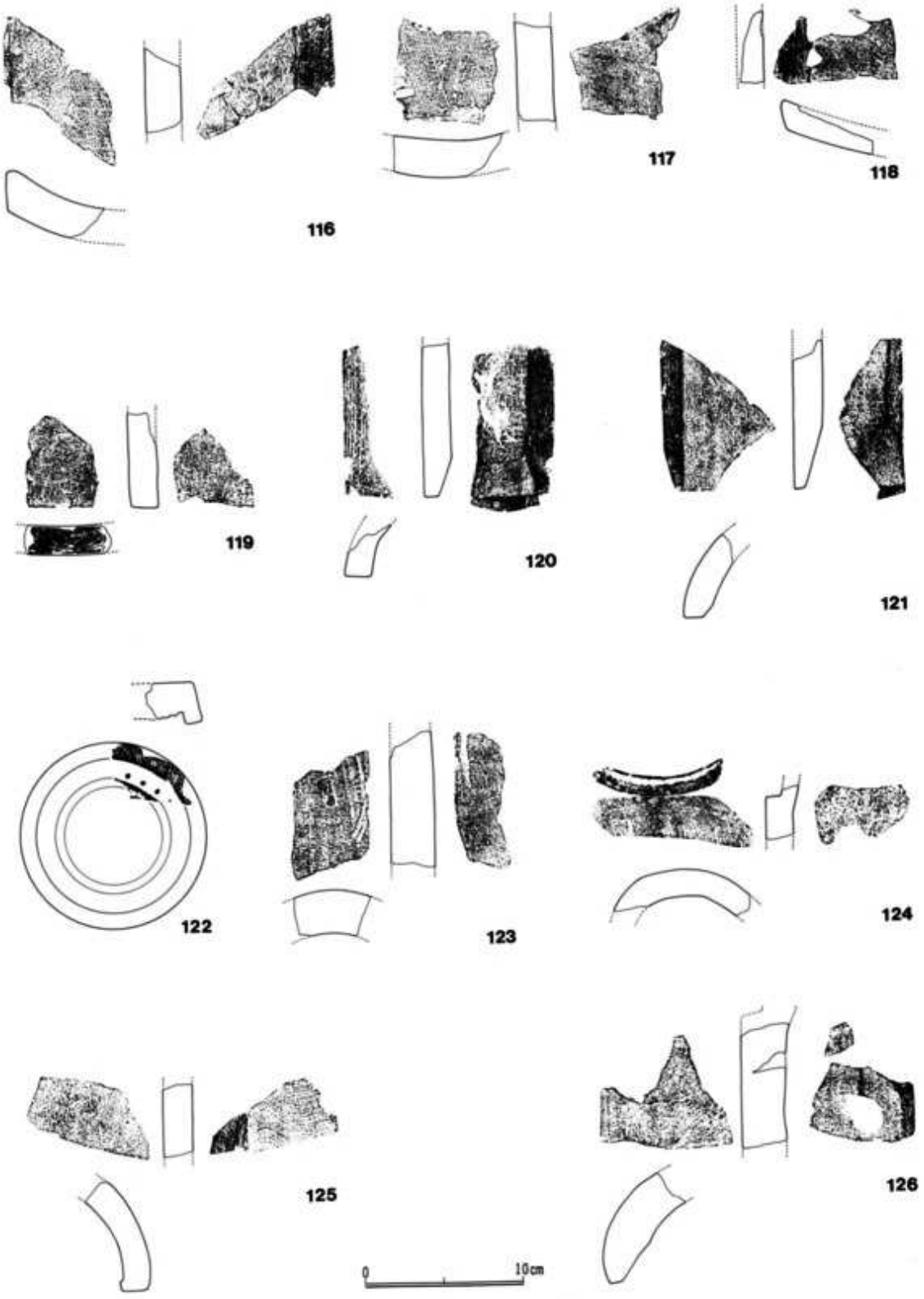
第150図　堀跡出土遺物(10)



第151図　堀跡出土遺物(11)



第152図　堀跡出土遺物(12)



第153図　堀跡出土遺物(13)

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	瀬戸窯系 小皿	口縁部径 (8.6cm)	ロクロ成形。口縁部は短く直線的に外傾し、内面中位と外面下端に稜をもつ。	口縁部内外面回転ナデの後、淡緑色釉を施す。	黒色粒 内外－淡白褐色	口縁部1/8。 A区覆土中。
5	常滑窯系 広口壺	口縁部径 (23.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く横に開き、端部は上下に若干肥厚する。頸部は直立し、肩はやや張る。	口縁部内外面回転ナデ。胴部外面回転ナデ、内面ナデ。口縁部内外面と胴部外面に淡緑色釉を施す。	白色粒・黒色粒 内外－暗茶褐色 肉－淡灰色	口縁部1/3、胴部破片。同一個体の破片が第8号井戸跡より出土。 D・E区覆土中。
6	常滑窯系 甕	口縁部径 (42.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は横に開き、端部は上方に延びる。頸部は直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面下半及び口縁部内面上半に淡黄白色の自然釉。	白色粒・黒色粒 内外－暗茶褐色 肉－暗灰色	口縁部1/7。 D区覆土中。
7	常滑窯系 甕	口縁部径 (34.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は横に開き、端部は上方に延びる。頸部は直立する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面及び口縁部内面に淡黄白色の自然釉がかかる。	白色粒・黒色粒 内外－暗茶褐色 肉－暗灰色	口縁部1/7。 D区覆土中。
8	常滑窯系 甕	縁帯幅 3.7cm	粘土紐積み上げ成形。縁帯部は上下端とも延び、下端はやや外反する。	口縁部及び縁帯部内外面ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 外－暗茶褐色 内－暗灰色	口縁部破片。 B区覆土中。
9	常滑窯系 甕		粘土紐積み上げ成形。外面に間隔の開いた押印文を施している。	胴部内外面ナデ。内面指頭圧痕顕著。外面に淡黄緑色の自然釉がかかる。	白色粒・黒色粒 外－淡茶褐色 内－暗橙褐色	破片。 E区覆土中。
10	渥美窯系 甕		粘土紐積み上げ成形。外面に押印文を施している。	胴部外面縦方向のナデ、内面横方向の篦ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－黒灰色	破片。押印文は第5号井戸跡No.3と同一文様。 F区覆土中。
11	常滑窯系 甕		粘土紐積み上げ成形。外面に間隔の開いた押印文を施している。	胴部内外面ナデ。内面指頭圧痕顕著。	白色粒 内外－暗茶褐色 肉－黒灰色	破片。 B区覆土中。
12	常滑窯系 甕	底部径 (17.8cm)	底部円盤上での粘土紐積み上げ成形。底部は薄い平底で周縁は一部摩滅している。	胴部外面ナデ、内面篦ナデ。底部内外面ナデ。	白色粒・黒色粒 外－暗茶褐色 内－淡褐色	底部1/4。 E区覆土中。
13	常滑窯系 甕	底部径 (16.2cm)	底部円盤上での粘土紐積み上げ成形。底部は薄い平底で、外面に砂が多数付着。	胴部外面ナデの後ハケ、内面丁寧なナデ。内面に淡黄緑色の自然釉がかかる。	白色粒・黒色粒 外－淡橙褐色 内－淡灰褐色	底部1/4。 D区覆土中。
14	火鉢	口径(44.0) 残存高 11.1 底径(31.2)	粘土紐積み上げ成形。脚部貼り付け。体部は内湾しながら開き、口唇部は広い平坦面をもち、内側に若干突出する。底部は薄い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ヨコナデ。底部内外面ナデ。脚部ナデ。	赤色粒・白色粒 黒色粒 外－淡灰色 内－暗灰色 肉－淡橙褐色	口縁部1/4弱。 口縁部外面に押印文を施す。 B区覆土中。
15	内耳鍋		内耳貼り付け。器肉は厚い。口縁部は短く外傾し、口唇部は平坦で、内外に若干肥厚する。内耳は厚く幅広。	口縁部内外面雑なヨコナデ。胴部内外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 外－黒褐色 内－暗灰褐色 肉－明茶褐色	破片。 D区覆土中。
16	内耳鍋	口縁部径 (36.4cm) 残存高 8.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。口唇部は平坦で外側に若干肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－暗灰色 内－黒灰色 肉－淡灰色	口縁部1/4。 B区覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
17	内耳鍋	口縁部径 (33.5cm) 残存高 14.6cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。口唇部は平坦で外側に若干肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面指ナデの後下半ヨコナデ、内面ヨコナデ。	小石・白色粒 外－黒褐色 内－暗灰褐色	口縁部1/4。 外面に煤付着。 B区覆土中。
18	内耳鍋	口縁部径 (32.6cm) 残存高 15.9cm 底部径 (24.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は若干内湾ぎみに開き、内面の胴部との境に段をもつ。口唇部は平坦で外側に肥厚する。胴部は直線的で、底部は突出する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴胴部外面ケズリの後部分的にナデ、内面ナデ。底部内外面ナデ。	片岩粒・白色粒 外－暗茶褐色 内－淡褐色	1/5。 胴部内面下半は荒れている。 外面煤付着。 A区覆土中。
19	内耳鍋	口縁部径 (33.2cm) 残存高 15.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は若干内湾ぎみに開き、内面の胴部との境にやや緩い段をもつ。口唇部は平坦で外側に肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデの後内面篦ナデ。胴部外面ヨコナデの後下半篦ナデ、内面篦ナデ。	片岩粒・白色粒 黒色粒 内外－淡茶褐色	1/2。 胴部内面下半は荒れている。 外面煤付着。 B区覆土中。
20	内耳鍋	口縁部径 (34.4cm) 残存高 13.8cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境にやや緩い段をもつ。口唇部は平坦で外側に肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面雑なナデ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－黒灰褐色 肉－淡灰褐色	口縁部1/5。 外面煤付着。 A区覆土中。
21	内耳鍋	口縁部径 (29.6cm) 残存高 16.5cm 底部径 (17.2cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。口唇部は平坦で外側に肥厚する。胴部は直線的で、底部は丸みをもって突出する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後雑なナデ、内面ナデ。底部内外面ナデ。	片岩粒・白色粒 外－暗茶褐色 内－淡灰褐色	1/5。 外面煤付着。 A区覆土中。
22	内耳鍋	口縁部径 (35.8cm) 残存高 14.7cm	粘土紐積み上げ成形。内耳貼り付け。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。口唇部は平坦で外側に肥厚する。胴部はやや内湾ぎみである。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－暗褐色 内－淡茶褐色	口縁部1/4。 外面煤付着。 A区覆土中。
23	内耳鍋	口縁部径 31.4cm 残存高 14.9cm 底部径 20.9cm	粘土紐積み上げ成形。内耳貼り付け。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。口唇部は平坦で外側に肥厚する。胴部は直線的で、底部は突出。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面ヨコナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－暗灰色	2/3。 須恵質。 A区覆土中。
24	内耳鍋	口縁部径 (34.6cm) 残存高 16.3cm 底部径 (22.8cm)	粘土紐積み上げ成形。内耳貼り付け。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。口唇部は平坦で外側に肥厚する。胴部は直線的で、底部は突出。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後雑なナデ、内面上半ナデ・下半指ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－暗茶褐色 内－淡茶褐色	1/4。 胴部内面下半は荒れている。 外面煤付着。 A区覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
25	内耳鍋	口縁部径 (30.0cm) 残存高 14.2cm	粘土紐積み上げ成形。内耳貼り付け。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。口唇部は平坦で外側に肥厚する。胴部はやや内湾ぎみである。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面雑なナデ、内面丁寧なナデ。	赤色粒・白色針状物質 内外－暗褐色 肉－明茶褐色	口縁部1/4。 A区覆土中。
26	内耳鍋	口縁部径 (34.2cm) 残存高 15.0cm	粘土紐積み上げ成形。内耳貼り付け。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。口唇部は中央が窪む平坦面で、外側に肥厚する。胴部は直線的。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヨコナデの後ナデ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外－黒褐色 内－淡茶褐色	1/4。 胴部内面下半は荒れている。 外面煤付着。 A区覆土中。
27	内耳鍋	口縁部径 (25.6cm) 残存高 10.6cm	粘土紐積み上げ成形。内耳貼り付け。口縁部は直線的に外傾し、内面の胴部との境に段をもつ。口唇部は平坦で外側に肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面篦ナデの後上半ナデ、内面篦ナデの後上半ヨコナデ。	片岩粒・白色粒 内外－暗褐色 肉－淡灰褐色	口縁部1/4。 外面煤付着。 B区覆土中。
28	片口鉢	口縁部径 (39.0cm)	粘土紐積み上げ成形。器肉は厚い。口唇部内外に肥厚し、平坦面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。	白色粒 内外－暗灰色	口縁部1/6。 須恵質。 D区覆土中。
29	鉢	口縁部径 (31.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に開き、口唇部はやや肥厚し丸みをもつ。	内外面ヨコナデの後ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡灰褐色 肉－橙褐色	口縁部1/6。 外面斑点状剥落顕著。 D区覆土中。
30	鉢	口縁部径 (28.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや薄く内湾して立ち、口唇部は平坦面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。内面は良く擦れている。	白色粒 内外－暗灰色	1/6。 須恵質。 A区覆土中。
31	鉢	口縁部径 (30.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに開き、肥厚する。口唇部は広い平坦面をもち、内側は若干窪む。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外－灰色	口縁部1/4。 須恵質。 C区覆土中。
32	片口鉢	口縁部径 (27.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に開き、口唇部は丸みをもつ。器肉は薄い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。	小石・白色粒 内外－暗灰色 肉－淡灰褐色	口縁部1/5。 内面斑点状剥落顕著。 B区覆土中。
33	片口鉢	口縁部径 (29.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に開き、口唇部は平坦面をもつ。	内外面ともナデ。	片岩粒・赤色粒 内外－明橙褐色	口縁部1/4。 E区覆土中。
34	鉢	底部径 (14.8cm)	粘土紐積み上げ成形。底部は中央部がやや窪む平底を呈する。器肉は厚い。	体部外面ヨコナデ、内面ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	白色粒 内外－暗灰色	底部1/2。須恵質。 底部外面に板の圧痕あり。 D区覆土中。
35	擂鉢	口径(30.7) 器高 13.4 底径 11.4	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に開き、口唇部は中央部が若干窪む平坦面をもち、片口はやや小さい。底部は平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指ナデ、内面ナデの後櫛歯による「ハ」の字状の短い擂目を施す。底部内外面ナデ。	片岩粒・白色粒 外－淡褐色 内－淡灰褐色	約1/2。 第1号集石遺構出土の破片と接合。 A区覆土中。
36	擂鉢		粘土紐積み上げ成形。底部外面はやや摩滅している。	内外面ナデ。内面に5本単位の太い擂目を施す。	片岩粒・赤色粒 内外－淡茶褐色	破片。 D区覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
37	擂鉢		粘土紐積み上げ成形。	内外面ナデ。内面に3本単位の太い擂目を施す。	赤色粒・白色粒 内外－明茶褐色	破片。 B区覆土中。
38	擂鉢	底部径 (12.0cm)	粘土紐積み上げ成形。体部は直線的に開く。	体部外面ヨコナデの後篦ナデ、内面ナデの後櫛による8本歯の擂目を施す。	片岩粒・赤色粒 外－淡褐色 内－淡灰褐色	約1/4。 擂目は左回りに施文。 B区覆土中。
39	土釜		粘土紐積み上げ成形。鍔部は水平で長く、端部は中央が窪む平坦面をなす。	鍔部ヨコナデ。内面ナデ。	白色粒・黒色粒 外－淡褐色 内－暗褐色	破片。 胎土は在地のものと異なる。 C区覆土中。
40	土師質土器	口縁部径 (14.0cm)	手捏ね成形。口縁部は短く外傾し、口唇部はやや平坦をなす。底部は丸みをもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－淡茶褐色 内－黒褐色	口縁部1/4。 C区覆土中。
41	土師質土器	口径(12.6) 器高 2.5 底径 (7.4)	ロクロ成形。口縁部は外反ぎみに開き、底部は平底を呈する。器肉は薄い。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡橙褐色	約1/2。 A区覆土中。
42	土師質土器	底部径 5.6cm	ロクロ成形。体部は外反ぎみに開き、底部は平底を呈する。器肉は薄い。	体部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－暗茶褐色	底部のみ。 B区覆土中。
43	土師質土器	口径(10.8) 器高 2.4 底径(6.0)	ロクロ成形。口縁部は直線的に外傾し、底部は若干丸みを帯びた平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外－淡茶褐色	約1/2。 A区覆土中。
44	土師質土器	口径(10.2) 器高 2.2 底径(5.0)	ロクロ成形。口縁部はやや外反ぎみに開き、底部は平底を呈するものと思われる。	器表面の風化が著しいため、観察不能。	片岩粒・赤色粒 内外－淡橙褐色	口縁部1/5。 B区覆土中。
45	土師質土器	口径(8.6) 器高 1.7 底径(5.6)	ロクロ成形。口縁部は短く直線的に外傾し、底部は平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	白色粒 内外－明茶褐色	約1/2。 A区覆土中。
46	土師質土器	口径(8.0) 器高 2.0 底径(4.6)	ロクロ成形。口縁部は短くやや内湾ぎみに外傾し、底部は平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 黒色粒 内外－淡橙褐色	約1/4。 F区覆土中。
47	土師質土器	口径(8.6) 器高 1.7 底径 5.4	ロクロ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾し、底部は平底を呈する。器肉は厚い。	口縁部内外面回転ナデ。体部外面ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	白色粒 内外－黒褐色 肉－淡褐色	約1/2。 内外面に油煙付着。 B区覆土中。
48	土師質土器	口径 7.8 器高 1.9 底径 5.6	ロクロ成形。口縁部は短く直線的に外傾し、底部はやや突出した平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－暗褐色 内－淡褐色	ほぼ完形。 内外面に油煙付着。 B区覆土中。
49	土師質土器	口径(8.2) 器高 2.0 底径 5.2	ロクロ成形。口縁部は外反ぎみに開く。底部は薄く、平底呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－明茶褐色	約1/2。 A区覆土中。
50	土師質土器	口径(7.2) 器高 1.7 底径 4.6	ロクロ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾し、底部はやや突出した平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切りの後ナデ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外－淡橙褐色 肉－黒色	約2/3。 B区覆土中。
51	土師質土器	口径(7.4) 器高 1.9 底径(4.8)	ロクロ成形。口縁部は短く直線的に外傾し、底部は平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外－淡茶褐色 内－淡橙褐色	約1/2。 B区覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
52	石鉢	口径(34.0) 器高 17.0 底径 17.6	体部は直線的に開き、中位は肥厚する。口縁部は丸みをもち、底部はやや高く突出する。	体部内外面とも研磨。内面は良く擦れており、下半は斑点状に荒れている。	安山岩	1/4。 底部は内側から打ち抜かれている。 A区覆土中。
53	石製 粉挽臼 (上臼)	残存長 15.6 残存高 9.0 ふくみ 1.1	上縁は幅広く丸みをもつ。側面は垂直ぎみで、ふくみは浅い。	側面及び上面とも研磨。下面は擦り減って摩滅し、目は見られない。	花崗岩	約1/8。 A区覆土中。
54	石製 粉挽臼 (上臼)	長さ 30.3 高さ 6.7 くぼみ 2.1 ふくみ 2.5	断面は挽木穴側が厚く、上縁は幅広でやや角張っている。芯棒受けは貫通し、挽木穴の反対側の下面側縁に窪みをもつ。	上面と側面は研磨調整。下面はかなり擦り減っており、目は見られない。	花崗岩	1/2。 C区覆土中。
55	石製 粉挽臼 (上臼)	長さ 32.7 高さ 9.2 くぼみ 3.0 ふくみ 2.0	断面は挽木穴側が厚く、上縁は高く角張っている。供給口・芯棒受け・挽木穴は直線上に並び、挽木穴の反対側の下面側縁に窪みをもつ。	上面と側面は研磨調整。下面は良く擦れており、目は雑に刻み直されているため明確ではないが、8角を基本にしていたようである。	安山岩	完形。 A区覆土中。
56	石製 粉挽臼 (上臼)	長さ 29.5 高さ 11.4 くぼみ 2.0 ふくみ 1.6	断面は挽木穴側が厚く、上縁は幅広で丸みをもつ。芯棒受けは大きく、挽木穴と供給口は直線上に並ばない。	上面と側面は研磨調整。下面は擦り減っており、目は見られない。	花崗岩	3/4。 上面と下面に煤付着。 B・C区覆土中。
57	石製 粉挽臼 (上臼)	長さ 11.0 高さ 6.7 ふくみ 2.0	上縁は高く丸みをもつ。側面は垂直ぎみで、ふくみは深い。	側面及び上面とも研磨。下面は良く擦り減っており、目は不明瞭。	安山岩	1/4。 C区覆土中。
58	石製 粉挽臼 (上臼)	長さ 7.4 高さ 10.5 くぼみ 2.7	上縁は高く幅広で角張っている。挽木穴は長方形ぎみである。	側面及び上面とも研磨。下面は良く擦り減っており、目は不明瞭。	花崗岩	1/4。 A区覆土中。
59	石製 粉挽臼 (上臼)	長さ 9.5 高さ 8.0 くぼみ 4.2	上縁は高く丸みをもつ。側面は垂直ぎみで、挽木を縛り付ける穴を2孔もつ。	側面及び上面とも研磨。下面は擦り減っており、目は見られない。	安山岩	1/4。 A区覆土中。
60	石製 粉挽臼 (上臼)	長さ 11.7 高さ 7.5 ふくみ 1.5	上縁は高くやや丸みをもつ。側面は垂直ぎみである。	側面及び上面とも研磨。下面は良く擦れており、幅広で浅い目をもつ。	安山岩	破片。 B区覆土中。
61	石製 粉挽臼 (下臼)	長さ 14.4 高さ 6.4 ふくみ 1.2	断面は中央部がやや高く湾曲している。側面は丸みをもち、芯棒穴は貫通する。	上下両面とも研磨。側面は打ち欠き後雑な研磨。上面は良く擦れている。	花崗岩	1/3。 B区覆土中。
62	石製 粉挽臼 (下臼)	直径 28.7 高さ 10.4 ふくみ 0.5	断面は中央部が若干高く、側面はやや丸みをもつ。芯棒穴は貫通しない。	上下両面とも研磨。側面は打ち欠き後研磨。上面には7～8角の雑な目をもつ。	安山岩	1/2。 D区覆土中。
63	石製 粉挽臼 (下臼)	直径 27.6 高さ 9.3 ふくみ 1.3	断面は中央部がやや高く湾曲している。側面はやや傾斜し、芯棒穴は貫通しない。	上下両面とも研磨。側面は雑な打ち欠き。上面には非非常に雑な8角の目をもつ。	安山岩	4/5。芯棒穴は掘り直しが見られる。 B区覆土中。
64	石製 茶臼 (下臼)	長さ 24.9 高さ 10.5	上面はほぼ平坦で、側面は傾斜している。受皿は欠失し、芯棒穴は貫通する。	上下両面及び側面丁寧な研磨。上面には8角と思われる細かい目をもつ。	安山岩	1/2。 B区覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
65	砥石	残存長 14.0 幅 5.5 厚さ 3.2	形態は断面長方形の両端部に向かってやや細くなる柱状を呈すると思われる。	表面及び両側面とも良く擦れている。両端部欠損、裏面剥離。表面に敲打痕あり。	砂岩	約2/3。 A区覆土中。
66	砥石	長さ 18.8 幅 9.2 厚さ 1.5	自然石の剥離した表面を使用。	表面には擦痕や刃物による傷が見られる。表面に敲打痕あり。	砂岩	完形。裏面は焼けて煤付着。 A区覆土中。
67	板碑	残存長 22.0 幅 17.0 厚さ 2.3	両側縁部は平行し、頭部は山形を呈する。中央部に梵字を模した彫り込みをもつ。	表裏面ともほとんど未調整。側縁部及び頭部は打ち欠きによる形状調整。	緑色片岩	約1/3。 E区覆土中。
68	板碑	残存長 21.3 幅 12.0 厚さ 1.0	両側縁部は平行し、頭部は山形を呈する。中央部に梵字を模した彫り込みをもつ。	表裏面とも平坦に研磨を施す。側縁部及び頭部は打ち欠きによる形状調整。	緑色片岩	約1/2。 小形品。 G区覆土中。
69	板碑	残存長 18.0 幅 14.2 厚さ 2.3	両側縁部は平行し、頭部は山形を呈するものと思われる。	表面は平坦に研磨、裏面は整ケズリ。側面は裏面からの打ち欠きによる形状調整。	緑色片岩	破片。 小形品。 A区覆土中。
70	板碑	残存長 31.2 残存幅 16.9 厚さ 2.6	側縁部は直線的で、厚さは厚い。中央部に蓮華座と種子をもつ。	表面は平坦に研磨、裏面は整ケズリ。側面は打ち欠きによる形状調整。	緑色片岩	破片。 C区覆土中。
71	板碑	残存長 25.0 幅 12.5 厚さ 2.0	側縁部は直線的で、ほぼ平行するものと思われる。中央部に種子をもつ。	表面は平坦に研磨、裏面は雑な仕上げ。側縁部は裏面からの打ち欠き。	緑色片岩	破片。 小形品。 E区覆土中。
72	板碑	残存長 28.6 幅 13.7 厚さ 1.6	両側縁部は平行し、頭部は山形を呈する。	表裏面とも平坦に仕上げられている。側縁部は裏面からの打ち欠き。	緑色片岩	2/3。 小形品。 G区覆土中。
73	板碑	残存長 37.1 幅 32.8 厚さ 3.8	両側縁部はほぼ平行する。種子と蓮華座を配し、「文永十年」(1273年)・「一日」の紀年をもつ。	表裏面とも平坦に研磨。側縁部は打ち欠きによる形状調整。	緑色片岩	破片。 紀年部分は墨が入っている。 A区覆土中。
74	板碑	残存長 34.0 幅 21.6 厚さ 2.3	側縁部は直線的で整っている。中央部に「十三日」、左上にも文字のような彫り込みが見られる。	表面は未調整、裏面は整ケズリ。	緑色片岩	破片。 B区覆土中。
75	板碑	残存長 27.8 幅 23.5 厚さ 2.9	両側縁部は雑な仕上げで、頭部は山形を呈する。	表裏面とも未調整。側縁部及び頭部は主に裏面からの打ち欠きによる形状調整。	片岩	約1/3。 D区覆土中。
76	石塔	長さ 20.4 幅 20.9 高さ 16.3	平面形は方形、断面は長方形を呈する。上面は円形に窪んでいる。	全面とも細かな整によるケズリ調整。	砂岩	完形。 D区覆土中。
77	宝篋印塔相輪	残存高 11.1 最大幅 10.3	宝珠はやや偏平ぎみで、九輪の大半を欠失している。	全体に丁寧に研磨され、請花は右回りの山形沈線。	安山岩	相輪部1/2。 C区覆土中。
78	木製漆塗椀	口径(16.0) 器高 7.0 底部(9.6)	ロクロ削り。体部は内湾しながら開く。底部は突出し、高台は低い。	内外面の全面に黒漆を施し、朱文を配する。	内外－黒色	約1/3。 E区底面直上。
79	木製桶底板	残存長 10.0 厚さ 0.6	平面形は円形を呈するものと思われる。	表裏面とも平坦に仕上げられており、比較的多くの敲打痕が見られる。		破片。 E区最下層。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
80	板	長さ 14.9 幅 4.8 厚さ 0.3	比較的薄く小形の木札状を呈する。	表裏面とも平坦に削られ、上下端部及び両側面とも直線的に削られている。		完形。 E区最下層。
81	板	残存長 15.0 残存幅 6.9	平面形は方形もしくは長方形を呈するものと思われる。	表面は平坦で、端面と側面は直線的に削られている。		破片。 E区最下層。
82	板	残存長 14.3 残存幅 4.2 厚さ 1.1	平面形は方形もしくは長方形を呈するものと思われる。厚さは均一ではない。	表面は平坦で、端面と側面は直線的に削られている。裏面は未調整。		破片。 E区最下層。
83	角材	長さ 8.2 幅 5.3 厚さ 4.1	平面形及び断面とも長方形の柱状を呈する。片側の端面に隅切りが施されている。	各面ともきれいに削られている。		完形。 E区覆土中。
84	角材？	残存長 6.5 残存幅 3.5	平面形は方形もしくは長方形を呈するものと思われる。	表面は平坦に削られ、裏面は剥離している。		破片。 E区覆土中。
85	板	長さ 21.2 幅 5.7 厚さ 1.0	平面形は長方形を呈し、端面及び側面は直線的に調整されている。	表面は平坦に削られているが、裏面は痘痕状に窪んでいる。		完形。 E区最下層。
86	板	長さ 20.9 残存幅 2.6 厚さ 0.6	薄い板状を呈し、両側は欠失している。表面には、小さな長方形状の敲打痕あり。	表裏面とも平坦に削られ、上下端部は直線的に削られている。		破片。 E区最下層。
87	板	長さ 21.2 残存幅 2.4 厚さ 0.6	薄い板状を呈し、片側は欠失し、裏面の大部分は剥離している。	表面は平坦に削られ、上下端部及び側面は直線的に削られている。		破片。 E区最下層。
88	角材？	長さ 11.4 残存幅 3.2 厚さ 2.0	平面形は方形もしくは長方形を呈するものと思われる。厚さは厚い。	表裏面及び側面とも平坦に削られている。側面には釘跡が見られる。		破片。 E区最下層。
89	角材？	長さ 11.6 残存幅 3.0 厚さ 1.9	平面形は方形もしくは長方形を呈するものと思われる。上下両端面はやや傾斜する。	表面及び両端面とも平坦に削られている。		破片。 E区最下層。
90	羽口	残存長 7.4 幅 4.5 厚さ 1.1	形態は先端に向かって徐々に細くなる。端部は丸く、厚さは比較的均一である。	内外面丁寧なナデ。	片岩粒 内外－暗褐色	約1/2。上端部外面黒色化、内面赤色化。 C区覆土中。
91	平瓦	残存長 16.8 残存幅 17.1 厚さ 2.2	厚さは比較的均一である。側面は中央部がやや窪む。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗褐色	破片。 E区覆土中。
92	平瓦	残存長 10.4 残存幅 8.5	凸面側は剥離している。	凹面ナデ。	白色粒 凹－淡灰色	破片。 E区覆土中。
93	平瓦	残存長 17.8 残存幅 14.3 厚さ 1.9	厚さは比較的均一である。端面はやや傾斜し、側面は垂直ぎみである。	凹凸面木口状工具によるヨコナデの後凸面縄目叩き、凹面縦方向のナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－淡灰色	約1/4。 B区覆土中。
94	平瓦	残存長 9.4 残存幅 8.1 厚さ 1.6	厚さは比較的均一で、やや薄い。	凸面木口状工具によるヨコナデ、凹面縦方向のナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 B区覆土中。
95	平瓦	残存長 6.9 残存幅 7.0 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、端面は垂直ぎみである。	凸面縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 A区覆土中。

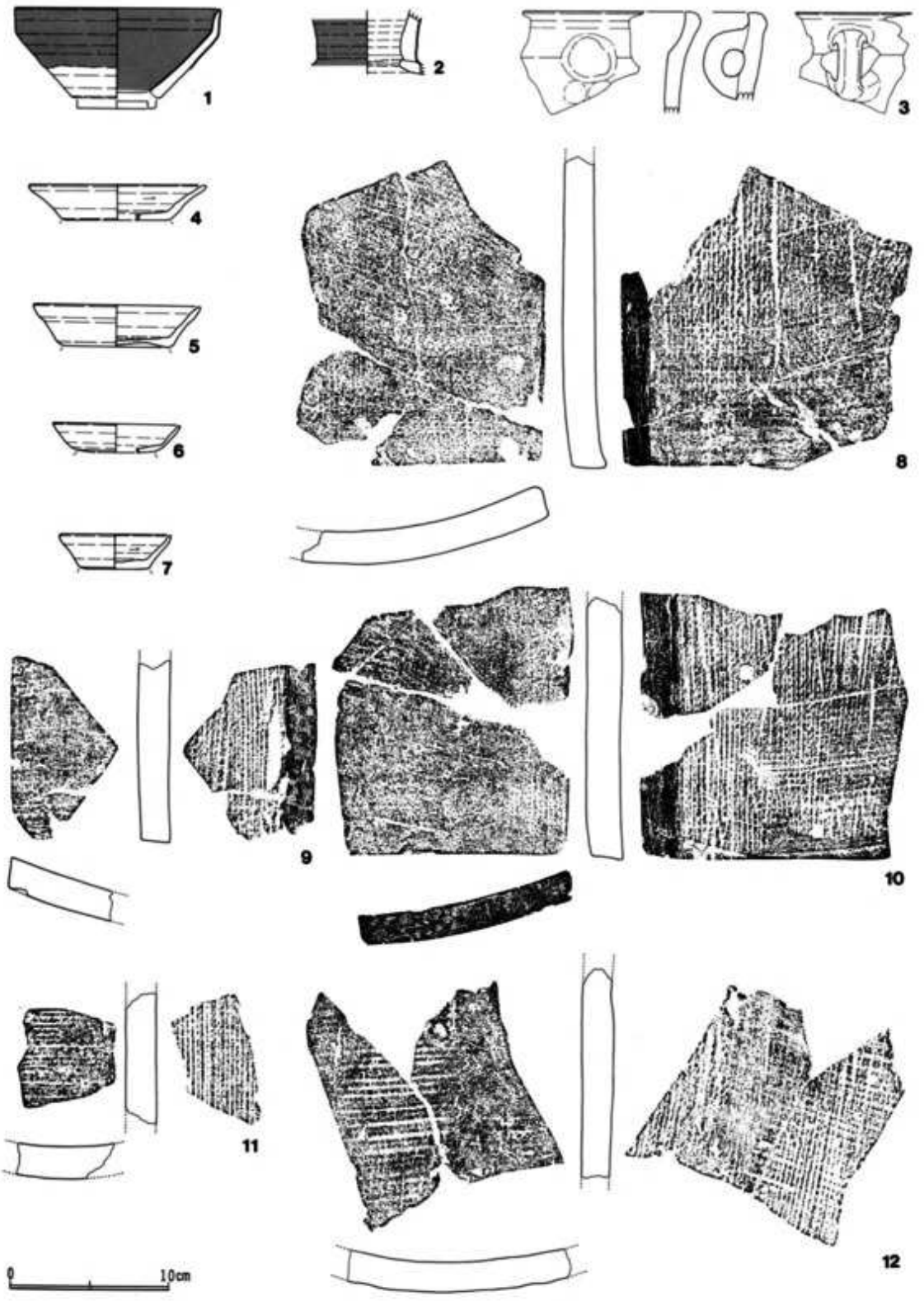
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
96	平瓦	残存長 20.0 残存幅 11.8 厚さ 2.5	厚さは比較的均一で厚い。端面は垂直ぎみで、側面はやや傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	約1/4。 B区覆土中。
97	平瓦	残存長 6.9 残存幅 7.9 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、側面はやや傾斜する。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 C区覆土中。
98	平瓦	残存長 9.7 残存幅 8.9 厚さ 1.8	厚さは比較的均一で、端面はやや丸みを帯びる。	凸面木口状工具によるヨコナデ、凹面ナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 E区覆土中。
99	平瓦	残存長 15.5 残存幅 12.7 厚さ 2.2	厚さは比較的均一で、側面は垂直ぎみである。凹面側砂付着。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕の後ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 B区覆土中。
100	平瓦	残存長 9.0 残存幅 5.9 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、側面は傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデの後ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 F区覆土中。
101	平瓦	残存長 14.1 残存幅 12.5 厚さ 2.1	厚さは比較的均一である。端面は垂直ぎみで、側面は傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹－暗灰色 凸－黒灰色	破片。凹面側に凸面縄目の転写圧痕あり。 C・G区覆土中。
102	平瓦	残存長 8.9 残存幅 7.3 厚さ 2.2	厚さは比較的均一である。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕の後木口状工具によるナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 F区覆土中。
103	平瓦	残存長 11.4 残存幅 13.4 厚さ 1.6	厚さは比較的均一で、やや薄い。側面は垂直ぎみである。	凸面縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデの後縦方向のナデ。側面ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 D区覆土中。
104	平瓦	残存長 7.6 残存幅 7.4 厚さ 1.9	厚さは比較的均一である。端面はやや丸みをもつ。凹凸両面及び端面砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデ、凹面ナデ。端面ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 E区覆土中。
105	平瓦	残存長 10.6 残存幅 11.7 厚さ 2.1	厚さは比較的均一で、端面は垂直ぎみである。	凸面木口状工具によるヨコナデ後縄目叩き、凹面篦ナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 C区覆土中。
106	平瓦	残存長 14.2 残存幅 11.7 厚さ 2.2	厚さは比較的均一で、端面・側面とも垂直ぎみである。	凸面縄目叩き、凹面篦ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 B区覆土中。
107	平瓦	残存長 12.9 残存幅 11.9 厚さ 1.6	厚さは比較的均一で、側面は垂直ぎみである。	凸面縄目叩き、凹面篦ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 C区覆土中。
108	平瓦	残存長 8.8 残存幅 9.0 厚さ 2.1	厚さは比較的均一で、側面は垂直ぎみである。凹面側砂付着。	凸面縄目叩き、凹面篦ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 C区覆土中。
109	平瓦	残存長 14.1 残存幅 11.6 厚さ 2.3	厚さは比較的均一で、端面はやや丸みをもち、凸面側に肥厚する。凹面側砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデ後縄目叩き、凹面ナデ。端面ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 A区覆土中。
110	平瓦	残存長 10.5 残存幅 8.8 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具によるヨコナデ後縄目叩き、凹面篦ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 B区覆土中。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
111	平瓦	残存長 6.5 残存幅 11.8 厚さ 1.9	厚さは比較的均一である。凹面側砂付着。	凸面縄目叩き、凹面木口状工具によるヨコナデの後縦方向のナデ。	白色粒 凹－灰色 凸－暗茶褐色	破片。 C区覆土中。
112	平瓦	残存長 11.5 残存幅 10.5 厚さ 2.2	厚さは比較的均一で、側面は垂直ぎみである。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰褐色 肉－淡灰色	破片。 C区覆土中。
113	平瓦	残存長 10.0 残存幅 7.5 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、側面は垂直ぎみである。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面布目圧痕の後木口状工具によるヨコナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 D区覆土中。
114	平瓦	残存長 9.0 残存幅 8.6 厚さ 1.9	厚さは比較的均一で、側面は垂直ぎみである。凹面側砂付着。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 B区覆土中。
115	平瓦	残存長 7.5 残存幅 7.0 厚さ 2.2	側面はやや垂直ぎみである。	凸面木口状工具によるヨコナデの後縄目叩き、凹面篦ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 C区覆土中。
116	平瓦	残存長 8.0 残存幅 7.6 厚さ 2.3	側面は垂直ぎみで、凹面側は丸みをもつ。	凸面縦方向の篦ナデの後文様叩き、凹面布目圧痕。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 C区覆土中。
117	平瓦	残存長 7.2 残存幅 8.0 厚さ 2.3		凸面縦方向の篦ナデの後文様叩き、凹面布目圧痕。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 A区覆土中。
118	平瓦	残存長 5.3 残存幅 6.5 厚さ 1.8	凹面側の大部分は剥離している。側面は傾斜する。凸面側砂付着。	凸面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凸肉－淡灰色	破片。 C区覆土中。
119	平瓦	残存長 6.3 残存幅 5.5 厚さ 1.8	端面は垂直ぎみである。凹凸両面とも砂付着。	凸面横方向の篦ナデ、凹面ナデ。	白色粒・褐色粒 凹凸－黒灰色 肉－淡灰色	破片。 B区覆土中。
120	丸瓦	残存長 10.0 厚さ 1.9	広端面と側面は平坦で、広端面の凹面側は斜方向の広面取りを施す。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕。広端面・側面ナデ。	赤色粒・白色粒 凹凸－淡褐色	破片。 C区覆土中。
121	丸瓦	残存長 9.7 厚さ 1.9	広端面と側面は平坦で、両面とも凹面側に斜方向の面取りを施す。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面篦ナデ。広端面・側面ナデ。	赤色粒・白色粒 凹凸－淡褐色	破片。 C区覆土中。
122	軒丸瓦	残存長 3.5 厚さ 2.6	周縁幅は狭く、珠文は小さい。	周縁外側と瓦当裏面は丁寧なナデ。	白色粒 凹凸－黒灰色	破片。 E区覆土中。
123	丸瓦	残存長 9.3 厚さ 2.7	厚さは比較的厚い。	凹凸両面ともナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 B区覆土中。
124	丸瓦	残存長 4.3 厚さ 1.7	玉縁部の取り付け角度はやや傾斜している。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕。玉縁部凹凸両面ともナデ。	赤色粒・白色粒 凹－黒色 凸－淡灰色	破片。 D区覆土中。
125	丸瓦	残存長 5.8 厚さ 1.8	側面は平坦で、凹面側に若干肥厚する。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕。	赤色粒・白色粒 凹凸－淡褐色	破片。 C区覆土中。
126	丸瓦	残存長 7.8 厚さ 2.8	厚さは比較的厚い。側面はやや尖り、凹面側に広い斜方向の面取りを施す。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕。側面ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色 肉－淡茶褐色	破片。 E区覆土中。

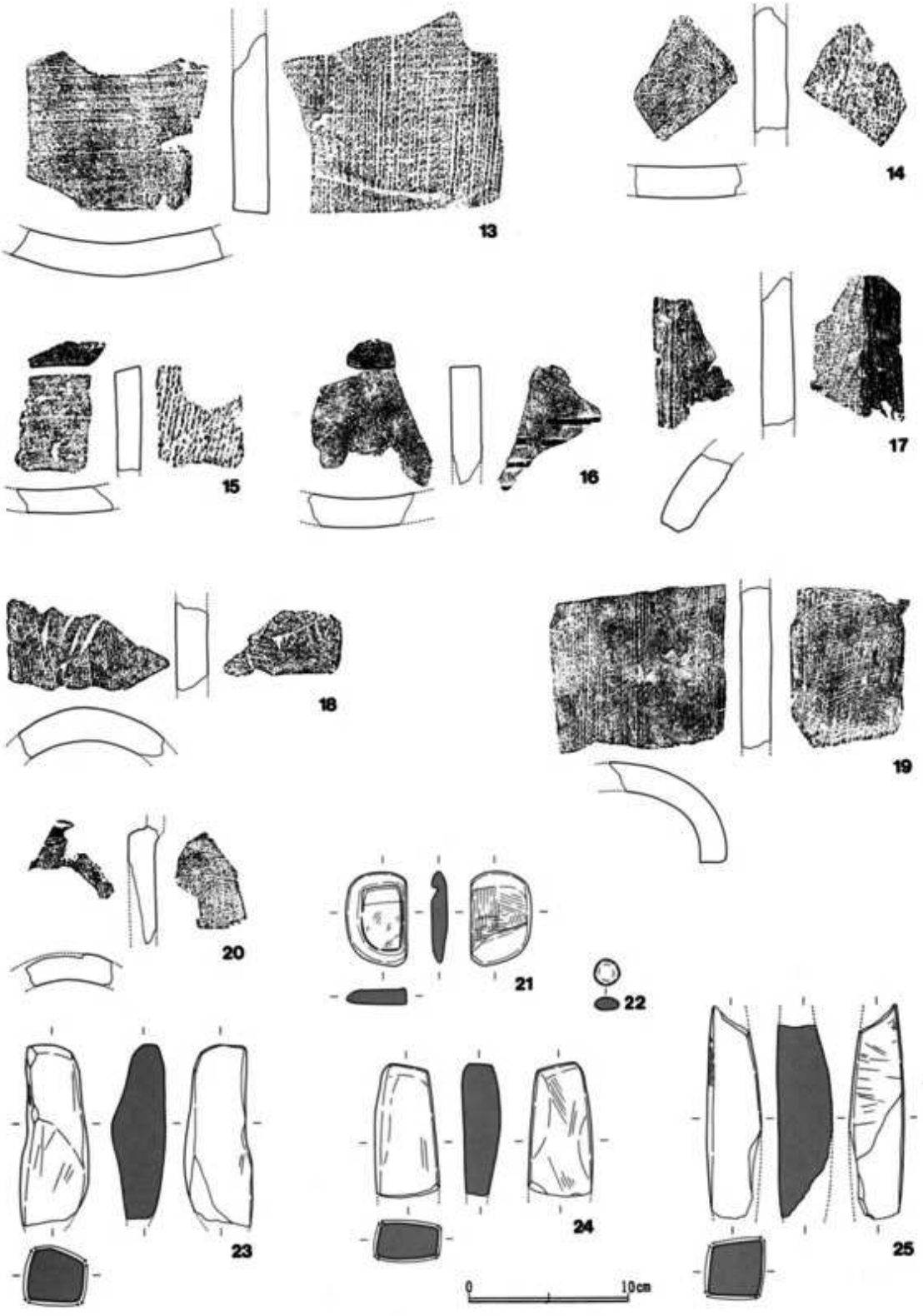
10. ピット出土遺物

ピット出土遺物観察表

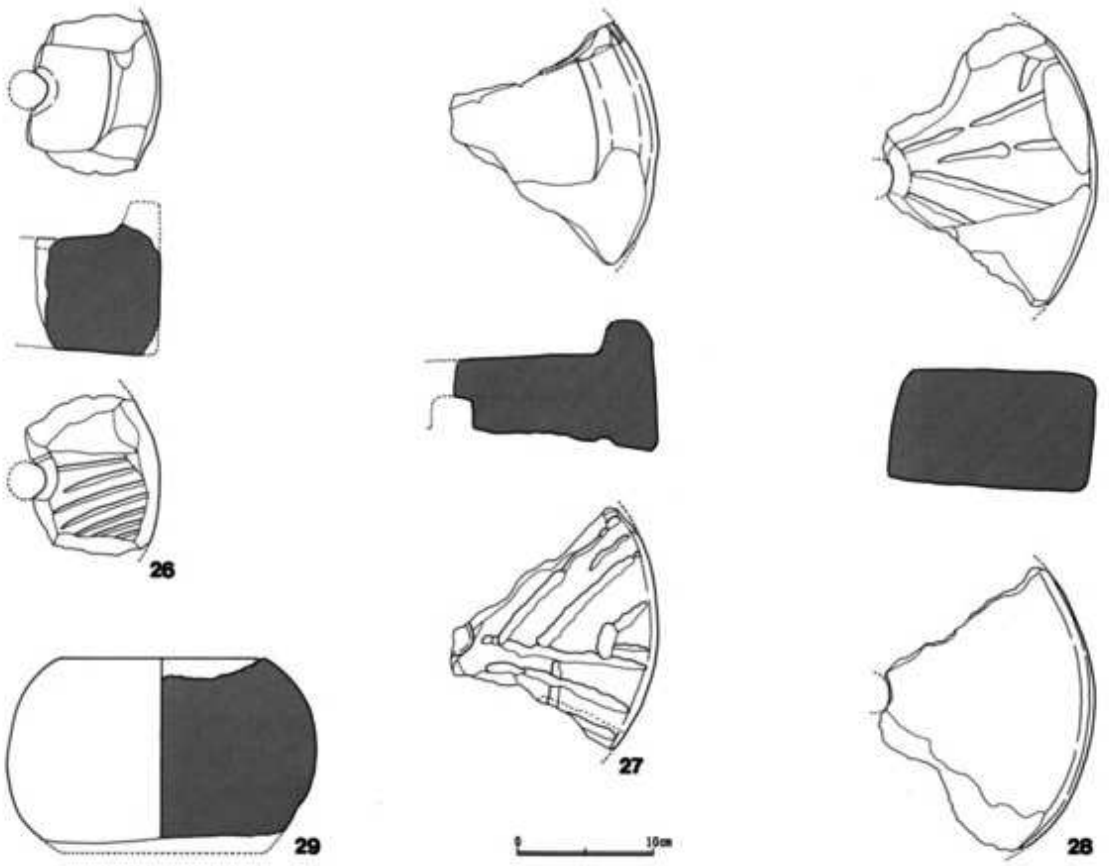
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	瀬戸窯系 天目茶碗	口縁部径 (13.0cm)	ロクロ成形。体部は直線的に開き、口縁部は垂直ぎみに屈曲して立つ。	内外面とも回転ナデ。底部外面回転篦ケズリ。内外面に厚い黒色釉がかかる。	白色粒・黒色粒 内外－暗灰色 肉－淡灰白色	約1/4。 P103
2	瀬戸窯系 花瓶		ロクロ成形、頸部と胴部は貼り付け。	内外面とも回転ナデ。外面に鉄釉がかかる。	白色粒・黒色粒 外－黒褐色 内－淡褐色	頸部1/5。 P87
3	内耳鍋		粘土紐積み上げ成形。内耳貼り付け。口縁部は短く内湾ぎみに外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内外面ナデ。	白色粒 外－黒灰色 内－淡灰色	破片。 P 4
4	土師質土器	口径(11.2) 器高 2.2 底径(6.8)	ロクロ成形。口縁部は外反ぎみに開き、底部は平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	赤色粒・白色粒 内外－暗褐色	口縁部1/5。 P95
5	土師質土器	口径(10.6) 器高 2.6 底径(6.6)	ロクロ成形。口縁部は外反ぎみに開き、底部は薄い平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外－淡橙褐色	1/3。 P48
6	土師質土器	口径(8.0) 器高 2.3 底径(4.8)	ロクロ成形。口縁部は直線的に外傾し、底部は薄い平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。	片岩粒・白色粒 内外－明茶褐色	1/5。 P40
7	土師質土器	口径(7.0) 器高 2.2 底径 4.4	ロクロ成形。口縁部は内湾ぎみに開き、底部は平底を呈する。	口縁部内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り、内面一定方向のナデ。	赤色粒・白色粒 黒色粒 内外－明橙褐色	1/3。 底部外面に板の圧痕あり。 P81
8	平瓦	残存長 19.6 残存幅 15.7 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。端面は垂直ぎみで、側面は傾斜する。凹面側砂付着。	凸面篦ナデの後縄目叩き、凹面篦ナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	赤色粒・白色粒 凹凸－淡褐色	1/4。 P 2
9	平瓦	残存長 11.9 残存幅 7.1 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、端面・側面とも垂直ぎみである。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	赤色粒・白色粒 黒色粒 凹凸－淡褐色	破片。 P 2
10	平瓦	残存長 17.0 残存幅 15.3 厚さ 2.2	厚さは比較的均一である。側面は垂直ぎみで、端面は若干傾斜する。	凸面木口状工具による横方向のナデの後縄目叩き、凹面ナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	赤色粒・白色粒 黒色粒 凹凸－暗灰色 肉－明茶褐色	1/4。 凹面側に凸面縄目叩きの転写圧痕あり。 P 2
11	平瓦	残存長 8.6 残存幅 6.7 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。	凸面縄目叩き、凹面木口状工具による横方向のナデ。	赤色粒・白色粒 凹－暗灰色 凸－暗茶褐色	破片。 P 2
12	平瓦	残存長 16.6 残存幅 16.5 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。	凹凸両面とも木口状工具に横方向のナデの後、凸面縄目叩き。	赤色粒・白色粒 凹－明茶褐色 凸－暗灰色	1/4。 P 2
13	平瓦	残存長 11.1 残存幅 13.2 厚さ 2.1	厚さは比較的均一で、端面はやや傾斜している。	凸面縄目叩き、凹面木口状具による横方向のナデ。端面篦切り後ナデ。	片岩粒・白色粒 凹凸－暗灰色	1/4。 P108
14	平瓦	残存長 8.7 残存幅 6.8 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。凹凸両面とも砂付着。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕。	白色粒1/4。 凹凸－暗灰色 肉－暗茶褐色	破片。 P21



第154図　ピット出土遺物(1)



第155図　ピット出土遺物(2)



第156図　ピット出土遺物(3)

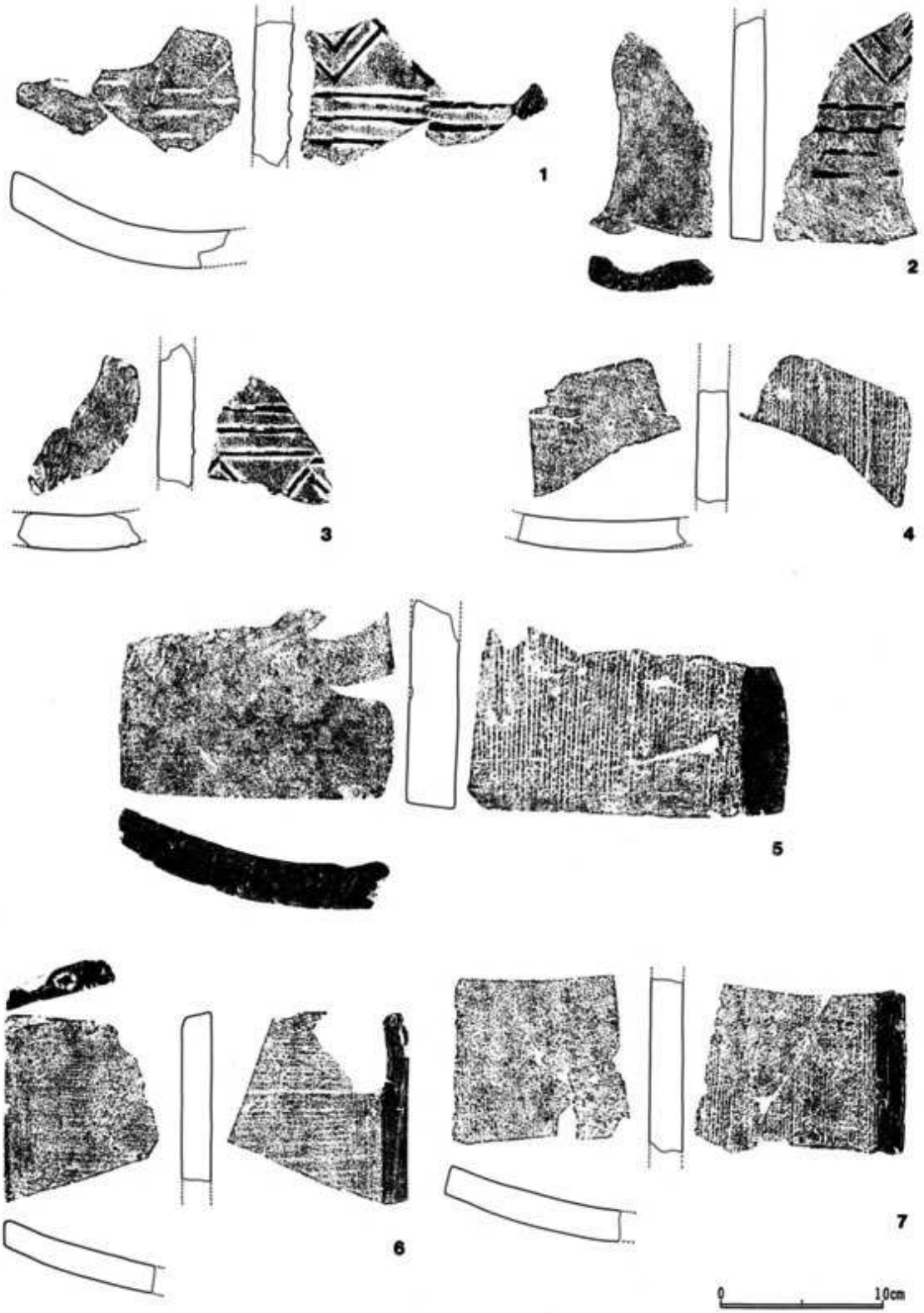
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
15	平瓦	残存長 6.4 残存幅 6.2 厚さ 1.6	厚さは比較的均一で薄い。端面は傾斜している。	凸面縄目叩き、凹面横方向の篦ナデ。端面篦切り後ナデ。	白色粒・黒色粒 凹凸－淡灰褐色	破片。 P114
16	平瓦	残存長 8.6 残存幅 8.3 厚さ 1.9	厚さは比較的均一で、端面は垂直ぎみである。	凸面ナデの後文様叩き、凹面布目圧痕。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－黒灰色	破片。 P79
17	丸瓦	残存長 9.2 厚さ 2.0	側面は平坦面をもち、内側に面取りを施す。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 P60
18	丸瓦	残存長 5.9 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕。	赤色粒・白色粒 凹凸－淡茶褐色	破片。 P27
19	丸瓦	残存長 10.0 厚さ 1.9	厚さは比較的均一で、側面は平坦面をもつ。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕。	白色粒 凹凸－淡灰褐色	破片。 P89
20	丸瓦	残存長 7.3 厚さ 1.6	凸面側の大部分は剥離している。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目圧痕。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 P56
21	石製硯	長さ 5.8 幅 3.8 厚さ 1.0	小形で偏平な自然石を半切し、研磨やケズリにより形状を整える。厚さは薄く、彫り込みは浅い。	表面及び側面研磨。裏面の中央部と側面の一部ケズリ。摺面は良く擦れている。	粘板岩	完形。 P6

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
22	碁石？	直径 1.6 厚さ 0.8	平面形はきれいな円形を呈し、表面は光沢をもつ。	全面丁寧な研磨。	蛇紋岩	完形。重さ2.5g。 P90
23	砥石	残存長 11.3 幅 4.2 厚さ 3.3	形態はやや厚い短冊形に近いるが、各面は歪んでいる。断面は方形ぎみである。	各面とも良く擦られ、刃物によると思われる細い線状の傷が多数見られる。	凝灰岩	4/5。 先端部欠失。 P68
24	砥石	残存長 8.4 幅 4.0 厚さ 2.3	形態はやや偏平な撥形を呈している。断面は長方形ぎみである。	各面とも良く擦られている。	凝灰岩	3/4。 先端部欠失。 P39
25	砥石	残存長 13.2 幅 3.3 厚さ 3.4	形態は厚い短冊形を呈しているが両端部に向かってやや細くなっている。	各面とも良く擦られ、刃物によると思われる細い線状の傷が多数見られる。	凝灰岩	2/3。 両端部欠失。 P86
26	石製粉挽臼（上臼）	残存長 9.2 残存高 9.5 ふくみ 0.8	上縁は幅がやや狭く、側面は垂直ぎみである。	上面研磨、側面は雑な研磨。下面は良く擦れており、目は荒い。	安山岩	破片。 P5
27	石製粉挽臼（上臼）	残存長 15.1 残存高 9.7 ふくみ 1.8	上縁は幅狭で、低く丸みをもつ。側面は若干傾斜する。芯棒受けは貫通しない。	上面研磨、側面は雑な研磨。下面は良く擦れており、目は荒い。	安山岩	約1/6。 P5
28	石製粉挽臼（下臼）	残存長 15.6 残存高 8.7	上面・下面ともほぼ平らで、側面は垂直ぎみである。芯棒穴は貫通している。	下面・側面とも雑な研磨。上面は良く擦れており、目は荒い。	砂岩	約1/6。 P82
29	五輪塔（水輪）	残存高 13.6 幅 22.8	側面はきれいな丸みをもち、上端面は窪む。	側面鑿ケズリの後雑な研磨。	砂岩	下端部欠失。 P3

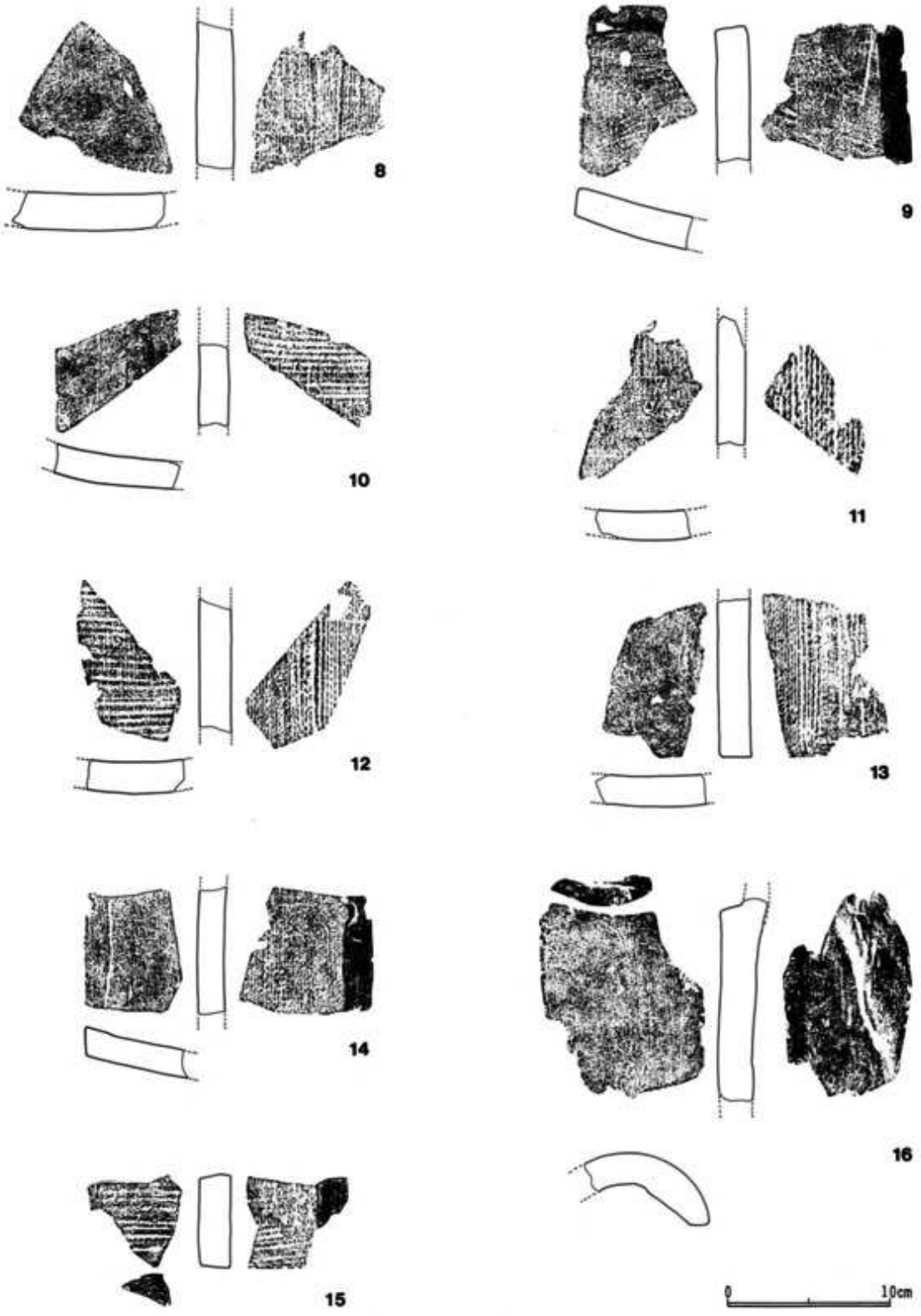
11. 城の内遺跡表採瓦

城の内遺跡表採瓦観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	平瓦	残存長 8.0 残存幅 13.8 厚さ 2.1	厚さは比較的均一で、側面は垂直ぎみである。	凸面ナデの後文様叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡褐色	破片。凹面側に凸面文様叩きの転写圧痕あり。 表採。
2	平瓦	残存長 14.6 残存幅 9.2 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、端面は垂直ぎみである。	凸面ナデの後文様叩き、凹面布目圧痕。端面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－黒褐色	破片。 表採。
3	平瓦	残存長 8.9 残存幅 7.6 厚さ 2.1	厚さは比較的均一である。	凸面ナデの後文様叩き、凹ナデ。	白色粒 凹凸－淡褐色	破片。 表採。
4	平瓦	残存長 10.0 残存幅 10.6 厚さ 1.9	厚さは比較的均一である。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。	白色粒 凹－灰色 凸－暗灰色	破片。 表採。
5	平瓦	残存長 17.9 残存幅 17.2 厚さ 3.0	厚さは比較的均一で厚い。端面・側面とも垂直ぎみである。凹凸両面砂付着。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。 表採。



第157図　城の内遺跡表採瓦(1)



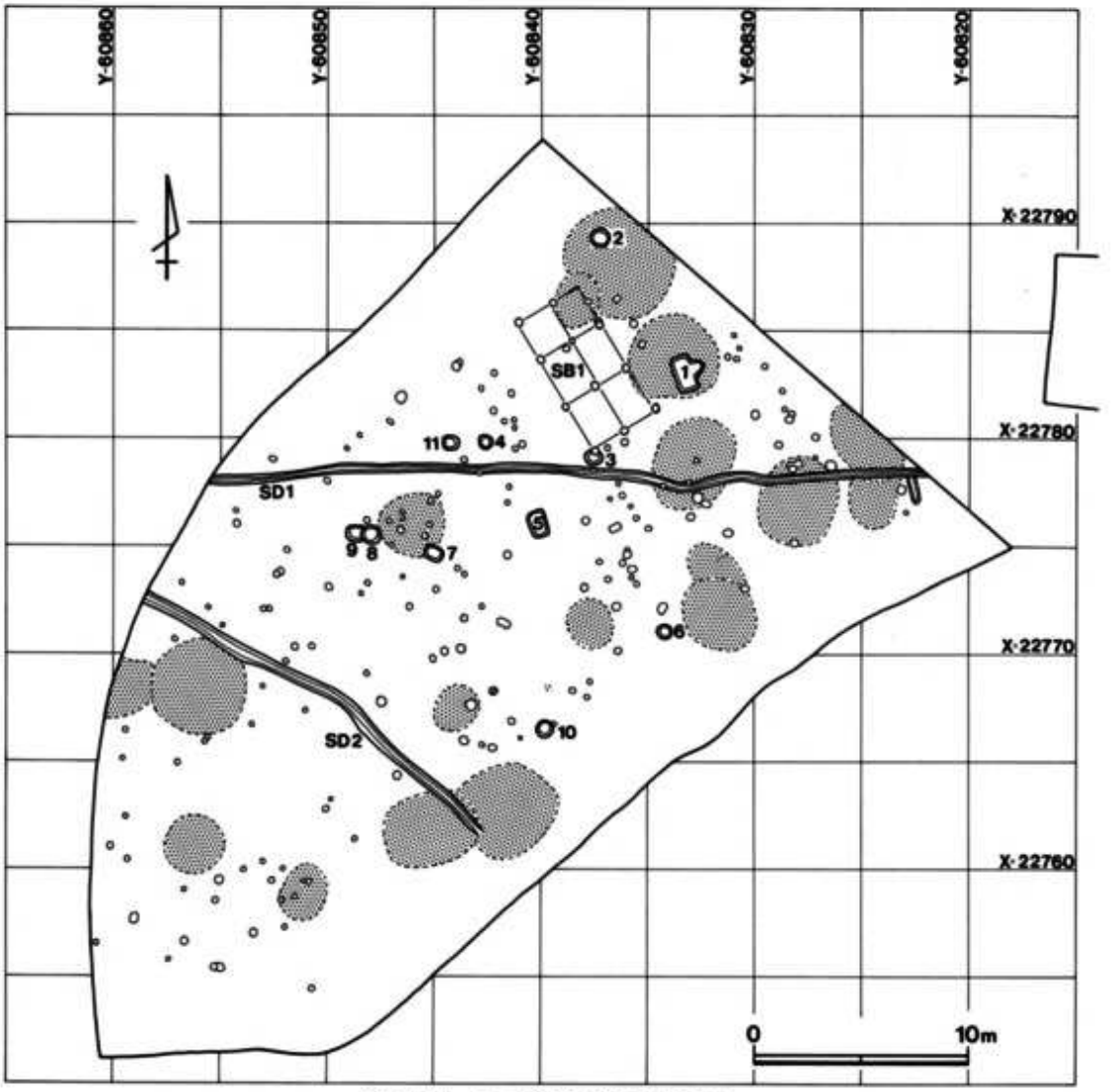
第158図　城の内遺跡表採瓦(2)

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
6	平瓦	残存長 12.2 残存幅 10.2 厚さ 1.9	厚さは比較的均一である。狭端面はやや傾斜し、内側に面取りを施す。側面は垂直ぎみである。	凹凸両面とも木口状工具による横方向のナデの後、凸面側縄目叩き。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 凹凸両面砂付着。 表採。
7	平瓦	残存長 10.7 残存幅 11.3 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、側面はやや傾斜する。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 表採。
8	平瓦	残存長 10.1 残存幅 10.3 厚さ 2.3	厚さは比較的均一でやや厚い。凹面側砂付着。	凸面縄目叩き、凹面ナデ。	白色粒 凹－淡褐色 凸－黒灰色	破片。 表採。
9	平瓦	残存長 9.5 残存幅 8.2 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。い。狭端面・側面ともやや傾斜している。狭端面・側面及び狭端面砂付着。	凸面縄目叩きの後狭端部付近ナデ、凹面木口状工具によるナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 表採。
10	平瓦	残存長 7.5 残存幅 8.2 厚さ 1.9	厚さは比較的均一である。凹凸両面とも砂付着。	凸面木口状工具による横方向のナデの後縄目叩き、凹面縦方向の篦ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色	破片。 表採。
11	平瓦	残存長 10.8 残存幅 8.3 厚さ 1.7	厚さは比較的均一である。凹面側砂付着。	凸面縄目叩き、凹面横方向のナデ。	白色粒 凹凸－淡褐色	破片。凹面側に凸面縄目叩きの転写圧痕あり。 表採。
12	平瓦	残存長 11.9 残存幅 8.0 厚さ 2.0	厚さは比較的均一である。凸面側砂付着。	凸面縄目叩き、凹面木口状工具による横方向のナデ。	白色粒 凹凸－淡灰色	破片。凹面側に凸面縄目叩きの転写圧痕あり。 表採。
13	平瓦	残存長 10.4 残存幅 7.8 厚さ 1.9	厚さは比較的均一で、端面は垂直ぎみである。	凸面縄目叩き、凹面横方向のナデ。	白色粒 凹凸－淡褐色	破片。 表採。
14	平瓦	残存長 8.0 残存幅 7.1 厚さ 1.7	厚さは比較的均一で、端面は垂直ぎみである。凸面側砂付着。	凸面縄目叩き、凹面布目圧痕の後ナデ。側面篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－暗灰色 肉－暗茶褐色	破片。 表採。
15	平瓦	残存長 6.0 残存幅 5.8 厚さ 2.0	厚さは比較的均一で、端面・側面とも垂直ぎみである。凸面側砂付着。	凸面木口状工具によるナデの後縄目叩き、凹面布目圧痕の後木口状工具によるナデ。端面・側面とも篦切り後ナデ。	白色粒 凹凸－灰色	破片。 表採。
16	丸瓦	残存長 13.7 厚さ 2.2	厚さは比較的均一で、側面は傾斜する平坦面をもつ。	凸面縄目叩きの後ナデ、凹面布目及び紐圧痕。	白色粒 凹凸－黒灰色	破片。 表採。

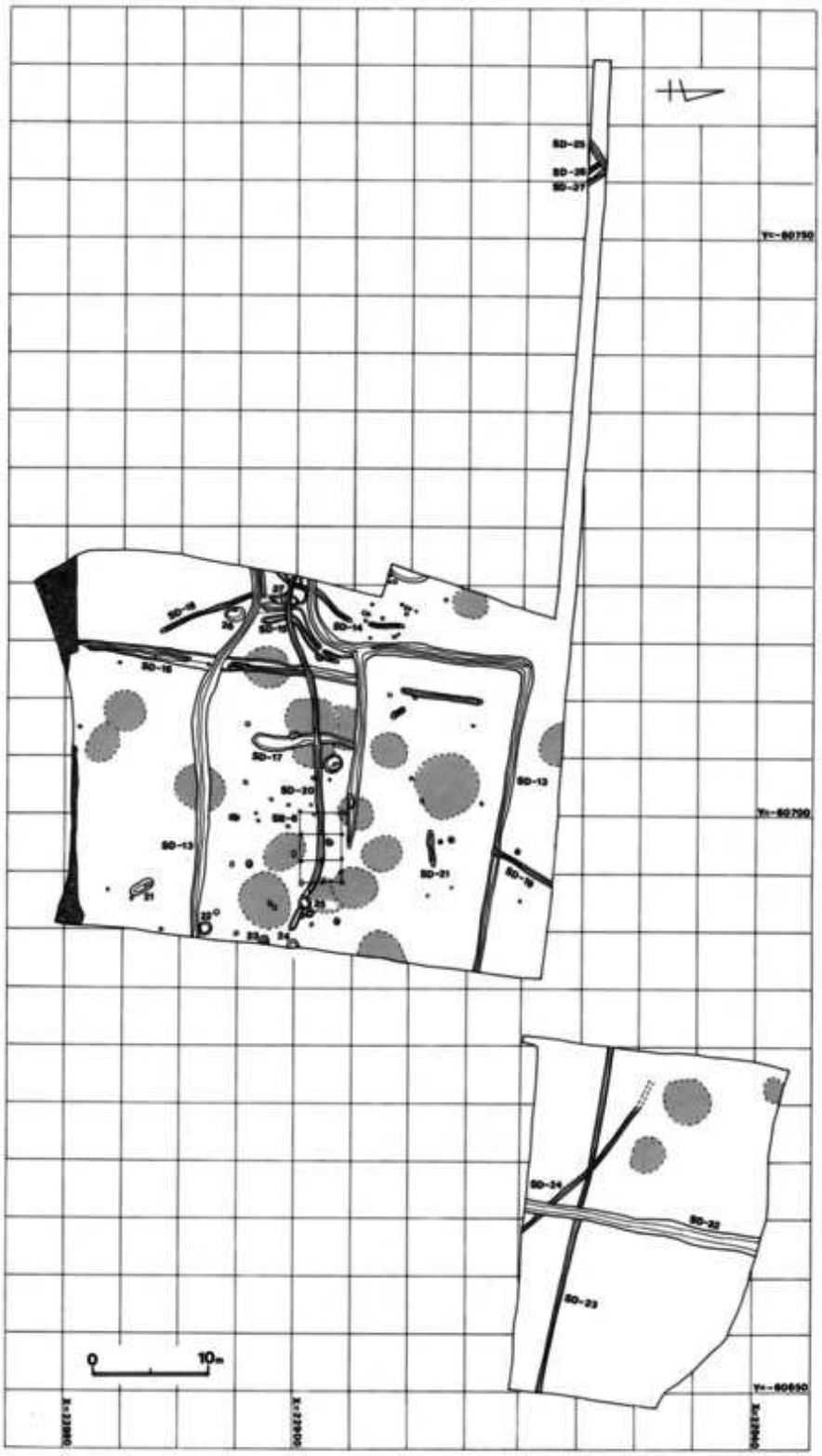
第Ⅲ章　日延遺跡A・C地点の発掘調査

第1節　遺跡の概要

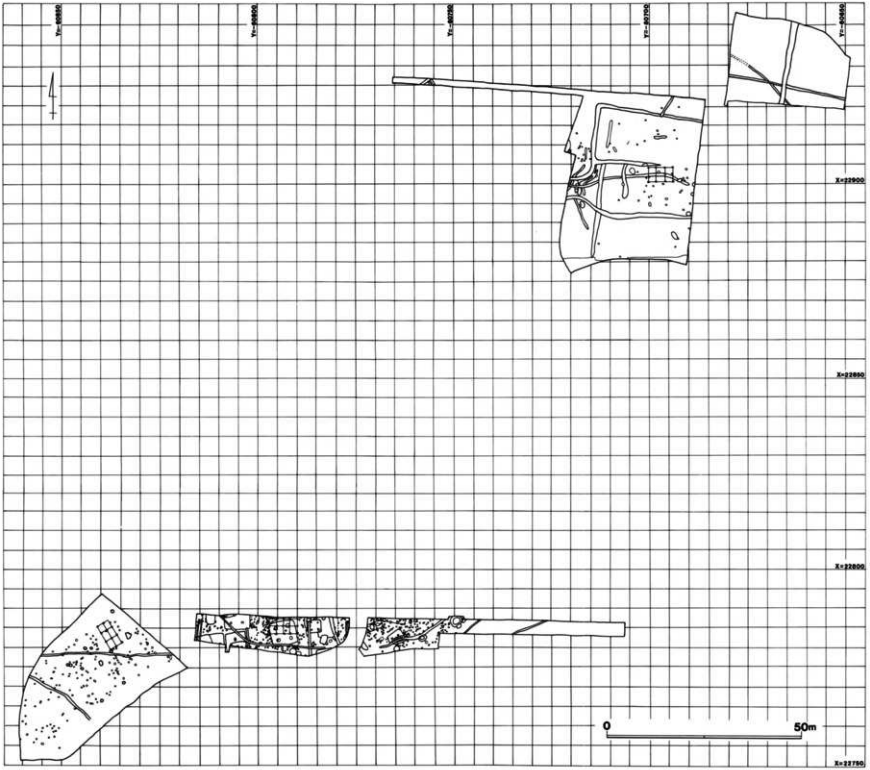
本遺跡は、城の内遺跡(本報告)の北側約50mに位置する標高76mの南西から北東方向に延びる微高地上に立地しており、西側約20mには蛭川変電所建設に伴って発掘調査された深町遺跡(鈴木・西口1981)がある。本遺跡周辺の水田を主体とする低地部には、1町四方の方格地割りが連続する児玉条里遺跡が広がっており、本遺跡が立地するこの微高地上にもこの条里形地割りの坪界線の痕跡が一部に認められ、A地点とB地点では明確な時期が特定できないものの、この坪界線にほぼ一致した溝跡も検出されている。



第159図　日延遺跡A地点全体図



第160図　日延遺跡C地点全体図



第161図　日延遺跡A・B・C地点全体図

本遺跡の発掘調査は、現在までに県営ほ場整備事業児玉南部地区の平成３年度工区に伴うＡ地点と平成４年度工区に伴うＣ地点、県営灌漑排水事業九郷地区に伴うＢ地点の３地点で実施されている。このＡ～Ｃの３地点で検出された主な遺構は、住居跡11軒・掘立柱建物跡６棟・土壙27基・井戸跡２基・溝跡27条で、本遺跡が古墳時代前期～中期の集落跡（Ｂ地点）と中世の屋敷跡（Ａ～Ｃ地点）を主体とする遺跡であることが明らかになっている。本報告は、このうちの県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴って発掘調査されたＡ地点とＣ地点の２地点である。Ｃ地点の西側調査区の北西端から西側に延びる小排水路を対象とした筋堀状の調査区は、当初児玉条里遺跡として調査した部分であるが、調査区が近接しており、また本遺跡と関係する時期の溝跡も検出されているため、便宜上ここでは本遺跡のＣ地点に含めて報告する。

今回報告する本遺跡のＡ地点は遺跡が立地する微高地の南西端に、Ｃ地点は反対側の北東端に位置しており、相互の距離は約150m離れている。検出された遺構は、Ａ地点が掘立柱建物跡１棟（中世）・土壙11基（古墳時代中期２・中世８・近世後半以降１）・溝跡２条（Ａ軽石降下以前）・倒木痕18基、Ｃ地点が掘立柱建物跡1棟（中世）・土壙７基（古墳時代中期１・中世６）・溝跡14条（古墳時代中期２・古代～中世５・現代７）・倒木痕21基である。両地点とも、遺跡の中心部から離れた端部に位置しているため、調査区内で検出された遺構数は少ないが、時期は中世と考えられるものが主体である。掘立柱建物跡も検出されていることから、恐らくＢ地点で検出された中世（13世紀～15世紀頃）の屋敷跡と関係するものと思われるが、Ｃ地点については西側調査区の南端に条里形地割りの東西方向の坪界線に一致する大堀川（やぼり川）が流れており、ＡＢ地点の屋敷とは別の屋敷を構成している可能性も推測される。出土遺物は、古墳時代中期の土器片が主体で、中世の遺物は非常に少ないが、Ａ地点の第５号土壙から龍泉窯系青磁碗の破片が、Ｃ地点で常滑窯系甕の破片などが出土している。

第2節　検出された遺構と遺物

1．掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第162図）

A地点の調査区北側に位置する。北側には第2号土壙が、東側には第1号土壙が、南側には第1号溝跡が近接し、建物跡の南端の柱穴は重複する第3号土壙を切っている。形態は、南東から北西方向に向く2間×2間の長方形を呈し、真ん中に中心柱をもつ総柱式である。建物跡の北西側の延長上にはさらに類似したピットが2箇所見られ、庇か下屋のような付属施設が存在した可能性も考えられる。規模は、南東から北西方向の桁行が4.80mで、付属施設と推測される部分を含めると6.80mあり、南西から北東方向の梁行は3.40mを測る。建物跡の桁行方向は、N−32°−Wを向いている。柱通りは、桁行側梁行側ともあまり良くない。柱心間は、桁行方向が2.40mと広く、梁行方向は1.70mと狭くなっている。柱穴の形態は、直径25cm～40cmの比較的規模の小さい円形を呈し、確認面からの深さは16cm～38cmと不揃いである。本建物跡の時期は、出土遺物がないため明確にできないが、柱穴覆土中にB軽石を含むことから中世の所産と考えられる。

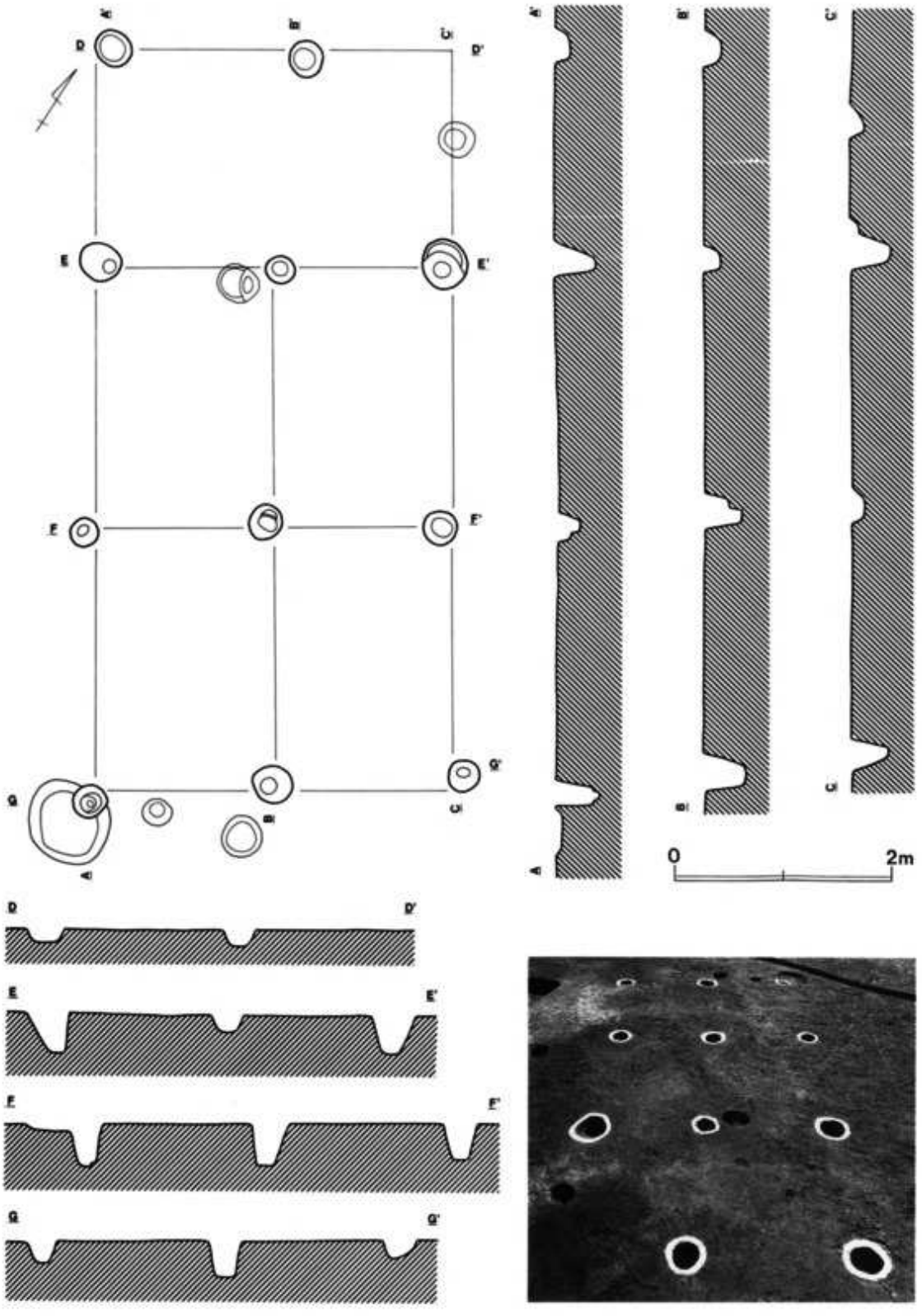
第6号掘立柱建物跡（第163図）

C地点の調査区中央部の南側寄りに位置し、重複する古墳時代中期の第20号溝跡を切っている。建物跡の南側には第25号土壙が近接している。形態は、3間×2間の東西方向に長い長方形を呈し、建物内に中心柱をもつ総柱式である。規模は、東西方向の桁行が6.00m・南北方向の梁行が3.40mを測る。建物跡の桁行方向は、ほぼN−90°−Wを向いている。柱通りは、比較的良いが、中心柱の梁行方向に若干ずれるものが見られる。柱心間は、桁行・梁行方向とも不揃いで、桁行方向は東側から1.80m・2.00m・1.80mと真ん中の1間が広くなっており、梁行方向は北側が1.60m・南側が1.80mと南側の方が広くなっている。柱穴の形態は、直径25cm～30cmの比較的規模の小さい円形を呈し、確認面からの深さは25cm～50cmあるが、全体的に30cm前後のものが主体である。本建物跡の時期は、出土遺物がないため明確にできないが、柱穴覆土中にB軽石を含むことから中世の所産と考えられる。

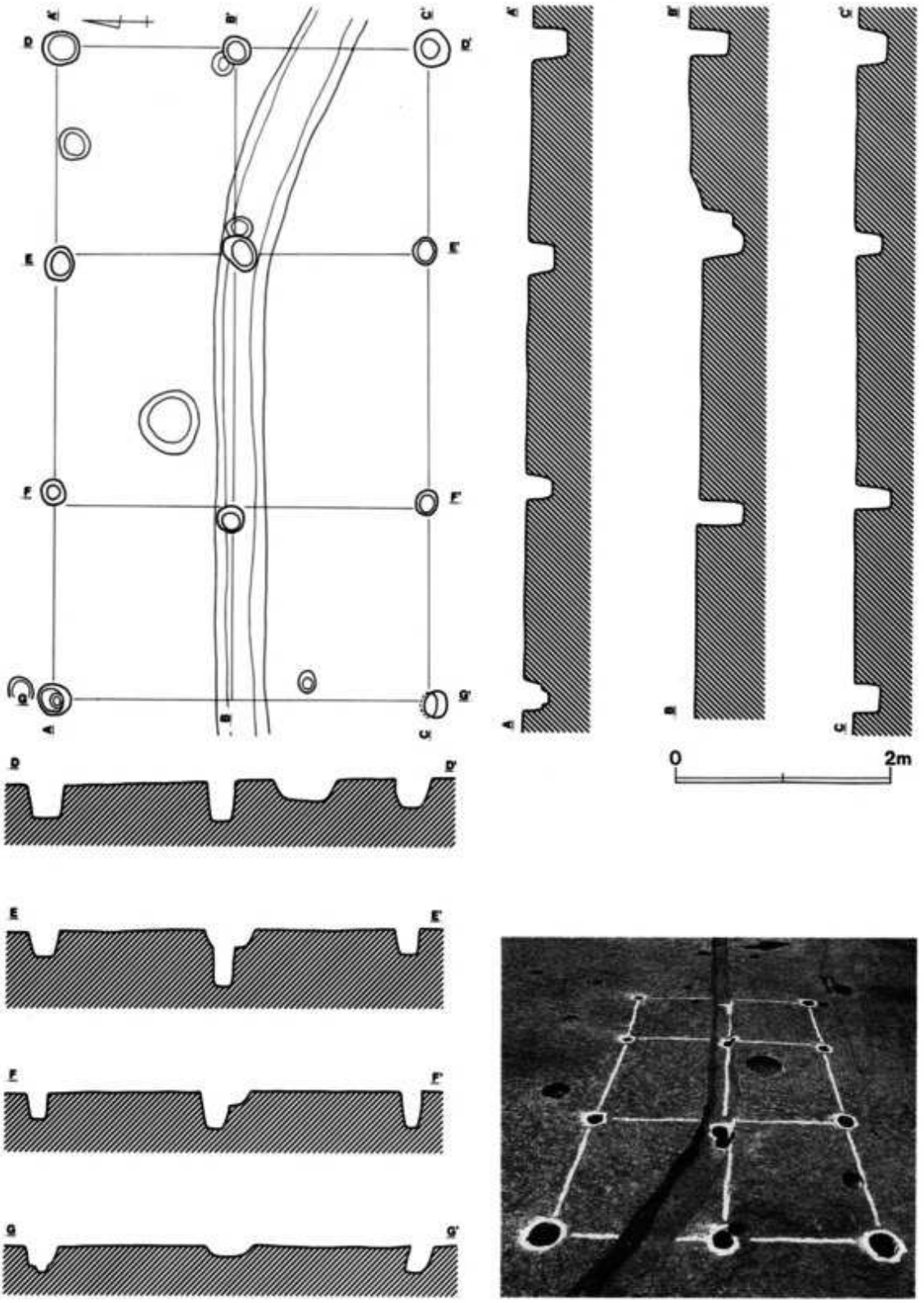
2．土　　壙

第1号土壙（第164図）

A地点の調査区北側に位置し、西側には第1号掘立柱建物跡が近接している。平面形は、比較的整った長方形を呈し、東側壁の中央部に張り出しを伴う。規模は、南北方向が1.66m・東西方向は張り出し部を含めると1.42mある。壁は直線的で垂直ぎみに立ち上がるが、張り出し部は傾斜がやや緩やかである。底面は、広く平坦で確認面からの深さは20cmを測る。土壙の北側半分の底面と壁面は、非常に良く焼けて赤色化しており、覆土中にも多量の焼土が見られた。本土壙は、短軸方向の一方に張り出しをもつ形態であることや、土壙内部で火を焚いていることから火葬墓と考えられるが、覆土中に骨片や骨粉などは顕著に見られなかった。時期は、出土遺物がないため明確ではないが、覆土中にB軽石を含むことから中世の所産と考えられる。



第162図　第1号掘立柱建物跡



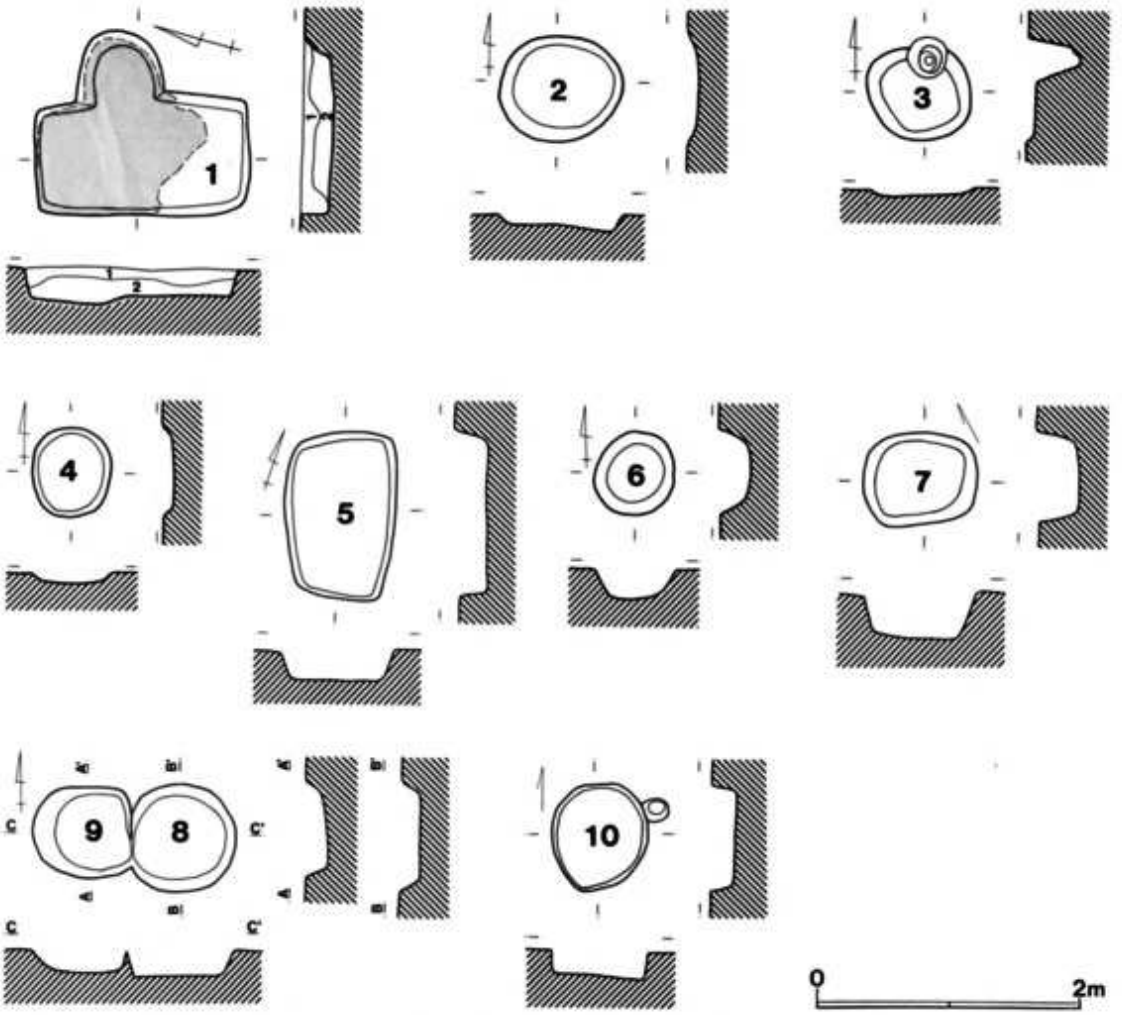
第163図　第６号掘立柱建物跡

第２号土壙（第164図）

Ａ地点の調査区北側に位置し、南側には第１号掘立柱建物跡が近接している。平面形は、94cm×80cmの楕円形を呈している。壁は、なだらかに立ち上がり、確認面からの深さは14cmを測る。底面は、広く平坦である。覆土は、Ｂ軽石とローム粒子を微量に含む黒褐色土である。本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土中にＢ軽石を含むことから中世の所産と考えられる。

第３号土壙（第164図）

Ａ地点の調査区北側に位置し、第１号掘立柱建物跡の柱穴に切られている。また、南側には東西方向に延びる第１号溝跡が隣接している。平面形は、76cm×72cmの不整円形を呈している。壁は、



第164図　土　　壙（Ａ地点）

第１号土壙土層説明
第１層：黒褐色土層（Ｂ軽石・焼土粒子・焼土ブロック・炭化粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量に、Ｂ軽石を均一に含む。粘性・しまりともない。）

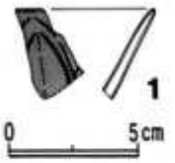
なだらかに立ち上がり、確認面からの深さは5cm程度で浅い。底面は、広く平坦である。本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土が第2号土壙と類似していることから、中世の可能性が高いものと思われる。

第4号土壙（第164図）

A地点の調査区北側寄りに位置し、南側には第1号溝跡が西側には第11号土壙が近接している。平面形は、67cm×60cmの円形に近い形態を呈している。壁は、なだらかに立ち上がり、確認面からの深さは10cmを測る。底面は、広く平坦である。本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため不明である。

第5号土壙（第164図）

A地点の調査区中央部に位置し、北側には第1号溝跡が近接している。平面形は、1.36m×0.95mの南北方向に長い長方形ぎみの形態を呈している。壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは25cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、B軽石とローム粒子を均一に含む暗褐色土で、覆土中からは龍泉窯系青磁碗の破片が1点出土しただけである。本土壙の性格は明確ではないが、時期は出土遺物や覆土の状態から中世の所産と考えられる。



第165図　第5号土壙出土遺物

第5号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	龍泉窯系青磁碗		ロクロ成形。口縁部は内湾ぎみに開き、口唇部はやや尖る。	口縁部外面鏑手蓮弁文、内面回転ナデ。内外面とも淡緑色釉を施す。	黒色粒・白色粒 内外－淡緑色 肉－灰色	破片。 覆土中。

第6号土壙（第164図）

A地点の調査区中央部東側寄りに位置する。平面形は、63cm×60cmの円形を呈する。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは23cmある。底面は、広くやや丸みをもつ。覆土は、ローム粒子を均一に含む暗茶褐色土で、覆土中からは和泉式土器の破片が数片出土している。本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物から古墳時代中期の可能性が高いと思われる。

第7号土壙（第164図）

A地点の調査区中央部に位置し、西側には第8号土壙と第9号土壙が近接し、東側には第5号土壙がある。平面形は、90cm×70cmのコーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは30cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、B軽石を均一に含む暗褐色土である。本土壙の時期は、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第８号土壙（第164図）

Ａ地点の調査区中央部西側寄りに位置する。第９号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は、93cm×80cmの円形に近い形態を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20cmある。底面は、広く平坦である。覆土は、Ｂ軽石を均一に含む黒褐色土である。本土壙の時期は、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第９号土壙（第164図）

Ａ地点の調査区中央部西側寄りに位置する。第８号土壙と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は、75cm×70cmの不整形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは15cmある。底面は、広いがやや丸みをもつ。覆土は、Ｂ軽石を均一に含む黒褐色土である。本土壙の時期は、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第10号土壙（第164図）

Ａ地点の調査区中央部東側寄りに位置する。平面形は、82cm×74cmの不整円形を呈している。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは最高20cmある。底面は、広く平坦であるが東側に向かって若干傾斜している。覆土は、第６号土壙に類似している。時期は、遺物が出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは古代の可能性が高いと思われる。

第11号土壙（第159図）

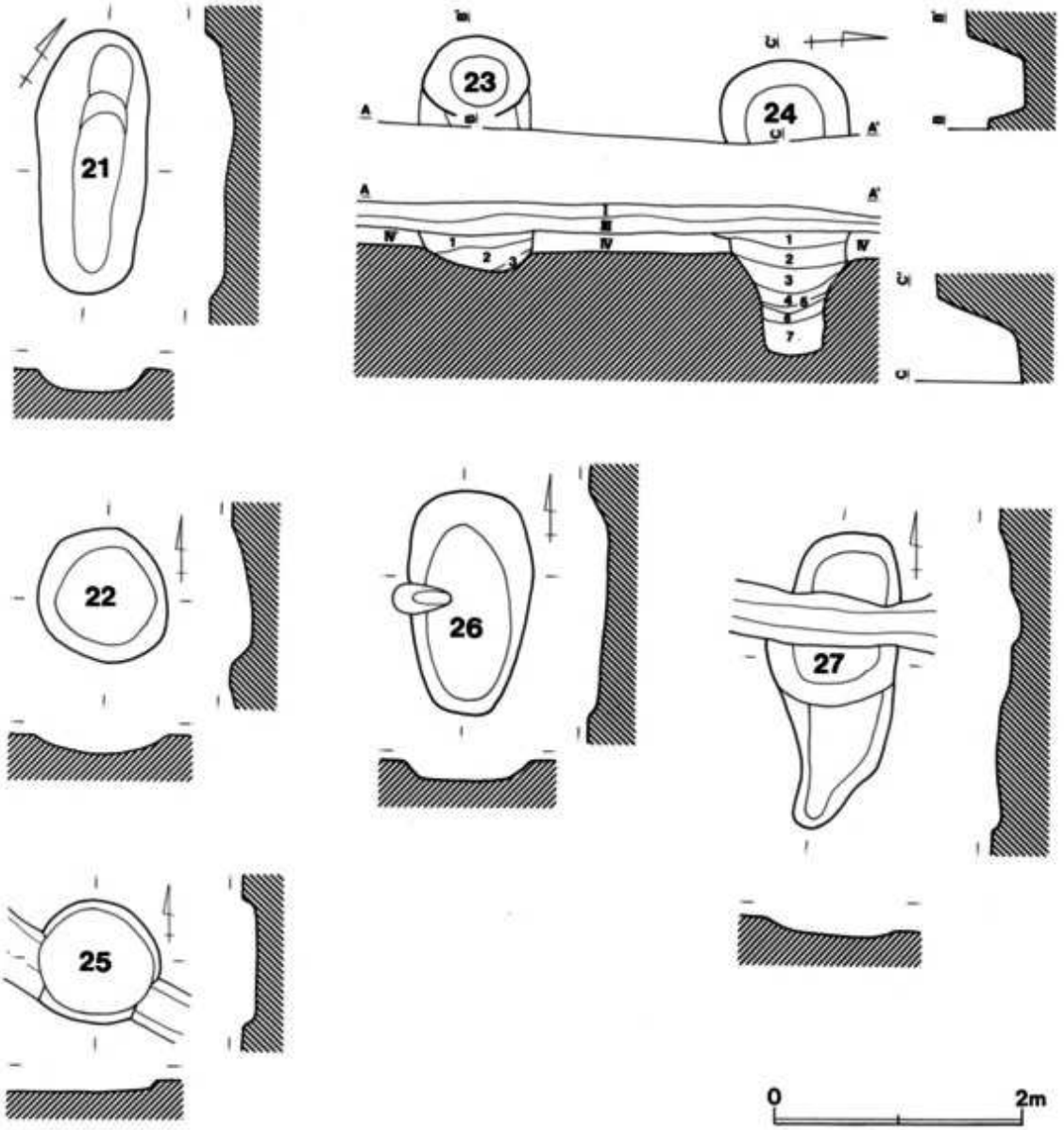
Ａ地点の調査区北側に位置し、東側には第４号土壙が南側には第１号溝跡が近接している。平面形は、71cm×65cmの不整形を呈している。壁は、直線的で傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは５cm程度で、底面は広く平坦である。覆土は、Ａ軽石を均一に含む淡灰褐色土である。時期は、覆土の状態から見て近世後半以降の所産であるが、かなり新しいものと思われる。

第21号土壙（第166図）

Ｃ地点の西側調査区の南東側に位置する。平面形は、2.14m×0.90mの北西から南東方向に長い超楕円形のような形態を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは24cmを測る。底面は、やや起伏があり、北西側に向かって若干浅くなっている。覆土は、白色粒子を均一に含む黒色土である。本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態からは古代以前のものと思われる。

第22号土壙（第166図）

Ｃ地点の西側調査区の東端に位置し、南側には第13号溝跡が隣接し、北側には第23号土壙がある。平面形は、1.10m×1.06mの不整円形を呈している。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは16cmを測る。底面は、広く丸みをもつ。覆土は、Ｂ軽石とローム粒子を含む黒褐色土である。本土壙の時期は、覆土の状態から中世の所産と考えられる。



第166図　土　　壙（C地点）

第23号土壙土層説明

第Ⅰ層：現耕作土（A軽石混入。）
第Ⅲ層：黒色土層（中世耕作土、B軽石混入。）
第Ⅳ層：暗褐色土（B軽石降下以前。）
第1層：黒灰色土層（ローム粒子・B軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：暗灰色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：暗灰色土層（B軽石・ローム粒子・鉄斑を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第24号土壙土層説明
第1層：黒灰色土層（B軽石を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第2層：黒灰色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第3層：黒灰色土層（ローム粒子を均一に、B軽石を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第4層：黒灰色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第5層：黒灰褐色土層（ローム粒子・鉄斑を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第6層：暗灰色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第7層：暗灰色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）

第23号土壙（第166図）

C地点の西側調査区の東端に位置し、南側には第22号土壙があり、北側には第24号土壙が近接している。土壙の東側は調査区外に位置するため、遺構の全容は不明である。平面形は、遺構の西端部が88cm×66cmの南北方向に長い楕円形を呈しているが、その東側は浅く溝状に調査区外に延びている。壁は、西端部の楕円形を呈する部分では、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは46cmあるが、溝状に東側調査区外に延びる部分では比較的緩やかに立ち上がり、深さは15cm程度である。底面は、比較的狭い平坦をなすが、溝状に延びる部分は広く丸みをもつ。本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第24号土壙（第166図）

C地点の西側調査区の東端に位置し、南側には第23号土壙がある。土壙の東側は調査区外に位置するため、遺構の全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、円形か楕円形のような形態を呈するものと思われる。規模は、南北方向が1.06m・東西方向は66cmまで測れる。壁は、上半が緩やかに傾斜し、下半は直線的で垂直ぎみであり、深さは約1mとかなり深い。底面は狭く平坦である。覆土は、自然堆積を示し、遺物は何も出土しなかった。本土壙は、その形態や規模及び覆土の堆積状態から、小規模な井戸の可能性も考えられる。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第25号土壙（第166図）

C地点の西側調査区の東側に位置し、重複する第20号溝跡を切っている。平面形は、直径1mの比較的整った円形を呈している。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは12cmと浅い。底面は、広く平坦である。覆土は、B軽石とローム粒子を含む黒褐色土である。本土壙の時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から中世の所産と考えられる。

第26号土壙（第166図）

C地点の西側調査区の西側に位置し、北側には第13号溝跡が、西側には第18号溝跡が近接している。平面形は、1.80m×1.00mの南北方向に長い楕円形のような形態を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは16cmとやや浅い。底面は、広くほぼ平坦であるが、南側に向かって若干傾斜している。覆土は、B軽石とローム粒子を含む黒褐色土である。本土壙の時

期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、覆土の状態から推測すると、中世の可能性が高いと思われる。

第27号土壙（第166図）

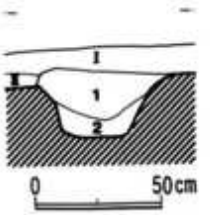
C地点の西側調査区の西側に位置し、重複する第20号溝跡を切っている。また、本土壙の南端は削平を受けているが、南側の第18号溝跡に繋がっていた可能性が高い。平面形は、2.34m×1.06mの南北方向に長くコーナー部の丸みが強い長方形ぎみの形態を呈しているが、南端部はやや細く張り出している。壁は、かなり緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは14cmとかなり浅い。底面は、北側半分が若干深く、南側半分はやや起伏をもちながら浅くなっている。覆土は、焼土粒子と炭化粒子を微量に含む黒褐色土である。出土遺物は、底面付近から高坏の脚柱部が出土し、覆土中からも同時期の土器の破片が少数出土している。本土壙の時期は、出土遺物や覆土の状態から古墳時代中期の所産と考えられる。

3．溝　跡

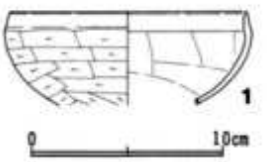
溝跡は、A地点で2条、C地点で14条が検出されている。このうちC地点の第13～17号溝跡及び第21～23号溝跡の8条は、調査前の現地表面に見られた水田や畑の地割り区画に合うものや、A軽石降下以後でも比較的新しい時期の所産と考えられるものである。そのため、これら8条の溝跡については説明を省略し、ここではA軽石降下以前と考えられる溝跡についてのみ説明することにしたい。

第1号溝跡（第159･167図）

A地点の北側寄りに位置する。流路は、本遺跡が立地する微高地の微地形条件に関係なく、ほぼ東西方向に直線的に向いている。規模は、上幅が40cm前後の比較的均一で、確認面からの深さは20cm前後を測る、比較的小規模な溝である。壁は直線的に傾斜して立ち上がり、底面はやや狭く平坦である。覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土(第1層)であり、水が流れていたような形跡は認められない。遺物は、覆土中より古墳時代中期の和泉式土器の破片が少量出土しているが、これらの土器片は混入の可能性が高いと思われる。本溝跡は、本遺跡周辺の現地表面に見られる条里形地割りの東西方向の坪界線の位置に近いものである。時期は、A軽石降下以前の所産ではあるが、覆土中でのB軽石の混入については明確に把握することができず、明細は不明である。



第167図　第1号溝跡断面図



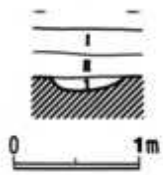
第168図　第1号溝跡出土遺物

第1号溝跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	坏	口縁部径(12.2cm)	体部は深く内湾しながら開き、口縁部は短く直線的に若干内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面篦ナデ。	片岩粒・赤色粒白色粒内外－茶褐色	口縁部1/4。覆土中。

第２号溝跡（第159･169図）

Ａ地点の南側寄りに位置する。流路は、北西から南東方向に向いてやや蛇行しており、溝の南東端は削平されている。規模は、上幅が60cm前後の比較的均一で、確認面からの深さは10cm前後を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広くやや丸みをもつ。覆土は、ローム粒子や鉄斑を含む黒褐色土(第１層)である。本溝跡は、水が恒常的に流れていたような形跡が認められないことから、北西側の水田部から本遺跡の微高地を横断して南東側の城の内遺跡との間の一段低い水田部に抜ける小規模な排水路であったと考えられる。時期は、Ａ軽石降下以前の所産であるが、遺物が何も出土していないため明細は不明である。



第169図　第２号溝跡断面図

第18号溝跡（第160図）

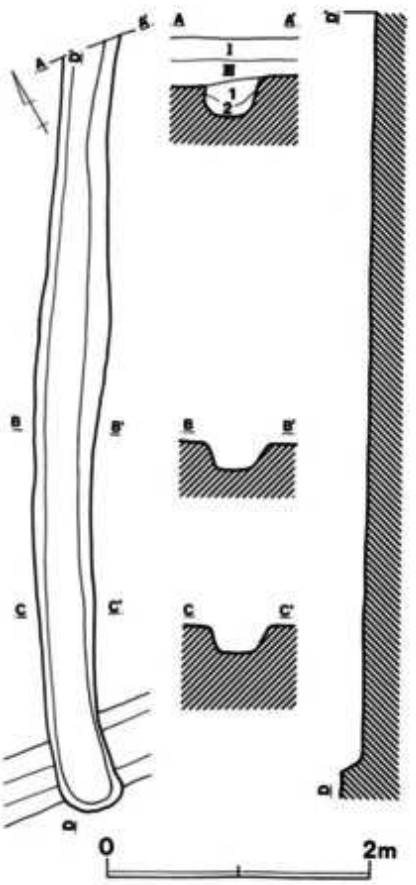
Ｃ地点西側調査区の西側に位置する。流路は、北西から南東方向にほぼ直線的に向き、両端は削平されているが、溝の北西側は第27号土壙の南端に繋がる可能性が高い。規模は、現状で上幅が24cm～30cm、確認面からの深さは５cmしか残存しておらず、かろうじてその痕跡を止めている程度で、遺構の遺存状態は極めて悪い。覆土は、黒褐色土を主体にしており、溝底面付近からは古墳時代中期の和泉式土器の破片が少量出土している。本溝跡の時期は、覆土の状態や出土遺物から古墳時代中期の所産と考えられる。

第19号溝跡（第170図）

Ｃ地点西側調査区の北側に位置し、溝南端の上面を第13号溝跡に切られている。流路は、調査区内では南西から北東方向に向いて、ほぼ直線的な形態をとっており、溝の南西端は途切れている。規模は、上幅が45cm～55cmの比較的均一な幅で、確認面からの深さは25cm前後を測る。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は平坦でほぼ水平をなしている。本溝跡は、その形態や覆土の状態から区画を意図した溝かあるいは排水路と考えられる。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、中世の基本第Ⅲ層直下で検出されており、古代まで溯る可能性もある。

第19号溝土層説明

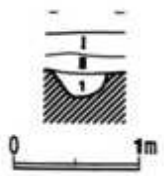
第Ⅰ層：現耕作土（Ａ軽石混入。）
第Ⅲ層：黒色土層（中世耕作土、Ｂ軽石混入。）
第１層：黒灰褐色土層（鉄斑・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第170図　第19号溝跡

第20号溝跡（第171図）

C地点西側調査区の中央部に位置し、第6号掘立柱建物跡や第25号土壙及び第27号土壙に切られている。流路は、緩やかに蛇行しながらほぼ地形の等高線に沿った東西方向に向いている。規模は、上幅が45cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは20cm程度ある。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、底面は広く平坦をなしている。覆土は、鉄斑を均一に含む黒褐色土を主体にしており、覆土中からは古墳時代中期の土器片が比較的多く出土している。時期は、覆土の状態や出土遺物から古墳時代中期の所産と考えられる。



第171図　第20号溝跡断面図

第20号溝土層説明

第Ⅰ層：現耕作土（A軽石混入。）
第Ⅱ層：旧耕作土（A軽石を多量に含む。）

第1層：黒褐色土層（白色粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

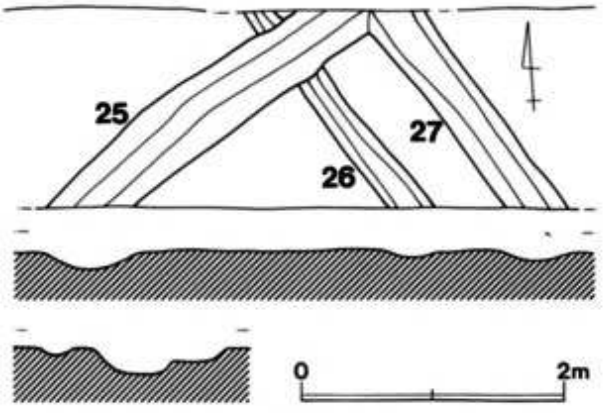
第2層：黒褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第24号溝跡（第160図）

C地点東側調査区の南側に位置し、重複する近世後半以降の第22号溝跡と第23号溝跡に切られている。流路は、若干蛇行ぎみに南東から北西方向に向いており、北西端はすでに削平されている。規模は、上幅が40cm前後の比較的均一な幅で、確認面からの深さは5cm程度しか残存していない。壁は緩やかに立ち上がり、底面は広くやや丸みをもっている。覆土は、A軽石を含まない黒褐色土を主体としている。時期は、遺物が何も出土していないため明確ではないが、A軽石降下以前の所産であり、古代～中世に溯る可能性が高い。

第25～27号溝跡（第172図）

C地点西側調査区の北西端から西側に帯状に延びる、当初は児玉条里遺跡として調調査した調査区の西側に位置する。調査区が狭いため、溝跡の様相は不明であるが、第26号溝跡と第27号溝跡はいずれも直線的に平行して南東から北西方向に向いており、第25号溝跡はそれらを切って南西から北東方向に向かって直線的に延びている。規模は、第25号溝跡が上幅50cm前後・深さ15cm、第26号溝跡が上幅25cm前後・深さ5cm、第27号溝跡が上幅40cm前後・深さ10cmを測る。時期は、A軽石降下以前の所産で中世の可能性が高い。



第172図　第25～27号溝跡